

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 11

—長野市内その9—

はるやま はるやま
春山遺跡・春山B遺跡

1999・11

日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

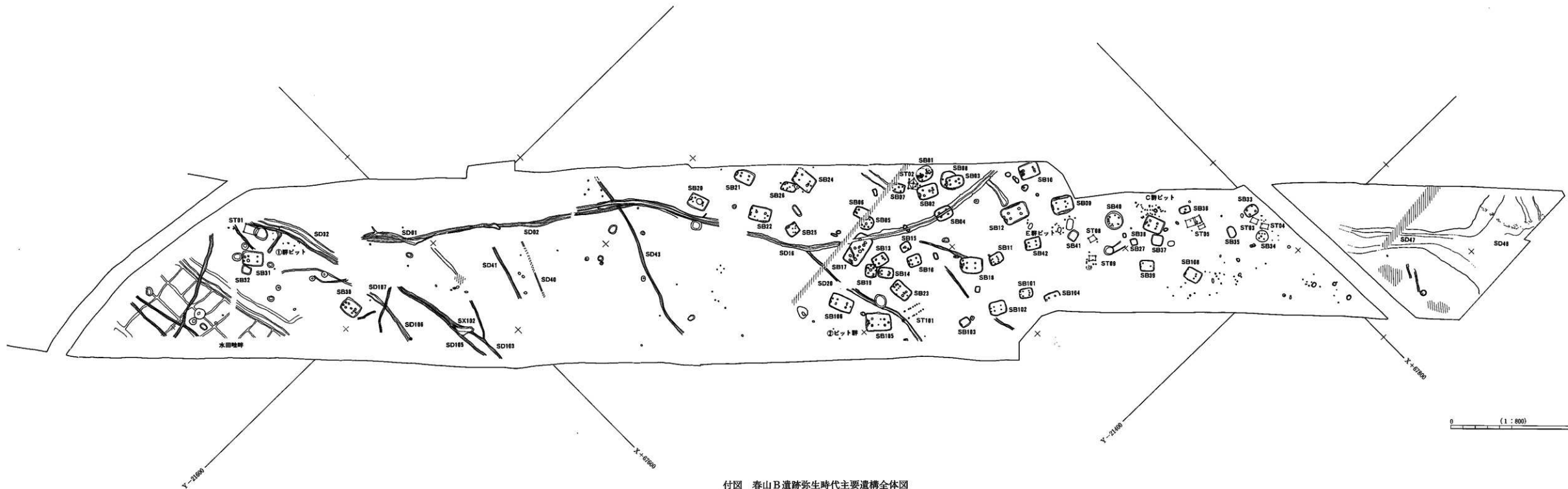
上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 11

—長野市内その9—

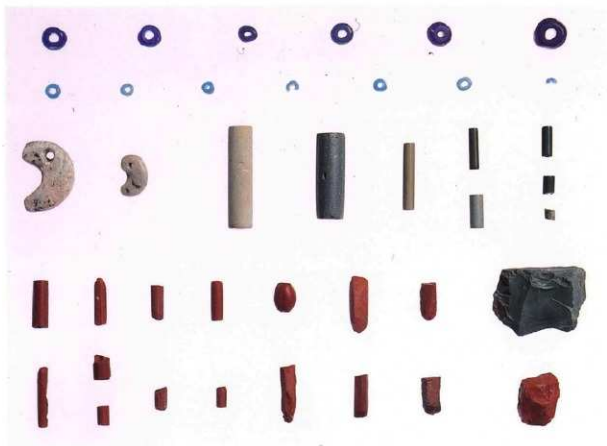
はるやま はるやま
春山遺跡・春山B遺跡

1999・11

日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー



付図 春山B遺跡弥生時代主要遺構全体図



ガラス小玉・勾玉・管玉・管玉未成品
(1 : 1)



木製赤黒漆塗片口鉢 (SB30)

赤漆附着布 (SB10)
(1 : 1)



序

県内でもっとも広く、かつ肥沃な沖積平野である善光寺平は、緩やかに北流する千曲川の流れとともにその歴史が地下に刻まれています。かつて水田地帯であったこの地の景観は、近年の都市化の流れの中でその面影を周辺地域に残すにとどまっていますが、緑豊かな雄大な平を周囲の山々から眺めることができます。

善光寺平における上信越自動車道関連の発掘調査は、平成元年から平成7年まで実施され、その成果のいくつかは既に報告致しております。そのなかでも、地表下深くにある幾層もの文化層の調査は全国的にも注目され、千曲川と支流河川のもたらす土砂の堆積の故に、その沖積地の歴史の一幕一幕が解き明かされています。

今回報告致します春山・春山B遺跡は、千曲川を主とする河川の影響により埋没した弥生時代の集落遺跡で、千曲川が形成した自然堤防と低地に位置し、上信越自動車道のルートでは長野インターチェンジから4キロほどの地点にあたります。隣接する川田条里遺跡では本遺跡と時代・時期を同じくする水田跡が広く見つかるとその関連が注目されます。

本遺跡を含め千曲川流域には弥生時代の遺跡が数多くあり、善光寺平を中心に当時の「クニ」と呼ぶにふさわしい規模と内容をもっております。今回の調査ではこの地の弥生文化の内容を更に充実させることができました。ことに県内初となります弥生時代中期の玉製作址と住居出土の鉄斧、全国的にも珍しい弥生後期の丸木船、漆付着布などが注目され、今後の弥生研究には欠かせない重要な資料として大いに活用されることと思われます。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、本報告書刊行に至るまで深い御理解と御協力をいただいた日本道路公団、長野県高速道局、同長野高速道事務所、長野市、長野市教育委員会など関係機関および地元協力者の方々、発掘・整理作業にご尽力されたの方々、直接ご指導・ご助言をいただいた長野県教育委員会の皆様に対し心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成11年11月30日

長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間 鉄四郎

例 言

1. 本書は長野県長野市大字若穂綿内に所在する春山・春山B遺跡の発掘調査報告書である。
2. この調査は、上信越自動車道建設工事に伴う記録保存のための事前調査として、長野県教育委員会の委託を受け、財団法人長野県埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 本遺跡の調査・整理の概要については、すでに当センター発行の『(財)長野県埋蔵文化財センター年報』7・9・14・15、速報・企画展示等で紹介してきたが、本報告書をもって最終報告とする。先の文献と本書での記述に相違があるが本書をもって訂正する。
4. 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道路線平面図(1:1,000)をもとに作成したほか、国土地理院発行の地形図(1:25,000)、長野市発行の長野市都市計画図(1:2,500)を使用した。
5. 巻首図版および写真図版掲載の航空写真は(株)新日本航業、(株)写真測図研究所に撮影を委託したものである。
6. 樹種同定は(株)パレオ・ラボ、漆布の素材鑑定分析は奈良国立文化財研究所 高妻洋成氏に分析を依頼し、それぞれ玉稿を賜った。また木製品樹種同定では東北大学 鈴木三男教授、骨の鑑定では京都大学霊長類研究所 茂原信生教授に御指導をいただいた。
7. 本報告書の執筆は第4章第2節を町田勝則が行い、それ以外の執筆及び編集は白居直之が行った。
8. 本報告書で報告した遺跡の記録及び出土遺物は、長野県立歴史館に保管する予定である。

凡 例

1. 本書に掲載した遺構・遺物の縮尺は各図に記したが、概略は以下の通りである。
 竪穴住居 1:60 土坑・遺物集中 1:40 周溝墓・掘立柱建物跡 1:80
 土器実測図 1:4 ミニチュア・土器拓影図 1:3 金属製品 1:2 裝飾品玉類 1:1
 木製品 1:6~1:8
2. 本書で用いたスクリーン・トーンは以下の通りである。



本文目次

巻首写真	
序	
例言	
凡例	
本文目次	
図版目次	
表目次	

第1章 調査の概要

第1節 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の体制と経過	1
(1) 平成2(1990)年度 (2) 平成4(1992)年度	
(3) 平成9(1997)年度 (4) 平成10(1998)年度	
3 整理作業の分担	3
4 指導者・協力者	3
第2節 調査の方法	3
1 遺跡の名称と記号	3
2 調査区設定と略称	3
(1) 調査区設定の原則 (2) 遺構記号	

第2章 周辺の環境と遺跡の概観

第1節 周辺の環境	6
1 地理的・歴史的環境	6
第2節 遺跡の概観	8
1 基本土層と地形復元	8
2 遺跡の概要	12

第3章 各時代の遺構・遺物

第1節 弥生時代前期並行期(縄文晩期)	19
1 概観	19
2 遺構と遺物	19
(1) 土坑 SK121・SK53・SK120・SK124	
(2) 遺物集中 III区-Aグリッド遺物集中 (3) 出土土器の概要	
第2節 弥生時代中期	28
1 概観	28
2 遺構と遺物	28
(1) 竪穴住居址 SB01・SB05・SB07・SB08・SB19・SB26・SB33・SB34・SB35 SB36・SB37・SB40	
(2) 土坑 SK57・SK58・SK68・SK60・SK65・SK66・SK81・SK83・SK84・SK85	

SK86・SK89・SK156・SX06

(3) 掘立柱建物址 A群ビットST03・04、B群ビットST05、C群ビット

D群ビットST08・09、E群ビット、F群ビットST02

(4) 溝址及びその他の遺構 SD15・SD24・SD25・SD26・SD27・SD37・SD38

SD38・SD39・SD43・SD106・SM17・SM101・SM102

第3節 弥生時代後期	82
1 概観	82
2 竪穴住居址	82
SB02・SB03・SB04・SB06・SB09・SB10・SB11・SB12・SB13・SB14・SB15・SB16 SB17・SB18・SB20・SB21・SB22・SB23・SB24・SB25・SB27・SB30・SB31・SB32 SB38・SB39・SB41・SB42・SB101・SB102・SB103・SB104・SB105・SB106・SB108	
3 掘立柱建物址	189
ST01・ST101・①ビット群・②ビット群	
4 土墳墓・土坑	191
(1) 墓 SK01・SK49・SK59	
(2) 井戸 SK03・SK04・SK06・SK08・SK09・SK10・SK13・SK14・SK19・SK33 SK35・SK43	
(3) 炭堆積土坑 SK07・SK17・SK20・SK36・SK40・SK41・SK42・SK47・SK55	
(4) 住居隣接廃棄土坑 SK16・SK38・SK45・SK51・SK54・SK109・SK159・SK160・SX102	
5 遺物集中遺構	219
(1) 低地域及び低地域境の遺構 ア 調査区南西側低地域 イ 調査区東低地域	
(2) 低地と集落境界域の遺構 (3) 集落・墓域内の遺構	
6 弥生後期水田址	234
7 溝址	237
(1) 南西低地域の溝址 ア 8層下部検出の溝址 イ 8層上部検出の溝址	
(2) 東側低地域の溝址 (3) 集落と低地境界域の溝址	
第4節 弥生時代後期終末～古墳時代前期	248
1 周溝墓	248
(1) IV区L・Mグリッド内の周溝墓群 SM01・SM02・SM03・SM04・SM05 SM06・SM07・SM12・SM13	
(2) SD16区画外の方形周溝墓 SM08・SM09・SM10・SM14・SM15・SM16	
2 溝址	267
(1) 墓域に関わる溝址 (2) 墓域後(古墳前期)の溝址	
第5節 古墳時代後期・平安時代・近世	274
1 概観	274
2 古墳時代後期	274
SD29・SD30	
3 平安時代前半期	274
(1) 溝址 SD45 (2) 遺物集中 東側低地遺物集中	
4 近世	276

- (1) 近世埋没水田址 水田区画 SD06 (2) 近世埋没水田上層の遺構 SX01~05・SK44
 (3) 近世埋没水田下層の遺構 SK11・SX101・103・104・SD19

第4章 遺物各説

第1節 木製品	283
---------	-----

丸木舟・容器・武具・農工具・建築材・杭

第2節 石器	299
--------	-----

1 磨製石斧の評価

(1) 大型蛤刃石斧 (2) 扁平片刃石斧 ア 偏光顕微鏡鑑定 イ 県内の事例

第3節 金属製品	319
----------	-----

1 鉄製品 2 銅製品

第4節 玉類	320
--------	-----

第5章 まとめ	323
---------	-----

付章

第1節 木製品の樹種同定	324
--------------	-----

写真図版

挿 図 目 次

第1図 春山・春山B遺跡年度別調査範囲と調査地区 割り図	1	第20図 SB01実測図及び炭化材出土分布図(1:60)	30
第2図 春山・春山B遺跡大々地区・大地区グリッド 割り付け図	4	第21図 P8内太行蛤刃石斧出土状況図(1:40)	30
第3図 中・小地区割り付け図と呼称	4	第22図 SB01出土遺物分布図(1:40)	31
第4図 周辺遺跡分布図(1:20,000)	7	第23図 SB01出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	32
第5図 弥生時代主要遺構上の基本土層地点と基本土 層柱状図	9	第24図 SB05実測図及び出土遺物分布図(1:60)	33
第6図 地形模式図	10	第25図 SB05出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	34
第7図 主要遺構分布図1(1:400)	14	第26図 SB07実測図及び出土遺物分布図(1:60)	35
第8図 主要遺構分布図2(1:400)	15	第27図 SB07出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	36
第9図 主要遺構分布図3(1:400)	16	第28図 SB08実測図(1:60)	37
第10図 主要遺構分布図4(1:400)	17	第29図 SB08出土遺物分布図(1:60)	38
第11図 主要遺構分布図5(1:400)	18	第30図 SB08出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	39
第12図 SK53・120・121・124実測図及び出土遺物分布図 (1:20/1:40)	21	第31図 SB19実測図(1:60)	40
第13図 Ⅲ区Aグリッド遺物集中平面分布図及び垂直 分布図(1:150)	22	第32図 SB19出土遺物分布図(1:60)	41
第14図 SK121出土土器実測図・拓影1(1:4)	23	第33図 SB19出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	41
第15図 SK121出土土器実測図・拓影2(1:4/1:3)	24	第34図 SB26実測図及び出土遺物分布図(1:60)	42
第16図 SK53・120・124・125及びⅢ区Aグリッド遺物集 中出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	25	第35図 SB26出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	43
第17図 Ⅲ区Aグリッド遺物集中及び調査区内出土晩 期土器実測図・拓影(1:4/1:3)	26	第36図 SB33実測図及び出土遺物分布図(1:60)	44
第18図 弥生中期遺構分布図(1:1600)	29	第37図 SB33出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	45
第19図 弥生中期集落域遺構分布図(1:800)	29	第38図 SB34実測図及び出土遺物分布図(1:60)	46
		第39図 SB34出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	47
		第40図 SB35実測図及び出土遺物分布図(1:60)	48
		第41図 SB35出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	48
		第42図 SB36実測図及び出土遺物分布図(1:60)	49
		第43図 SB36出土土器実測図(1:4)	50
		第44図 SB36出土土器実測図・土器拓影(1:3)	51
		第45図 SB37実測図及び出土遺物分布図(1:60)	52

第46図	SB37出土土器実測図(1:4)	53	第89図	SB14出土遺物分布図及び炉実測図(1:60/1:40)	107
第47図	SB37出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	54	第90図	SB15実測図及び出土遺物分布図(1:60)	108
第48図	SB40実測図(1:60)	55	第91図	SB15出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	109
第49図	SB40出土遺物分布図(1:60)	56	第92図	SB16実測図(1:60)	110
第50図	SB40出土土器・土製品実測図(1/4/1:3)	57	第93図	SB16出土土器実測図(1:4)	110
第51図	SB40出土土製品実測図・土器拓影(1:3)	58	第94図	SB16出土遺物分布図(1:60)	111
第52図	SK57-58-60-68-83実測図及び出土遺物分布図(1:40)	60	第95図	SB16出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	111
第53図	SK65-81-85-86-89-SX06実測図(1:40)	62	第96図	SB17実測図(1:90)	113
第54図	SK57-58-60-85出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	64	第97図	SB17出土遺物分布図及び掘り方実測図(1:90/1:120)	113
第55図	SK65-66-81-83-86-89-SX06-SQ46-53出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	65	第98図	SB17出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	114
第56図	SK66-84-156実測図(1:40)	66	第99図	SB18実測図(1:60)	115
第57図	掘立柱建物址実測図(1:80)	68	第100図	SB18出土遺物分布図(1:60)	116
第58図	弥生中期溝址実測図1(SD15-24-25-26)	70	第101図	SB18出土土器実測図(1:4)	117
第59図	弥生中期溝址実測図2(SD27-37-38-39-106)	71	第102図	SB18出土土器実測図・拓影(1:6/1:3)	118
第60図	平地式住居居溝実測図(SM17-101-102)	72	第103図	SB20実測図(1:60)	118
第61図	SB02実測図及び掘り方実測図(1:60)	83	第104図	SB20出土遺物分布図(1:60)	119
第62図	SB02出土土器実測図(1:4)	84	第105図	SB20出土土器実測図(1:4)	120
第63図	SB02出土土製品実測図・土器拓影(1:3)	85	第106図	SB20出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	121
第64図	SB02出土遺物分布図(1:60)	85	第107図	SB21実測図及び出土遺物分布図(1:60)	122
第65図	SB03実測図及び出土遺物分布図(1:60)	86	第108図	SB21出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	123
第66図	SB03出土土器・土製品実測図・拓影(1/4/1:3)	87	第109図	SB22実測図及び出土遺物分布図(1:60)	124
第67図	SB04実測図及び出土遺物分布図(1:60)	88	第110図	SB22出土土器実測図(1:4)	125
第68図	SB04出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	89	第111図	SB22出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	126
第69図	SB06実測図及び出土遺物分布図(1:60)	90	第112図	SB23出土遺物分布図(1:60)	126
第70図	SB06出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	91	第113図	SB23実測図(1:60)	127
第71図	SB09実測図(1:60)	92	第114図	SB23出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	128
第72図	SB09出土土器実測図(1:4)	93	第115図	SB24実測図(1:60)	129
第73図	SB09出土土器拓影(1:3)	94	第116図	SB24出土遺物分布図(1:60)	130
第74図	SB09出土遺物分布図(1:60)	94	第117図	SB24出土土器実測図(1:4)	131
第75図	SB09掘り方実測図(1:60)	95	第118図	SB24出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	132
第76図	SB10実測図及び出土遺物分布図(1:60)	96	第119図	SB25実測図及び出土遺物分布図(1:60)	133
第77図	SB10出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	97	第120図	SB25出土土器実測図・拓影(1/4/1:6/1:3)	134
第78図	SB11実測図(1:60)	97	第121図	SB27実測図及び出土遺物分布図(1:60)	135
第79図	SB11出土遺物分布図(1:60)	98	第122図	SB27出土土器実測図(1:4)	135
第80図	SB11出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)写真(1:2)	99	第123図	SB30実測図(1:60/1:40)	136
第81図	SB12実測図(1:60)	100	第124図	SB30出土遺物分布図(1:60)	137
第82図	SB12出土土器実測図(1:4)	101	第125図	SB30出土土器実測図(1:4)	138
第83図	SB12出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	102	第126図	SB30出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	139
第84図	SB12出土遺物分布図(1:60)	102	第127図	SB31実測図(1:60)	140
第85図	SB13実測図及び出土遺物分布図(1:60/1:40)	103	第128図	SB31出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	141
第86図	SB13出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	104	第129図	SB31出土遺物分布図(1:60)	142
第87図	SB14実測図(1:60)	105	第130図	SB32実測図及び出土遺物分布図(1:60)	142
第88図	SB14出土土器実測図・拓影(1/4/1:3)	106	第131図	SB32出土土器実測図(1:4)	143
			第132図	SB38実測図(1:60/1:40)	143
			第133図	SB38出土遺物分布図(1:60)	144
			第134図	SB38出土土器実測図(1/4/1:6)	145
			第135図	SB38出土土器実測図・拓影(1:6/1:3)	146

第136図	SB39実測図及び出土遺物分布図(1:60/1:40)	147	第175図	SK06-08・10・13出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	203
第137図	SB39出土土器実測図・拓影(1:6/1:4/1:3)	148	第176図	SK19-33・43出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	204
第138図	SB41実測図(1:60)	148	第177図	SK35出土土器実測図(1:4)	205
第139図	SB41出土遺物分布図(1:60)	149	第178図	SK35出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	206
第140図	SB41出土土器実測図・拓影(1:6/1:4/1:3)	149	第179図	SK07-17・20・36・39実測図(1:40)	207
第141図	SB42実測図(1:60/1:40)	150	第180図	SK40-41・42・47-55実測図(1:40)	209
第142図	SB42出土遺物分布図(1:60)	151	第181図	SK07・20・42・47・55出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	211
第143図	SB42出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	152	第182図	SK16-38・45-51・54・109・159-160実測図及び出土遺物分布図(1:40)	213
第144図	SB101実測図(1:60)	153	第183図	SK15-45・51出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	214
第145図	SB101出土遺物分布図(1:60)	153	第184図	SK54・159-160・SX102出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	215
第146図	SB101出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	154	第185図	SX102実測図(1:80)	216
第147図	SB102実測図及び出土遺物分布図(1:60)	155	第186図	遺物集中遺構立地分類模式図(1:8000)	219
第148図	SB102出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	156	第187図	南西低地域7-8a~b層遺構分布図及び断面図(1:400/1:40)	221
第149図	SB103実測図(1:60)	157	第188図	SQ01-02・03-04・05・10-11・12-13実測図(1:40)	222
第150図	SB103出土遺物分布図(1:60)	157	第189図	SQ15-19-25-29-30-32-33-36-49-51実測図(1:40)	223
第151図	SB103出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	158	第190図	SQ48-52-55 SF102実測図(1:40)	224
第152図	SB104出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	158	第191図	SQ01-02・03出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	225
第153図	SB104実測図及び出土遺物分布図(1:60)	159	第192図	SQ04-05出土土器実測図・拓影・写真(1:4/1:3)	226
第154図	SB105 3層(灰と炭)の分布範囲図(1:80)	159	第193図	SQ09-10-11-13-15出土土器・土製品実測図・拓影(1:4/1:3)	227
第155図	SB105実測図(1:60)	160	第194図	SQ19-25-29-30-32-33-35-36出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	228
第156図	SB105出土遺物分布図(1:60)	161	第195図	SQ36-47・48出土土器実測図(1:4)	229
第157図	SB105出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	162	第196図	SQ48-49-51・52SF101・102・103出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	230
第158図	SB106実測図(1:60)	163	第197図	SQ41・42・43-45-54実測図(1:40)	231
第159図	SB106出土土器実測図(1:4)	164	第198図	SQ42-43-54出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	231
第160図	SB106出土土製品実測図・土器拓影(1:3)	165	第199図	SQ41-54出土土器実測図(1:4)	232
第161図	SB106出土遺物分布図(1:60)	166	第200図	弥生後期水田址実測図(1:250/1:40)	235
第162図	SB108実測図及び出土遺物分布図(1:60)	167	第201図	弥生後期水田址実測図及びコンタ図(1:400)	236
第163図	SB108出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)	168	第202図	Ⅶ区南西低地域8層下部溝迹全体図・断面図(1:400/1:40)	238
第164図	掘立柱建物址実測図1(ST01・101)(1:80/1:40)	190	第203図	SD47-48実測図及び流路模式図(1:400/1:80)	240
第165図	掘立柱建物址実測図2(①・②ビット群)(1:80/1:40)	191	第204図	SD47-48実測図及び出土遺物状況図	
第166図	SK01-49・59実測図及び出土遺物状況図(1:20)	192			
第167図	SK01-49出土土器実測図・拓影(1:6/1:3)	193			
第168図	SK59出土角骨(1:2)	194			
第169図	SK03-04・09実測図及び出土遺物分布図(1:40)	195			
第170図	SK06-08・13実測図及び出土遺物分布図(1:40)	197			
第171図	SK10-19・33実測図及び出土遺物分布図(1:40)	198			
第172図	SK14-35・43実測図及び出土遺物分布図(1:40)	200			
第173図	SK43方形井筒実測図及び構造模式図(1:20)	201			
第174図	SK03-04・09出土土器実測図・拓影(1:4/1:3)				

挿 表 目 次

<p>第1表 弥生前期並行期（縄文晩期）土坑一覧……………20</p> <p>第2表 弥生中期竪穴住居内出土の石材別剥片・碎片 重量……………73</p> <p>第3表 弥生時代中期竪穴住居出土土器及び土製品観 察表……………73</p> <p>第4表 弥生後期竪穴住居内出土の石材別剥片・碎片 重量……………169</p> <p>第5表 弥生時代後期竪穴住居出土土器及び土製品観 察表……………169</p> <p>第6表 土坑一覧……………216</p> <p>第7表 遺物集中遺構分類一覧……………219</p> <p>第8表 弥生時代中・後期遺物集中遺構一覧……………233</p>	<p>第9表 溝址時期別一覧……………237</p> <p>第10表 弥生時代終末期～古墳時代前期周溝墓内出土 土器観察表……………269</p> <p>第11表 木製品観察表……………297</p> <p>第12表 SB01出土の磨製石斧属性……………299</p> <p>第13表 磨製石斧関連石材別内訳1……………301</p> <p>第14表 磨製石斧関連石材別内訳2……………301</p> <p>第15表 玉類一覧……………322</p> <p>第16表 春山B（BHA-B）遺跡出土木材の樹種同定結 果一覧……………330</p> <p>第17表 春山B遺跡出土木製品の器種・用途別の使用 樹種……………331</p>
---	--

第1章 調査の概要

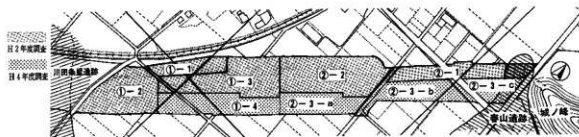
第1節 調査の経過

1 調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は、日本道路公団（以下「公団」）による上信越自動車道建設に関連して行われたものである。従来より、高速自動車道用地内にある埋蔵文化財の発掘調査については、公団が長野県教育委員会（以下「県教委」）に調査を委託し、県教委は財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下「センター」）に再委託する方式がとられていた。本遺跡の発掘調査も県教委により行政上の調整を済ませた上でセンターが受託、実施した。

長野市若穂綿内春山地蔵には城ノ峰山山裾から南東に広がる周知の春山遺跡がある。春山B遺跡は、この春山遺跡の南西方向へ広がる遺跡として、平成元年に県教委文化課による試掘トレンチ調査の結果確認された。「春山B遺跡」の名称は、春山遺跡との間に低湿地をはさみ、立地条件が異なる点を考慮して区別して付けられたものである。

発掘調査は、春山遺跡1,000㎡、春山B遺跡24,800㎡がそれぞれ調査対象面積となり、暫定二車線解除にともなう調査範囲や工事工程の変更、用地買収等の事情により平成2年度と4年度の2か年にわたる分割調査を行った。また年次の調査においても工事工程に従い発掘調査範囲を分割設定し、この分割調査範囲には○-○区と仮名称が付された（第1図）。



第1図 春山・春山B遺跡年度別調査範囲と調査地区割り図

年度別の調査地区及び契約面積は以下の通りである。

(年度)	(春山B遺跡発掘調査地区)	(調査契約面積)	(春山遺跡調査契約面積)
平成2年度	①-1B・①-2・①-3・②-1・②-2	18,500㎡	500㎡
平成4年度	①-4・②-3a・②-3b・②-3c	6,850㎡	500㎡

2 調査の体制と経過

(1) 平成2（1990）年度

○調査体制 事務局長(兼専務理事) 塚原隆明

長野調査事務所長 峯村忠司

同 庶務部長(兼事務局総務部長)	塚田次夫
同 庶務部長補佐	松本忠巳
同 調査部長(兼事務局調査部長)	小林秀夫
同 調査課長	白田武正
同 調査研究員	市川隆之 伊藤友久 白居直之 内山美彦 大久保邦彦 武居公明 土屋 積 鶴田典昭 渡辺敏泰 中村 寛

調査期間 平成2年4月9日～同年12月27日

道路工事工程により分割設定した①-2・1b・3、②-1・2調査区を対象に18,450㎡の発掘調査を実施し、弥生中・後期にまたがる集落遺跡であることが判明した。①-2調査区では住居跡と水田跡が同一面上から検出され、生産域と集落域の景観が復元された。弥生中・後期の住居が40軒と多数の土坑が検出され、鉄斧・銅鋼などの金属製品、石斧・鉄石英製管玉未製品、丸木船、漆塗木製鉢、布など貴重な遺物が多数出土した。

(2) 平成4(1992)年度

○調査体制 事務局長(兼専務理事) 峯村忠司
参事 樋口昇一
事務局総務部長 神林幹生
長野調査事務所長 岡田正彦
同 調査部長(兼事務局調査部長) 小林秀夫
同 庶務課長 山崎今朝寛
同 整理課長 原 明芳
同 調査研究員 大久保邦彦 田中昭二郎 月原隆爾 夏目大助 宮入英治
若林 卓

調査期間 平成4年2月24日～同年9月12日

一昨年度からの継続調査で、工事工程により分割設定した①-4、②-3a・b・c調査区を対象に6,850㎡の発掘調査を実施した。②-3cにあたる春山遺跡の調査では、農業用水路の関係から確認調査のみにとどまり、春山B遺跡では弥生中・後期の遺構のほか前期並行期(縄文晩期)の土坑が検出された。

(3) 平成9(1997)年度

○整体系制 事務局長 青木 久
事務局総務部長 山崎悦雄
長野調査事務所長(兼事務局調査部長) 小林秀夫
同 庶務課長(兼事務局総務部長補佐) 外谷 功
同 調査課長 土屋 積
同 調査研究員 白居直之 徳永哲秀 西鳴 力

遺物整理は注記から接合・復元と実測・トレースを行い、遺構は修正及び確定作業をへてトレースを行った。また遺物の写真撮影及び遺構の焼き付けの一部を行った。木製品の樹種同定を(株)パレオ・ラボ、布の鑑定を奈良国立文化財研究所 高妻洋成氏、骨の鑑定を京都大学霊長類研究所の茂原信生教授に依頼した。

(4) 平成10(1998)年度

○整理体制	所長	佐久間鉄四郎
	副所長兼管理部長	山崎悦雄
	管理部長補佐	宮島孝明
	調査部長	小林秀夫
	調査課長	土屋 積
	調査研究員	白居直之 徳永哲秀 西嶋 力

本年度は1月から3月までの約3か月間で、遺構・遺物の図版作成及び原稿執筆を行い、PEG処理の完了した丸木船の接合復元を通常実施して、実測・写真撮影を完了した。

3 整理作業の分担

本遺跡の整理作業では各作業を以下の調査研究員が担当し、以下の作業以外は全て白居直之が行った。

土器の復元・丸木船の復元…徳永哲秀 遺物写真撮影・焼き付け…西嶋 力
金属器・木製品の保存処理・修復…白田広之 磨製石器実測・トレース…町田勝則

4 指導者・協力者

発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご援助を頂いた。記して謝意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

飯島 哲也、石黒 立人、上原 真人、大崎 康文、風間 栄一、工楽 普通、小池 岳史、
高妻 洋成、茂原 信生、鈴木 三男、千野 浩、寺島 孝典、中山 誠二、能城 修一、
矢島 宏雄、山口 明、山田 昌久、長野市教育委員会

第2節 調査の方法

1 遺跡の名称と記号

遺跡名称は、長野県教委作成の遺跡台帳に記載されている「春山遺跡」「春山B遺跡」とし、記録の便宜を図るために、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を与えた。3文字の1番目は長野県内を9地区に分けた地区記号で長野市に該当する「B」と記し、次の2文字は遺跡をローマ字表記した「HARUYAMA」「HARUYAMA-B」の「HA」を続けてそれぞれ「BHA」「BHA-B」とした。この遺跡記号は、本遺跡に関係する遺物の注記、図面、写真など全ての資料について使用されている。

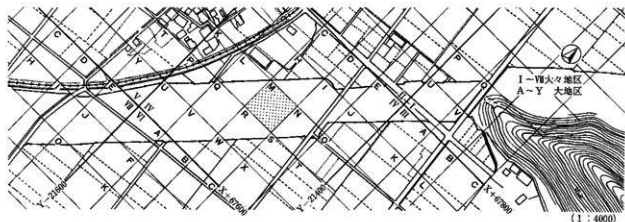
2 調査区設定と略称

(1) 調査区設定の原則

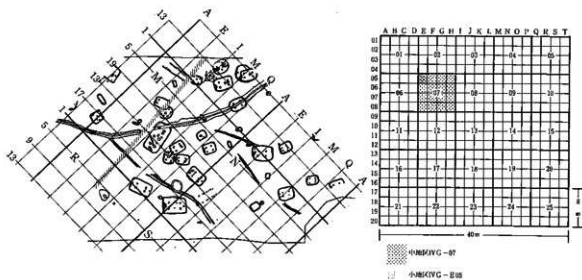
グリッドの設定は、国土座標のメッシュに従うことを原則とした。測量基準点は国土地理院の平面直角座標系の原点(長野県第Ⅷ系、 $X=0.0000$ $Y=0.0000$)を基点に200倍の数値を選んで調査範囲内のX軸・Y軸を測量基準線とした。これをもとにグリッドが設定され、大々地区(200×200m)・大地区(40×40m)・中地区(8×8m)・小地区(2×2m)の4段階に区分する。本遺跡は全長420mに及ぶ調査範囲を対象とし北西から南東に向かってI区、II区、III区……の順に7の大々地区を設定した(第2図)。この大々地区

を25区画に分割し、大地区とし北西から南東へA、B、C……の大文字アルファベットを付した(第2図)。更に大地区を25区画に分割し北西から南東へ1、2、3……のアラビア数字を付した(第3図)。測量基準杭は中地区のメッシュを基本とし、測量業者に委託して設定した。

調査で検出された遺構の記録および遺物の取り上げには中地区の基準杭、グリッド名称を用いた。



第2図 春山・春山B遺跡大々地区・大地区グリッド割り付け図



第3図 中・小地区割り付け図と呼称

(2) 遺構記号

遺構名称は記録、遺物の注記等の便宜を図るため記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は基本的に検出時に、主として平面的な形態や分布の特徴を指標として決定するため必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。一旦、記号・番号を付した遺構に関しては原則として変更しない。このため番号には欠番があり、表記についても2桁数字から3桁数字など様々なものがある。最終的な遺構名称の決定は整理作業の段階で行われる。本書で用いた遺跡記号には、次の種類がある。

- ・SB：方形・円形・楕円形の掘り込み。竪穴住居址、竪穴状遺構。
- ・SK：SBより平面形が小さな掘り込み。土坑、土壇、貯蔵穴、井戸等。
- ・ST：SBより平面形が小さな掘り込みが、一定間隔で方形に配置されるもの。掘立柱建物址等。

- ・ S C : 耕地の遺構において連続する大小の高まり。水田面畦畔、道路状遺構。
- ・ S L : 耕地の遺構において S C、S A 等によって区画された面。水田区画、畑。
- ・ S D : 細長く連続する掘り込み。溝址。
- ・ S Q : 遺物が面的に集中するもの。祭祀址、ごみ捨て場等。
- ・ S F : 火を焚いたあとが面的に広がるもの。火床、炉址等。
- ・ S X : 不明遺構。



平成2年度調査区遠景



高速道建設後の周辺

第2章 周辺の環境と遺跡の概観

第1節 周辺の環境

1 地理的・歴史的環境 (第4図)

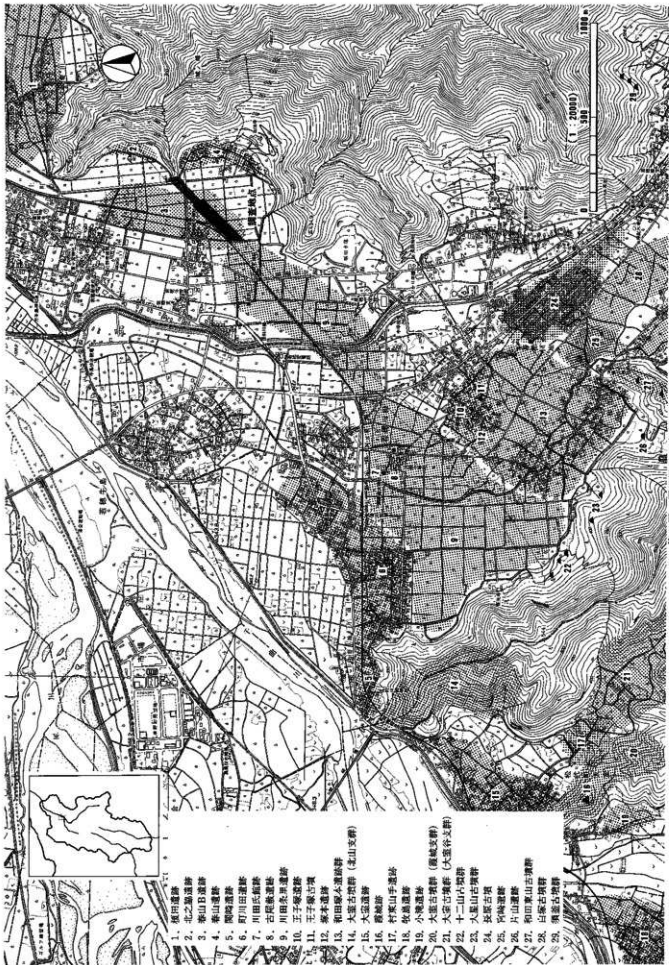
春山遺跡、春山B遺跡は長野市南東部の長野市大字若穂綿内字田中に所在する。本遺跡は千曲川右岸に形成された自然堤防地帯と城ノ峰西側の後背湿地に位置する。標高は339~341mである。地形は千曲川の氾濫源と支流河川の堆積による複合扇状地で、この扇状地は保科扇状地と呼称され、奇妙山をはじめとする標高1,000m前後の河東山塊に端を発する保科川と赤野田川によって形成されている。扇尖・扇端部は水田地帯となり、自然堤防上の微高地と山間部は果樹園として利用されている。集落は自然堤防上に領家、牛島などがあり、本遺跡が含まれる古屋、田中に広がっている。

保科扇状地及び周辺の丘陵には数多くの遺跡があり、かつ特殊な遺物を見ることができる。また発掘調査された遺跡からは保科川、千曲川の河川堆積作用による影響をも知ることができる。

縄文時代の遺跡では扇状地西端に宮崎遺跡(25)がある。宮崎遺跡では縄文後期の敷石住居3軒を始め、後期から晩期前半の石棺墓8基、土塚墓11基等が検出され、多量の土器、石器や土製品が出土している。宮崎遺跡の遺物包含層から保科扇状地の平坦面は縄文晩期を境に安定し始めたと推定される。また扇端の低地に位置する川田条里遺跡(9)でも縄文晩期の遺構が検出され、後背湿地の形成と土地利用の始まりを裏づけている。

弥生時代の集落遺跡は本遺跡を含め自然堤防上にあり、町川田遺跡(6)では弥生中期から後期の集落が調査された。中期の住居からは扇片刃石斧が出土し、本地域に所在する該期集落の磨製石器の普遍的な在り方に共通性を示している。また後期の住居出土遺物には北陸系の土器群が含まれ注目される。本遺跡東端の城ノ峰を隔てた自然堤防上には弥生中期から古墳後期の複合遺跡となる榎田遺跡(1)がある。弥生中期の集落は後世の河川氾濫の影響により削平が著しく全容は不明であるが住居44軒が検出され、三重に濠を巡らせた環濠集落を形成している。環濠外集落では全国的にも珍しい太形蛤刃石斧の製作址がある。弥生後期から古墳時代前期の集落は、住居約130軒と周溝墓、溝などが検出され大規模集落となる。生産遺跡では本遺跡南西低地から連続して隣接する川田条里遺跡がある。川田条里遺跡では広範囲に弥生中期から後期、古墳時代から近世に至る水田址が見つかり各時代の水田区画の変遷を辿ることができる。

古墳時代の集落遺跡は、保科扇状地域では未だ確認されていないが、榎田遺跡では古墳中期から後期の大集落が検出されている。濠となる自然流路からは壺甕や鞍、劍鞘、靴など特殊な木製品が出土している。祭祀遺跡では拳手人面土器を出土した片山遺跡(26)が山麓にあり、低地の川田条里遺跡からは珠文鏡が出土している。集落遺跡の状況は不明ながら本地域には多くの古墳が存在する。奇妙山系の尾根づたいには前方後円墳3基を含む前期古墳群の和東山古墳群(27)をはじめ、大星山古墳群(23)、十二山古墳群(22)が連なっており、十二山古墳群からは素環頭大刀が出土している。更に大星山山頂丘陵部には大室古墳群北山支群(14)があり、その中の大室18号墳は全長49.5mの前方後円墳である。扇状地内には22.5mの規模を有する王子塚古墳(11)があり単独立地している。



平安時代では「和名類聚抄」に記載された高井郡5郷の「穂科郷」に保科・川田周辺が該当し、平安末期には「長田御厨」があったとされる。榎田遺跡は奈良時代の集落が希薄となった後の平安時代前半に竪穴住居30軒のほか多数の掘立柱建物、土坑等が確認された。木簡、皇朝十二銭、緑釉陶器などの特殊遺物が共存していることから中核集落であった可能性がある。また古町遺跡では土師器・須恵器とともに布目瓦が採取され、保科扇状地内では川田条里遺跡で条里型水田が広く発見されている。

参考文献

- 長野市教育委員会：1988「宮崎遺跡」
 長野市教育委員会：1988「町川田遺跡」
 長野市教育委員会：1983「川田条里的遺構他」
 長野市若穂文化財調査委員会：1983「若穂の文化財」
 長野県埋蔵文化財センター：1991「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3 大室古墳群」
 長野県埋蔵文化財センター：1991「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 大星山古墳群」
 長野県埋蔵文化財センター：1999「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書9 小地遺跡・北之島遺跡・前山田遺跡」
 長野県埋蔵文化財センター：1999「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 榎田遺跡」
 長野県埋蔵文化財センター：1991～98「長野県埋蔵文化財センター 年報7～14」

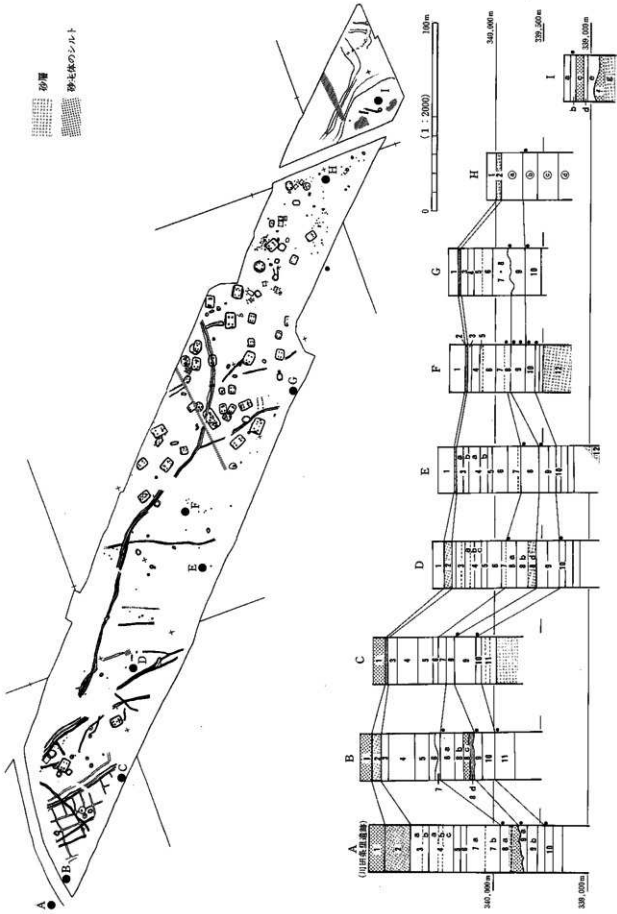
第2節 遺跡の概観

1 基本土層と地形復元 (第5・6図)

本遺跡の調査範囲は、35～60m道路幅で北東から南西方向へ約450mに及ぶ路線区間である。地形は自然堤防の南西端域となり、低地との境界及び低地の一部が含まれる。

本遺跡の主要検出遺構は弥生時代中・後期に限定され、該期の遺構・遺物は調査区全域で確認された。また弥生時代後期の遺構面はいくつかの調査地点で細かく区分され、弥生時代を通して集落が営まれていたことが確認された。基本土層は、砂層堆積が顕著に観察された川田条里遺跡A地点、春山B遺跡B地点と、弥生時代の遺構を3面検出したF地点を基準として設定した。A地点は低地の生産域(水田)、B地点は生産域と集落域の境界、F地点は集落域に該当する。この基本土層は微妙な土質差はあるものの峰山裾の低地を除く調査域において共通する。調査区北東端の春山遺跡を含む低地域(以下東低地域)では、生産・集落域とは異なった土質となり自然流路の影響を受け滞水、低温地性の堆積土層として捉えられた。このため土層対比はA～G地点とH・I地点とを分けて扱うこととする。低地生産域と集落域の土層概要と検出遺構は以下のとおりである。

土層概要 〈A～G地点〉	検出遺構	
	〈B地点〉	〈F地点〉
1層…灰黄褐色砂質シルト層	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現耕作土 ・ 洪水性堆積 ・ 近世水田耕作土 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現耕作土 ・ 洪水性堆積 ・ 近世水田耕作土
2層…砂層 (灰黄色～黄褐色)		
3層…灰色～褐灰色シルト質粘土層		
3b層…褐灰色シルト層 鉄・マンガンの集積		
4層…黒褐色粘土層 炭化物粒混入		
4b層…黒灰色粘土層		

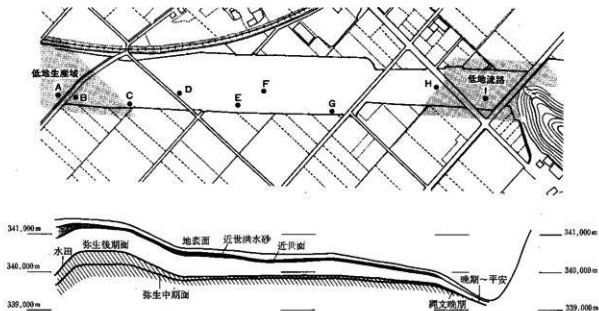


第5図 弥生時代主要遺構上の基本土層地点と基本土層柱状図

5層…黒褐色シルト～シルト質粘土層		・古墳後期 溝址	
6層…黒褐色シルト～シルト質粘土層	細砂混入		
7層…黒褐色シルト層	細砂混入		・弥生後期周溝墓
8層…灰色粘土質シルト層		・弥生後期遺物集中	
8b層…褐灰色砂質シルト層			
8c層…灰黄褐色シルト質粘土層		・弥生後期集落	・弥生後期集落
8d層…灰色細砂層		・洪水性堆積	
9層…灰黄褐色～灰色シルト層	粗・細砂混入	・弥生後期水田	・弥生後期集落
10層…黒褐色～灰色粘土層			・弥生中期集落
11層…黒褐色粘土層	白色粘土斑紋混入	・弥生中期 溝址	
12層…オリープ灰色砂層			

基本土層1層は現耕作土で、地表面は西から東へ緩く傾斜し城ノ峰山の山裾が最も低い地形となる。

2層は、洪水砂と認識される細粒砂ではぼ遺跡一帯で確認された。隣接する川田糸里遺跡E-2調査区全域でも30cm前後の堆積厚で検出され、本遺跡B・C地点同様に水田跡を覆う状況であった。出土遺物は近世陶磁器数片であったが、文献から18世紀中頃に地域一帯を襲った河川氾濫が該当する(寛保2-1742年 戊の満水)。3層はこの洪水砂で覆われた近世耕作土であり、土層下部には水田跡を特徴付ける鉄・マンガンの集積が認められた調査区もあった。3層は、全域で確認されたことから近世の土地利用は水田だったことが窺える^(註11)。4層は20cm前後の厚みの堆積となり、下部に炭化物粒を多量に混入している。この炭化物粒の堆積は起伏と一致した薄い泥炭質であり、4層堆積過程で本遺跡全域が一時期低地化したことを示している。4層内の遺構・遺物は判然としませんが、平安時代から中世の時期が該当し、耕地として利用された可能性が高い。5層はB・C地点を除いては極めて薄い堆積層であり、B地点の調査区の一部で溝址が検出された以外は遺物も皆無であった。この溝址からは古墳時代後期(6世紀代)の土器が出土し、5層堆積はほぼこの時期が該当する。6・7層は明瞭な砂層堆積は認められなかったものの、砂質シルトあるいは砂が多量に混入した状況となる調査域があった。6層内からは明瞭な遺構と出土遺物はなく、7層上に安定的な被覆となっていることから、洪水性の自然堆積層が基調となって耕作地もしくは荒



第6図 地形模式図

れ地であったと推測される。7層は検出遺構等から古墳前期初頭の時期が下限となるので、6層は古墳前期中葉から中期の時期が与えられ、人為的な土地利用はなされなかったと判断される。F地点の7層中からは周溝墓群が検出され8層との分層が微妙であった。8層は灰色シルトを基調とし弥生後期の遺構が検出され、低地では4層に細分された。B地点の調査区(低地)では砂あるいは砂質シルトが間層となりに検出面の異なる溝址、土坑、土器・炭化物集中があり、E・F地点(集落域)では竪穴住居・土坑群の検出面となった。8層上位は弥生後期後半～終末、中位は後期中葉の時期が与えられる。低地、低地境では8層下部(8d層)が細砂で、洪水性の堆積層と捉えられる。この砂層は水田址を覆い、竪穴住居の埋土にも同質の砂層が認められることから9層内に構築された数棟の住居は水田埋没とほぼ同時期とみなされる。10・11層からは弥生中期の遺構が検出され、中期に集落が展開したことが窺える。12層以下は砂層と灰色砂質シルトの互層で砂礫層になる。

調査区北東の城ノ峰山山裾には従来から大規模な埋没河川址(自然流路)の存在が指摘され、航空写真からも一帯の低地状況を読み取ることができる。この東低地地域の土質は泥炭質の有機物を含んでおり、北東端には弥生時代後期までさかのぼる河川址が検出された。本調査域の土層および検出遺構の概要は以下のとおりである。

〈H地点〉土層概要と検出遺構

- | | |
|----------------|---------------------------|
| 1層…灰黄褐色砂質シルト層 | |
| 2層…砂層(灰黄色～黄褐色) | |
| ③層：灰褐色粘土層 | |
| ⑤層：灰褐色シルト質粘土層 | ┌ 弥生中期集落
└ 縄文晩期土坑・遺物集中 |
| ⑥層：灰褐から黒褐色粘土層 | |
| ⑧層：灰色シルト層 | |

〈I地点〉土層概要と検出遺構

- | | |
|------------------------|------------------------|
| a層：黒色粘土層 泥炭質有機物多量混入 | |
| b層：明灰色粘土 | ┌ 平安前半期須恵环出土
└ 弥生溝址 |
| c層：褐灰色シルト質細砂層 炭化物粒混入 | |
| d層：によう黄褐色シルト層 薄い泥炭層と互層 | |
| e層：黒色泥炭層 | |
| f層：オリブ灰色砂質シルト層 | |
| g層：灰色シルト質砂層 | |

H地点では集落域2層の近世砂層と、⑥層内下部に鉄・マンガンの集積が確認され、近世水田が本調査域まで広がっていたことが確認された。⑥層下部を検出面として弥生中期の集落及び縄文晩期の土坑群があり、⑤～⑥層内には縄文晩期の遺物を主として弥生後期までの土器が散在していた。弥生後期の遺構は皆無で、中期も西寄り(IV区)に限定される。⑥層は集落域9～11層に該当し、⑧層は12層以下の土質に近く、本遺跡で最も古い遺構として検出された縄文晩期が⑥層にあたる。

I地点は弥生後期河川址と隣接する調査域であるが、b層を除いて泥炭質もしくは砂質のシルトで、弥生後期以前・以後ともに流路であったと捉えられる。b層からは弥生後期と9世紀の遺物が、c層からは縄文晩期から弥生後期までの土器が出土したが、河川に由来した低地化の繰り返しによる状況と判断されb・c層は縄文晩期から平安までの時間幅をもつ。g層は集落域12層に相当し、F地点との比高差は50cm程度である。

本遺跡の地形形成による土地利用は、縄文晩期に始まり、弥生後期にいたるまで生産域に隣接した集落として継続利用されている。沖積地の微地形形成が縄文晩期に始まることは多くの研究者の指摘するとこ

ろであるが、本遺跡でも東低地地域の河川を含めて該期に成立したと捉えられた。弥生中・後期の地形はC地点の水田低地境とF地点の集落域を頂点とし南方向と南東方向に傾斜し、弥生後期以後水田域が1m近い堆積土となり近世では北東方向への傾斜に変化する。

註1【更級郡誌】によると慶長9(1614)年から明治44(1911)年までの下曲川及び犀川の河川氾濫の記録は91件ある。中でも寛保2年の茂の濁水、弘化4年の善光寺地震による犀川の決壊は善光寺平一帯に甚大な被害をもたらしたことが知られている。茂の濁水は稲の刈取りの時期で、本砂層に被覆された水田面及び洪水砂内に稲穂や倒れた稲束の痕跡が明瞭に確認されたことから寛保2年の洪水を該当させた。

2 遺跡の概要(第7~11図)

本遺跡は沖積地に立地するため、砂質あるいはシルト質の土質で地形が形成され、遺構の構築土層及び遺構埋土ともに河川が影響した堆積となる。善光寺平の沖積低地に立地する遺跡では、河川堆積によって幾層にも重複する文化層が確認され、縄文から近世までの幅広い時代の遺構群の調査が行われている。本遺跡では弥生時代前期並行期(縄文時代晩期)、弥生時代中・後期、古墳時代前期・後期、平安時代、近世の遺構・遺物が最大約2mの厚みの堆積土から確認された。ただし本遺跡が他の沖積地の状況と異なる点は、弥生中期から後期に限定された遺構群が調査区全域から検出され、他の時代の遺構・遺物は僅かで、弥生終末期以降近世に至るまで集落等に利用されていなかったことである。このため弥生時代の各遺構は後世の前平を受けずに完全な形で残され、従来集落域では残りにくい有機質の遺物も多数出土した。また生産域と集落域が隣接して検出された全国的にもまれな例である。弥生時代に生産・集落として展開した場所が以降の積極的な土地利用を阻んだ要因としては、河川による土砂堆積が激しかったことによる。

本遺跡では縄文晩期の遺構・遺物が最も古く、前項で述べたごとく微地形形成後の土地利用とかかわる時期と捉えた。住居跡はなかったものの水Ⅱ式の範囲に入る土器群と石器が出土し、土坑を検出した。遺物は限定された時期の良好な一括資料である。

弥生中・後期は集落として展開し、複数の竪穴住居と掘立柱建物が検出された。該期の遺構の多くは地形を形成した砂層まで達して掘り込まれており、遺構の下部プランを明瞭に捉えることが可能であった。この条件によって小ピットに至るまで掘り残しなく遺構が検出され、住居の床構造や遺構下部に有機質遺物を確認することとなった。

弥生中期は出土遺物から新・旧2時期あるが、両時期ともに集落の主体は北西の未調査区に広がる可能性が高く、本調査域は集落全体の南東の端に位置するものと推測される。古段階の竪穴住居からは鉄石英製の管玉製作、磨製石斧製作、土製円盤製作を示す遺物が出土し、本地域の特産品製作の集団といった性格が見える。新段階の焼失住居からは多数の磨製石斧とともに鉄斧が出土し、該期の住居出土金属製品では県内初である。

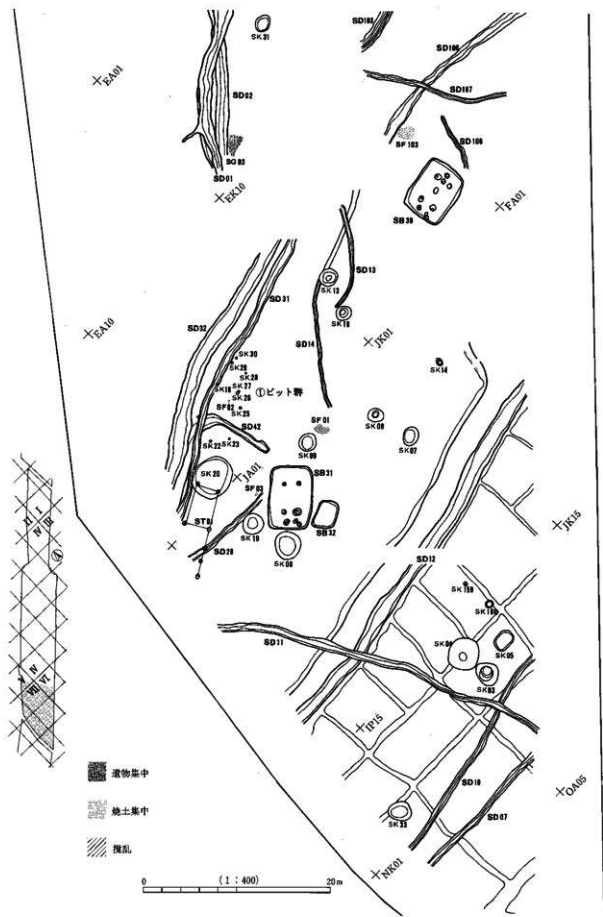
弥生後期の集落は遺構の重複関係から2ないし3時期あると考えられるが、出土土器の型式差は微妙である。後期集落の主体も中期集落同様に未調査区の北西にあると予想され、竪穴住居の分布状況から単位集団が数群見いだせる。後期中葉段階は水田址が確認され、居住空間と合わせた景観が具体的に姿を現した。水田は洪水性の砂層により埋没し、数軒の竪穴住居の埋土からも同一の砂層堆積が認められ、本地域一帯に大洪水があり、一時的な断絶があった状況が確認された。後期後葉段階に低地は遺物廃棄場あるいは井戸が複数検出され、住居は北東寄りに展開する。集落景観は竪穴住居、井戸、廃棄土坑、溝などの遺構で構成されるが、従来該期では不明な点が多い掘立柱建物も数棟検出された。これら各遺構には集落域では残りにくい木製品が出土し、竪穴住居・掘立柱建物の柱穴に残存した柱材、井筒転用の丸木船、漆塗の木製鉢等がある。また竪穴住居内からは銅釧、漆付着布(絹か)などがあり、木材利用と合わせて従来

の弥生生活具を補強する貴重な資料を得ることができた。本遺跡は弥生後期後葉段階で居住域としての利用はなくなる。

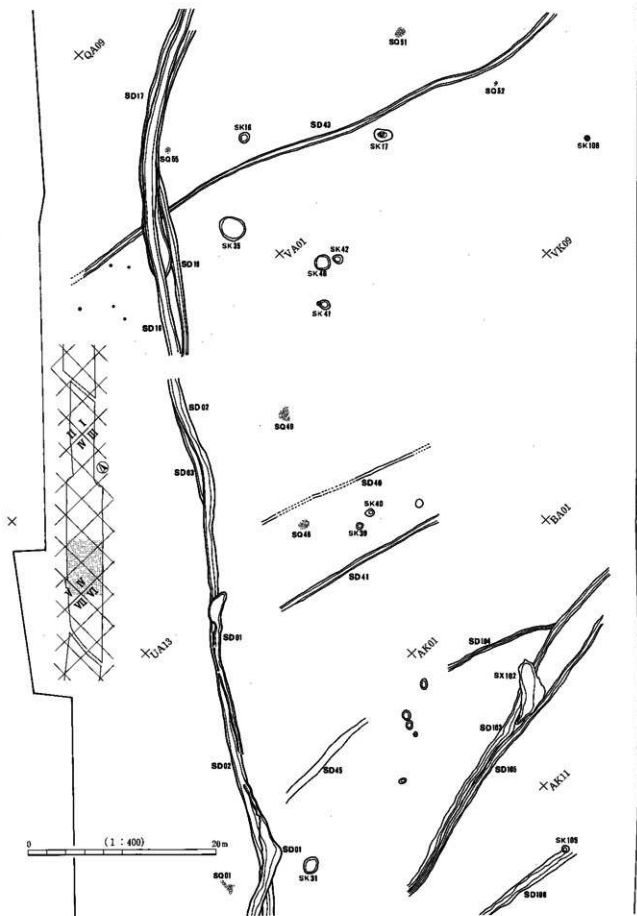
弥生後期終末から古墳前期は周溝墓群が作られ集落から墓域へと変化した。後期終末の円形周溝墓は区画溝内に群をなし、古墳前期の方形周溝墓は単独で分布する状況が明らかになった。

古墳中期以降は集落微高地域から遺構・遺物が皆無となり、生産域である低地との境界部に古墳後期の溝が数条検出されたほか、東低地域に9世紀後半の遺物を少量出土するだけである。古墳中期から中世までは生産域として利用されたと推測されるが、後世の耕作や災害による再開発のため状況は不明である。

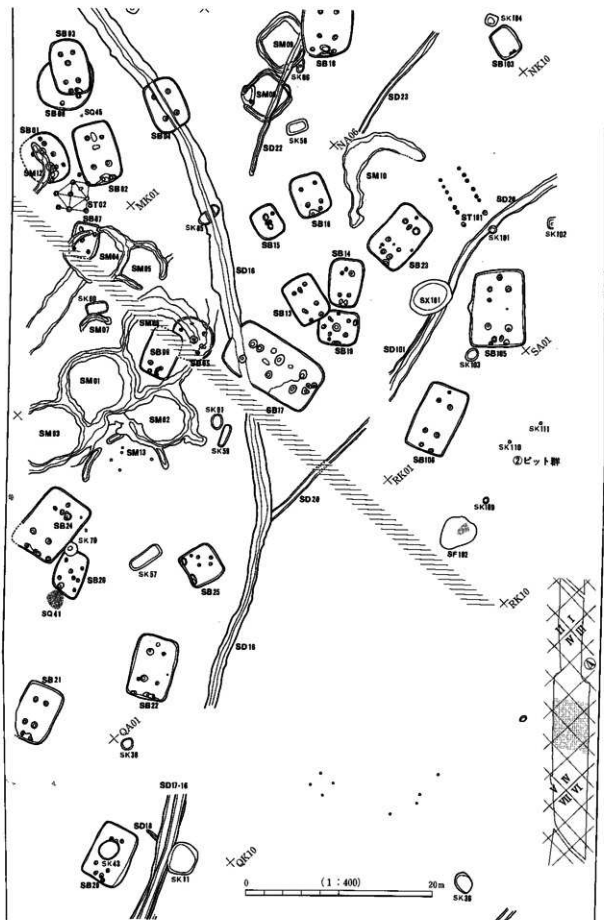
近世は洪水砂が調査域全域から検出され、この砂を被覆した水田畦畔や砂層を前後する近世土坑等がいくつ検出され、現在に至る。



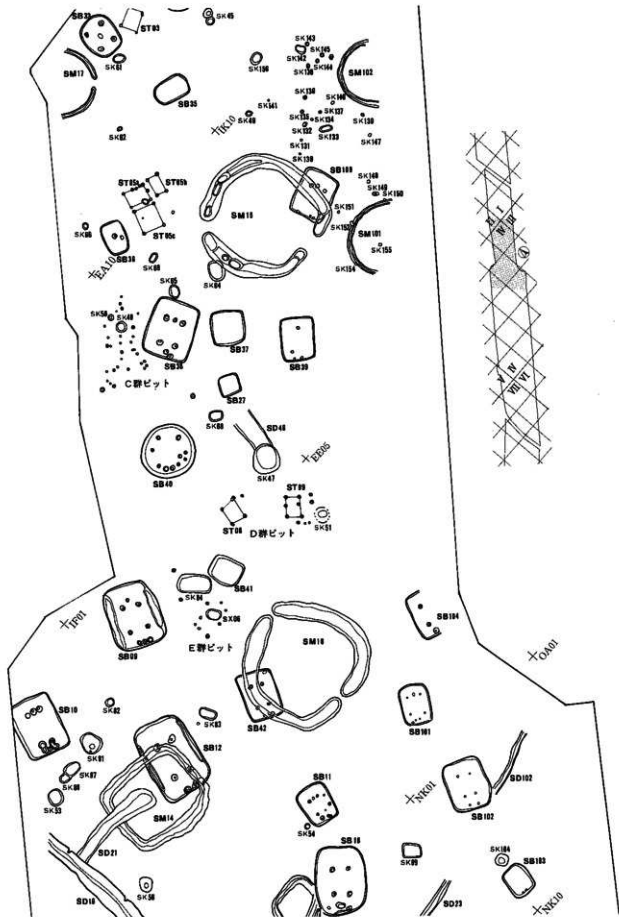
第7図 主要遺構分布図1



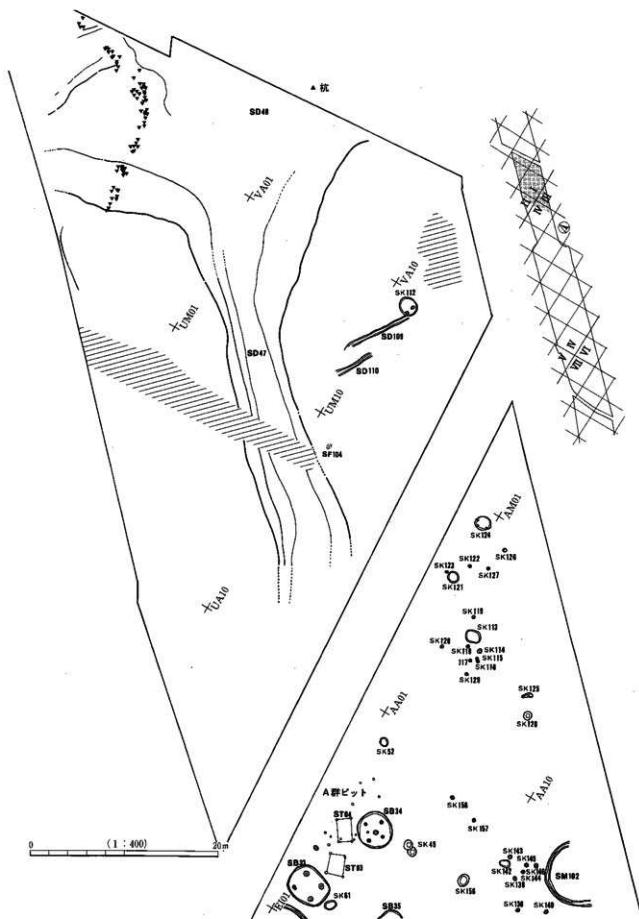
第8図 主要遺構分布図2



第9図 主要遺構分布図3



第10図 主要遺構分布図 4



第11図 主要遺構分布図 5

第3章 各時代の遺構・遺物

第1節 弥生時代前期並行期（縄文時代晩期）

1 概観

該期の遺構検出・遺物出土は調査区東端に集中し、春山遺跡の境界となる低地に位置する。出土遺物から確実に本期に帰属する遺構は土坑4基のみであるが、埋土や周囲の状況からⅢ区-Aグリッド及びⅠ区-Uグリッド内の土坑の大半が本期に属するものと判断される。Ⅲ区-Aグリッド内には土器・石器の遺物集中と18基の土坑（ヒットも含む）が検出されている。遺物では、細密条痕を主体とした深鉢形土器が多く、打製石斧と石鎌が数点ある。また弥生時代中・後期の遺構からも数点の土器片が出土しており、それらの遺構はⅣ区-I・D・Eグリッド内に位置する。該期の遺構の分布はほぼ北東側に限定されていたと見ることができる。

出土土器群の時期は、在地の条痕施文を主体とした晩期終末段階の水Ⅱ式と捉えられ、本遺跡において最も古い時期の遺構・遺物として微地形形成及び土地利用の観点から重要な変換期とみなされる。

2 遺構と遺物

(1) 土坑 [第1表]

SK121 (Ⅲ区-Uグリッド) [第12・14・15図 PL18・29・91]

調査区東端に位置する。他の遺構との重複はない。北西-南東方向にやや長い楕円形プランである。平面規模は1.0×0.8mで、検出面から40cmの深さとなる。底面は平坦で、ほぼ垂直に掘りこまれ、断面形は長方形を呈する。埋土は人為的な埋め戻しであり、炭化物粒を多量に混入した黒色シルトに各種の遺物が多量に含まれていた。土器は埋土下部と壁寄りに大形破片の集中が見られ、小片は埋土内に散在していた。器形復元された個体は深鉢1点(3)のみで、この個体以外は破片として投棄された可能性が高い。まとまった深鉢破片の下からは多数の獣骨(鹿)片(PL91)が出土し、一部焼骨も含まれていた。また頁岩の剥片・砕片も多数出土した。土器の多くは櫛状工具による細密条痕文の深鉢であったが、貝殻条痕を施文した搬入品(10-13)も含まれていた。また口縁部を欠くが変形工字文施紋の浅鉢(4)もあり大冨A'式の範疇に含まれる。

SK53 (Ⅳ区-Nグリッド) [第12・16図]

調査区のほぼ中央北寄りに位置する。南北方向にやや長い不正円形プランで、平面規模は1.6×1.3m、検出面から8cmの深さとなる。底面は平坦で鍋底状の断面形となり、薄い炭層が広がる。埋土はシルト質の自然堆積層である。遺物は有肩の深鉢土器2片が出土したのみである。本址の立地と埋土において該期に帰属させるか疑問もあるが、本址周辺住居内に晩期遺物があることから当該期の土坑とした。

SK120 (Ⅲ区-Aグリッド) [第12・16図 PL18]

調査区東端に位置する。他の遺構との重複はないが当該期の遺物集中域内である。径90cmの円形で、検出面から35cmの深さの掘り鉢状の断面形状となる。埋土は黒褐色粘土で下層には多量の炭化物粒が含まれる。遺物は下層下部から口縁端部に押圧のある土器片と頁岩（粘板岩質）製の打製石斧1点（PL61-4）が出土した。

SK124 (Ⅱ区-Uグリッド) [第12・16図 PL18]

調査区東端に位置する。他の遺構との重複はない。南北方向にやや長い不正円形プランで、規模は1.4×1.2m、検出面から32cmの深さとなる。底面は平坦で断面逆台形の垂直気味の掘り込みである。埋土は炭化物粒を含み、埋め戻し土と捉えた。底面壁際には径15cm、深さ10cm程の小ピットが3基検出された。遺物は細密条痕を施した土器小破片の他に、打製石斧製作時の大形剥片（PL62-16）が出土した。

第1表 弥生前期並行期（縄文晩期）土坑一覧

土坑番号	グリッド	規模 (cm)	形状	備考 (埋土・出土遺物)
SK53	Ⅳ区Eグリッド	本文記載		
SK114	Ⅲ区Aグリッド	54×44	-18	楕円形 黒灰色粘土（上）黒灰色粘土・オリーブ色シルト混入（下）
SK115	Ⅲ区Aグリッド	径20	-15	円形 オリーブ色シルト
SK116	Ⅲ区Aグリッド	径24	-10	円形 オリーブ色シルト
SK117	Ⅲ区Aグリッド	径26	-14	円形 オリーブ色シルト
SK118	Ⅲ区Aグリッド	径22	-10	円形 オリーブ色シルト
SK119	Ⅲ区Aグリッド	径24	-19	円形 オリーブ色シルト
SK120	Ⅲ区Aグリッド	本文記載		
SK121	Ⅰ区Uグリッド	本文記載		
SK122	Ⅰ区Uグリッド	径18	-20	円形 黒灰色粘土
SK123	Ⅲ区Aグリッド	径20	-10	円形 黒灰色粘土
SK124	Ⅰ区Uグリッド	本文記載		
SK125	Ⅲ区Aグリッド	120×40	-18	不正楕円形 黒褐色粘土 土器片
SK126	Ⅲ区Aグリッド	38×28	-10	長方形 黒灰色粘土
SK127	Ⅲ区Aグリッド	径20	-10	円形 黒灰色粘土
SK128	Ⅲ区Aグリッド	径20	-10	円形 黒色シルト 土器片
SK129	Ⅲ区Aグリッド	22×19	-13	円形 黒灰色粘土
SK130	Ⅳ区Eグリッド	142×60	-12	長楕円形 黒褐色粘土（上層）灰色細砂（下層）

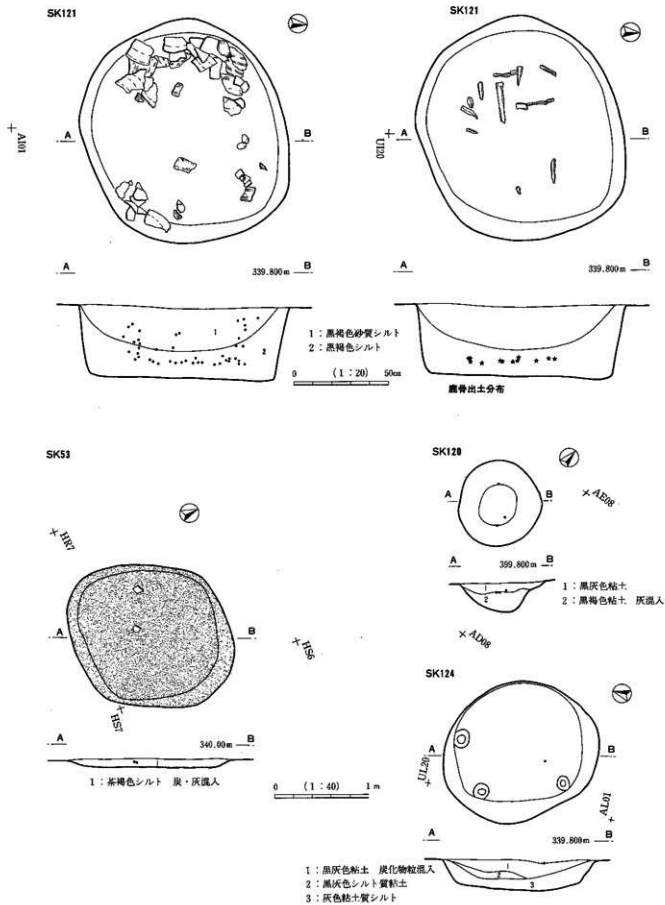
(2) 遺物集中

Ⅲ区-Aグリッド遺物集中 [第13・16・17図 PL61-62-74-76]

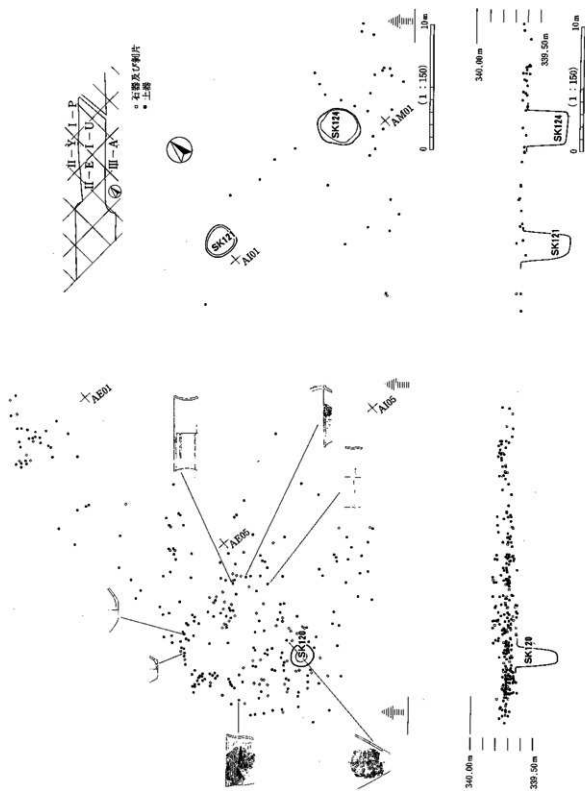
調査区東端に位置する。本調査地点は微高地から低地にかかる地形変換域にあたり弥生中期以後の居住関連の遺構は稀薄である。遺物も極少量の中・後期土器細片が散在するのみであり、晩期の土器破片が偏在していた。土器は頸部削りによる有肩の深鉢（1-4・19-22）が数点あり、櫛状工具もしくは筥状工具による条痕施文が目につくほか、頸部に沈線を巡らす深鉢（3・15・16）や口縁端部に押圧のある浅鉢（5）などがある。石器は、石鏃（PL76-20）・石鏃未製品（PL76-36）のほか欠損品も含まれるが、頁岩製の打製石斧5点（PL61-5-6-8-9-10-11）・石核（PL74-9-11）などが出土した。

(3) 出土土器の概要

器種は甕（深鉢）、鉢、壺に分類されるが全容が確認できる個体は数点であり口縁形態が確認できる個体は30片である。甕は体部上半に緩い屈曲を有する器形となり外湾ないしは外反する口縁部をもつ1群

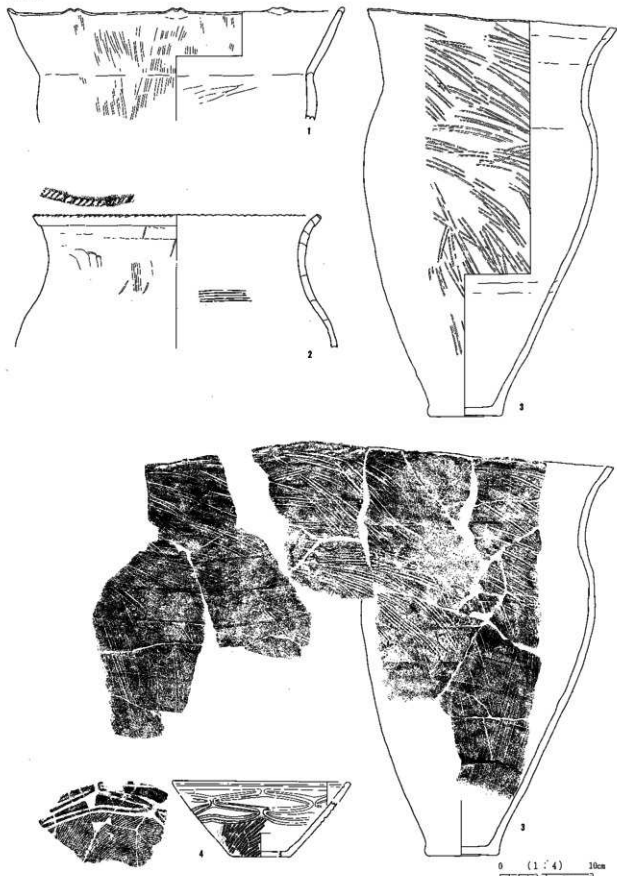


第12図 SK53・120・121・124実測図及び出土遺物分布図



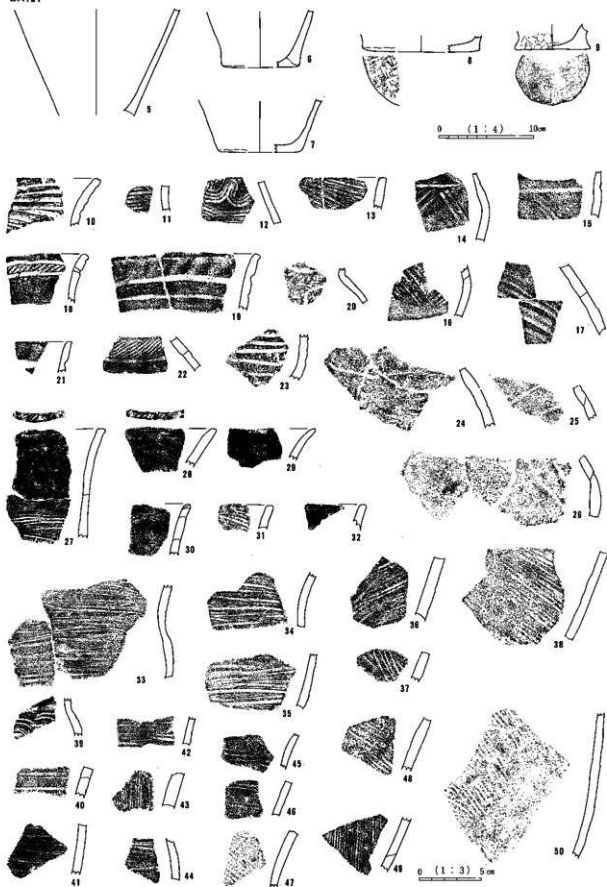
第133図 Ⅲ区Aグループ遺物集中平面分布図及び比重分布図

SK121

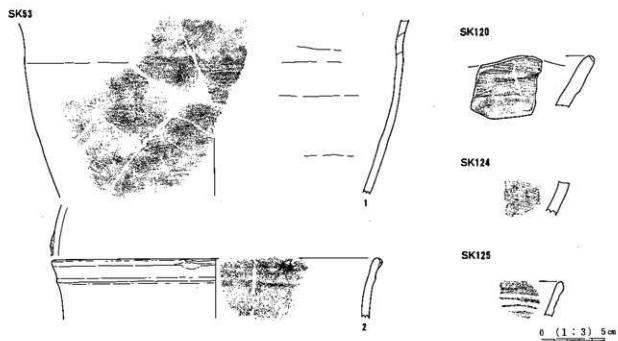


第14图 SK121出土器实测图・拓影1

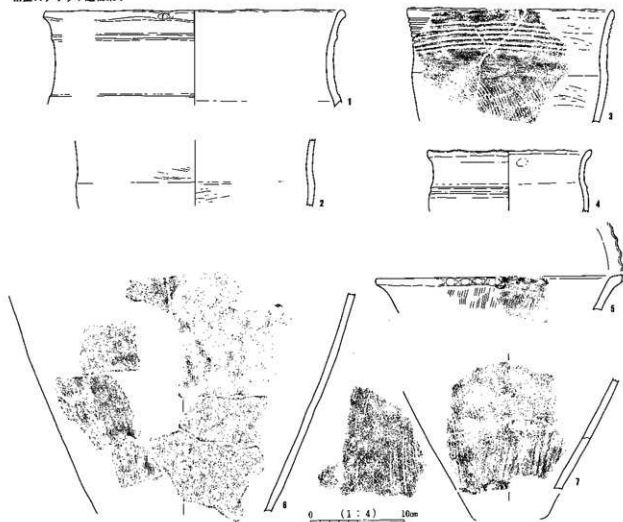
SK121



第15图 SK121出土土器实测图・拓影2

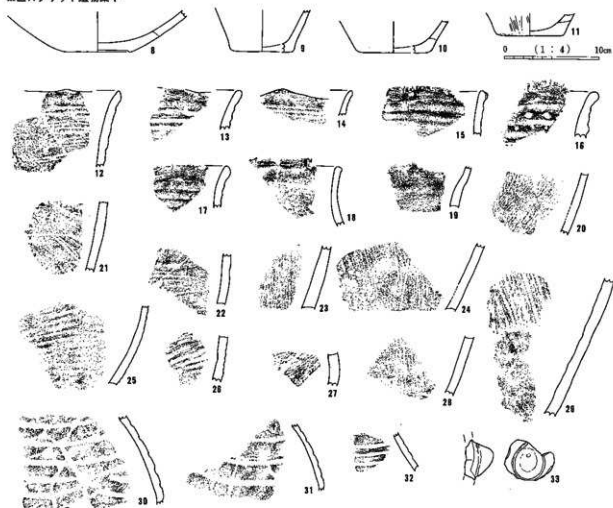


Ⅲ区Aグリッド遺物集中



第16図 SK53・120・124・125及びⅢ区Aグリッド遺物集中出土土器実測図・拓影

田区Aグリッド遺物集中



遺構外出土



第17図 田区Aグリッド遺物集中及び調査区内出土晩期土器実測図・拓影

(SK121-1-2-3, SK53-1-2, 遺物集中-1~4-18) と体部から緩やかに外傾もしくは直立する1群 (SK121-10-19-27~30) がある。口縁端部は突帯を有する1群 (SK53-2, 遺物集中-1-4-15-18) と単純口縁がある。単純口縁には上部からの押さえによって平坦になる形状 (SK121-3-13-18-19-31-32) と先鋭形状 (SK121-29・遺物集中-3-12~14-17) があり前者には端部に縄文が施紋されるもの (SK121-27-28) と刻み目が施されるもの (SK121-2-30) があり、後者には突起が付加されている (SK121-1-SK120-SK125)。甕の底部は全て平底で網代痕 (SK121-8) と木葉痕 (SK121-7-9) が見られた。鉢はSK121-4と遺物集中-5と上げ底を呈する遺物集中-8の3点がある。SK121-4は地文に回転縄文を施紋し、体部上半に2条の篋平行・斜行沈線文が彫り込まれて沈線区画内に磨きが施されている。この鉢は大洞A²式の典型的な基本工程を完備した紋様構成を示し、『変形工字文A型』とされる (須藤1976)。遺物集中-5は口縁小破片であるが水平口縁の端部に楕円形の手捺が加えられ、体部は細密条痕が施されている。壺は器形を知る資料がないが波状条痕 (SK121-12)、沈線文と縄文 (SK121-20-22)、沈線文 (SK121-24-25)、羽状条痕 (SK121-14-17) の各土器片が壺肩部として認識された。遺物集中-16は浮線文に楕円手捺を加えた壺もしくは鉢である。

施紋は器面の摩滅が著しい破片も多くあるが条痕文、沈線文、縄文があり、器面調整には削り、磨き、ナデが認められた。条痕文の多くは在地の細密条痕であるが篋状工具による密な条痕 (SK121-1-27-38-49, 遺物集中-22-23-24-28など)、半截竹管による2条1単位の鋭い条痕 (SK121-3-39)、篋状工具による沈線に近い条痕 (SK121-33-35-40-41, 遺物集中-12-14など)、貝殻条痕 (SK121-10-11, 遺物集中25-26) が観察された。条痕施紋の方向は横位・斜位・縦位がそれぞれあり、同一器形の甕 (深鉢) でもSK121-1は縦位SK53-1は横位、遺物集中-3は斜位であった。土器胎土は大半が長石・石英を多量に含んだ在地の土で、色調は橙褐色から茶褐色であったが、SK121-10~13は混入物の少ない黄白色の色調であり搬入品と捉えた。

参考文献

須藤 隆 1976 『亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立』 考古学研究第23巻第2号

第2節 弥生時代中期

1 概観 [第18・19図]

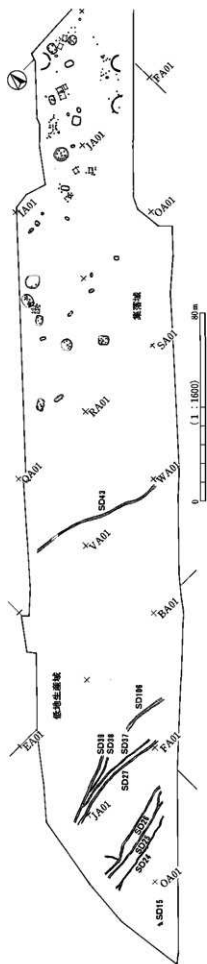
中期集落の主体は調査区中央から北東側にあり、集落域からは竪穴状遺構を含めた竪穴住居12軒と掘立柱建物8棟を含む6群のピット群、大小の土坑49基、溝10条、遺物集中3基がある。竪穴住居相互の重複はなく、土坑やピット群の切り合いも極めて少ない。集落南西は遺構の希薄な干渉地であり川田条里遺跡寄りの低地域に溝9条が検出された。出土土器は全て中期後半の栗林式土器であるが、土器様相から2～3時期ある。

2 遺構と遺物

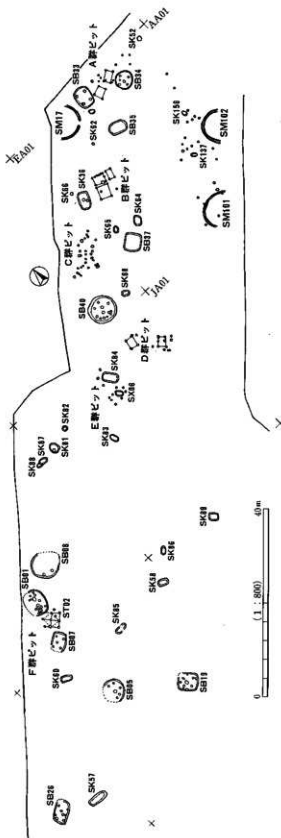
(1) 竪穴住居址

SB01 (IV区-Hグリッド) [第20～23・256～259・262図 PL2・30・53・55・56]

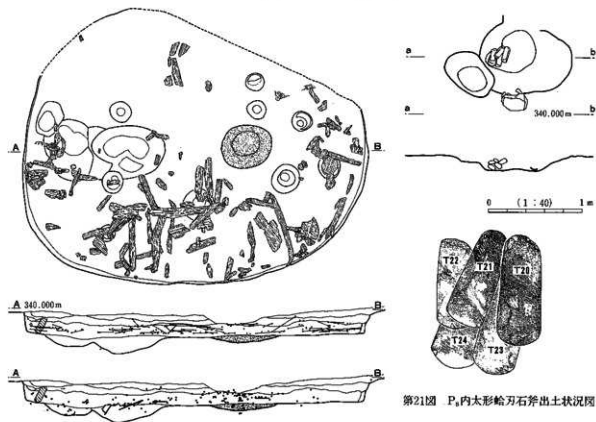
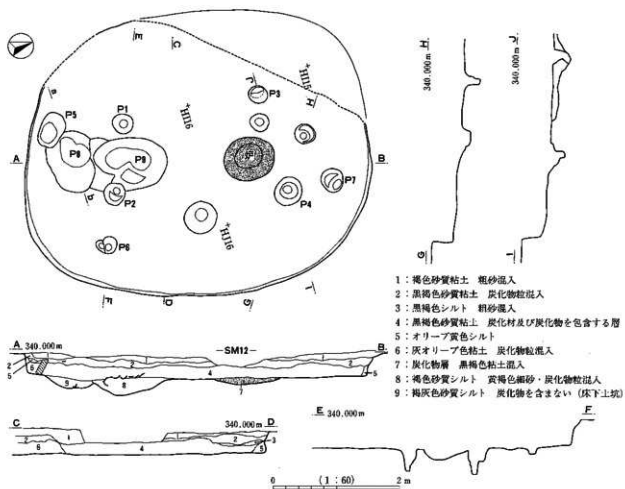
調査区中央北側に位置している。北東部の一部は調査区外のため遺構の約1/8は不明である。埋土上層にはSM12の周溝があり、南西側は掘立柱建物址ST02の柱穴を切る。形状・規模：隅丸長方形ないしは楕円形のプランとなり南北に長軸をとる5.33×(4.3)mの中型の竪穴住居である。主軸方向はN-21°-E。埋土：本址は焼失住居であり2層から炭化物を多量に含み、4層・床面に至るまで夥しい炭化材が出土した。4～7層は砂質土で焼失直後の埋土である。床面：黄灰色シルトを混入した貼り床であったが、全体的には稀薄であり、炭化材・炭化物が覆っていたため貼り床と炭化物混入のシルトとの判別が困難な部分もあった。床面からは11基、貼り床下からは2基のピットが検出された。炉：主軸上中央部北奥壁寄りに位置する。45×35cmの楕円形プランで床面からの掘り込みは15cmである。焼土は検出されなかったが細かい炭化粒子を多量に含んだ砂質粘土が埋土であった。炉周辺には浅い掘り鉢状のピットが検出された。柱穴・ピット：P₁～P₄は床面から40～50cmの深さをもち主柱穴と考えられるが、配置は住居中央寄り、柱穴を結ぶ形状は台形となるためP₅・P₇が補助柱穴となる可能性がある。P₅は出入り口もしくは貯蔵穴となるピットで炭化物を混入する埋土から鉢が出土した。P₆・P₈はいずれも主軸上に位置し、P₆は床面下から検出された床下土坑である。P₉の埋土は他のピットと異なり炭化物が含まれず、出土遺物にも被熱・炭化の痕跡が認められなかった。遺物の出土状況：炭化材は東側に整然と出土し、中央部から外側に放射状に伸びる形状の材と住居プランに平行する材が確認された。炭化材の樹種は板材がカバノキ属、割り材がトネリコ属・ニレ属(付章参照)で針葉樹材は検出されなかった。土器は西側の2層内から破片数点が出土している以外全て炭化材に伴った埋土(4層)もしくはピット内からであった。土器表面はP₈内出土高杯底部(14)を除いて全て被熱・炭化痕を残すもので、遺物は全て本址に伴うものである。大型壺1・2は広範囲にわたって破片が散在し、接合が認められた。これらの壺は住居焼失の過程で故意の破壊があった可能性を示唆している。石器は太形蛤刃石斧が8点(内1点は刃部方向先端を研磨している)、扁平片刃石斧が2点、大形研磨台石、砥石(ミガキ石か)、凹み石が各1点出土した。太形蛤刃石斧T1・T2は4層上部からの出土であるが、T3は台石の下から刃部を中央に向け低く傾斜した状況で出土した。T20～T24はいずれも完形で、P₈内に刃部を同一方向に揃え重なって検出された。これらP₈内出土蛤刃石斧の刃部には余り使用の痕跡が認められず保管していた可能性がある。特殊遺物としてT1層から鉄斧が出土した。該期の鉄斧としては県内で唯一遺構に伴う資料であり、複数の石器類との共存関係は注目される。時期：壺の胴下半部形態(2・5・6)と装飾、甕(12)の構指文施文、鉢(7)の形態から中期終末



第18図 弥生中期濃樺分布図

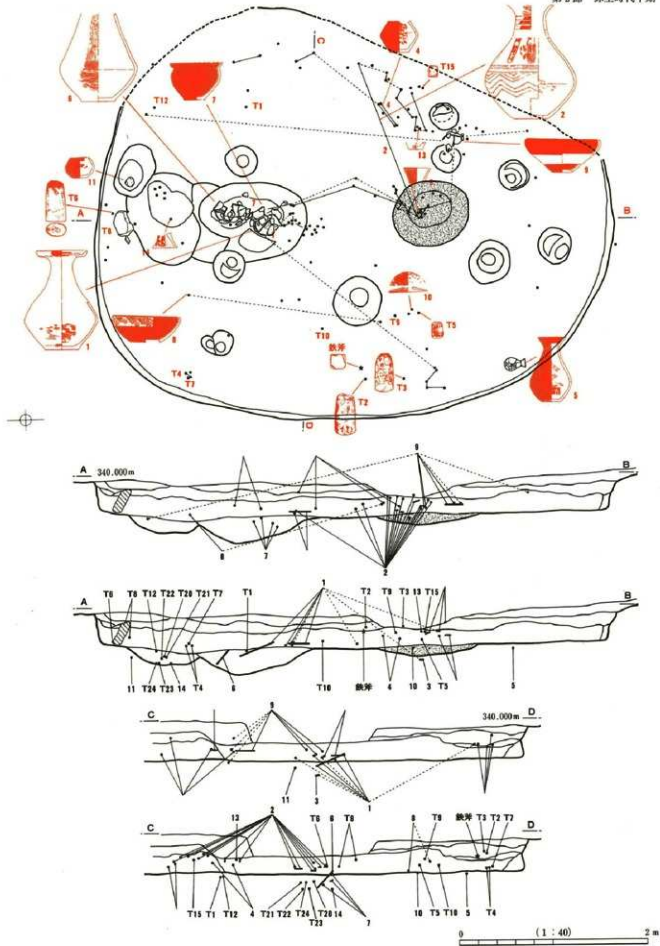


第19図 弥生中期濃樺濃樺分布図



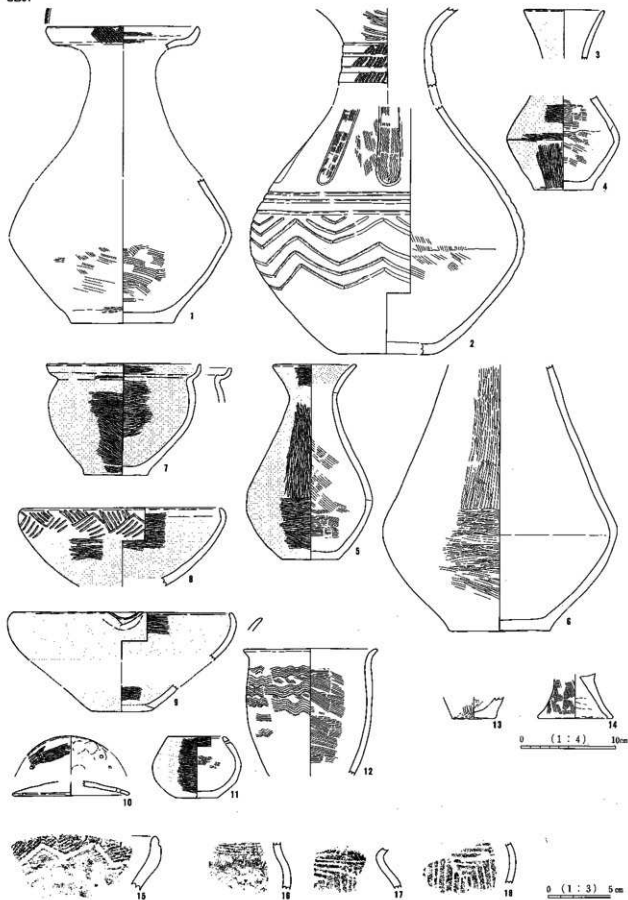
第21図 P₁内太形蛤刃石斧出土状況図

第20図 SB01 実測図及び炭化材出土分布図

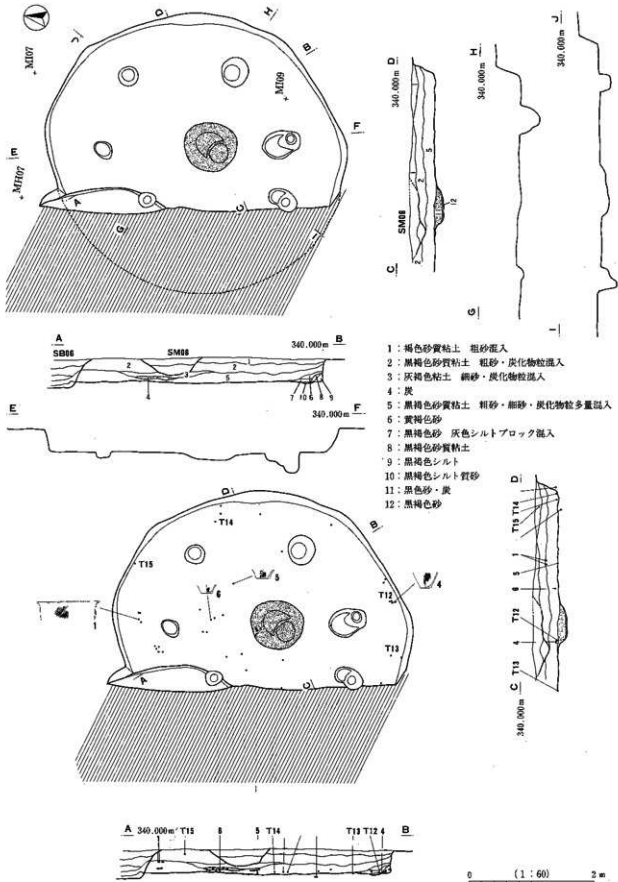


第22圖 SB01出土遺物分布圖

SB01



第23図 SB01出土土器実測図・拓影



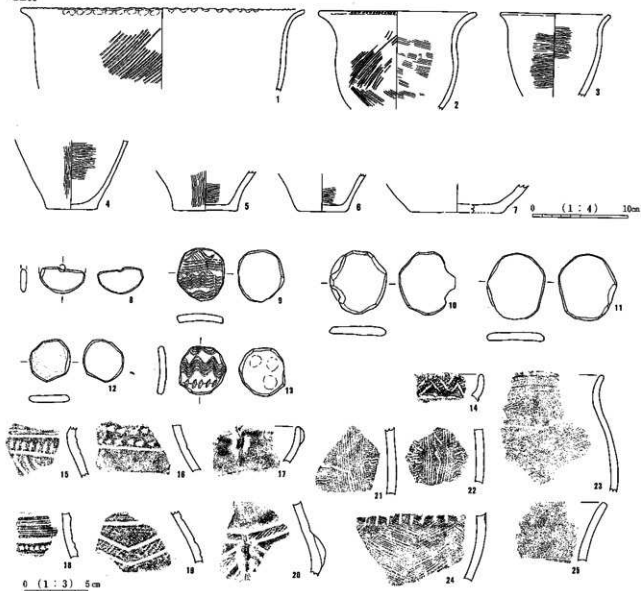
第24図 SB05実測図及び出土遺物分布図

段階で、住居形状と炉の位置も後期の形態に近い時期となる。

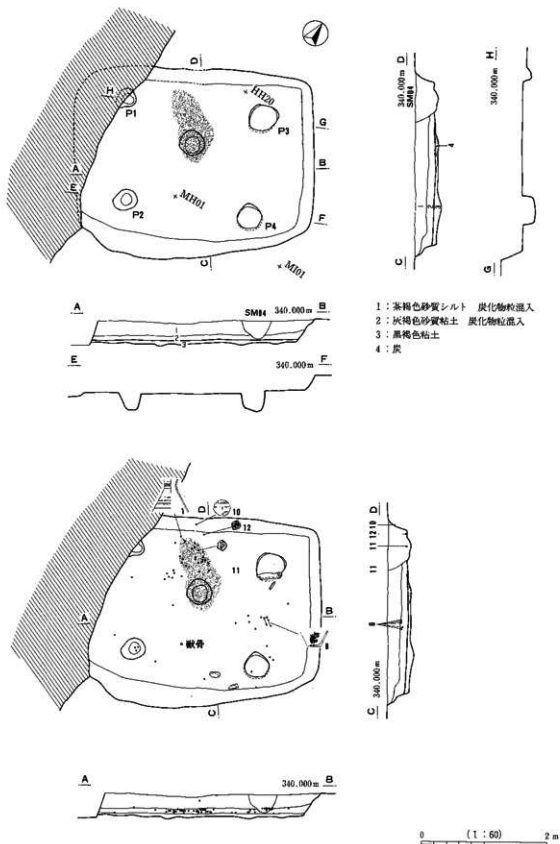
SB05 (IV区-Mグリッド) [第24・25・260・263図 PL2・3・52・55・56]

調査区中央北寄りに位置している。東西方向の現用水路によって約1/3を欠き、後期住居SB06が東側床面と壁の一部を切っている。更に埋土上層はSM06の周溝がある。形状・規模：4.5×4.4mのほぼ円形プランになると推定される中型の竪土住居である。主軸方向はN-43°-W。埋土：砂質分を多量に含んだ自然堆積層である。床面及び壁際には細・粗砂が残る部分もあり、遺構廃棄後に短期間に堆積したものと捉えた。床面：固く締った砂質シルトであるが、貼り床は認められない。炉：住居ほぼ中央部に位置する。径82cmの円形プランを呈し、床面から15cmの掘り込みとなる地床炉である。底面は南西側がやや深くなる。埋土には焼土がなかったものの炭化層が詰まり、周辺にも炭層の広がりが認められた。炭層中からは管玉未製品を含む鉄石英の剥片、碎片が多量に出土した。柱穴・ピット：ピットは6基検出され、30cm前後と浅い掘り込みであるが配置から全て柱穴になると判断した。遺物の出土状況：4層下部から下層・床

SB05



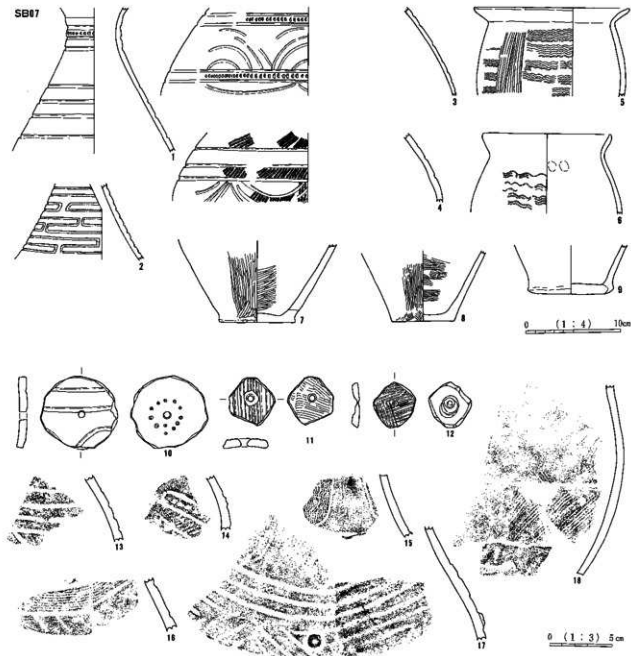
第25図 SB05出土土器実測図・拓影



第26図 SB07実測図及び出土遺物分布図

面にかけて少量の土器破片と石器、土製円盤6点が出土した。土器は散在していたのに対し石器は全て壁際からの出土で、破損太形蛤刃石斧1点、扁平片刃石斧1点と未製品2点、更に片刃石斧となる素材が5点、砥石破片1点、研磨台石破片数点などのほか、刃器となる大形板状剥片、磨製石鏃未製品などがある。扁平片刃石斧にかかわる未製品、粗割石材は注目され、これら磨製石斧類の素材となる閃緑岩の剥片、破片が埋土から253.5g出土した。また炉周辺を中心に鉄石英の剥片、破片が総重量約19.9g出土し、管玉の完成品はなかったものの未製品段階の破損品や研磨過程の玉が含まれていた(第263図)。

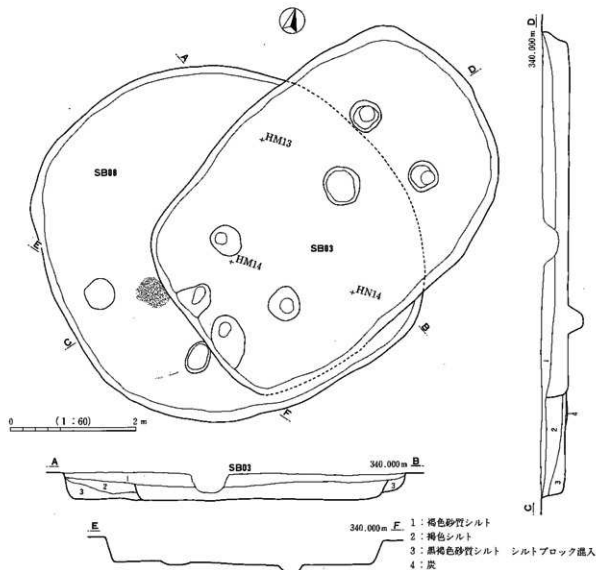
本址は出土遺物から鉄石英を素材とした管玉製作址と閃緑岩を素材とした磨製石器製作址としての性格付けがなされ、県内で該期の玉造資料としては初めてとなる。時期：図示した甕(1・2)は横羽状の櫛描文であり中期後半の古段階に位置付くが、土製円盤(9・13)の櫛描波状文や拓影(21・22)の文様から中段階とされる。



第27図 SB07出土土器実測図・拓影

SB07 (IV区-H・Mグリッド) [第26・27図 PL3・56・57・58・64・65]

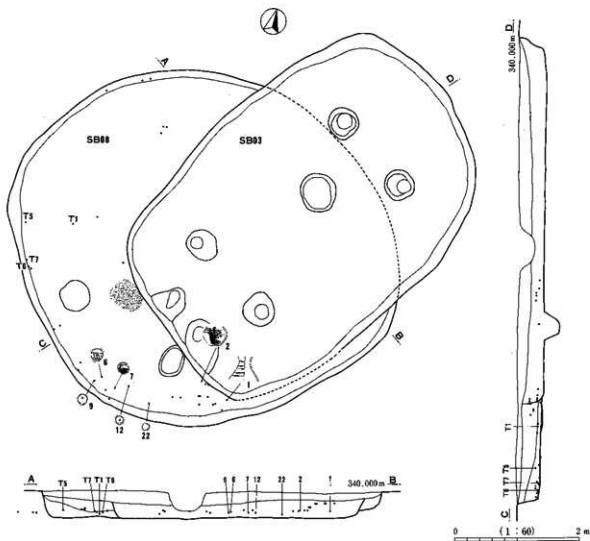
調査区中央北寄りに位置している。東西に走行する現用水路によって約1/6を欠き、埋土上層はSM04の周溝によって削られる。形状・規模：南西―北東方向に長軸をとる隅丸長方形になると推定され、短軸2.5mの小型の竪穴住居である。主軸方向はN-31°-Wで短軸辺を主軸とする。埋土：2層の自然堆積層からなる。下層は遺物を包含した砂質シルトで床面には砂が薄く残る部分もあり、短期間に堆積した埋土である。床面：南壁から炉までの床は黒褐色粘土と砂を混合した貼り床で、奥壁となる北壁付近は平坦に掘り込んだ砂層面を床としていた。炉：主軸上の中央やや奥壁北側に位置する。径40cmの円形プランを呈し、床面から8cmの掘り込みとなる地床炉である。炉内及び北壁にかけて炭層が広がり遺物が集中した。柱穴・ピット：ピットは4基検出され全て主柱穴となり、床面からはほぼ30cmの深さをもつ。P₃上部からは木片が出土した。遺物の出土状況：遺物は全て床面及び下層からで、炉周辺とP₂・P₄周辺にまとまって出土した。北壁付近には土製円盤3点があり、内1点には転用破片に円形裝飾が施されていた(10)。石器では磨製石斧の未製品が2点、大型板状剥片、磨り石があった。時期：2の壺は沈線によって変形工字文を施し、沈線に赤彩が残る。壺(1~4)の文様は古い様相が見られるが、壺は横羽状飾描文の18以外は5・6とも楠描波状文が施され、新段階とされる。



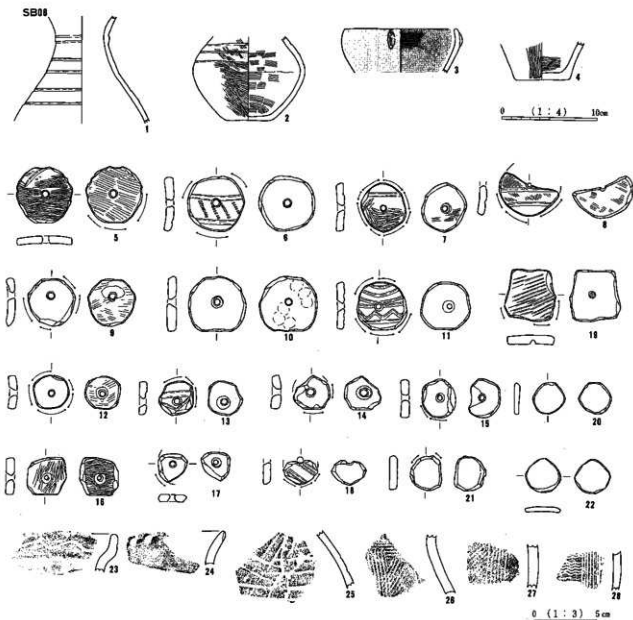
第28図 SB08実測図

SB01 (IV区-Mグリッド) [第28・29・30・261図 PL3-50-56-58-70-74-76]

調査区中央北寄りに位置している。後期住居SB03によって遺構の約2/3を欠き、形状・構造等が不明となる。形状・規模：径約6.0mの円形プランとなる中型の竪穴住居であったと推定される。主軸方向は不明であるが南西側が出入り口になると考えられる。埋土：上層はSB03の埋土と同一で、本址は2層に分層された。下層(3層)は炭化物を混入した埋め戻して上層(2層)は砂質の自然堆積層と捉えた。床：平坦に掘り込んだ砂層面が床で、貼り床は検出されなかった。炉：中央隔南西寄りの床面に炭層の広がりか認められたが、主炉はSB03によって壊されたと推測される。柱穴・ピット：ピットは2基検出されたが、いずれも床面から浅い掘り込みで柱穴は不明である。遺物の出土状況：床面ないし下層から少量の土器と、壁際の床面から石器・土製円盤がまとめて出土した。土製円盤は18点あり有孔(1~18)と無孔(20~22)、未製品(19)があった。石器では摩耗した太形蛤刃石斧1点、中型の磨製石斧1点と石砲丁の破片1点のほか、管玉の素材である鉄石英の剥片・砕片が25.9g、筋砥石が出土した。石砲丁はSB36出土破片と接合した(第261図)。時期：土器は少量であるが頸部から胴部にかけて多段の横線文を施文した壺があることから中段階とされる。



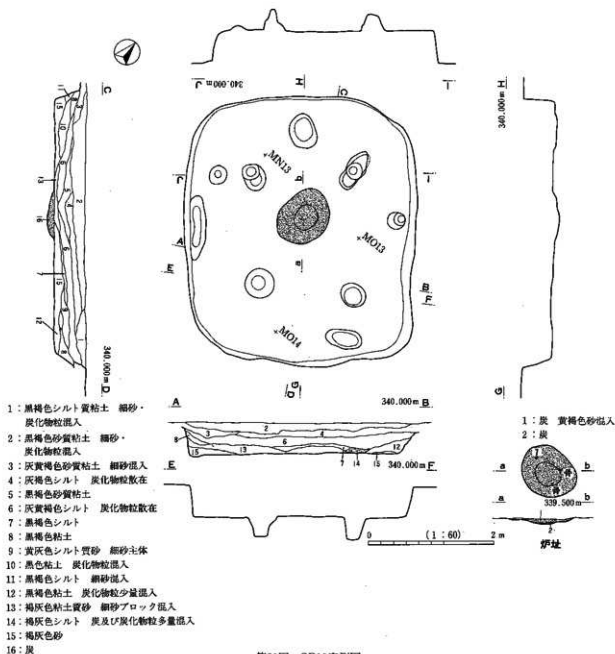
第29図 SB08出土遺物分布図



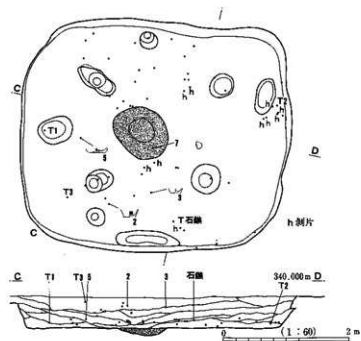
第30図 SB08出土土器実測図・拓影

SB19 (IV区-Mグリッド) [第31・32・33図 PL3-52-54-63-65-76-77]

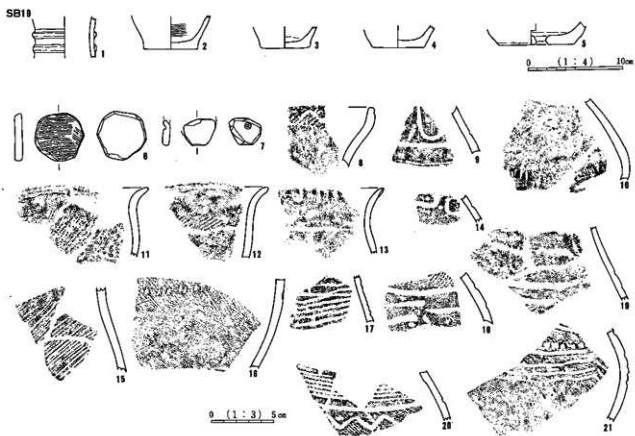
調査区中央部に位置し、中期の住居では南端となる。SB13によって北側コーナーの壁が切られるが、遺構の掘り込みが深く全容は把握された。形状・規模：北西-南東方向にやや長い隅丸方形のプラントとなり、4.2×3.5mの規模をもつ小型の竪穴住居である。主軸方向はN-40°-Wとなり、短軸辺を主軸とする。埋土：上層(2・3層)と床面を被覆する最下層(10・11層)は砂質もしくは砂層であり自然堆積層とされ、本址廃棄直後の1次堆積は砂であった。最下層上面は焼土・炭化物粒を含む人為的な埋め戻し粘土(4・6層)で、多量の遺物が伴っていた。本址の埋没過程は砂→焼土・粘土→砂となる。床面：平坦に掘り込んだ砂層面が床で、部分的に黄灰色シルトが混じる箇所もあったが明確な貼り床は検出されなかった。炉：住居中央部やや北東に位置する。90×75cmの楕円形プランを呈し、床面から14cmの掘り込みをもつ地床炉である。炉内は厚い炭層が詰まり、焼した獣骨片と土製円盤が出土した。炉の他に炭層の広がりとして南西壁付近にも認められた。柱穴・ピット：ピットは9基検出された。P₁~P₄が主柱穴とな



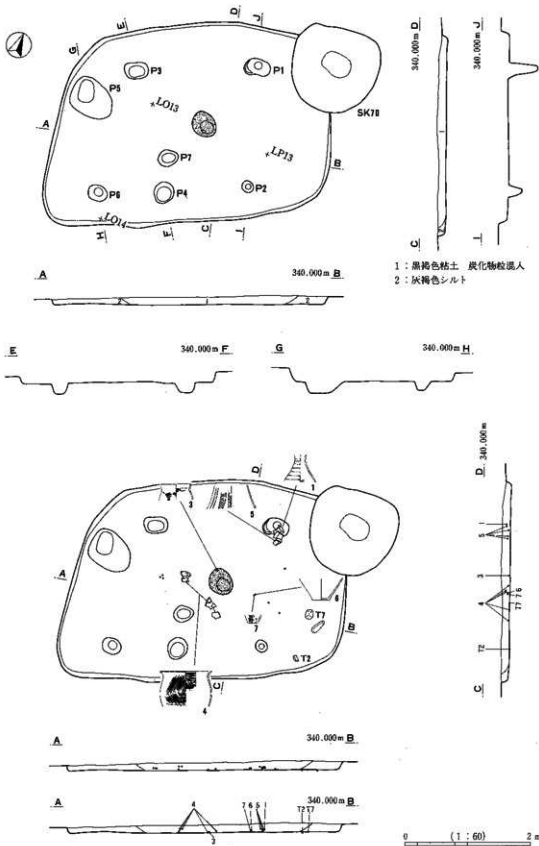
り、4柱穴とも床面からほぼ30cmの深さであった。東壁付近のP₈も同一の深さで、小規模の竪穴住居であるが棟持の柱穴と促えられる。P₈~P₉は僅かな窪みであった。遺物の出土状況：土器は小片が少量（4・6層）中層及び下層から、基部欠損の磨製石斧（2層）・石鏃（10層）などが各層から出土した。また本址からは石器製作にかかわる剥片・砕片が多量に残されていた。特殊遺物としては鉄石英を素材とする管玉の未製品2点、製品1点が出土したが、中・上層からである。



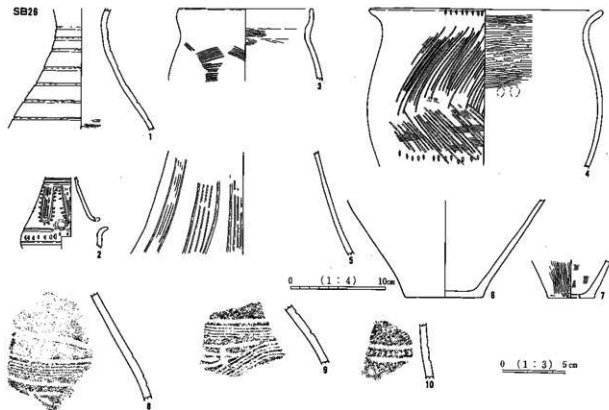
第32圖 SB19出土遺物分布圖



第33圖 SB19出土土器実測圖・拓影



第34図 SB26穴掘削図及び出土遺物分布図



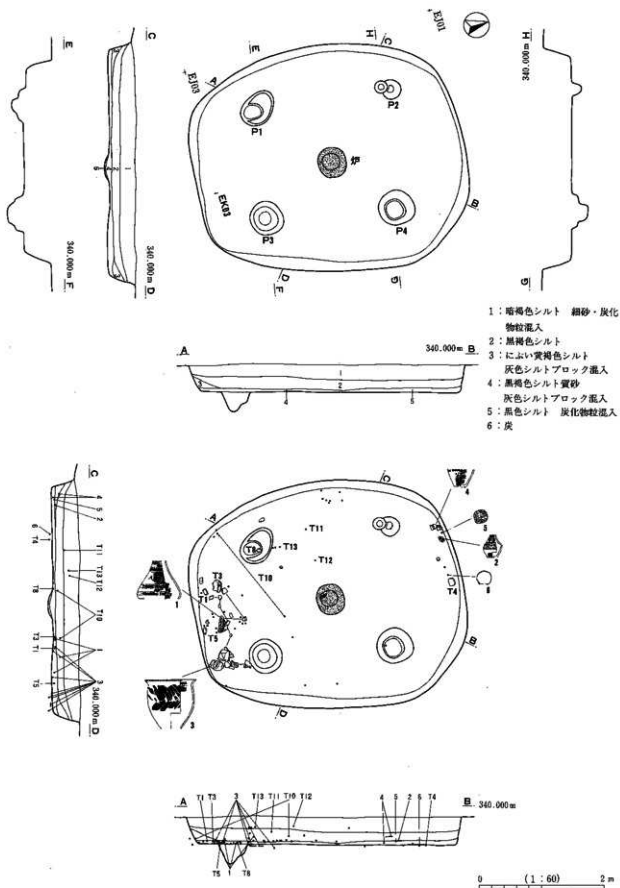
第35図 SB26出土土器実測図・拓影

SB26 (IV区-Lグリッド) [第34・35図 PL3・30・56・67・74]

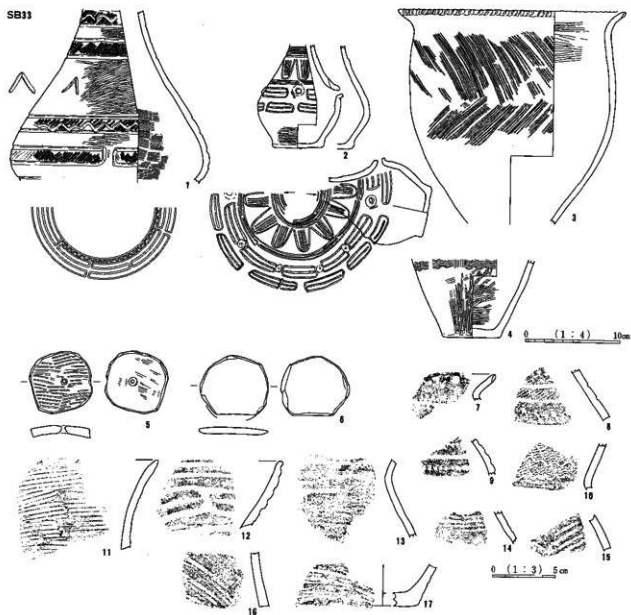
調査区中央北西寄りに位置し、集落の西端にあたる。SK70によって北東コーナーの床・壁を欠く。形状・規模：東西に長軸をとり、南西コーナーが突出した不正隅丸長方形のプランとなる。4.3×3.0mの規模をもつ小型の竪穴住居である。主軸方向はN-28°-E。埋土：検出面から浅い掘り込みで2層に分層された。下層(2層)にはシルトブロックが含まれ、上層(1層)には炭化物粒が多量に混入する。両者とも人為的な埋め戻しの埋土とされる。床面：平坦に掘り込んだ砂層面が床であったが、炉周辺には硬化が認められた。炉：ほぼ住居中央部に位置する。42×36cmの楕円形プランを呈し、床面から17cmの掘り込みをもつ地床炉である。炉内には炭と灰の堆積が認められた。柱穴・ピット：ピットは7基検出された。P₁は床面から50cmの掘り込みをもち、P₂~P₃は25~30cmと浅い掘り込みであった。配列からP₁~P₄が支柱穴、P₅が貯蔵穴もしくは出入り口施設になると捉えられる。遺物の出土状況：遺物は全て1層下面もしくは床面上からの出土で、炉周辺から北東側に分布していた。土器は全て破片資料で、石器は磨製石斧未製品1点、磨り石、石錘などがある。時期：器形がほぼ確認できる土器は横羽状櫛描文の甕(4)のみであるが壺1・2の文様が多段構成であることから中段階に位置付けられる。

SB33 (IV区-Eグリッド) [第36・37図 PL4・30・52・54・56・58・60・67・70・76]

調査区北東寄りに位置し、当該期の遺構の中では最北端にあたる。他の遺構との重複はない。形状・規模：北西側の壁がやや脹んで楕円形に近い隅丸長方形プランを呈す。4.2×3.5mの規模をもつ小型の竪穴住居で、主軸方向はN-79°-W。埋土：上層(1~3)は砂質分を多く含む自然堆積層であり、最下層(4層)は炭化材、炭化物粒を含んだ埋め戻し層である。床面：明瞭な貼り床はない。平坦に掘り込んだ砂層面に黒褐色シルトを薄く敷いた状況が柱穴配列内の床面に認められたが、軟弱であった。炉：住居中央部

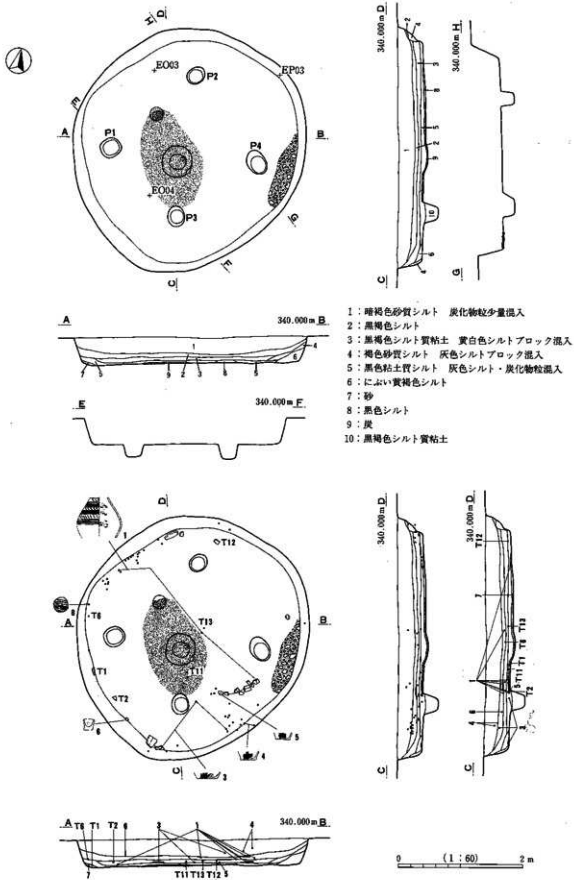


第36図 SB33実測図及び出土遺物分布図

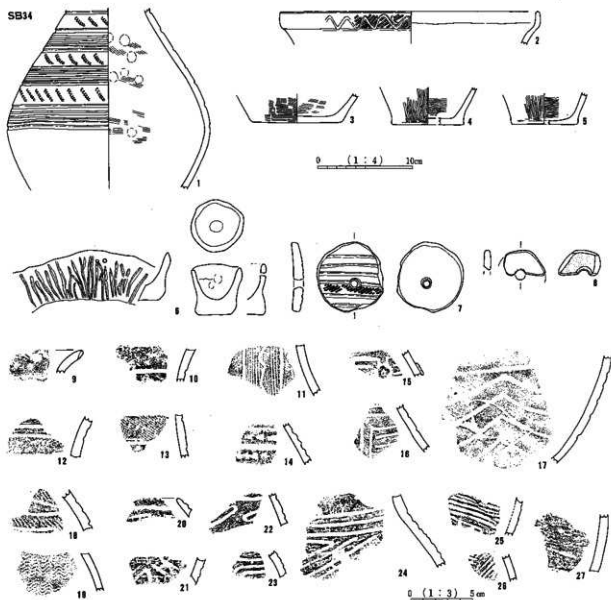


第37図 SB33出土土器実測図・拓影

に位置する。短軸方向にやや長い50×42cmの楕円形プランで、床面から約10cm掘り窪めた地床炉である。焼土の残る炉壁は被熱により硬化が認められが底面は炭の堆積のみで軟弱であった。柱穴・ビット：ビットは4基検出された。P₁～P₄は全て支柱穴となり、床面からは30cm程度の掘り込みであった。遺物の出土状況：上層からは土器細片・石鏃などが散在し、縄文晩期の土器片も含まれていた(11～15)。床面には南壁付近(1・3)と北壁付近(2・4・5)に遺物が集中し、磨製石斧未製品2点、石砲丁破片3点、研磨台石、打製石鏃・砥石などの石器類も含まれていた。また本址からは石器製作にかかわる剥片・破片が多量に出土した。この剥片・破片のなかで注目すべき石材は、管玉となる鉄石英が41.3g、太形蛤刃・扁平片刃などの磨製石斧類となる閃緑岩(輝緑岩)が543.0g、石鏃となるチャートが1125.1gである。これら石材は炭化材を含んだ下層埋土内にあり、本址内に一括廃棄された遺物と捉えられる。ただし、本址が石器製作の工房となるかは不明である。時期：壺1・2の胴部には変形宇字文構成の文様が施され、甕3は横羽状描文である。栗林式の古段階に位置付けられる。



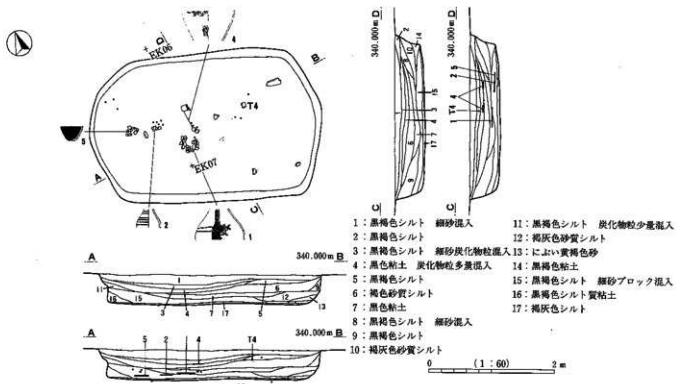
第38図 SB34実測図及び出土遺物分布図



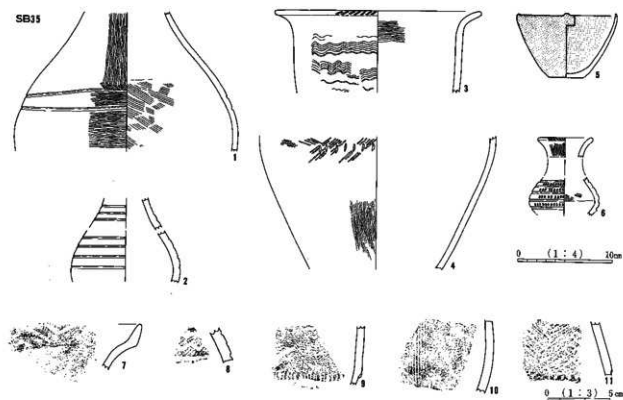
第39図 SB34出土土器実測図・拓影

SB34 (IV区-Eグリッド) [第38・39図 PL4-50-52-56-57-59-60-61-62-65-73-74-76-77]

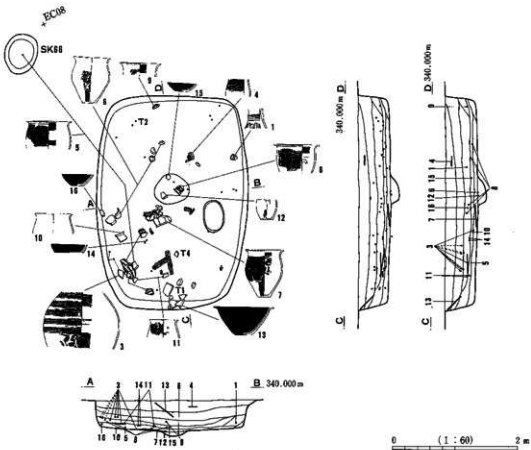
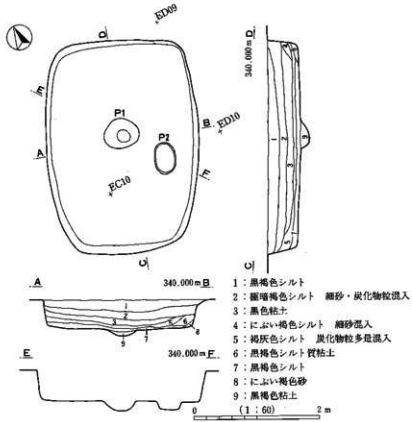
調査区北東寄りの集落域東端に位置している。他の遺構との重複はない。形状・規模：北西-南東方向にやや長い胴張りの方形もしくは円形プランとなり、 3.5×3.4 mの規模をもつ小型の竪穴住居である。主軸方向は柱穴の配列からは南西を出入り口とするN-36°-Wとなるが、炉の位置からは北東を出入り口とするN-54°-Eとなる。埋土：砂質分を多く含んだ上層の自然堆積層(1層)と2層以下の炭化物粒を含んだ人為的な埋め戻し層からなる。埋め戻し埋土3~5層にはシルトブロックが混入することと下層土器との接合がある状況から遺構廃棄直後の層であると捉えられ、やや経過した後に2層埋土の堆積があったものと判断される。床面：平坦に掘り込んだ砂層面が床となり、南東壁付近では旧河道の堆積物である小円礫が平坦に検出された。円礫の状況から砂が床面に敷かれた可能性もあるが、床の硬化は認められない。炉：中央部やや北西寄りに位置する。径50cmの円形プランで、床面から約10cmの掘り込みをもつ地床炉である。炉内に焼土はなかったが炭が堆積し、周辺床面にも薄い炭層の広がりが認められた。また炉と北東壁の中間に径20cmの焼土塊が検出された。柱穴・ピット：ピットは4基検出された。P₁~P₄全て主柱穴



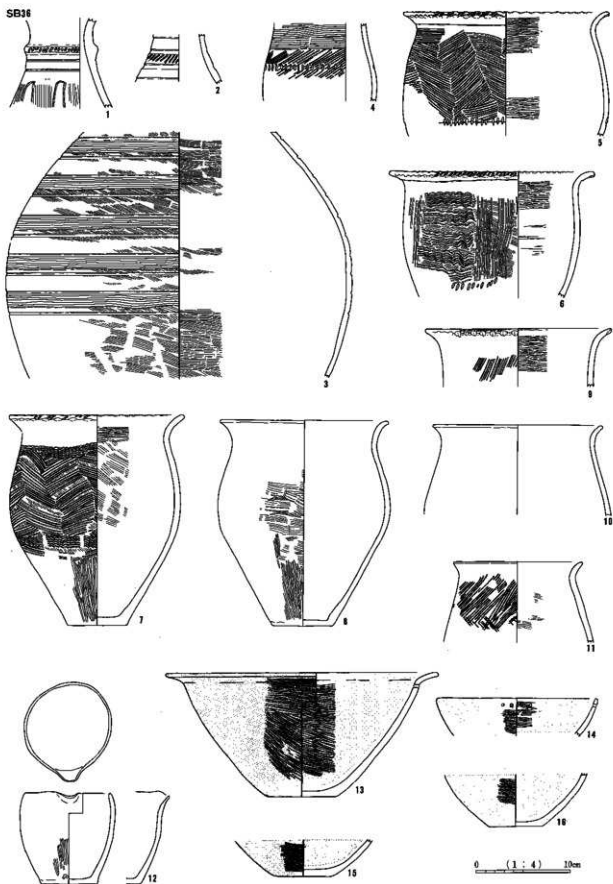
第40図 SB35実測図及び出土遺物分布図



第41図 SB35出土土器実測図・拓影



第42図 SB36実測図及び出土遺物分布図



第43図 SB36出土土器実測図

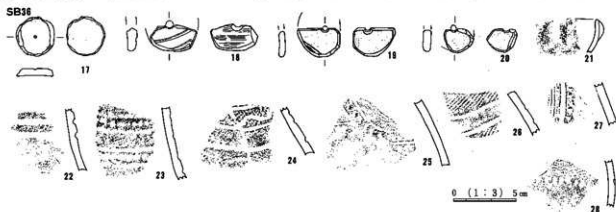
となるが、床面からの掘り込みは20cm程度と浅い。**遺物の出土状況**：土器は少量であったが、埋土2層内と3層以下に偏在していた。埋土2層の遺物は南壁側から中央部に傾斜する状態で、3層以下の遺物は壁際と炉周辺に点在しており、北壁付近の床面からは磨製石斧未製品2点・打製石斧片、板状剥片などが集中した。1の壺は床面と3層中の土器片が接合したもので住居廃棄と同時の埋没を示す。特殊遺物ではランダムな縦位沈線文を付したミニチュア(6)、土製円盤(7・8)があり、石器製作にかかわる剥片・砕片もあった。打製石鏃以外に製品はないが、チャート597g、閃緑岩225g、安山岩124gが出土した。また本址には縄文晩期(24-27)、中期前半期(15・16・18・20・22)に属する土器片が数点見られた。**時期**：1の壺は栗林式期の古段階に位置付けられるが、遺物は少なく本址を確定するには至らない。

SB35 (IV区-Eグリッド) [第40・41図 PL4-54-58-60-61-76]

調査区北東寄りに位置し、集落域では東端にあたる。他の遺構との重複はない。**形状・規模**：東西方向に長軸をとり、短辺となる東西ライン中央が外側に突出する不正隅丸長方形プランとなる。3.5×2.1mの小規模な竪穴状遺構である。長軸方向に主軸をとるとN-41°-Wとなる。**埋土**：砂質分を多く含む自然堆積層(1~3・5・6・8~15層)と炭化物粒を混入した人為的な埋め戻し層(4・7層)に分けられる。後者には炭化物粒に混じって土器片が出土している。**床面**：平坦に掘り込んだ砂層面が床となり、軟弱である。**炉**：ほぼ中央部床面に数ミリの厚みをもつ炭層を検出した。径20cmの範囲に広がっていたが、焼土、掘り込みはなく炉とするには疑問がある。また炭層の南側床面に炭化板材が出土した。**柱穴**：ピットやその他の施設は認められない。**遺物の出土状況**：床面と下層からの出土は少なく、鉢(5)と太形蛤刃石斧と大型刃器があるのみで、他は全て2次堆積となる4・7層からの出土である。

SB36 (IV区-Eグリッド) [第42・43・44図 PL4-5-31-52-59-70-74]

調査区北東寄りに位置している。他の遺構との重複はないが、隣接する土坑(SK66)出土土器片と本址出土土器(5)が接合した。**形状・規模**：ほぼ南北に長軸をとる隅丸長方形プランとなり、3.2×2.3mの小型の竪穴住居である。長軸方向に主軸をとるとN-21°-Eとなる。**埋土**：砂質分を多く含む自然堆積層(1・2・7層)と炭化物粒を混入した埋め戻し層(3・5層)に分けられる。後者には炭化物層に多量の遺物がともなっていた。**床面**：平坦に掘り込んだ砂層面であり、貼り床はない。**炉**：住居中央やや北東寄りに位置する。径50cmの円形プランを呈し、床面から16cmの掘り込みをもつピット(P₁)であるが、底面に僅かな炭層の広がり認められたのみで炉として機能したか疑問が残る。**柱穴・ピット**：住居内に柱穴は確認されず、中央東壁寄りに浅い掘り込みをもつ楕円形ピットが1基(P₂)検出されたのみであった。**遺物の出土状況**：土器は主として埋土3・5層と下層から出土した。3・5層には大形破片が多く南西コー

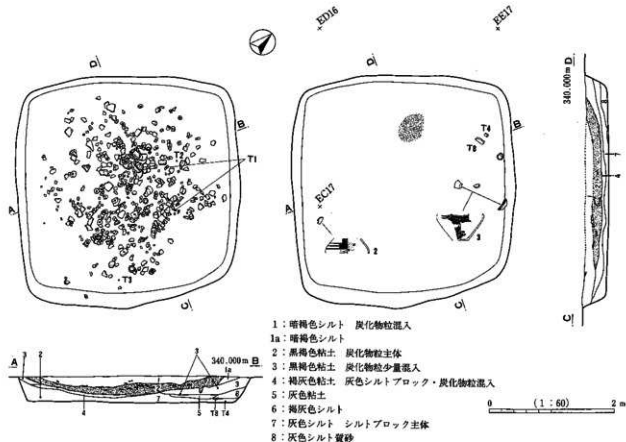


第44図 SB36出土土製品実測図・土器拓影

ナーから中央部に傾斜する状況を示し、下層には完存する個体がP₁周辺にまとまりをもっていた。下層出土は甕(6・7)と片口鉢(12)であり、SK66と接合した甕(5)と土製円盤は5層出土である。また南壁寄りの5層下面から炭化板材(ケヤキ)が、研磨台石がP₁脇から出土した。時期:甕は縦羽状描幅文(5・7・11)と櫛描波状文(6・7)、無文(8・10)であり粟林式期中段階に位置付けられ、他の器種も同段階の様相である。

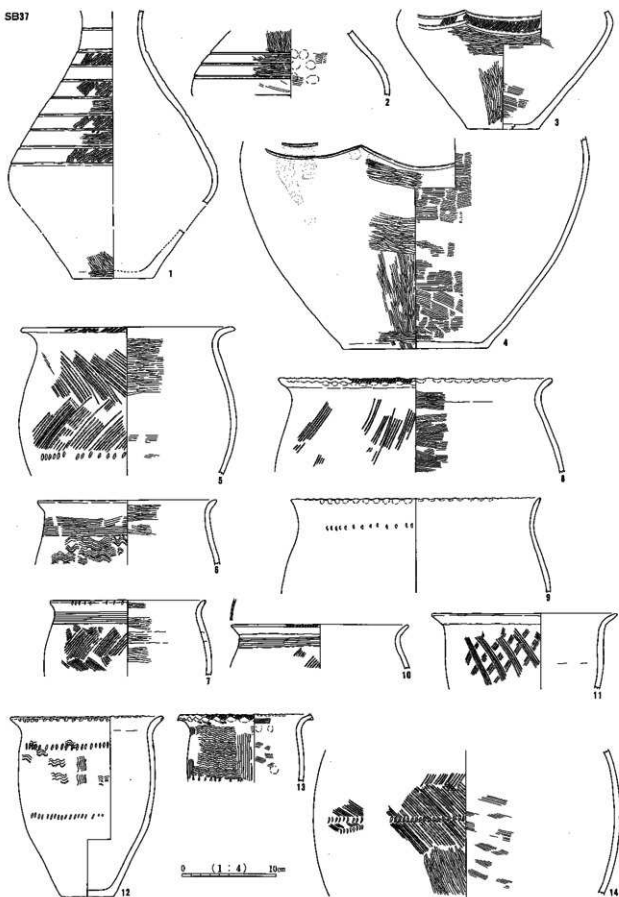
SB37 (IV区-Eグリッド) [第45・46・47図 PL5-31-52-56-57-59-60-63-70-71]

調査区北東寄りに位置し、他の遺構との重複はない。形状・規模:南西壁がやや張んだ隅丸方形のプランとなる。3.4×3.2mの規模をもつ小型の竪穴住居で、主軸方向はN-45°-E。埋土:灰色シルトブロックが主体となる下層(4・7層)と炭化物粒が主体となる上層(2層)が人為的な埋め戻しと捉えられた。下層埋土は遺物をほとんど含まずに埋め戻され、その後の住居埋没過程のなかで多量の遺物投棄がなされた状況が窺えた。この2層の間層(3・5・6層)と上層(1・3層)は砂質分を含んだ自然堆積層である。床面:平坦に掘り込んだ砂質シルトが床となり、貼り床はない。炉:主軸上の北東壁寄り床面に、50×40cmの楕円形に広がる炭層が検出された。炭の厚さは2cm程度であったが、焼土・掘り込み等は検出されなかった。柱穴:ピットは検出されず、住居内部に柱穴を配置しない上屋構造が想定される。遺物の出土状況:多量の土器、石器、礫が埋土2層中から炭化物に混じって出土した。土器は大形破片が多いものの器形復元されるものは少なく、ミニチュア(27)や土製円盤(28)が含まれるなど多様な器種に及ぶ。石器も石鏃、大形刃器、研磨台石、敲き石など多器種あり、特殊遺物として破損した磨製石剣、管玉があった。これらの遺物は遺構埋没過程での2次的な一括廃棄行為と捉えられる。2層内遺物の他に下層・床面



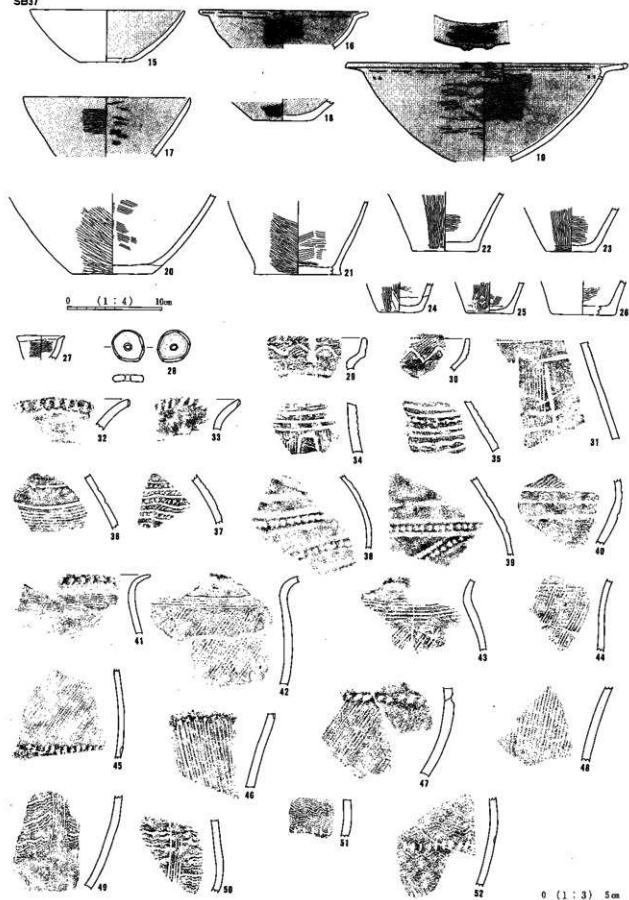
第45図 SB37実測図及び出土遺物分布図

SB37

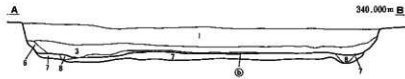
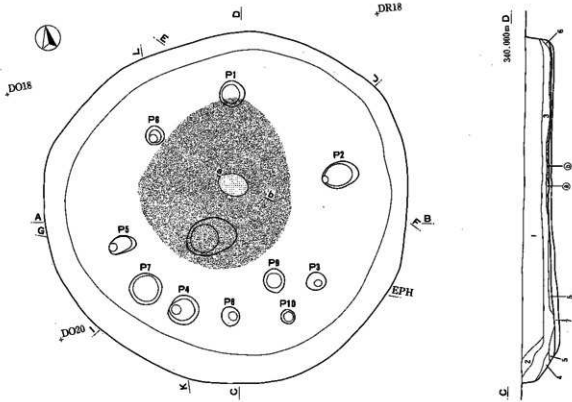


第46圖 SB37出土土器実測圖

SB37



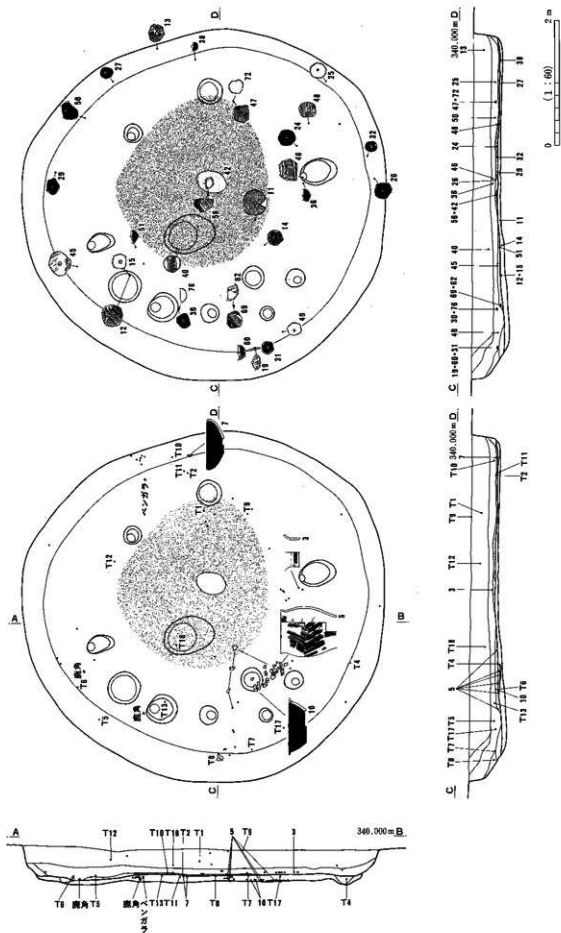
第47図 SB37出土土器実測図・拓影



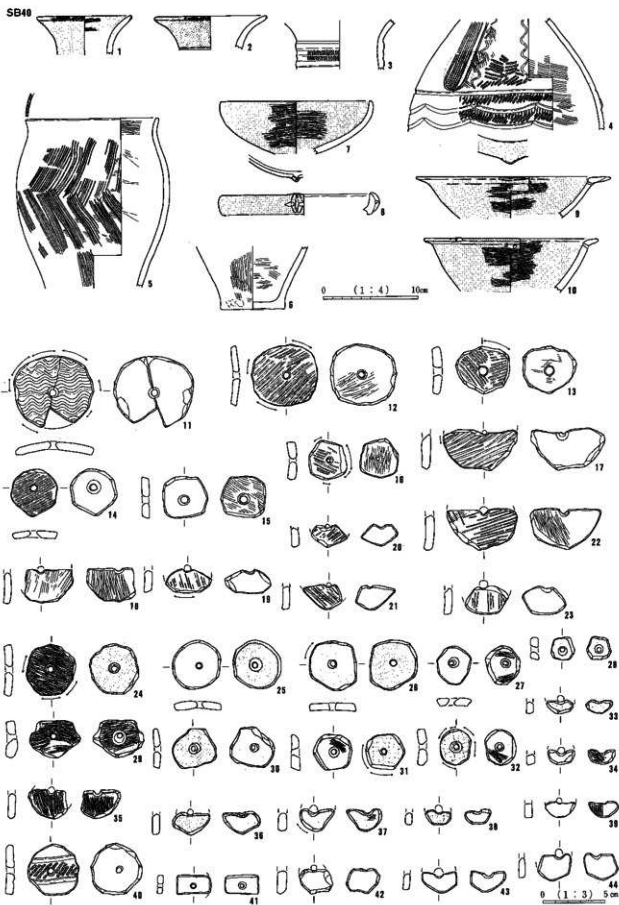
- 炉址
-
- ①：焼土
 ②：黒褐色シルト質粘土 炭化物粒主体
- 1：黒褐色砂質シルト
 - 2：褐灰色砂質シルト
 - 3：黒褐色シルト
 - 4：によい黄褐色シルト
 - 5：によい黄褐色シルト 黒褐色粘土ブロック混入
 - 6：灰黄褐色砂質シルト
 - 7：黒褐色シルト質粘土 黒色粘土ブロック・砂混入
 - 8：褐灰色砂質シルト 黒色粘土ブロック混入

0 (1:60) 2m

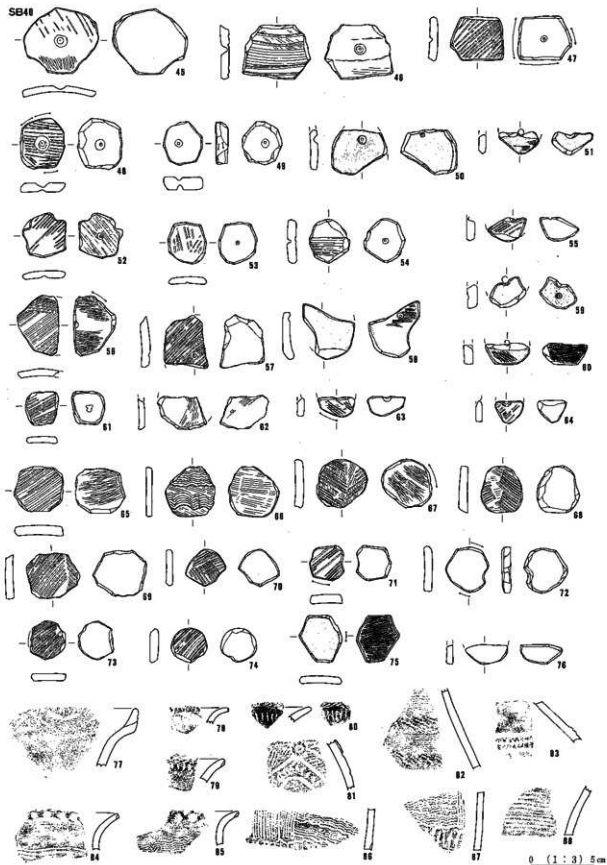
第48図 SB40実測図



第49図 SB40出土遺物分布図



第50圖 SB40出土土器・土製品実測圖



第51図 SB40出土土製品実測図・土器拓影

から数点の土器（2・3）と扁平片刃石斧未製品2点が出土し、これらが本址の1次廃棄に伴う遺物となる。時期：1の多段に文様を付した壺、8・12・13の頸口縁端部の押印文及び5・9に見る胴部の列点文から栗林式期古段階から中段階に埋没した遺構である。

SB40 (IV-Dグリッド) [第48・49・50・51図 PL5・31・51・56・60・64・65・67・70・76・77]

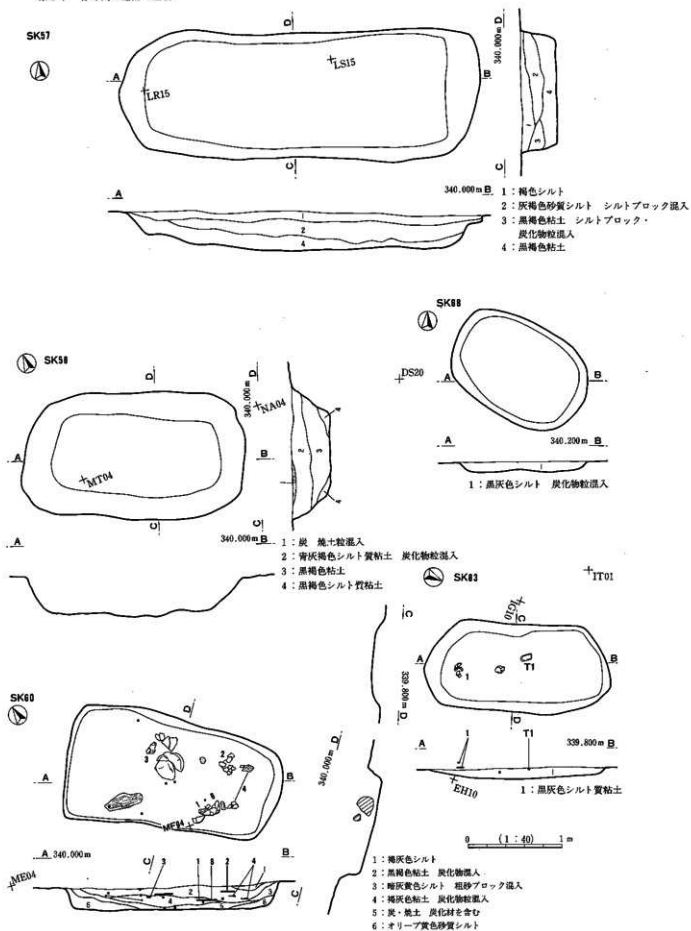
調査区北東寄りに位置している。遺構埋没過程で西側壁が著しく崩落し、床面からの壁立ち上がり傾斜が不均一であった。形状・規模：北東-南西方向がやや脹んだ円形プランを呈し、5.2×4.2mの大型の竪穴住居である。主軸はビット配列、炉の位置からN-47-Eとなる。埋土：一様に砂質となる自然堆積層であるが、1層には粗砂、下層には細砂ブロックが混入する状況がみられ、洪水性堆積の可能性が高い。床面：平坦に掘り込んだ砂層面上に黒色～黒褐色粘土と灰色シルトを混合した貼り床が10～15cmの厚みで確認された。この貼り床内からはチャート・黒曜石の剥片・破片が多数出土した。炉：住居中央床面に、硬化した炭層が2.6×2.4mの広範囲にわたり検出され、そのほぼ中央部に位置する。42×38cmの楕円形プランを呈し、深さ6cmの掘り鉢形状のビット内からは焼土が検出された。また炉周辺の炭層からもチャートの剥片・破片が多数出土した。柱穴・ビット：ビットは11基検出された。この内床面から30cm以上の掘り込みをもつビットはP₁～P₆で主柱穴となり、柱穴は壁面に沿って円形に配されている。P₇は浅い掘り込みであるが出入り口施設もしくは貯蔵穴となる。P₁₁は、炉と出入り口の中間に位置し20cmほどの深さで炭層を伴って検出された。炭層内の石器剥片状況から工作用ビットと捉えた。遺物の出土状況：本址からは土製円盤が66点、チャートの剥片・破片2974点・黒曜石の剥片・破片19点が出土したことが特質される。土製円盤には有孔・無孔の完存個体の他未製品や破損未製品があり、製品は柱穴と壁の空間域に集中した。剥片・破片は住居中央の炭層内に分布の中心があり、製品では磨製石鏃1と打製石鏃3点が壁際出土である。剥片はなかったが、閃緑岩の磨製石斧未製品と扁平片刃石斧が各1点、安山岩製の大形板状剥片、磨石・敲き石等が複数散在していた。土器・礫器の平面分布では壁際と炉周辺に中心があり、層位では下層と床面（5・10）を主体として出土した。この他鹿角が2点出入り口付近から、赤色顔料の塊が西側壁際から出土した。工作用ビットと出土遺物等から本址が工房住居としての性格を有すると判断される。時期：土器は全て破片で器形が把握される土器は少ない。1・2・3の壺は口縁、頸部のみであるが口縁端部と頸部にのみ文様帯を有する栗林式の中段階に位置付けられ、5の甕は古段階の横羽状櫛描文を施しているが胴部中心に最大径を有することから壺と同時期と判断される。

(2) 土坑

土坑は、平面形態から長方形・階円形・円形など5種に分類されたが、位置・配列には規則性が窺えた。配列は、SK60・85・58・86・89が東西方向に整然と位置し、SK81・82・83・SX06・SK68・65・66が西から北東に弧を描いて位置する。前者の土坑配列にSK137・156を加えると、北東方向に中心を置く、同心円上に2列の土坑群に整理される。この配列は土坑の属性に起因すると考えられるが、微高地の縁辺を取り巻く立地となり、地形制約された状況である。

SK57 (IV区-Lグリッド) [第52図 PL56]

中期集落域の南西に位置する。東西方向に長軸をとる長方形プランとなり、平面規模は3.8×1.3m、検出面から40cmの深さとなる。断面形は短軸方向が底面から垂直に立ち上がる箱形、長軸方向が緩やかに立ち上がる船底形状である。埋土上層（1層）は自然堆積層となり2層以下はシルトブロックが混在した埋め戻し土となる。遺物は1層下面から土器片及び扁平片刃石斧1点（PL56）が出土した。



第52図 SK57・58・60・68・83実測図及び出土遺物分布図

SK58 (IV区-Nグリッド) [第52図]

中期集落域のほぼ中央に位置する。北西-南東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランとなり、平面規模は2.3×1.3m、検出面から40cmの深さとなる。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がり、断面台形状となる。上層(1層)は本址埋没後の人為的な埋め戻しであり2層以下は砂質であることから自然堆積層と捉えた。遺物は少量の土器片が各層から出土した。

SK68 (IV区-Dグリッド) [第52図]

中期集落域のほぼ中央に位置する。北西-南東方向に長軸をとる隅丸長方形プランで、平面規模は1.5×10.5m、検出面から10cmの深さとなる。底面は平坦で断面は船底形状である。埋土はシルト質の自然堆積層、遺物は土器細片が少量出土したが図示できるものはない。検出状況から中期の土坑とした。

SK69 (IV区-Mグリッド) [第52図]

中期集落域の中央西寄りに位置する。北西-南東方向に長軸をとる長方形プランとなり、平面規模は2.1×1.05m、検出面から約30cmの深さとなる。底面は平坦でほぼ垂直に壁が立ち上がる箱形の土坑である。下層埋土(5層)は焼土粒を混在した炭層で、炭化材も残ることから底面と壁面堆積層(6層)上での焼焼行為と捉えることができる。更にこの5層上面を粘土とシルト、粗砂ブロックで埋め戻した状況が認められる。遺物は、ほぼ中央に破砕した人頭大の礫があり、この礫周辺と南側から土器片が集中して出土した。

SK83 (IV区-Iグリッド) [第52・55図 PL55]

中期集落域のほぼ中央に位置する。北北西-南南東方向に長軸をとる長円形のプランとなり、平面規模は2.0×0.9m、検出面から15cmの深さとなる。底面は平坦で断面は船底形状である。埋土は砂質で自然堆積層とされる。遺物は少量の土器片と欠損した太形蛤刃石斧の素材(PL55-6)が出土した。

SK85 (IV区-Mグリッド) [第53・54図 PL19・55・71・77]

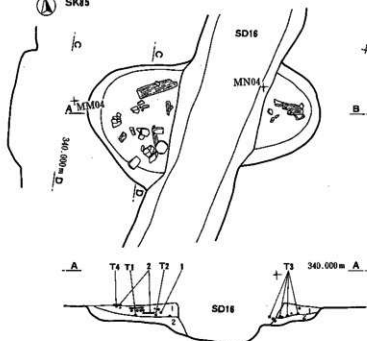
中期集落域のほぼ中央に位置する。遺構中央部は後期の溝SD16によって壊され、全容は不明となるが、遺物は多く残されている。形状は東西方向に長軸をとる楕円形、平面規模は2.3×1.3mと推定される。底面は平坦になり、断面形はほぼ長方形になる。埋土は上下2層に分層され、上下層ともシルトブロックと砂の混合で埋め戻し土である。上層下面には炭化板材と多量の遺物が出土し、埋没過程での廃棄行為と捉えられる。石器には太形蛤刃石斧が2点あり、1点は刃部側切断面にミガキ面(PL55-3)、1点は基部切断面にミガキ面(PL55-4)があるいわゆるすり潰し具である。またこれらとセットとなる研磨台石(PL71-2・5)も出土した。

SK86 (IV区-Nグリッド) [第53・55図 PL19・52]

中期集落域の南に位置する。本址上部にはSD22とSM09があるが、調査面が異なるため直接の切り合いはない。南西-北東方向に長軸をとる楕円形プランを呈し、平面規模は1.7×0.8m、検出面から16cmの深さとなる。底面は平坦で、断面形は短軸方向が逆台形、長軸方向が緩やかな湾曲形状となる。土坑底面はほぼ中央部に径40cmの窪みがある。埋土はシルトブロック・炭化物粒を含む黒褐色粘土で、埋め戻しの状況を示す。遺物は北東側に底部が潰れた状況で出土したほか、半月形土製円盤1点、扁平片刃石斧の素材粗割段階の未製品(PL57-3)が1点出土した。

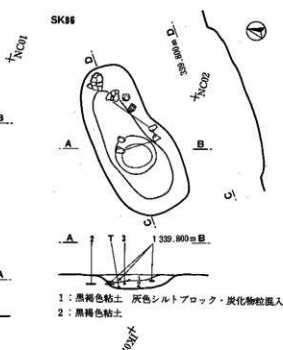
第3章 各時代の遺構・遺物

SK85



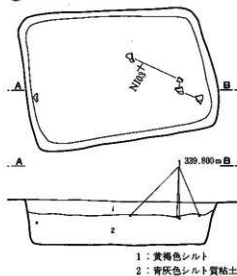
- 1: 黒褐色シルト 炭化物粒混入
2: オリーブ黄色シルト 細砂混在

SK86



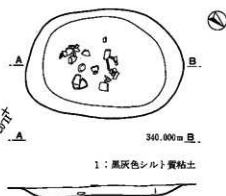
- 1: 黒褐色粘土 灰色シルトブロック・炭化物粒混入
2: 黒褐色粘土

SK89



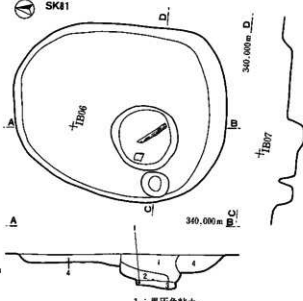
- 1: 黄褐色シルト
2: 青灰色シルト質粘土

SX88



- 1: 黒灰色シルト質粘土

SK81



- 1: 黒灰色粘土
2: 灰色シルト質粘土 シルトブロック混入
3: 黄褐色シルト質砂
4: 灰色粘土 粗砂混入

第53図 SK85・81・85・86・89、SX06実測図

SK09 (IV区-Nグリッド) [第53・55図]

中期集落域の南に位置する。北西-南東方向に長軸をとり長方形のプランを呈す。平面規模は1.8×1.2m、検出面から46cmの深さとなる。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり竪穴状遺構に近い形状となる。埋土には灰色シルトブロックの混入が顕著で、埋め戻しの状況を示す。2層上面から少量の土器片が散在出土し、1片を除いて全て接合した。

SX06 (IV区-Iグリッド) [第53図 PL19]

中期集落域の中央に位置する。本址周辺には掘立柱建物が想定される柱穴が8基検出(E群ピット)され、3基からは柱材が出土している。本址との関係は不明であるが同時期の遺構である。北北西-南南東方向に長軸をとる楕円に近い隅丸長方形のプランを呈し、平面規模は1.7×1.1mである。検出面が低いいため深さ10cm程度で、平坦な底面から壁が緩く立ち上がる。埋土は砂質で自然堆積層と捉えた。底面に人頭大の礫があり土器片が周辺に散在して出土した。

SK05 (IV区-Eグリッド) [第53・55図]

中期集落域の中央東寄りに位置する。南北にやや長い卵形を呈し、平面規模は1.4×1.0mで、検出面からの深さは10cm程度である。平坦な底面から壁が緩く立ち上がる。埋土は砂質の自然堆積層で中期土器片が僅かに出土した。

SK01 (IV区-Iグリッド) [第53・55図]

中期集落域の中央に位置する。本址は2基の土坑の重複であり、大形土坑のほぼ中央部を小形土坑が切る。大土坑は南北方向に長軸をとり、楕円に近い隅丸長方形のプランを呈す。平面規模は2.3×1.8mで検出面から20cmの深さとなり、西側に小ピットがある。小土坑は径70cmの円形で深さは40cmである。埋土は大土坑が自然堆積層(4層)、小土坑が埋め戻し(1・2層)と捉えた。遺物は小土坑底面に木材片と土器片が出土した。検出面と遺物から2基の土坑とも中期に帰属する。

SK04 (IV区-Iグリッド) [第56図 PL21]

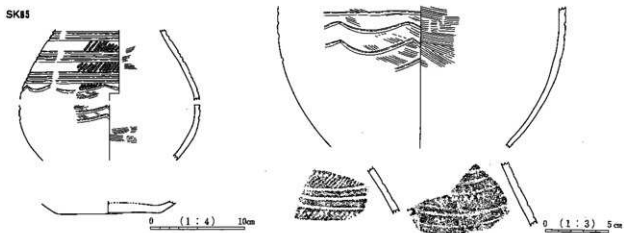
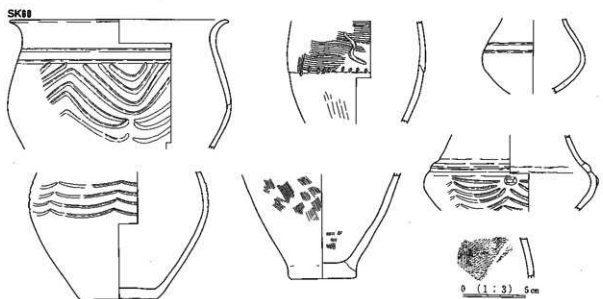
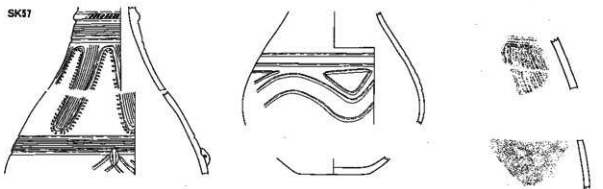
中期集落域の中央に位置する。本址北側には径30cmの小ピットが3基(E群ピット)ある。北西-南東方向に長軸をとる長方形プランで、規模は3.6×1.9mとなる大形土坑である。検出面からの深さは14~30cmであり、掘り込みはやや傾斜するが垂直気味の壁で、底面は平坦である。埋土は埋め戻しと捉えられるシルトブロックの混入した黒灰色粘土で遺物の出土はない。本址は検出状況と埋土から中期の土坑とした。

SK156 (IV区-Eグリッド) [第56図]

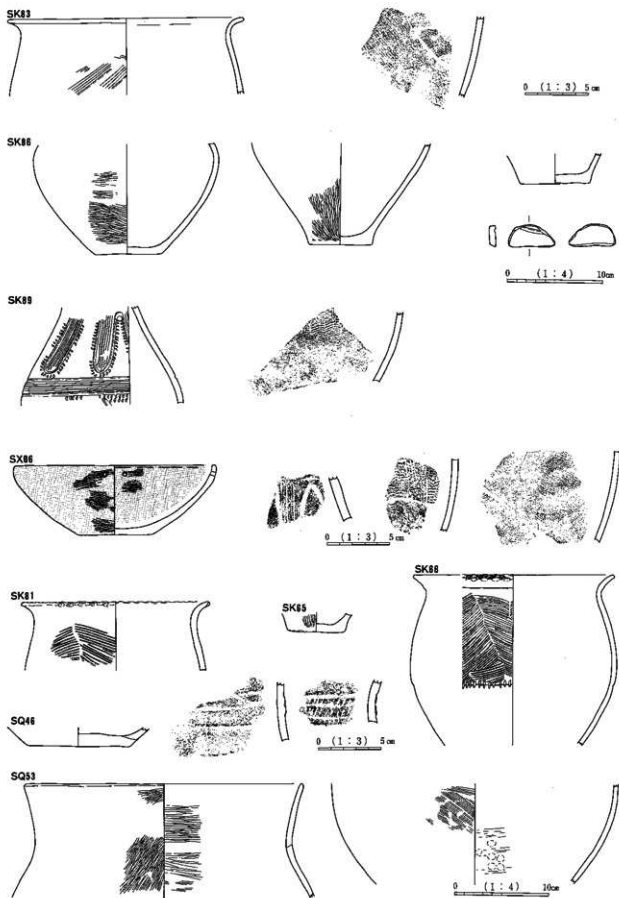
中期集落の東南に位置する。東西方向がやや長く、平面1.3×1.1mの楕円形を呈す。検出面が低いいため深さ18cm程度で、平坦な底面から壁が緩く立ち上がる。埋土は砂の混入が少ない粘土質で、上層(1層)と下層(2層)の間層に炭層が入る。上・下層に埋没経過の違いはあるものの埋め戻しの埋土と捉えた。遺物は上層から土器碎片数片のほか打製石鏃(PL76-7)が出土した。

SK08 (IV区-Eグリッド) [第55・56図]

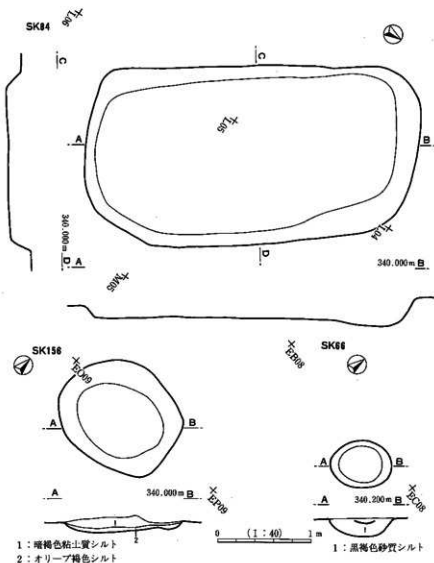
中期集落域の中央北東寄りに位置する。径60cmの円形プランで、検出面から20cmの深さとなる。埋土は砂質の自然堆積層である。遺物は甕の破片2点が中位から出土し、SB36出土の甕(5)と接合した。兩遺



第54図 SK57・58・60・85出土土器実測図・拓影



第55圖 SK65・66・81・83・86・89、SX06、SQ46・53出土土器実測圖・拓影



第56図 SK66・84・156発掘図

構の関係は不明であるが、同一条件での埋没であったと解釈される。

SQ44・46・53 [第55図 PL54]

中期の遺物集中地点が検出面上から3箇所で確認された。いずれも径20~30cmの範囲に出土したが、土坑となる掘り込みは確認されなかった。SQ44はST02付近から土器碎片とともに太形蛤刃石斧1点か、SQ46・53はSB26とSD43の中間にあたるIV区Lグリッド内から数点の土器片がまとめて出土した。

(3) 掘立柱建物

集落域内で掘立柱建物の存在を確認もしくは想定した遺構は、ピット群の集合として6群(A~F)ある。このうち埋土、柱穴の配列から掘立柱建物と捉えた遺構は8棟であるが、10数棟の建物があったと推測される。

A群ピット ST03・84 (IV区-Eグリッド) [第57図]

中期集落域の北東端に位置し、SB33・34と近接する。本群に属すピットは20基検出された。ピットの

規模は径15～20cm、検出面からの深さは20～33cmであり、細砂に黒色シルトブロックが混在する埋土であった。柱穴の配列及び深さから1×1間（4本柱）の掘立柱建物が2棟想定されたが、更に複数の建物柱があったと考えられる。ST03は西南西～東北東方向に長軸をとり、桁行2.1m×梁行1.7mの規模となり、柱穴の深さが30cm前後と深い。ST04もほぼ同一方向に長軸をとり、桁行2.4m×梁行1.3mの規模で、柱穴の深さも30cm前後と深い。

B群ビット ST05 a・b・c (IV区-Eグリッド) [第57図]

中期集落域の北東寄りに位置し、SB36と近接する。径15～20cmのビットが20基検出された。検出面から16～28cmの深さとなり、埋土には一様に細砂と黒色シルトブロックが混在する。柱穴の配列から1×1間（4本柱）の掘立柱建物が3棟想定された。ST5aは西北西～東南東方向に長軸をとり、桁行2.3m×梁行1.7mの規模となる。北東桁側には深さ15cm前後の浅いビットが4基あるが本址との関係は不明である。ST5b・5cは北北東～南南西方向に長軸をとる。ST5bは桁行2.7m×梁行2.3m、ST5cは桁行1.9m×梁行1.1mの規模となる。

C群ビット (IV区-Dグリッド) [第19図]

中期集落域の北東寄りに位置し、SB35・36・40と近接する。径15～20cmのビットが31基検出された。ビット群は更に南東方向に広がる状況となるが、後期住居SB38、土坑SK48等によって壊され全容は不明となる。検出面からの深さは15～30cmで、埋土は黒褐色シルトブロックが混在した砂であった。本ビット群は複数棟の掘立柱建物から構成されると考えられるが、柱穴配列から具体的に復元することはできなかった。

D群ビット ST08・09 (IV区-Iグリッド) [第57図]

中期集落域の中央に位置し、SB40と近接する。径15～20cmのビットが20基検出された。検出面からの深さは7～15cmとなり、細砂に黒色シルトブロックが混在する埋土であった。柱穴の配列から2棟の掘立柱建物が想定された。ST08は北北東～南南西方向に長軸をとる1×1間（4本柱）の建物で、規模は桁行2.0～2.2m×梁行1.6mである。ST09は北東～南西方向に長軸をとる1×1間もしくは2×1間の建物で、規模は桁行2.2m×梁行1.6mである。ST09には柱列延長上いくつかのビットがあり、規模の大きな掘立柱建物になる可能性がある。

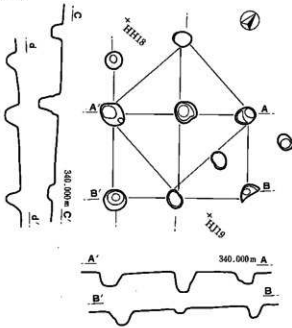
E群ビット (IV区-Iグリッド) [第19図]

中期集落域の中央に位置し、土坑SX06・SK84と重複する。径20～40cmのビットが11基検出され、内3基には柱材が残っていた。検出面からの深さは15～30cmとなり、埋土は細砂混じりの黒灰色粘土である。1×1間もしくは2×1間の掘立柱建物（3.2×2.0m）が想定されるが、柱穴配列から具体的に復元することはできなかった。なお本群ビットに関してはSX06・SK84と関連をもつ可能性がある。

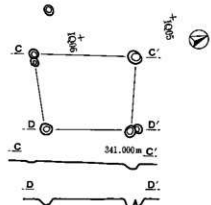
F群ビット ST02 (IV区-Hグリッド) [第57図]

中期集落域の中央西寄りに位置し、SB07と近接する。径32～40cmのビットが10基検出されたが、同時期終末の住居SB01と後期住居SB03によって一部ビットが壊され、全容は不明である。検出面からの深さは24～40cmとなり、細砂に黒色シルトブロックが混在する埋土であった。柱穴の配列から2×2間（9本柱）の掘立柱建物が想定され、北西～南東方向がやや長く桁行3.3m×梁行3.0mの規模となる。柱穴から

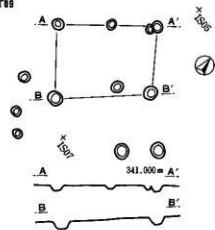
ST02



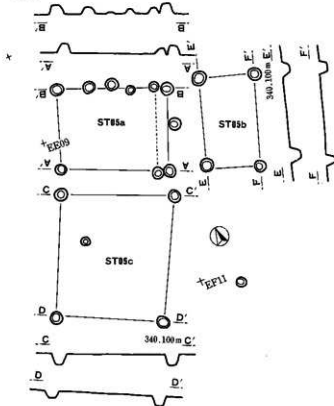
ST08



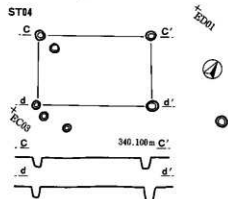
ST09



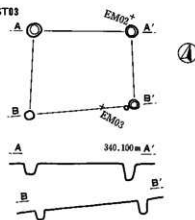
ST05



ST04



ST03



0 (1:80) 2m

第57図 掘立柱建物址実測図

は少量の中期土器片が出土した。

(4) 溝址及びその他の遺構

本時期の流路として捉えた溝址は10条検出され、調査区北東側の集落域との境界に1条(SD43)があるほかは全て低地域にある。いずれの溝からも遺物は出土しなかったが、弥生後期水田耕作土直下のⅦ区9層下部及び10層(第2章参照)が検出面となり弥生中期とした。低地域の溝址9条は等高線に平行して配され、ほぼ西から東に走行、分岐する状況がみられた。これら溝址は低地に広がる自然流路もしくは水田区画の痕跡と捉えられる。

集落域には円形の周溝が3基検出された。いずれも調査区外に及ぶため規模は不明であり、周囲の土坑・ピット群との関連も不明である。調査時点では円形に廻る溝という形態から周溝基と認識し、SMの記号を付したが検出状況や埋土、遺構規模、竪穴住居の分布状況から平地式住居の周溝と捉えた。

SD15 (Ⅶ区-Nグリッド) [第58図 PL25]

調査区南西端の低地域に位置し、東西方向に約2.6m走行する。溝幅は60~80cm、検出面から12cmの深さの断面U字形を呈する。埋土は灰色シルトである。

SD24・25・26 (Ⅶ区-I・Jグリッド) [第58図 PL25]

3条の溝はほぼ東西方向に並列走行し、西から東方向に微妙な傾斜が認められた。SD24は全長36.6mにわたって緩い蛇行形状で検出され、西側に分岐合流点がある。最大幅は1.0m、最小幅は41cmで、深さは10~14cmと浅い。SD25は全長42.6mで、東端部で二又に分岐する。最大幅は1.08m、最小幅は41cmで、深さは6~20cmである。SD26は北西から走行する幅30~55cmの溝と合流し全長44mにわたって検出された。最大幅は1.04m、最小幅は40cmで、深さは12~16cmである。埋土は、いずれも細砂・炭化物粒子(有機質)を含んだ黒褐色シルトであり、遺物は出土していない。

SD27・37・38・39 (Ⅶ区-D・Eグリッド) [第59図 PL25]

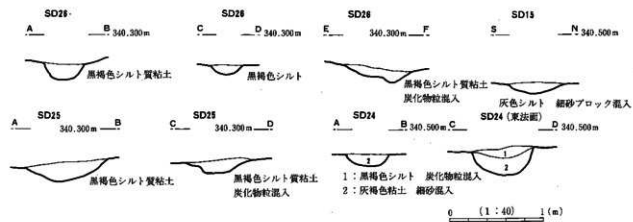
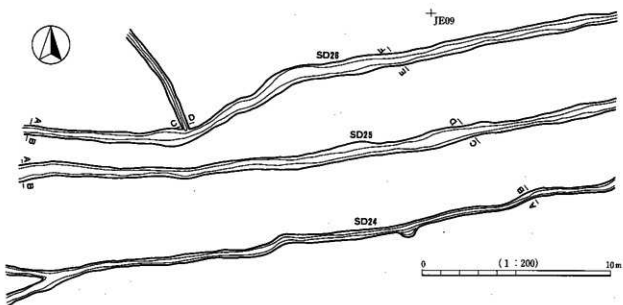
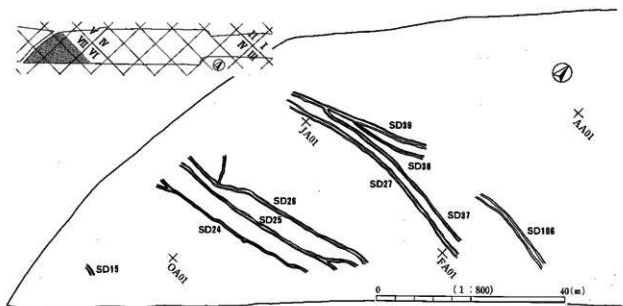
SD27は北側に緩く膨らんだ状態で扇形を描いて東西に走行し、SD37・38はSD39から分岐しSD27に平行して走行する。SD27は全長52m、最大幅は1.2m、最小幅は55cmで、深さは12cm前後であった。埋土は炭化物粒を混入した黒褐色シルトで、SD24~26・106と同一である。SD37は全長47m、最大幅は1.12m、最小幅は80cmで、深さは16cm前後であった。SD38・39も溝幅、深さとも同一規模である。SD39東端から劣化した杭が1点出土した。SD37~39の埋土はほかの溝と異なり灰色シルトであった。

SD106 (Ⅶ区-E・Ⅵ区-Aグリッド) [第59図 PL26]

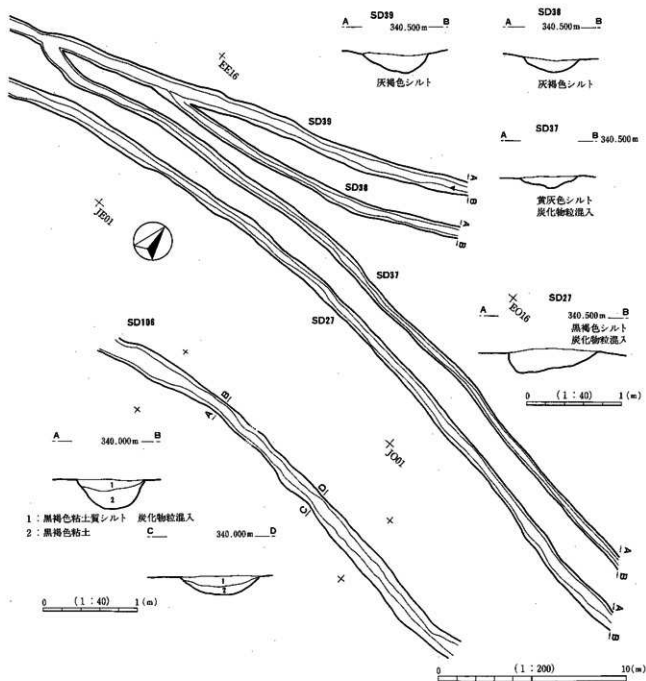
低地域の溝址と同様に西から東に傾斜走行し約25m検出され、後期の溝址SD107に一部壊される。幅は40~60cm、深さ25~35cm、断面は緩いU字形で、埋土は黒褐色シルト質の自然堆積層である。SD38・39の東側延長上に位置するが、埋土が異なり同一の連続する溝かは不明である。

SD43 (Ⅳ区-P・Q・Vグリッド) [第18図 PL26]

調査区中央南西寄りに位置する。調査区を横断する状況で西北西から東南東方向へ57mにわたって検出された。西側で後期溝址SD16等に切られる。幅40~60cmで検出面からの深さは20cm、断面はU字形である。埋土は灰色シルトで遺物の出土はない。本址は地形変換点に位置することから低地と集落を区画する



第58図 弥生中期清址実測図1 (SD15・24・25・26)

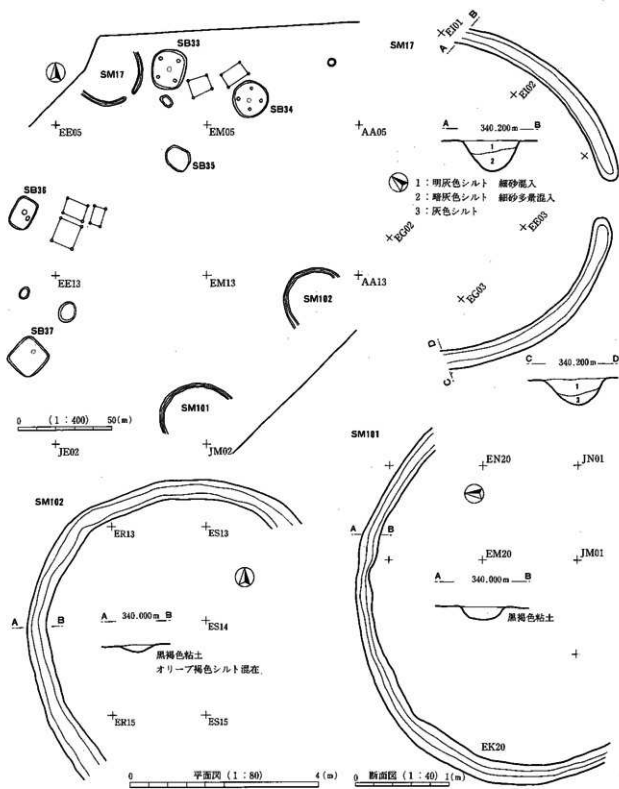


第59図 弥生中期溝址実測図2 (SD27・37・38・39・106)

溝であったと推測される。

SM17・101・102 (IV区-Eグリッド) [第60図]

SM17はSB33に隣接する住居群に位置する。溝幅55～64cm、深さ35cmで検出され、外周径は7～7.2mと推定される。南東方向に一カ所周溝が途切れ陸橋となる。埋土は細砂が混入した灰色シルトで、周辺の竪穴住居の埋土と共通する。SM101・102は小ビット群がある低地側に位置する。SM101は溝幅44～64cmで外周径は8.5～10.5m、SM102は溝幅36～52cmで外周径は7.0～8.6mの規模と推定される。埋土は周辺土坑・ビット群と同一のシルト混じりの黒褐色粘土である。



第60図 平地式住居周溝実測図 (SM17・101・102)

第2表 弥生中期竪穴住居内出土の石材別割片・破片重量 (ただし製品・未製品の重量は含まれない)

住居番号	石質製品						住居内出土の石物・石製品
	鏡石美 (菅玉)	チャート (石鏡)	黒曜石 (石鏡)	四稜岩(黒緑岩) (蛤刃石斧・ 扇平片刃石斧)	輝石安山 岩(写器・ 石甕丁)	粘板・頁岩 (石甕丁・ 磨製石鏡)	
SB05 (SB06)	19.9	320.0 (49.2)		195.0 (41.5)	834.8 (93.8)	5.2	打製石鏡1・打製石斧2・扇平片未製品3 扇平片刀1・太形蛤刃未製品1 菅玉未製品・残核10以上多数
SB08 (SB03)	32.2 (6.3)	566.1 (152.1)	2.9 (2.9)	75.9 (34.4)	9.5 (9.5)		打製石鏡2(1)・磨製石甕丁1(SB36と接合) 扇平片未製品1・扇平片刀1・太形蛤刃1
SB19		705.2	9.2	106.8	678.0		太形蛤刃1 菅玉1・菅玉未製品2
SB33	41.3	1125.1	9.4	543.0			打製石鏡1・磨製石甕丁破片3 扇平片未製品1・太形蛤刃1
SB34		597.6	6.7	225.2	124.0		打製石鏡1・打製石斧(写器か)2 扇平片未製品2
SB35	1.6	353.3			2650.0		打製石鏡1・打製石斧1・太形蛤刃1
SB36		134.5		38.3			磨製石甕丁1(SB08と接合)
SB37		1290.7	8.0		988.0	46.3	磨製石鏡未製品2・打製石鏡3・磨製石剣1 扇平片未製品2
SB40		2974.3	19.9		127.3		磨製石鏡1・打製石鏡2・扇平片刀1 扇平片未製品1

※SB05とSB08は後期弥生住居SB06とSB03とそれぞれ重複しているため重複後住居内の重量を加算した。()内が加算した重量である。
※四稜岩と分類した石材は、第4章2節を参照されたい。

第3表 弥生時代中期竪穴住居出土土器及び土製品観察表

色調及び胎土は以下の記号を用いて記載し、色調は土器表面(赤彩内面と断面)観察による。
色調 A…褐色→明褐色 B…橙褐色 C…灰褐色→灰色 D…暗褐色→黒褐色 E…茶褐色 F…赤褐色
胎土 a…石美・長石・チャートの破片、茶色の糠破片を多量に混入する在地通有の胎土。
b…石美・長石・チャートの破片を含むが精選された細かい粒子の胎土。
c…a・b以外の輸入品と認識される胎土。糠破片を含まない精選土器、黒色砂礫を多量に含む土器など

SB01

器種No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	16.2	11.0		口縁部1/2 胴部下半は完存	AD	a	・縄文(口縁)ハケ→ナデ(胴)黒斑 ・摩滅 赤彩 ミガキ→ナデ 黒斑(口縁)ハケ 黒色化	2次焼成 片口壺か図上復元
2	壺		10.0		胴部1/2 底部1/3	E	a	・縄文→横線文→斜位ミガキ(胴)ハケ→縦位置 横線状文→区画比線文(胴上半) 円弧文・横 線文(胴下半) ・摩滅 斜位ハケ	胴と胴部の接点 なし図上復元
3	壺	8.5			口縁部完存	D	a	・摩滅 赤彩 断面を含め黒色化 ・摩滅 黒色化	2次焼成
4	壺		6.4		胴部ほぼ完存	AE	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・横・斜位ハケ→ナデ	
5	壺	8.8	6.0	20.7	完存	AD	a	・横位ミガキ→縦位ミガキ 赤彩 1/2黒色化 ・斜位ハケ→ナデ 口縁部赤彩 黒色化	
6	壺		10.6		胴部ほぼ完存	A	a	・ハケ→縦位ミガキ→横位ミガキ 黒斑 ・摩滅 ナデ	
7	鉢	16.3	6.8	11.8	完存	A	a	・横・斜位ミガキ→赤彩 ・横・斜位ミガキ→赤彩	
8	鉢	21.0			口縁部1/3	A	a	・横線 横文→縦位ミガキ→赤彩 黒斑 ・横位ミガキ→赤彩	SB21と接合
9	片口鉢	23.0	6.5	10.0	口縁部1/3 底部2/3	D	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩 2次焼成により器 壁の一部剥落 黒色化	口縁と胴部の接点 なし図上復元
10	壺		12.4		全形1/3	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・ナデ 拍胸圧痕 部分赤彩	穿孔2 孔径0.2~0.3
11	鉢	5.8	4.4	6.6	ほぼ完存	A	b	・摩滅 横・斜位ミガキ→赤彩 ・摩滅 ナデ 横位ハケ	穿孔2 孔径0.15~0.2
12	壺	14.2			口縁・胴部完存	AD E	a	・摩滅 斜位ハケ→横位文(6本3~4段) ・斜位ハケ 横位着 黒色化	
13	壺		3.4		底部完存	A	a	・ナデ(弱いミガキ) ・ハケ→ナデ	穿孔2
14	台付壺		8.0		胴部完存	A	a	・斜位ハケ 端部黒斑 ・ナデ	

本出土土器は得難い実測・拓影図他に口縁部12個体あり、内訳は弥生中原壺2、壺1、鉢・高杯5個体、後期壺1、壺1、鉢1、不明1個体であった。底部は6個体あり、内訳は壺4、鉢2個体であった。

S B05

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	甕	30.2			口縁部1/8	D	a	・横羽状帯幅文→ナデ 口縁部指頭押圧 黒色化 ・ナデ 黒色化	
2	甕	16.8			胴部上半1/4	D	b	・ナデ→横羽状帯幅文 縄文(口縁部) ・斜位ハケ→ナデ 内外面全体黒色化	
3	甕	11.8			胴部上半1/3	D	a	・横位ミガキ→ナデ 黒色化 ・横位ミガキ→ナデ 黒色化	
4	甕	5.4			胴部下半はほぼ完存	D	a	・縦位ミガキ→ナデ 全面麻付着 ・横位ミガキ 上半黒色化	
5	甕	6.6			底部完存	DE	a	・摩滅 弱い縦位ミガキ 底面ミガキ ・横位ミガキ	
6	甕	4.8			底部完存	AD	a	・摩滅 黒色化 ・斜位ミガキ 部分的に赤色顔料付着	
7	甕	9.6			底部1/2	BD	a	・摩滅 縦位ミガキ ・摩滅 ナデ 一部黒色化	

土製品

図版No.	器種	直径	器厚	孔径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
9	土製円盤	4.1×3.78	0.63	—	10.60	完存	E	a	・横線文→波状文 ・摩滅	壺 破片転用
10	土製円盤	5.0×4.5	0.68	—	14.33	ほぼ完存	A	a	・摩滅 ・摩滅	壺 破片転用
11	土製円盤	5.22×4.67	0.64	—	16.11	完存	C	a	・摩滅 ・摩滅	壺 破片転用
12	土製円盤	3.3	0.58	—	5.84	ほぼ完存	DF	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅	壺か 破片転用 2次焼成
13	土製円盤	3.8	0.60	—	9.25	完存	D	a	・波状文 斜交列点文 煤付病 ・ナデ 指頭圧痕	壺 破片転用

本出土土器は掲載した実測・新影図の他に口縁部17個体あり、内訳は発生中期壺3、甕5、鉢・高杯8個体、後期鉢・高杯1個体であった。底部は15個体あり、内訳は壺4、甕10、鉢1個体であった。

S B07

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺				胴部上半1/2	B	a	・摩滅 横線文(7段)竹管刺突列点文 ・摩滅	
2	壺				胴部上半1/4	A B	a	・摩滅 変形工字文 沈線赤彩 ・摩滅	
3	壺				胴部上半1/8	A D	a	・摩滅 重円弧文→竹管刺突列点文 横線文 ・摩滅	
4	壺				胴部上半1/3	A	a	・縄文→横線文 重円弧文 一部黒色化 ・摩滅	
5	壺	16.4			胴部上半1/3	F	a	・描線横線文(7本2列)→波状文 ・摩滅	
6	壺	13.4			口縁部1/6	A	a	・摩滅 波状文 ・摩滅 指頭圧痕 部分的に黒色化	
7	壺	7.8			胴部下半2/3 底部完存	A	a	・縦位ミガキ 一部煤付着 ・横位ミガキ→ナデ	
8	壺	6.6			底部完存	D	b	・ハケ→縦位ミガキ 一部黒色化 ・横位ハケ→横位ミガキ 黒色化	
9	壺	9.0			底部3/4	DE	a	・摩滅 底面煤付着 黒色化 ・摩滅	2次焼成

土製品

図版No.	器種	直径	器厚	孔径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
11	右乳土製円盤	3.9×3.6	0.65	0.50	8.89	完存	D	a	・磨面区画文 ・ハケ	壺 破片転用
12	右乳土製円盤 未製品	3.6×3.3	0.55	—	6.40	完存	D	a	・羽状帯幅文 ・摩滅	壺 破片転用

本出土土器は掲載した実測・新影図の他に口縁部5個体あり、内訳は発生中期壺1、甕2、鉢・高杯1個体、後期鉢1個体であった。底部は10個体あり、内訳は壺3、甕6、高杯1個体であった。

SB08

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺				胴部1/2	D a	・摩滅 横線文(4条) 黒色化 ・摩滅 黒色化	2次焼成	
2	壺		4.8		胴部下半1/2 底部完存	AD a	・ハケ→横線文(3条)→斜位ミガキ 部分赤彩 ・黒色化 ・斜・横位ハケ→ナデ		
3	鉢	12.0			口縁部1/4	F b	・梅豆粒貼付文→横位ミガキ→赤彩 一部砥付滑 ・横位ミガキ→ナデ 赤彩		
4	甕		5.8		底部完存	D a	・横位ミガキ 部分的に黒色化 ・横位ミガキ 底面ミガキ 黒色化		

土製品

図版No.	器種	直径	器厚	口径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
6	有孔土製円盤	4.4	0.67	0.48	14.14	完存	DE a	・棒状工具刺突文→横線文 ・摩滅	壺破片転用	
7	有孔土製円盤	3.6	0.59	0.40	8.77	完存	D a	・横線文 黒斑 ・ハケ→ナデ	壺破片転用	
8	有孔土製円盤	(4.6)	0.60	(0.40)	8.59	全形1/2	AD a	・斜位ハケ→横線文 黒斑 ・斜位ハケ	壺破片転用	
9	有孔土製円盤	3.7	0.62	0.42	8.38	完存	AD a	・摩滅 ・ハケ 黒色化	壺破片転用	
10	有孔土製円盤	4.5	0.65	0.48	16.34	ほぼ完存	AD a	・ナデ ・ナデ 指板圧痕	壺破片転用	
11	有孔土製円盤	3.9	0.62	0.43	9.92	完存	A a	・透気文→横線文→瓦状沈線文 ・摩滅	壺破片転用	
12	有孔土製円盤	2.7	0.63	0.40	5.07	完存	AD a	・ミガキ ・ハケ 黒色化	壺破片転用	
13	有孔土製円盤	2.8	0.65	0.42	5.63	完存	D a	・横線文→瓦状沈線文 ・ナデ 砥付滑	壺破片転用	
14	有孔土製円盤	3.0	0.68	0.56	5.27	全形2/3	D a	・摩滅 ・摩滅	壺破片転用	
15	有孔土製円盤	3.0	0.76	0.40	5.36	ほぼ完存	A a	・ナデ ・ミガキ	壺破片転用	
16	有孔土製円盤	3.06×3.1	0.70	0.30	8.23	完存	D a	・ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ	壺破片転用	
17	有孔土製円盤	2.2	0.73	0.37	3.12	全形1/2	AD a	・摩滅 ・摩滅 黒斑	不明	
18	有孔土製円盤	(3.0)	0.60	(0.40)	3.45	全形1/2	D a	・斜状棒造文 ・ナデ	壺破片転用	
19	有孔土製円盤 未製品	4.1×4.05	0.69	—	14.77	完存	A a	・斜状棒造文 ・ナデ	壺破片転用	
20	土製円盤	2.5	0.44	—	2.73	完存	B a	・摩滅 ・摩滅	壺破片転用	
21	土製円盤	2.6	0.65	—	4.55	ほぼ完存	C a	・ミガキ ・ミガキ	壺破片転用	
22	土製円盤	2.7	0.42	—	2.91	完存	C a	・摩滅 ・摩滅	不明	

本出土土器は実測・拓影図の他に底部が3個体あり、内訳は表2、表1個体であった。なお口縁部の出土はない。

SB19

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺				胴部1/2	AB a	・摩滅 2条横線帯 ・摩滅		
2	甕		5.8		底部1/2	BD b	・器壁剥落 ・弱い横位ミガキ 黒色化		
3	甕	5.3			底部完存	E a	・摩滅 ・摩滅 ナデ		
4	甕	5.4			底部完存	A a	・摩滅 底面黒斑 ・摩滅 ナデ(弱い横位ミガキ)		
5	有孔鉢	8.2			底部1/2	AD b	・ナデ ・ナデ	口径0.8~1.0	

土製品

図版No.	器種	直径	器厚	孔径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整		備考
									口徑	底徑	
6	有孔土製円盤 未製品	(2.7)	0.75	—	3.84	全形1/2	D	a		・ナテ 黒色化 ・ナテ	壁 破片転用
7	土製円盤	3.8	0.60	—	9.92	完存	DE	a		・羽状帯描文 黒色化 ・ナテ	壁 破片転用

本址出土土器は実測・拓影図の他に口縁部が2個体あり、内訳は中期壺2、壺9、鉢・高杯1個体、後期壺2、壺3個体、不明5個体であった。底面は19個体あり、内訳は中期壺6、壺11個体、後期鉢2個体であった。

S B26

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整		備考
		口徑	底徑	器高						
1	壺				胴部1/3	A	a		・多条横位沈線 ・ハケ→ナテ	
2	注口付壺				胴部1/4	A	a		・摩滅 横線文(頸・胴部)区画帯描文→竹管型 点文 ・摩滅	
3	壺	14.0			口縁部1/6	B	a c		・ナテ→縦羽状帯描文 ・ハケ→ナテ(弱いミガキ)	
4	壺	24.4			胴部上半完存	B	a		・横位ハケ→横羽状帯描文(上→下)口縁部み 全面係着 ・指頭圧痕→横位ミガキ	
5	壺				胴部1/2	A	a		・摩滅 区画帯描文 ・摩滅	
6	壺		8.1		胴部下半1/2 底部完存	C	a		・摩滅 底面黒色化 ・摩滅 ナテ 係不着 黒色化	
7	壺		4.8		底部1/4	C	a c		・縦位ミガキ ・ハケ→ナテ	

本址出土土器は実測・拓影図の他に壺の底部が2個体であった。

S B33

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整		備考
		口徑	底徑	器高						
1	壺				胴部中位完存	D	a		・縦文→横線文(頸・胴上部)区画線文(胴中位) ・波状沈線文→横位ミガキ→矢印文 黒色化 ・横位ハケ→ナテ 係不着 黒色化	
2	注口付壺		5.2		胴部完存	C	a		・横線文(頸・胴中位) 縦位帯描文→沈線区画 文(区画工字文→内形貼付文→部分赤彩→ 横位ミガキ 黒線 ・ナテ	注口径0.6横長楕 円形
3	壺	24.0			口縁部・胴部ほぼ 完存	CD	a		・摩滅 神状工具押印圧痕(口縁) 斜位ハケ→ 縦羽状帯描文(5~6本上→下)係着 一部 黒色化 ・摩滅 ハケ→ミガキ ナテ 一部黒色化	
4	壺		6.0		底部完存	ED	a		・斜位ハケ→波状沈線文→縦位帯描文→縦位ミガキ 底面ミガキ 黒色化 ・斜位ハケ→横位ミガキ 底面ミガキ	

土製品

図版No.	器種	直径	器厚	孔径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整		備考
									口徑	底徑	
5	有孔土製円盤	5.0×5.0	0.72	0.25	22.77	完存	D	a		・摩滅 羽状帯描文 ・ハケ→ナテ	壁 破片転用
6	土製円盤	5.3	0.60	—	16.66	ほぼ完存	A	a		・摩滅 ・摩滅 黒色化	壁 破片転用

本址出土土器は実測・拓影図の他に口縁部が12個体あり、内訳は発生中期壺1、壺7、鉢・高杯3、不明1個体であった。底面は15個体あり、内訳は壺2、壺13個体であった。

S B34

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整		備考
		口徑	底徑	器高						
1	壺				胴部1/3	AD	a		・帯横横線文(6本)→帯横列点文(6本)→横線 文 黒線 ・斜位ハケ 指頭圧痕	
2	壺	27.0			口縁部1/8	D	a		・縦文→波状沈線文 ・ナテ	
3	壺	9.4			底部3/4	DE	a		・横位ハケ 黒色化 ・摩滅 ハケ	
4	壺	7.6			底部1/2	AD	a		・縦位ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ	
5	壺	7.0			底部1/2	BD	b		・ハケ→縦位ミガキ 底面ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ 底面ミガキ 黒色化	

6	ミニチュア (白か)	4.0	2.8	4.0	完存	AD	a	・ナデ→笥状工具による縦・斜位のランダム沈 積 ・ナデ 指頭圧痕	穿孔2 孔径0.15-0.25
---	---------------	-----	-----	-----	----	----	---	--	--------------------

土製品

図版No.	器種	直径	器厚	孔径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
7	有孔土製円盤	5.3	0.70	0.50	24.87	完存	A	a	・横線文 縦縄文 ・ナデ	窓 破片転用
8	有孔土製円盤	(4.0)	0.50	(0.80)	3.82	全形1/2	B	a	・摩滅 ・ミガキ→赤彩	鉢(窓) 破片転用

本址出土土器は実測・拓影図の他に口縁部18個体あり、内訳は弥生中期壺1、甕8、鉢・高杯6個体、後期壺2個体、縄文晚期保鉢1個体であった。底部は18個体あり、内訳は壺4、甕10、不明4個体であった。

S B35

図版No.	器種	法 量			残 存 度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺				胴部2/3	D	a	・横位沈線文(2条)→縦・斜位ミガキ(上部) 横位ミガキ(下部) 部分的に黒色化 ・斜位ハケ 胴中位帯状に落付着 黒色化	
2	壺				胴上半1/4 胴下半1/3	A	a	・摩滅 横位沈線文 ・摩滅 ナデ	胴と胴の接点なし 図上復元
3	甕	22.0			口縁・胴部上半1/6	D	a	・摩滅 縄文(口縁) 波状文 ・横位ミガキ→ナデ	
4	甕				胴部下半1/2	D	a	・摩滅 縦羽状帯線文→列点文→横位ミガキ 落付着 ・摩滅 ナデ 黒色化	
5	鉢	10.4	3.5	6.6	口縁部1/2 底部完存	A	a	・摩滅 赤彩 黒斑 ・摩滅 赤彩	口縁端部山形突起
6	壺	5.9			口縁・胴部1/4	C	a	・摩滅 縄文(口縁端) 縦位ミガキ(胴) 竹管 刺突列点文→横位沈線文 ・ハケ→ナデ	胴と胴の接点なし 図上復元

本址出土土器は実測・拓影図の他に口縁部17個体あり、内訳は弥生中期壺6、甕8、鉢・高杯3個体であった。底部は12個体あり、内訳は壺3、甕7、鉢2個体であった。

S B36

図版No.	器種	法 量			残 存 度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺				胴部完存	B	a	・横線帯文(1条)→縄文 横位沈線文(2条) 縦位帯線文(7-9本)→区画沈線文 ・ナデ	
2	壺				胴部3/4	D	a	・縄文→横位沈線文(3条) 黒色化 ・摩滅 ミガキ	
3	壺				胴部下半1/2	AD	a	・斜位ハケ→横線文→帯指横線文(6本)黒斑 帯指横線文の一部赤彩 ・斜・横位ハケ 器壁一部剥落	
4	甕				胴部1/2	DE	a	・帯指横線文(6-7本)→斜線文→列点文 黒 色化 ・ナデ 黒色化	
5	甕	21.6			胴部上半1/3	AD	a	・ナデ→縄文→指頭押圧(口縁) 帯指縦羽状文 →列点文 落付着 ・横位ミガキ→ナデ	
6	甕	21.6			胴部上半1/4	D	b	・縄文→指頭押圧→ナデ(口縁)横・斜位ハケ 帯指縦線文(7本2条)→波状文(5段)→列点 文 落付着 黒色化 ・横位ミガキ ハケ線状痕→ナデ 落付着 一 部黒色化	
7	甕	18.5	6.3	22.3	ほぼ完存	D	a	・縄文→指頭押圧(口縁) ハケ→波状文(6本) 上段→帯指縦羽状文(6本)→波状文(下段)→ 帯状文 縦位ミガキ 落付着(胴上半) ・斜位ハケ→横位ミガキ 黒色化	
8	甕	17.8	6.4	21.8	胴部1/3 底部完存	B	a	・摩滅 帯指斜線文→ミガキ磨り出し→縦位ミ ガキ 黒斑 ・摩滅	
9	甕	19.8			口縁部1/6	AD	a	・縄文→指頭押圧(口縁) ナデ→帯指斜線文 ・横位ミガキ	
10	甕	18.0			口縁部1/3	B	a	・摩滅 ・摩滅	
11	甕	13.6			口縁部完存	B	a	・摩滅 縦羽状帯線文 黒斑2カ所 ・摩滅 ハケ	
12	片口鉢	9.2 10.6	6.0	9.8	完存	AB D	a	・摩滅 ハケ→ミガキ 黒斑 ・摩滅	
13	鉢	28.9	7.3	13.1	全形1/2	AB	a	・斜・横位ミガキ→赤彩 底面黒斑 ・横位ミガキ→赤彩 一部黒色化	穿孔2 孔径0.3

14	鉢	17.0			口縁部1/6	C	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ハケ→ミガキ→赤彩	穿孔2 孔径0.3
15	鉢	6.0			胴部下半1/4	AC	a	・斜・横位ミガキ→赤彩 底面ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩	
16	鉢	5.6			胴部下半1/4	BD	a	・摩滅 斜位ミガキ→赤彩 底面赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	

土製品

図版No.	器種	直径	器高	口径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
17	有孔土製円筒 未製品	2.9	0.62	—	6.45	完存	A	a	・摩滅 ミガキ→赤彩 ・摩滅 ミガキ→赤彩	鉢 破片転用
18	有孔土製円筒	(4.2)	0.90	(0.50)	7.96	全形1/2	D	a	・沈線文 ・ハケ	壺 破片転用
19	有孔土製円筒	(3.7)	0.63	(0.40)	6.65	全形1/2	E	a	・沈線文→ミガキ→赤彩 ・ミガキ→赤彩	鉢 破片転用
20	有孔土製円筒	(3.7)	0.72	(0.35)	3.23	全形1/2 以下	C	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	鉢 破片転用

本出土土器は実測・布影図の他に口縁部8個体あり、内訳は発生中期壺7、鉢1個体であった。底部は9個体あり、内訳は発生中期壺2、壺4、鉢2個体、後期壺1個体であった。

SB37

図版No.	器種	法量		口径	器高	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	直径							
1	壺		8.4			胴部上半1/2 胴部下半2/3 底面完存	CD	a	・縄文(4段)→横線文(9段)横・斜位ミガキ ・縄文 ・摩滅 胴下半一底黒色化 器壁一部剥落	胴と底部の接点交し 図上復元
2	壺					胴部上半1/4	AD	b	・ハケ→横線文(4条)→ミガキ 部分赤彩 ・ハケ→指頭押痕→ナデ	
3	壺		7.6			胴部下半3/4	AD	a	・縄文→重円弧文→斜・横位ミガキ 黒色化 ・斜位ハケ 器壁一部剥落	
4	壺		15.6			胴部下半2/3	AD	a	・重円弧文→縦・斜位ミガキ→横位ミガキ→部分赤彩 底面ミガキ 黒斑 ・斜・横位ハケ 底面ハケ 黒色化	
5	壺		22.6			胴部上半完存	AD	a	・波状横線文→直刺突列点文 縄文(口縁端) 裏行着 黒色化 ・ハケ→横位ミガキ 部分的に黒色化	
6	壺		19.0			口縁部1/4	D	a	・横線横線文(6本2段上→下)→波状文 黒色化 ・横・斜位ミガキ	
7	壺		16.6			口縁部1/6	AD	a	・斜位ハケ→横線横線文(7本)横羽状横線文 口縁端刺突文 黒色化 ・ナデ(弱い横位ミガキ)	
8	壺		29.2			口縁部1/2	AC	a	・横羽状横線文 縄文(口縁端)→指頭押圧 口縁端のみ黒色化 ・斜・横位ハケ→横位ミガキ	
9	壺		26.6			口縁部2/3	B	a	・摩滅 竹管刺突列点文 口縁端指頭押圧	
10	壺		19.0			口縁部1/6	D	a	・横線横線文(6本)→横羽状横線文 縄文(口縁端) 黒色化 ・摩滅 縁辺のみ黒色化	
11	壺		19.8			口縁部1/6	D	a	・横線横線文 黒色化 ・ナデ 黒色化	
12	壺		16.2	19.0	5.6	全形3/4	AF	a	・摩滅 波状文→列点文 口縁端のみ ・摩滅 横位着 黒色化	
13	壺		14.6			口縁部1/4	CD	a	・斜位ハケ→横線横線文(8本)→波状文(上→下) 胴部中央列点文 縄文(口縁端)→指頭押圧 黒色化 ・斜位ハケ ナデ 指頭押痕 黒色化	
14	壺					胴部2/3	D	a	・横羽状横線文→直刺突列点文→斜位ミガキ 黒色化 ・摩滅 斜位ハケ 一部黒色化	
15	鉢		16.4	5.6	5.5	全形1/2	B	a	・摩滅 赤彩	
16	鉢		17.8			口縁部1/6	B	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
17	鉢		17.6			口縁部1/6	A	b	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 ナデ(弱い横位ハケ)→赤彩黒斑	
18	鉢		6.4			底部1/3	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩	
19	鉢(高杯か)		29.4			杯部ほぼ完存	B	b	・摩滅 ハケ→横位ミガキ→赤彩口縁端2個1 対の山形突起4単位 ・横位ミガキ→赤彩	穿孔2 孔径0.2
20	壺		8.6			底部完存 胴部下半1/6	B	a	・横・斜位ミガキ 黒斑 ・摩滅 斜位ハケ 器壁一部剥落	

21	壺	9.2		胴部下半2/3	D a	・斜位ミガキ 黒色化 ・摩滅 横位ハケ 黒色化		
22	壺	7.0		底部完存	D a	・縦位ミガキ 黒色化 ・ナデ(弱い斜位ミガキ) 黒付着 黒色化		
23	壺	5.2		底部完存	AD a	・縦位ミガキ ・横位ミガキ		
24	壺	4.6		底部完存	D a	・縦位ミガキ ナデ 黒色化 ・ナデ(弱い斜位ミガキ)		
25	壺	5.0		胴部下半はほぼ完存	AD a	・斜位ハケ→縦位ミガキ 黒色化 ・摩滅 斜位ハケ		
26	壺	6.8		底部1/2	D a	・ナデ 黒色化 ・ナデ(弱い斜位ミガキ) 黒色化		
27	ミニチュア (鉢)	3.7		胴部1/4	E a	・横位ミガキ(密)→ナデ ・横位ミガキ(密)		

土製品

図版No.	器種	直径	器厚	口径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
28	有孔土製円盤	2.5	0.58	0.30	3.69	完存	A a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩		鉢 破片転用

本址出土土器は実測・拓制図の他に口縁部96個体あり、内訳は弥生中期壺16、壺70、鉢・高杯9個体、後期壺1個体であった。底部は103個体あり、内訳は壺27、壺52、鉢12、有孔鉢1、不明11個体であった。

S B 40

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	10.1			口縁部1/4	B a	・縄文→刻目(口縁端) 赤彩 ・横位ミガキ→赤彩		
2	壺	12.0			口縁部1/4	E a	・摩滅 縄文→刻目(口縁端) 横線文(頭) 赤彩 ・摩滅 赤彩		
3	壺				頸部1/3	B a	・摩滅 竹管刺突列点文(2条) ・摩滅		
4	壺				胴部1/4 (未接合の破片多数)	A a	・斜位ハケ→縄文→縦位帯縞文→区画沈線文 ・横線文・円弧文→斜刺突文→円形胎付文 部分赤彩 ・裏・斜位ハケ		
5	壺	14.2			口縁・胴部はほぼ完存	D a	・縄文→ナデ(口縁) 横羽状縞縞文(6~7本上→下) 縦位ミガキ 黒付着 黒色化 ・横位ミガキ→ナデ 口縁黒色化	焼成斑	
6	壺	6.8			底部1/2	AD a	・ハケ→縦位ミガキ 指頭圧痕 底部黒色化 ・斜位ハケ		
7	鉢	16.0			胴部1/4	B a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩		
8	鉢	16.0			口縁部1/6	D a	・ナデ→赤彩 ・ナデ 一部赤彩残存	突起穿孔	
9	鉢	10.0			口縁部1/4	C D b	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 口縁端突起胎付 ・横位ミガキ→赤彩 黒色化	穿孔1 孔径0.22	
10	鉢	18.4			口縁部2/3	B b	・摩滅 ハケ→横位ミガキ→赤彩 口縁端部山形突起(摩滅のため不明瞭) ・横位ミガキ→赤彩	穿孔2 孔径0.3	

土製品

図版No.	器種	直径	器厚	口径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
12	有孔土製円盤	5.2	0.56	0.45	16.17	完存	D a	・斜状縞縞文 黒縞 ・ナデミガキ	壺 破片転用	
13	有孔土製円盤	3.7×4.2	0.72	0.60	12.55	完存	D a	・羽状縞縞文 黒色化 ・ハケ	壺 破片転用	
14	有孔土製円盤	3.6	0.57	0.47	7.20	完存	DC a	・斜状縞縞文 黒付着 黒色化 ・ハケ	壺 破片転用	
15	有孔土製円盤	3.4×3.6	0.59	0.55	9.18	完存	E a	・ミガキ ・斜位ハケ	壺 破片転用	
16	有孔土製円盤	3.1	0.72	0.26	8.15	完存	D a	・羽状縞縞文 ・ミガキ	壺 破片転用	
17	有孔土製円盤	(6.0)	0.70	(0.40)	15.24	全形1/2以下	C a	・羽状縞縞文 ・ナデ	壺 破片転用	
18	有孔土製円盤	(5.0)	0.61	(0.50)	7.92	全形1/2以下	D a	・ハケ 黒付着 黒色化 ・ミガキ	壺 破片転用	
19	有孔土製円盤	(4.0)	0.70	(0.50)	5.16	全形1/2以下	E a	・斜状縞縞文 ・ナデ	壺 破片転用	

20	有孔土製円盤	(3.1)	0.63	(0.30)	3.13	全形1/2以下	A E	a	・羽状櫛歯文 ・摩滅	壺 破片転用
21	有孔土製円盤	(3.7)	0.64	(0.30)	4.28	全形1/2以下	D	a	・ハケ→斜状櫛歯文 ・ナデ	壺 破片転用
22	有孔土製円盤	(5.7)	0.73	(0.50)	14.59	全形1/2	D	a	・ハケ→羽状櫛歯文 黒色化 ・ナデミガキ	壺 破片転用
23	有孔土製円盤	(4.3)	0.75	(0.50)	6.15	全形1/2以下	A	a	・羽状櫛歯文 ・ナデ	壺 破片転用
24	有孔土製円盤	4.0	0.60	0.42	11.50	完存	A	a	・ヨコミガキ→赤彩 ・赤彩	鉢 破片転用
25	有孔土製円盤	3.8	0.60	0.37	10.34	完存	A	a	・摩滅 ・ミガキ→赤彩	鉢 破片転用
26	有孔土製円盤	3.8×3.71	0.61	0.42	11.16	完存	A	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	鉢 破片転用
27	有孔土製円盤	3.1×2.7	0.63	3.30 (0.35× 0.41)	6.03	完存	A D	a	・摩滅 赤彩 ・ミガキ→赤彩	鉢か高杯 破片転用
28	有孔土製円盤	1.9	0.63	0.35	2.22	完存	A	a	・ミガキ→赤彩 ・ミガキ→赤彩	鉢 破片転用
29	有孔土製円盤	2.8×4.0	0.85	0.45	10.28	ほぼ完存	A	a	・ヨコミガキ→赤彩 ・ミガキ→赤彩 黒斑	鉢 破片転用
30	有孔土製円盤	3.5	0.60	0.32	7.05	ほぼ完存	A	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	鉢 破片転用
31	有孔土製円盤	3.0	0.73	0.40	6.85	完存	A	a	・ミガキ→赤彩 ・赤彩	鉢 破片転用
32	有孔土製円盤	2.7	0.70	0.40	5.46	完存	A	a	・ミガキ→赤彩 ・ミガキ→赤彩	鉢 破片転用
33	有孔土製円盤	(2.2)	0.63	(0.30)	1.48	全形1/2以下	A	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 密刺	鉢 破片転用
34	有孔土製円盤	(2.2)	0.70	(0.40)	1.77	全形1/2以下	A	a	・摩滅 赤彩 ・ミガキ→赤彩	鉢 破片転用
35	有孔土製円盤	(3.8)	0.65	(0.40)	5.38	全形1/2	A	b	・ミガキ→赤彩 ・ミガキ→赤彩	鉢 破片転用
36	有孔土製円盤	(3.4)	0.62	(0.40)	3.63	全形1/2以下	A	a	・摩滅 赤彩 ・ミガキ→赤彩	鉢 破片転用
37	有孔土製円盤	(0.3)	0.66	(0.40)	3.28	全形1/2以下	A	a	・ミガキ→赤彩 ・摩滅 ハケ→赤彩	鉢 破片転用
38	有孔土製円盤	(2.3)	0.68	(0.35)	1.84	全形1/2以下	A	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	鉢 破片転用
39	有孔土製円盤	(2.4)	0.67	(0.30)	2.10	全形1/2以下	A	a	・赤彩 黒色化 ・ミガキ→赤彩	鉢 破片転用
40	有孔土製円盤	4.0	0.70	0.40	11.63	完存	B	a	・縄文→横線文 ・ナデ	壺 破片転用
41	有孔土製円盤	(一)	0.52	0.32	2.26	全形2/3	B	a	・摩滅 ・摩滅	鉢 破片転用
42	有孔土製円盤	(3.7)	0.75	(0.40)	4.31	全形1/2	D	a	・摩滅 ・摩滅 黒色化	壺か 破片転用
43	有孔土製円盤	(3.0)	0.65	(0.40)	2.62	全形1/2以下	E	a	・摩滅 ・摩滅	壺か壺 破片転用
44	有孔土製円盤	(4.0×2.6)	0.58	(0.45)	3.47	全形1/2以下	E	a	・摩滅 ・摩滅	壺か壺 破片転用
45	有孔土製円盤 未製品	6.0×5.3	0.61	—	21.74	完存	D	a	・羽状櫛歯文→ミガキ ・ミガキ 黒色化	壺 破片転用
46	有孔土製円盤 未製品	4.32×5.3	0.74	—	20.33	完存	D	a	・ハケ→櫛状櫛歯文→横線文 ・ハケ→ナデ	壺 破片転用
47	有孔土製円盤 未製品	4.22×3.5	0.68	—	12.41	完存	D	a	・斜状櫛歯文 黒色化 ・ナデ 黒斑	壺 破片転用
48	有孔土製円盤 未製品	4.0×3.5	0.76	—	12.69	完存	D	a	・ハケ→斜状櫛歯文 ・ナデ	壺 破片転用
49	有孔土製円盤 未製品	3.3	1.00	—	13.59	完存	A D	a	・摩滅 黒色化 ・ナデ	壺 破片転用
50	有孔土製円盤 未製品	(4.4)	5.70	—	10.90	全形2/3	D	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	鉢 破片転用
51	有孔土製円盤	(3.2)	0.58	(0.40)	2.98	全形1/2以下	A	a	・摩滅 ハケ→赤彩 ・摩滅 赤彩	鉢 破片転用
52	有孔土製円盤 未製品	3.6×3.4	0.66	—	8.06	ほぼ完存	A D	a	・ミガキ→斜状櫛歯文 黒色化 ・ヘアナデ	壺 破片転用
53	有孔土製円盤 未製品	3.3	0.54	—	6.09	完存	D	a	・摩滅 羽状櫛歯文 ・摩滅	壺 破片転用
54	有孔土製円盤 未製品	3.3	0.78	—	8.01	ほぼ完存	C	a	・摩滅 櫛状櫛歯文 ・摩滅	壺 破片転用
55	有孔土製円盤 未製品	(3.8)	0.65	—	3.76	全形1/2以下	B	a	・斜状櫛歯文 ・摩滅 ナデ	壺 破片転用

56	有孔土製円盤 未製品	(5.3)	0.60	—	9.31	全形1/2	DA	a	・横線文→斜状櫛歯文 黒色化 ・ミガキ	甕 破片転用
57	有孔土製円盤 未製品	(4.22×3.5)	0.72	—	12.09	全形1/2以下	D	a	・羽状櫛歯文 黒色化 ・ミガキ	甕 破片転用
58	有孔土製円盤 未製品	4.5×4.03	0.76	—	10.47	全形1/3以下	B	a	・摩滅 赤彩 ・ヨコミガキ→赤彩	鉢 破片転用
59	有孔土製円盤 未製品	(3.8)	0.75	(0.40)	5.07	全形1/2以下	A	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	鉢 破片転用
60	有孔土製円盤	(3.5)	0.70	(0.35)	4.63	全形1/2以下	A	a	・ミガキ→赤彩 ・ミガキ→赤彩	鉢(蓋) 破片転用
61	有孔土製円盤 未製品	2.7×2.6	0.55	—	4.45	完存	D	a c	・斜状櫛歯文 黒色化 ・ナデミガキ	甕 破片転用
62	有孔土製円盤 未製品	(4.6)	0.53	—	5.55	全形1/3以下	D	a	・ハケ ・ハケ 黒色化	甕 破片転用
63	有孔土製円盤 未製品	(3.3)	0.60	—	3.39	全形1/2以下	D	a	・ハケ→斜状櫛歯文 黒色化 ・ナデミガキ	甕 破片転用
64	有孔土製円盤 未製品	(2.3)	0.60	—	2.59	全形1/2以下	D	a	・斜状櫛歯文 ・摩滅	甕 破片転用
65	土製円盤	3.6×3.9	0.72	—	13.54	完存	D	a	・羽状櫛歯文 煤付着 ・ミガキ 黒色化	甕 破片転用
66	土製円盤	3.8	0.51	—	9.71	完存	DE	a	・斜位ハケ→波状文 煤付着 ・ハケ	甕 破片転用
67	土製円盤	3.8	0.70	—	12.00	完存	D	a	・ハケ→羽状櫛歯文 煤付着 黒色化 ・ミガキ	甕 破片転用
68	土製円盤	3.72×3.3	0.70	—	10.82	完存	D	a	・ハケ→縦羽状櫛歯文 ・ハケ→ナデ 黒斑	甕 破片転用
69	土製円盤	3.6×4.25	0.70	—	12.58	完存	DE	a	・縦羽状櫛歯文 煤付着 黒色化 ・ナデ	甕 破片転用
70	土製円盤	2.8×3.2	0.55	—	4.46	完存	AD	a	・横羽状櫛歯文 黒色化 ・ナデ	甕 破片転用
71	土製円盤	2.8×2.8	0.72	—	7.01	完存	D	a	・斜状櫛歯文 ・ナデミガキ	甕 破片転用
72	土製円盤	3.4	0.71	—	8.66	完存	E	a	・摩滅 ・摩滅	甕か 破片転用
73	土製円盤	2.8	0.60	—	5.87	ほぼ完存	DA	a	・斜状櫛歯文 煤付着 黒色化 ・ナデミガキ	甕 破片転用
74	土製円盤	2.7	0.71	—	6.24	完存	D	a	・羽状櫛歯文 ・ナデミガキ	甕 破片転用
75	土製円盤	3.8×3.4	0.55	—	7.71	完存	A	a	・摩滅 赤彩 ・ヨコミガキ(密)→赤彩	鉢 破片転用
76	土製円盤	(3.4)	0.59	—	2.69	全形1/2以下	A	a	・摩滅 ・摩滅 黒色化	甕か 破片転用

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部45個体あり、内訳は弥生中期壺7、甕21、鉢・高杯17個体であった。底縁は24個体あり、内訳は壺9、甕11、鉢4個体であった。

第3節 弥生時代後期

1 概観 (付図参照)

弥生時代後期の遺構・遺物は基本層序8・9層から調査区全域で確認された(第2章参照)。本遺跡の性格は竪穴住居址を主体とする大規模集落であり、検出遺構は竪穴住居址32軒、炉址・柱穴のない竪穴状遺構3軒、掘立柱建物址2棟(ピット群を除く)、土坑58基、溝址37条、遺物集中遺構55基、水田址等である。これらの遺構群は検出面、重複関係から微妙な時間変遷はあるが、各遺構の密度・分布状況に変化はみられず基本的に同一の空間利用であった。

地形は調査区中央部に北西から微高地が張りだし、南西から南東にかけて半円状に低地が取り巻いている。遺構分布はこの地形に合わせて、南西低地から生産域(水田一帯)―集落域A(住居・土坑群)―干渉域(溝・遺物集中)―集落域B(住居群)となり東側自然流路に由来する低地に至る。このなかで遺構の密集する空間は、生産域から集落域Aと集落域Bで、干渉域とした空間は極めて散漫な遺構分布であった。A・Bに区分した集落域の住居址分布は、調査区中央部(IV区)に位置する集落域Bが竪穴住居址30軒と掘立柱建物址数棟の集中、約120m南西に隔てた低地側の微高地にある集落域Aが竪穴住居址2軒と掘立柱建物址数棟である。この2つの集落域の空間利用の違いは時間差とみなされ、当初から存在した集落域Aと生産域(水田)が洪水で埋没したことにより干渉域が南西低地に拡大し、集落Aは集落Bに集約されたと捉えられる。その結果生産域は井戸を主体とする土坑群へ、更に遺物集中遺構へと変化する(第10表参照)。

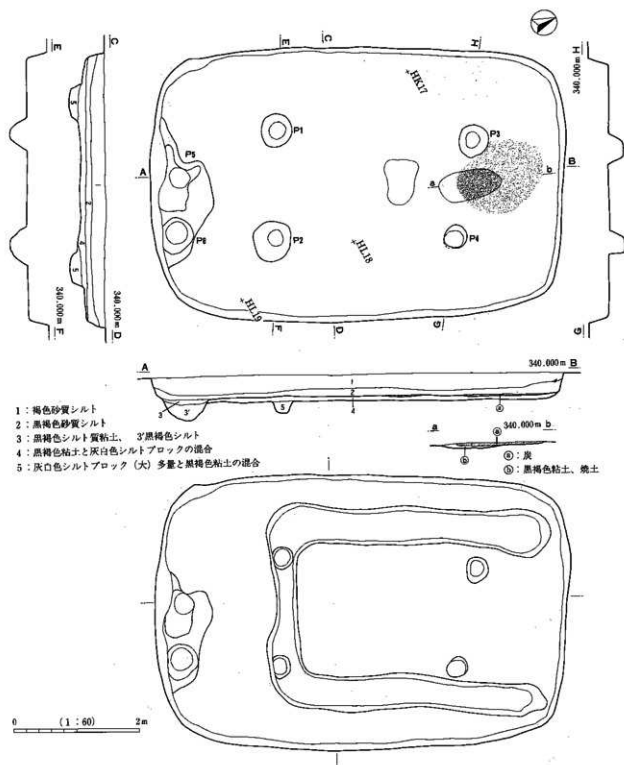
竪穴住居址32軒の内特殊構造となる住居は、長軸10mを越す大形住居(SB17)とベッド状遺構を付設した住居(SB09)の各1軒、特殊遺物となる銅銅片を出土した住居は3軒(SB14・16・42)である。これらの住居は集落中央部に帯状に連なった占地を示す。また住居群からミニチュアが21点、土製円盤を含む土製品が9点出土した。ミニチュア6点が集中した1軒(SB106)を除けば1～2点が13軒の住居に分散しており、集落内における特殊な位置は占めていない。この状況は集落内での祭祀等の遺構・遺物の性格の違いを示唆している。

出土土器は後期前半の特長をもつ土器片が散見されるが遺構に帰属するものはなく、ほぼ全て後期中葉に含まれる資料である。上層面から検出された遺構に伴う土器群が後期終末であることから本集落は後期中葉に限られた短期継続集落と位置づけられる。本遺跡の大半の遺構埋土には炭層の顕著な堆積と薄い砂層堆積が認められ、人為的な燃焼行為の痕跡と大規模な洪水砂の被覆があったものと捉えられる。炭層には遺構廃絶直後と廃絶後の2次利用としての燃焼痕跡に分けられ、大半の住居址は廃絶後に遺物とともに埋め戻しがありその上面に炭層が検出された。洪水砂は床面もしくは炭層上面から確認されるケースが多く、このことから微妙な時間差のなかで継続した遺構群とされる。本遺跡で検出された遺構群からは弥生時代の集落構成要素を全て見ることができ、本節では遺構分類に従って個別遺構の詳細を述べる。

2 弥生後期竪穴住居

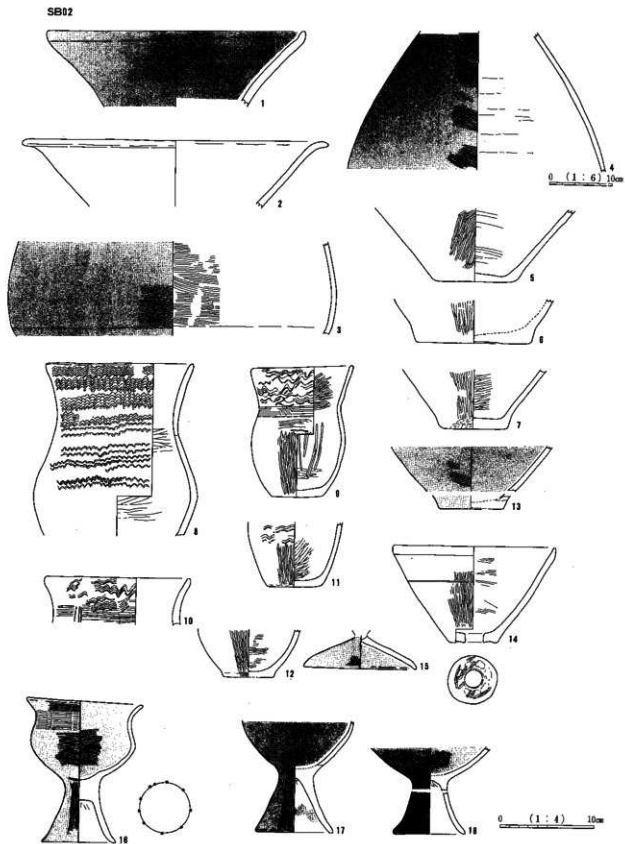
SB02 (IV区-Hグリッド) [第61～64図 PL5・6・31・32・52]

調査区中央部北西寄りに位置する。本址によって中期掘立柱建物址ST02の柱穴一部を壊している。形状・規模：南西―北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランとなり、6.3×4.2mの規模をもつ中型の竪穴住居である。主軸方向はN-28°-E。埋土：砂質分の多い自然堆積層からなる。床面：黒褐色粘土と灰黄色



第61図 SB02実測図及び掘り方実測図

シルト、砂の混合による貼り床である(4層)。床下からは幅60cm、深さ30cmとなる断面長方形の掘り方の溝が検出された。溝は入口側の主柱穴間を一边として奥壁方向に整然と掘り込まれ、平面「コ」の字形状となる。炉：主軸上の中央北東寄りと、奥壁側主柱穴の中間の2カ所に焼土が検出された。両者とも床面の明瞭な掘り込みはない。炭層が主柱穴間の焼土から奥壁にかけて広がっていたことから後者が主炉として機能したと判断される。柱穴・ピット：ピットは6基検出された。P₁~P₆は主柱穴となるが、床面からの掘り込みは30cmと浅い。P₂からは台付甕型の高杯(16)、甕(9)、有孔鉢(14)が重なって出土した。

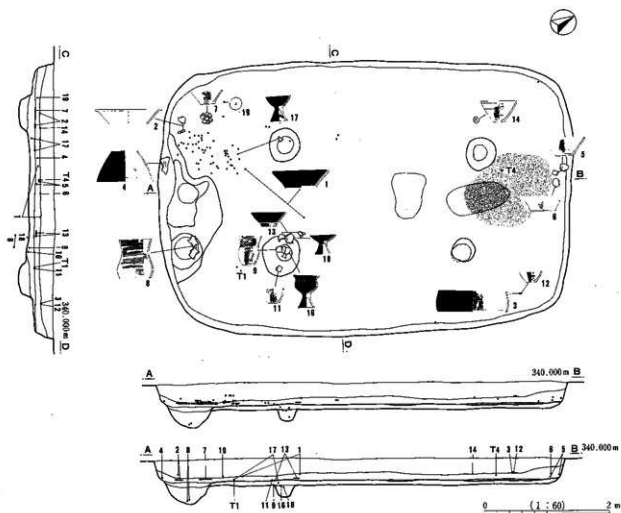


第62図 SB02出土土器実測図

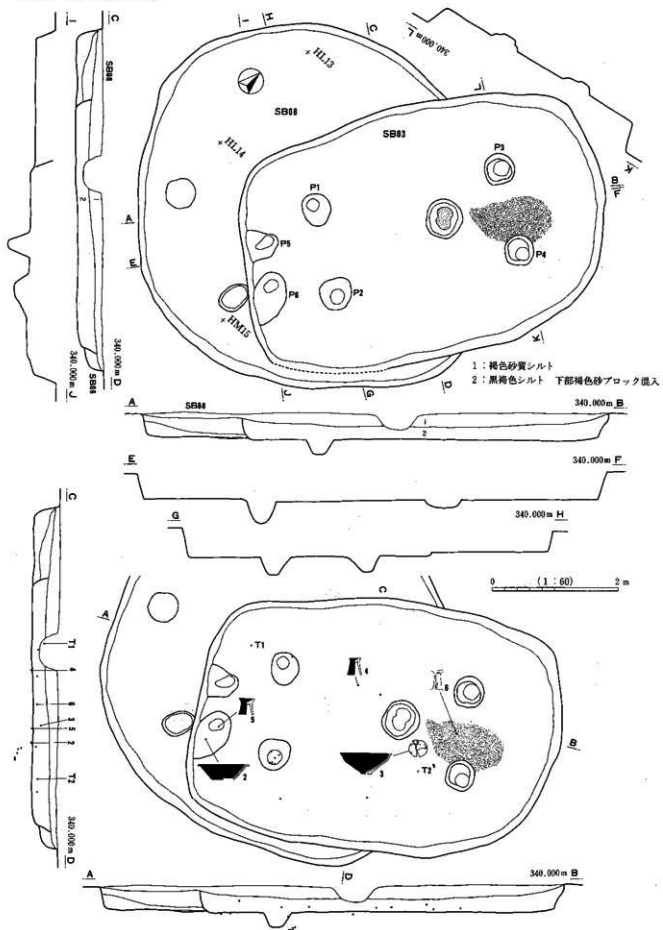
P₂は出入り口施設のピットで、大きな掘り込みであった。P₃は貯蔵穴であり、ピット内から甕が出土した。遺物の出土状況：西側コーナー床面に集中し、本址にともなう土器一括廃棄と捉えられる。特殊遺物



第63図 SB02出土土製品実測図・土器拓影



第64図 SB02出土遺物分布図

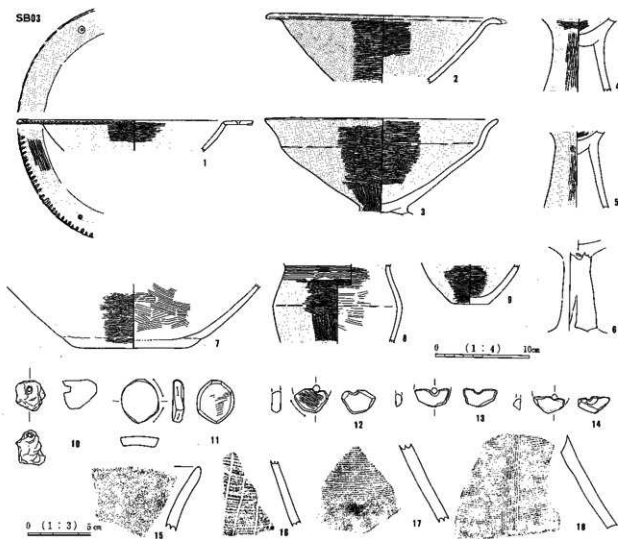


第65図 SB03実測図及び出土遺物状況図

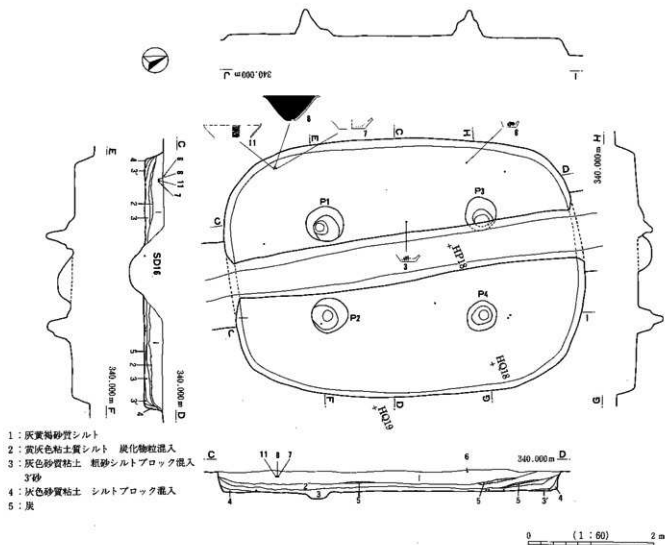
として土製円盤が2点あるが19のみ本址に帰属する遺物である。

SB03 (IV区-Hグリッド) [第65・66図 PL6・50-52]

調査区中央部北西寄りに位置する。本址によって中期整穴住居SB08の一部を壊している。形状・規模：南西-北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランとなり、5.6×3.8mの規模をもつ中型の整穴住居である。主軸方向はN-33°-E。埋土：2層に分層されるが、両層ともに砂質の自然堆積層である。床面：黒褐色粘土と砂の混合による硬化した貼り床がほぼ全面に確認された。炉：主軸上のほぼ中央北東寄りに位置する。径62cmの円形プランをもち、床面から13cmの深さに掘り窪められた地床炉である。炉床には焼土が堆積し、炉壁は硬化していた。また奥壁寄りの主柱穴間には炭層の広がりも確認された。柱穴・ピット：ピットは6基検出され、P₁~P₄は主柱穴、P₅は出入り口施設、P₆は貯蔵穴となり整然とした方形配列であった。主柱穴は床面から40cm、P₅・P₆は20cmの深さで、P₅内からは高杯(2・5)が出土した。遺物の出土状況：出土遺物は少量で、下層から床面にかけて散在していた。3の高杯は炉脇から潰れた状況で出土した。特殊遺物は土製円盤4点と穿孔をもつ粘土塊1点が下層から、緑色凝灰岩の管玉1点が上層から出土している。管玉は上層検出面に分布する周溝墓関連の遺物と捉えられる。



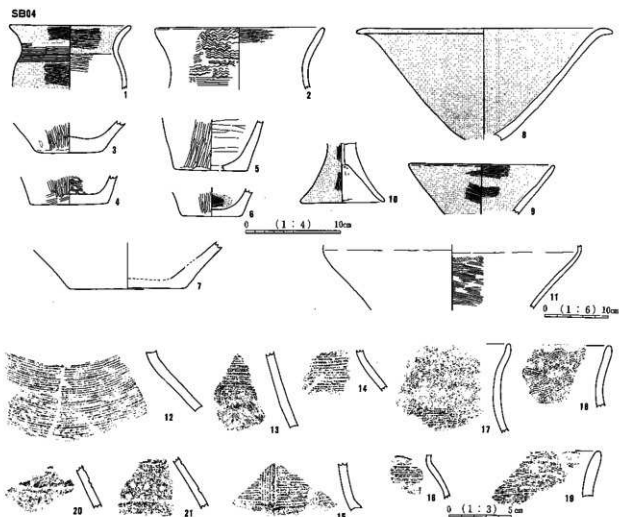
第66図 SB03出土土器・土製品実測図・拓影



第67図 SB04実測図及び出土遺物分布図

SB04 (IV区-Hグリッド) [第67・68図 PL6]

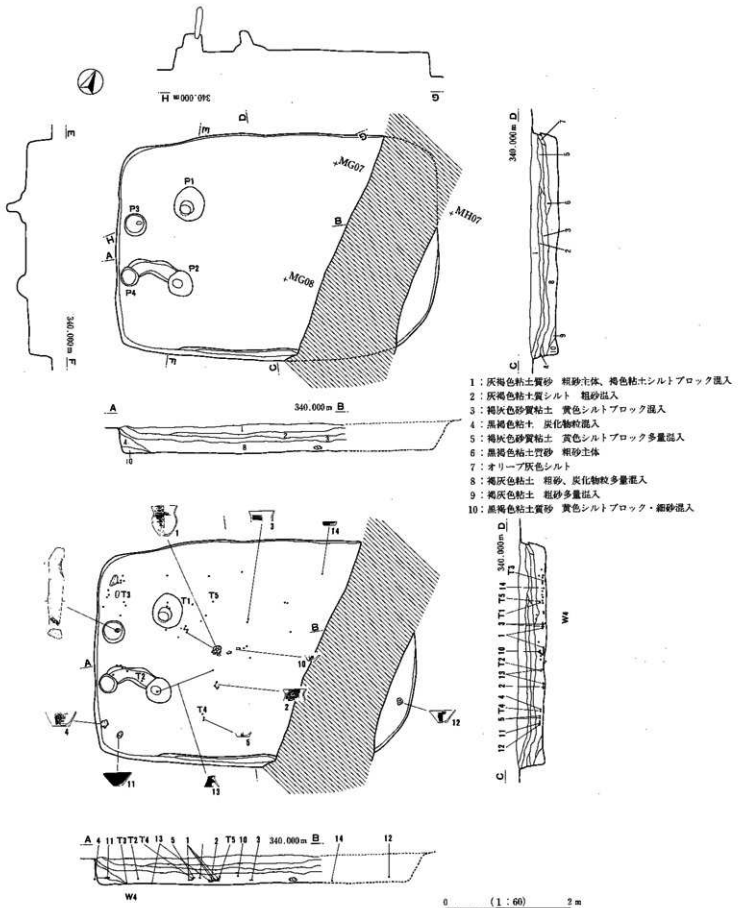
調査区中央部北西寄りに位置する。南北に走行する後期の溝址SD16によって中央部が削られ、規模と構造の一部が不明となる。形状・規模：南南西-北北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランを呈する。規模は短軸が3.9m、長軸が5.5mほどになると推定される中型の竪穴住居である。長軸を主軸と仮定するとN-17-Eとなる。埋土：床面上から上層まで一様に砂質で自然堆積層と捉えられるが、上層（1層）と中層（2層）、中層と下層（3層）の間層に焼土と炭が検出され、遺構埋没過程での人為的な痕跡とされる。床面：灰黄色シルトと砂を混合した7～8cmの厚みをもつ貼り床であり、ほぼ全面で確認された。炉：不明であるが、北側主柱穴（P₃・P₄）の中間に位置する可能性が高い。柱穴・ピット：主柱穴4基が検出され、床面から50cmの掘り込みとなる。遺物の出土状況：各層から小片が散在して出土した。埋土下層遺物は壺底部（3）と高杯（8）で器台（10）は検出面出土である。



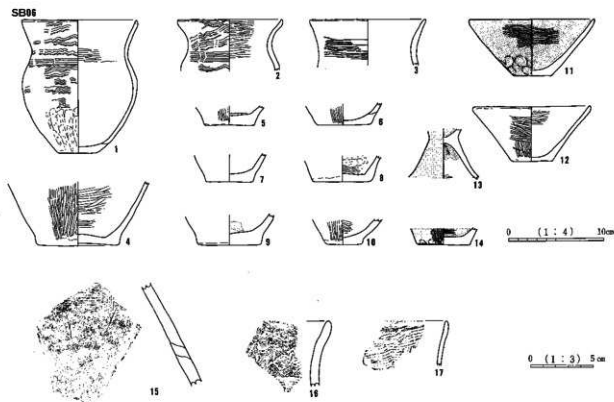
第68図 SB04出土土器実測図・拓影

SB06 (IV区-Mグリッド) [第69・70図 PL6・23]

調査区中央部北西寄りに位置する。南北に走行する現用水路によって北側コーナー、南側の壁と床面の一部を欠き、住居内の構造が不明となる。また本址は中期竪穴住居SB05を壊して構築されている。形状・規模：南西-北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランを呈す。5.3×3.5mの規模となる中型の竪穴住居である。主軸方向はN-67°-E。埋土：上層は砂層(1・2・6)と砂質の粘土(3・5)となる自然堆積層で、下層は粗砂ブロック、シルトブロックを混入した埋め戻し埋土(8層)となる。上層は埋設過程での洪水性の堆積層として捉えられる。床面：黒褐色粘土とシルトに砂を混合した貼り床で、5~10cmの厚みで全面に確認された。掘り方は中央に深く掘り鉢状となり、縁辺に浅い状況で、入口部壁際は砂層地山を硬化させた床であった。炉：不明であるが、主軸上の奥壁寄りに位置する可能性がある。柱穴及びその他の施設：ピットは4基検出された。P₁・P₂は配列から主柱穴となるが、P₂の掘り込みは20cmと浅い。P₃は出入り口施設のピットで、ピット内にはクリ材の柱(付巻参照)が残存していた。この柱材は浅いピットの掘り込みから地山の砂層に打ち込まれた状態で、先端部に掘り方は確認されなかった。P₄は10cmほどの掘り込みで性格は不明であるが、P₂に至る浅い溝が検出されている。また南側に部分的な周溝が



第69図 SB06実測図及び出土遺物分布図

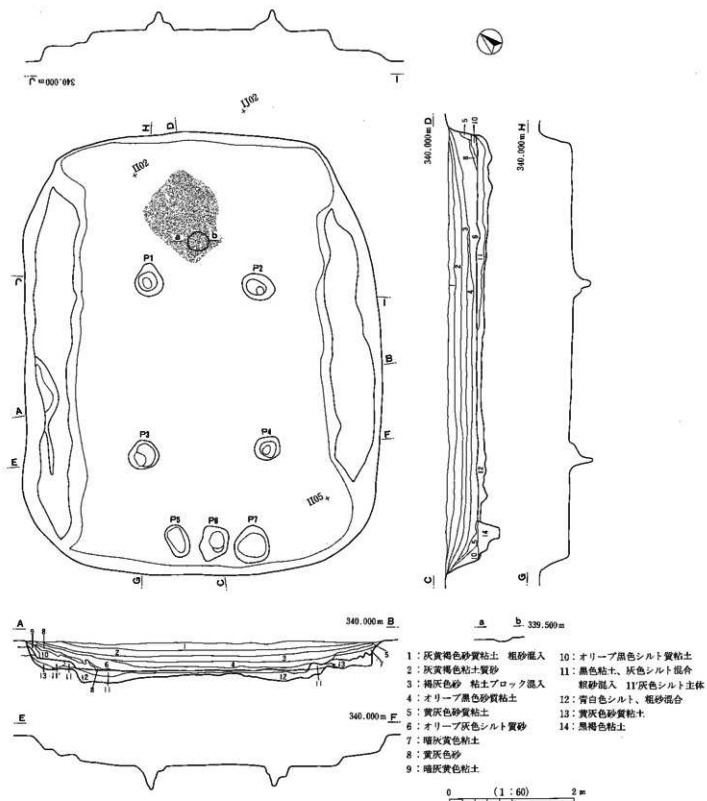


第70図 SB06出土土器実測図・拓影

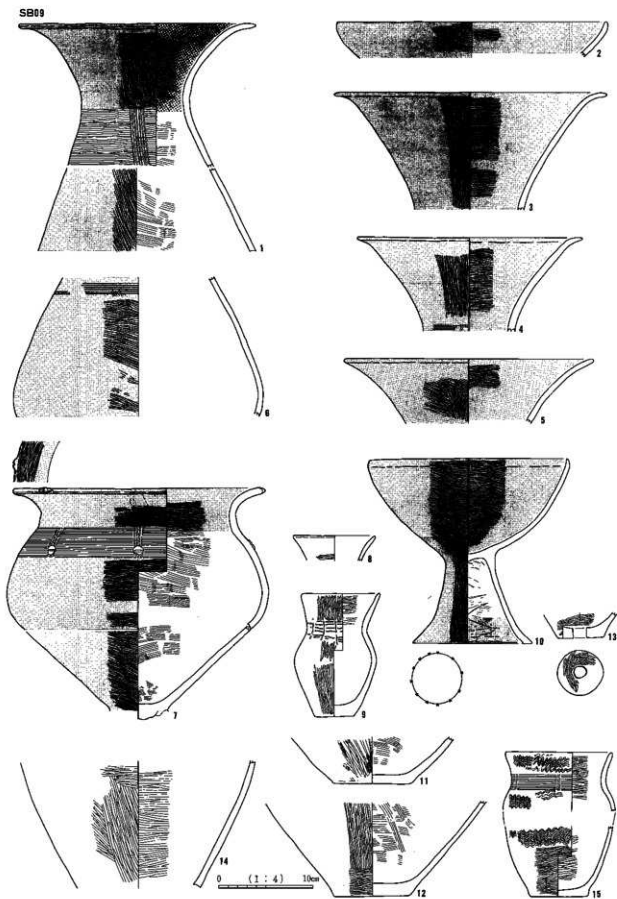
ある。遺物の出土状況：少量の土器が下層から散在して出土した。器形の確認できた個体は3個体で、底部破片が多数ある。

SB08 (IV区-Iグリッド) [第71～75図 PL7・32]

調査区中央部北東寄りに位置している。他の遺構との重複はない。形状・規模：南西-北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランとなる。規模は6.7×5.2mの比較的大型の竪穴住居で、側壁施設としてベッド状遺構をもつ。主軸方向はN-27°-E。埋土：数度の砂層が堆積する自然堆積である。(1～6層)。床面：黒色粘土、青灰色シルトと砂を混合した貼り床であり、シルト主体の床(11層)と粗砂主体の床(12層)からなる。掘り方は主柱穴を両む中央がマウンド状に盛り上がり、主柱穴外からベッド状遺構の立ち上がりまでが溝状に深くなる方形の周溝形状であった。炉：主軸上の北東奥壁寄りに位置する。径30cmの円形プランとなり、床面から5cmの掘り込みをもつ浅い地床炉である。炉内及び周辺には炭層が検出されている。柱穴及びその他の施設：ピットは7基検出された。P₁～P₄は主柱穴であり、床面から40cmほどの深さとなる。柱穴の配列は長方形であるが長軸に対し入口方向に偏りがある。P₅～P₇は出入り口施設となるピットで、3基とも深さ30cmであった。本址には特殊遺構としてベッド状遺構が北西と南東側の壁に付設されていた。ベッド上部の最大幅は65cm、最小幅は40cmで短辺壁際では細く収束する形状となり、床面との高低差は20～30cmに及ぶ。ベッドの構築は、砂層面(地山)までの掘り込み段階でほぼ原型を作った後、シルトとシルト混じりの粘土によって上部及び側面への張り付けを行っている。遺物の出土状況：床面から下層(4～6層)にかけて出土し、出入り口周辺と炉の周辺に集中している。出土遺物は全て本址にともなう土器一括廃棄と捉えられる。



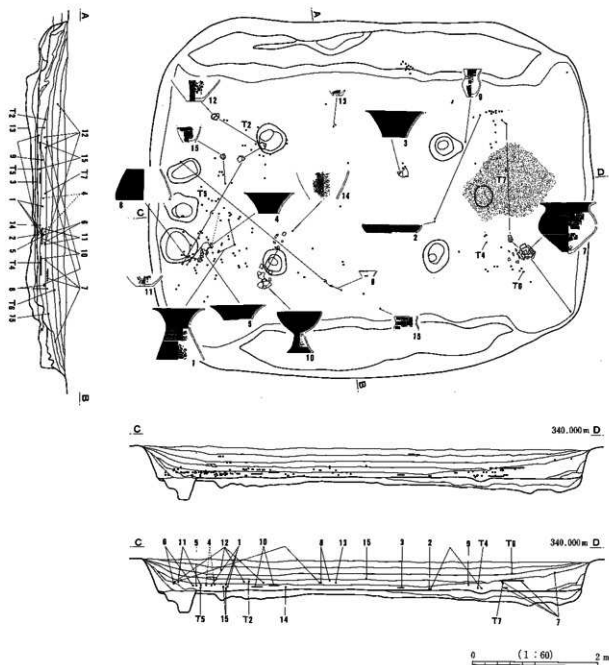
第71図 SB09実測図



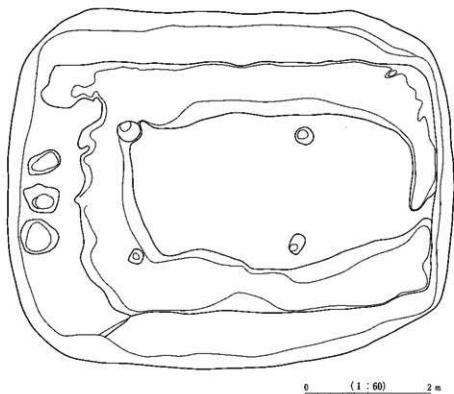
第72圖 SB09出土土器実測図



第73図 SB09出土土器拓影



第74図 SB09出土遺物分布図



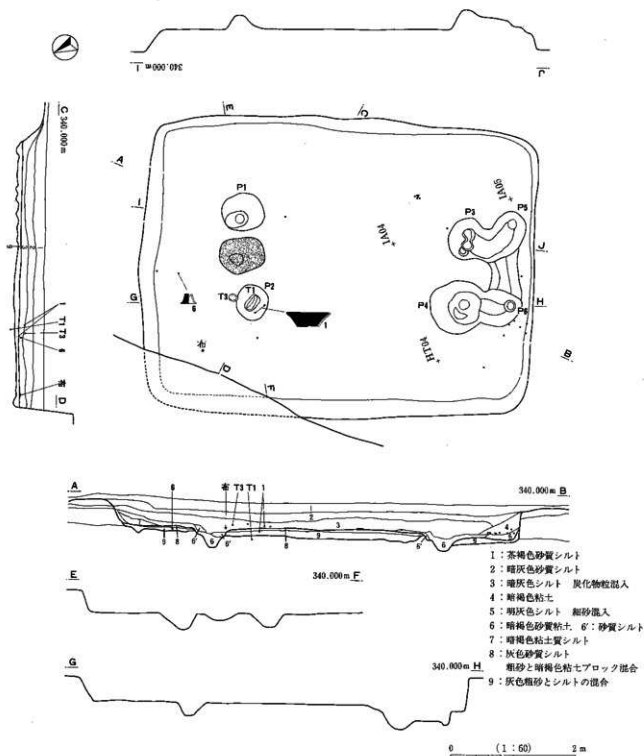
第75図 SB09掘り方実測図

SB10 (IV区-H・Iグリッド) [第76・77図 PL7]

調査区中央部北東寄りに位置する。北コーナーが調査区外のため未調査となるが、遺構の全容は把握される。形状・規模：南西-北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランを呈する。主軸方向はN-23°-Eとなり、6.0×4.4mの規模をもつ中型の竪穴住居である。埋土：一様に砂質の自然堆積層である。床：黒褐色粘土と褐色シルト、砂の混合による貼り床であり、ほぼ全面で確認された。炉：主軸上の北東奥壁側の主柱穴間に位置する。70×50cmの楕円形プランで、床面から約10cmの深さに掘り窪めた地床炉である。炉内からは多量の炭が検出された。柱穴・ピット：ピットは6基検出された。P₁~P₄は主柱穴であり、床面から30cm程の掘り込みとなる。主柱穴の配列は主軸中心部によった短辺の短い長方形となる。入口施設となるP₅・P₆は深さ25cm程で、両ピット間と主柱穴に至る浅い溝が検出された。またP₅内から鉄石英製の管玉が出土した。遺物の出土状況：床面~下層に少量の遺物が出土し、土器は入口ピット付近に集中が認められた。特殊遺物では北コーナー床面から赤漆に被覆された布(巻首函版)が出土した。布の素材は本州初となる絹の可能性が高いと鑑定された。出土遺物は全て本址発掘時にともなうものと捉えられる。

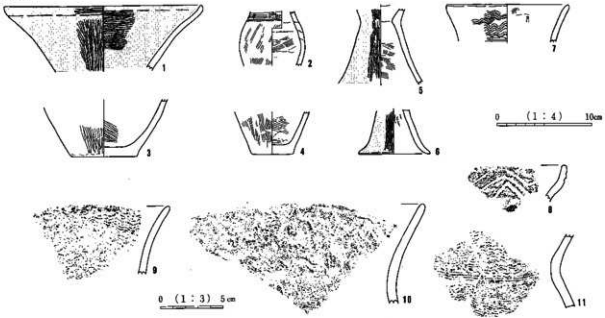
SB11 (IV区-Iグリッド) [第78・79・80図 PL8-32-50]

調査区ほぼ中央に位置している。他の遺構との重複はない。形状・規模：西西南-東北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランを呈し、3.9×3.1mの小型の竪穴住居である。主軸方向はN-14°-E。埋土：4層に分層されたが、ほぼ3層まで均一な砂質シルトの自然堆積層である。下層(4層)上面には焼土と炭、更に炭化板材等の遺物も集中して出土し、これは埋没過程での使用された痕跡と捉えられる。床面：青灰色シルトと砂を混合した貼り床であるが、厚みは2~5cmと薄い(5層)。炉：主軸上の北側主柱穴の間に位置する。径30cmの円形のプランを呈し、床を僅かの掘り窪めた地床炉である。炉内及び周辺の床面に

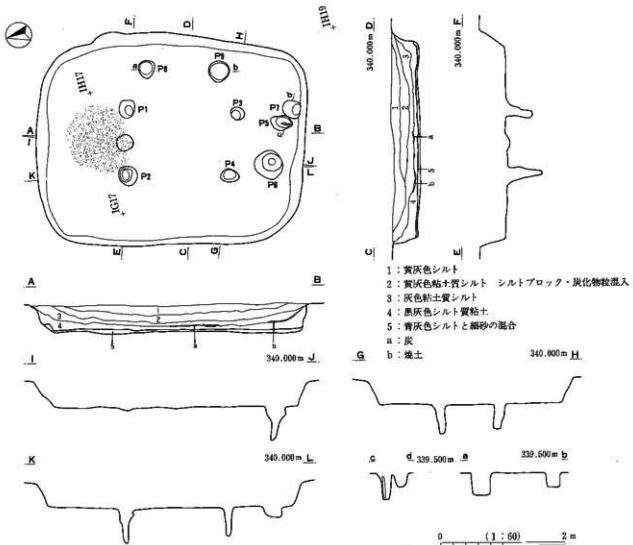


第76図 SB10実測図及び出土遺物分布図

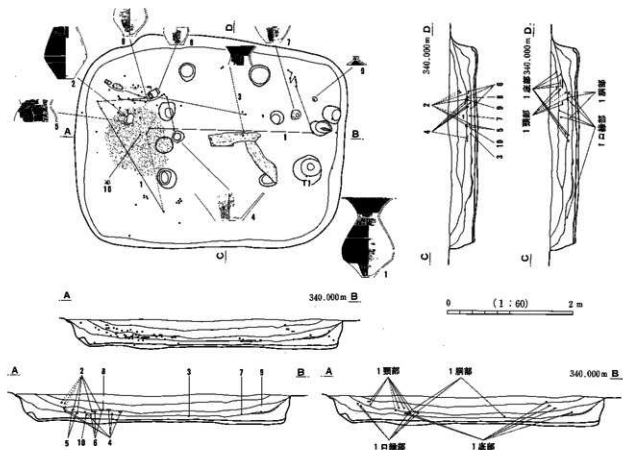
SB10



第77図 SB10出土土器実測図・拓影



第78図 SB11実測図



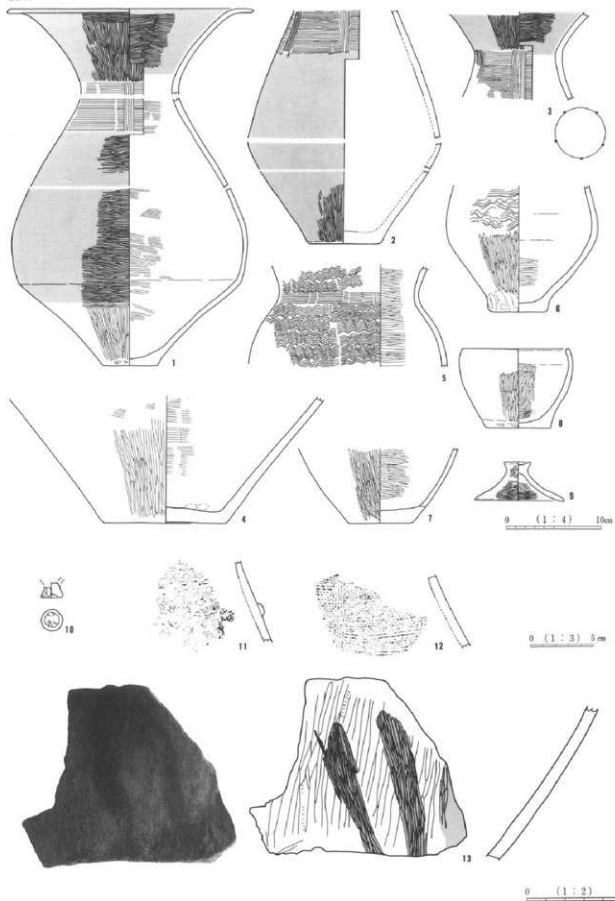
第79図 SB11出土遺物分布図

は厚い炭層の広がりが確認された。柱穴・ピット：ピットは床面から7基、床下から2基検出された。P₁~P₄が主柱穴となり、床面からの深さは55cmでいずれのピットも底面が先細りする断面形状であった。P₅・P₆は出入り口施設でありP₅には厚さ12cm、長さ43cmの板材（ヤマグワ）が直立して出土した。P₇は貯蔵穴で深さ18cmと浅い掘り込みであった。南東壁際には床下から径35cmと径20cm、深さ20cmの小ピットが検出されたが性格は不明である。遺物の出土状況：4層上面から多量の遺物が出土したほかは、各層とも少量の土器が散在していた。4層からは、1・2の壺や8の鉢など北東側を中心に多器種の土器破片があり、破片接合も4層内だけであった。このことから4層埋土は埋没過程での遺物一括廃棄行為と捉えられ、本址に直接かかわる遺物はない。13の壺破片はミガキ技法によって赤色塗彩された紋様が明瞭に観察された。

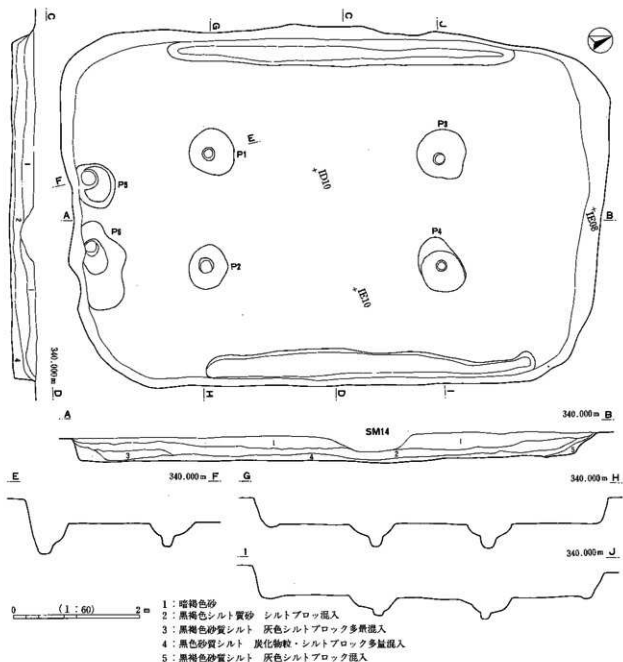
SB12 (IV区-Iグリッド) [第81~84図 PL8・32]

調査区はは中央西寄りに位置している。北西壁と南西壁の一部がSM14の周溝によって削られるが、遺構の全容は把握された。形状・規模：西南西-東北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランとなり、8.0×5.4mの大型の竪穴住居である。主軸方向はN-19°-E。埋土：下層（4層）は黒色粘土ブロックとシルトが混入する土質で本址廃棄直後の埋め戻し土となり、上層は砂を主体とした自然堆積層である。上層砂の堆積は厚く、洪水もしくは低地化した状況を示している。床面：黒褐色粘土と灰色シルト、砂を混合した貼り床で、全面ほぼ均一の厚みであった。炉：床面から焼土及び明確な炭は検出されなかった。北東側の主柱穴の間には壺（1・6）、高杯（10）、甕（18）の大形破片が床面に張り付いて出土しており、これ

SB11

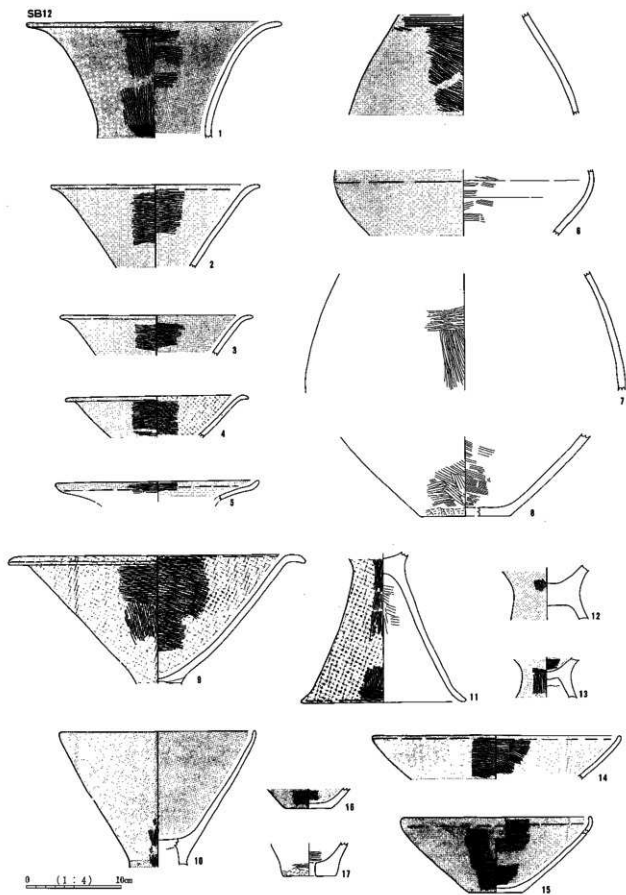


第80圖 SB11出土土器実測図・拓影・写真



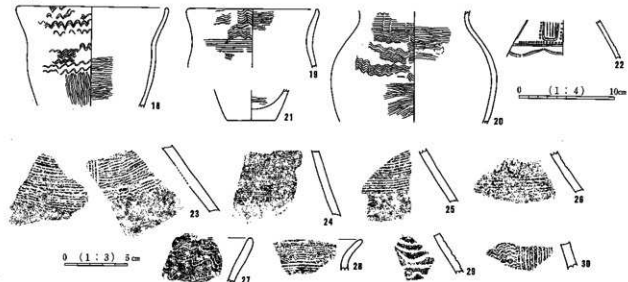
第81図 SB12実測図

らのいずれかが土器敷きであった可能性は強い。柱穴及びその他の施設：ピットは6基検出された。P₁～P₄が支柱穴で床面から35cmの深さで、P₅は出入り口施設のピットとなり42cmの深い掘り込みであった。P₆は貯蔵穴となる。北西と南東壁沿いには周溝がある。遺物の出土状況：上層からの出土はなく、全て下層（3層）以下の出土である。壺、高杯を主体とし比較的大形の土器片が多い。22の中期の壺は貼り床内から出土した。

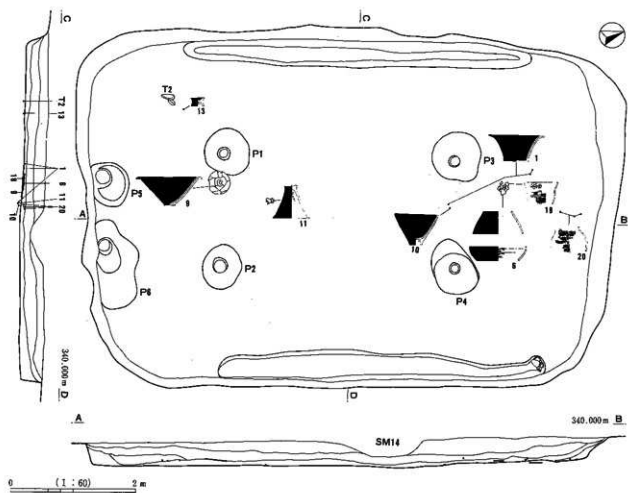


第82図 SB12出土土器実測図

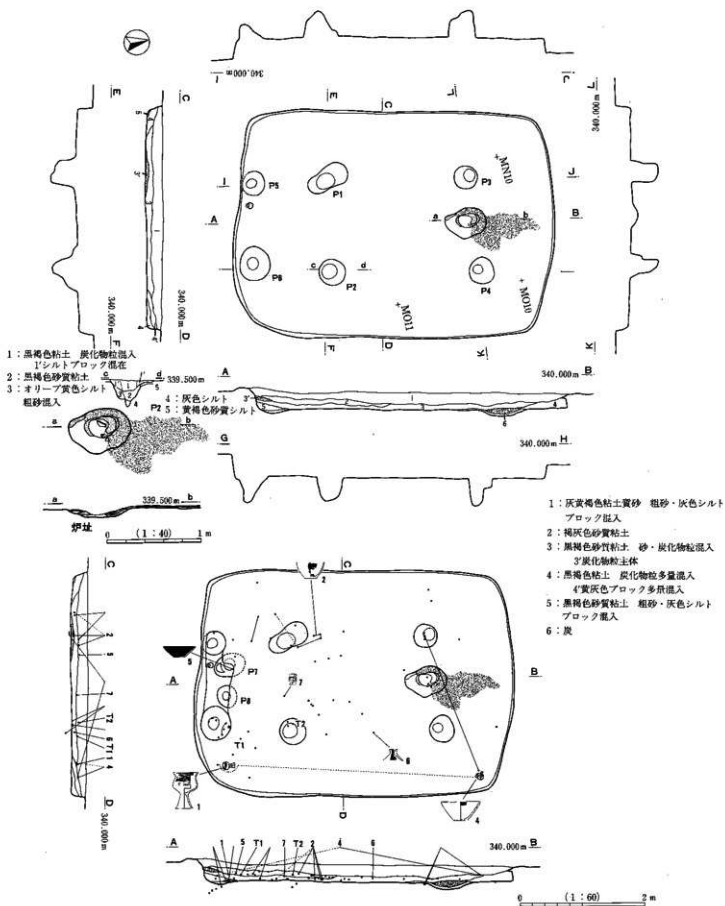
SB12



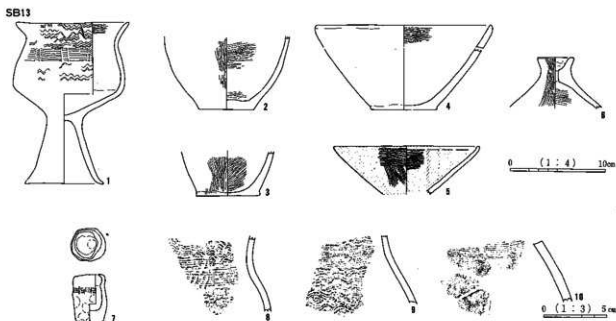
第83図 SB12出土土器実測図・拓影



第84図 SB12出土遺物分布図



第85図 SB13尖測図及び出土遺物分布図



第86図 SB13出土土器実測図・拓影

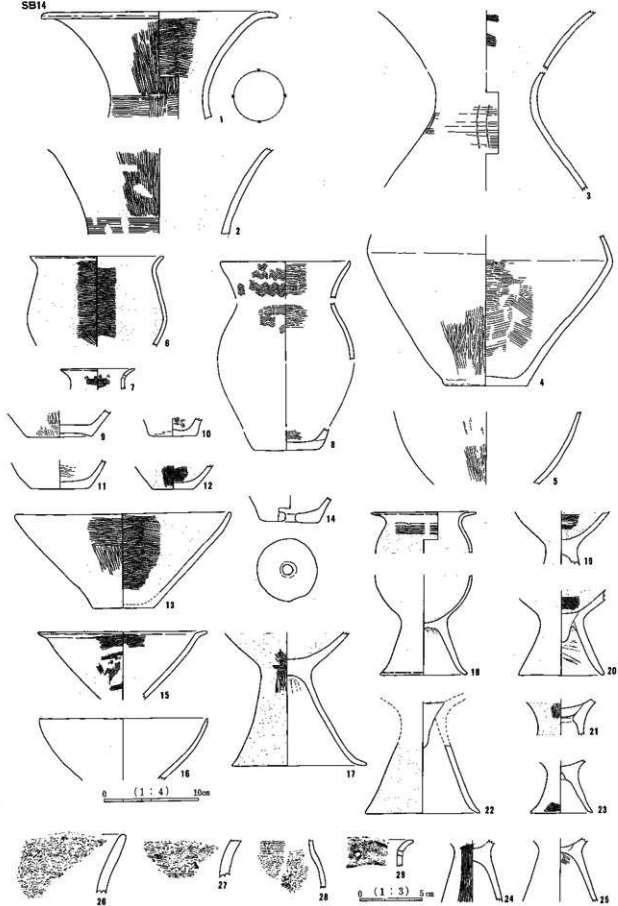
SB13 (IV-Mグリッド) [第85・86・263図 PL8-32-50]

調査区はほぼ中央に位置している。中期竪穴住居SB19の北東コーナーを壊し構築されている。形状・規模：南南西-北北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランを呈し、5.0×3.5mの規模をもつ中型の竪穴住居である。主軸方向はN-12°-E。埋土：一様に砂質分を多量に含んだ自然堆積層であり、上層(1層)は粗砂・細砂による一過性の堆積(洪水砂)となる。床面：黒褐色粘土と黄褐色シルト、砂を混ぜた貼り床である。厚さ10cm前後で全面に貼られ硬化が確認された。特に主柱穴周辺には少量の焼土と被熱硬化した床面が認められた。炉：主軸上の北側主柱穴の間に位置する。70×40cmの楕円形プランを呈し、床面から10cmほどの窪みとなる地床炉である。炉壁は硬化しドーナツ状に焼土が検出されたが、中央部炉床には炭もなく軟弱であった。炉から北壁付近まで不定形に広がる炭層が認められ、炉内からは数片の土器が出土した。柱穴・ピット：ピットは8基検出された。P₁~P₄が主柱穴となり、いずれも床面から45cmほどの掘り込みである。P₂では平面精密において柱痕が確認された。P₅・P₆はともに主柱穴と同じ深さとなるが住居内側から外部方向への傾斜した掘り込みであり、P₇・P₈はやや浅い掘り込みで外側から内部方向への掘り込みであった。P₅・P₆、P₇・P₈ともに出入り口部のピットであるが、前者が上層構造を支える柱穴、後者が出入り口施設(梯子等)の柱穴と判断される。P₅内からは、土器片や剥片とともにガラス小玉が1点出土した(第263図・巻首図版)。遺物の出土状況：少量の土器片が下層及び床面から散在して出土した。高脚の台付甕(1)、ミニチュア(7)など出土遺物は全て床面出土である。特殊遺物では鉄石製製の管玉未製品が埋土中から1点出土したが、SB19に関連する遺物と判断される。

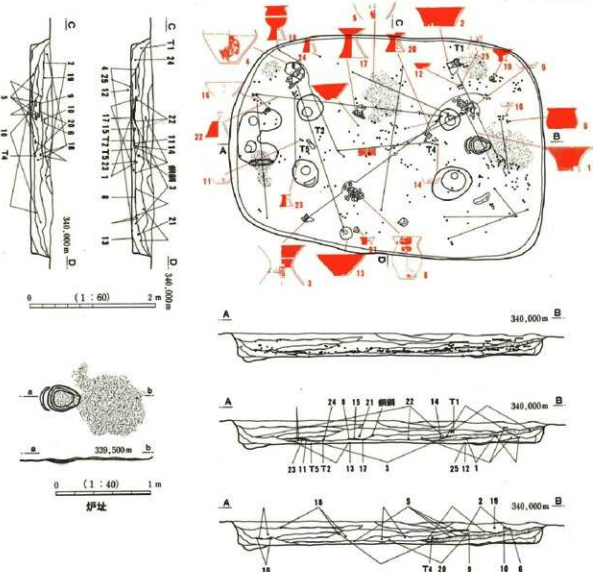
SB14 (IV-Mグリッド) [第87・88・89・262図 PL8-32]

調査区はほぼ中央に位置している。ほかの遺構との重複はない。形状・規模：南西-北東方向に長軸をとる南西短辺ラインがやや短い隅丸長方形のプランとなる。規模は4.8×3.4mの中型の竪穴住居であり、主軸方向はN-48°-E。埋土：炭化物粒を混入した粘土質の埋土を主体とし、粗砂とシルトブロックを含んだ

SB14



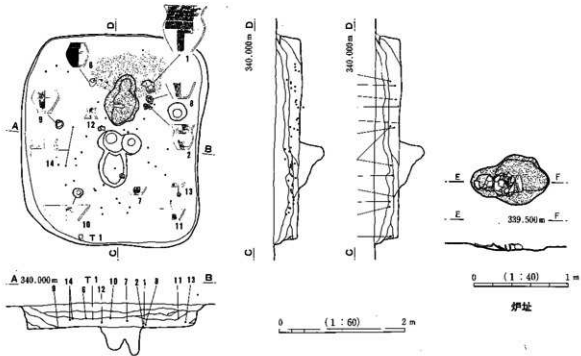
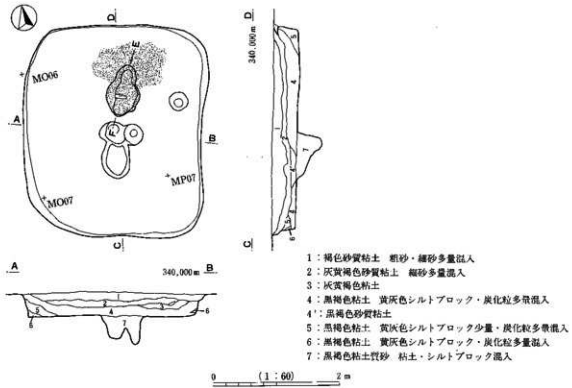
第88図 SB14出土土器実測図・拓影



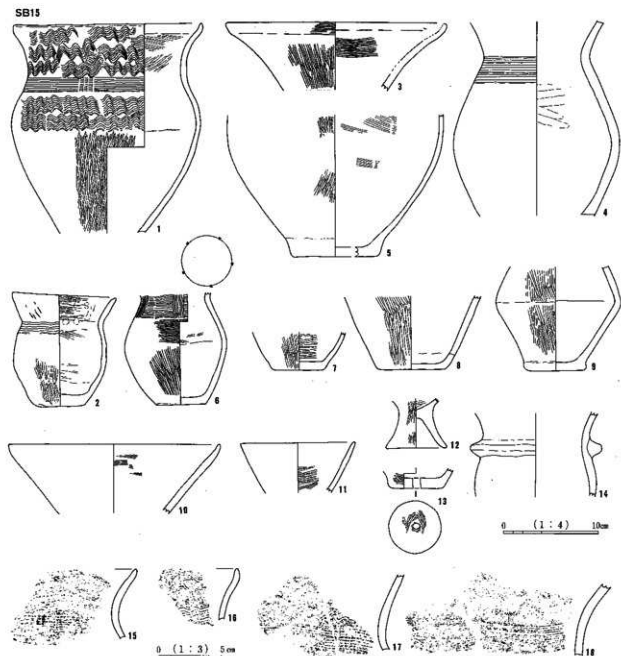
第89図 SB14出土遺物分布図及び炉実測図

SB15 (IV区-Mグリッド) [第90・91図 PL9-33]

調査区はほぼ中央に位置している。ほかの遺構との重複はない。形状・規模：南南西-北北東方向に長軸をとる隅丸方形プランを呈し、 $3.3 \times 2.7\text{m}$ の規模をもつ小型の竪穴住居である。主軸方向はN-8°-E。埋土：粗砂・細砂を主体とする上層の自然堆積層(1・2層)と炭化物粒・炭ブロックを多量に混入する人為的な埋め戻し層(4・5層)からなる。床面：黒褐色粘土と黄灰色シルトを混合した貼り床である。掘り方は中央部が浅く、壁際が深い構造である。炉：主軸上の中央北壁寄りに位置する。 $80 \times 34\text{cm}$ の不正楕円形を呈し、床面から10cmほどの窪みとなる地床炉である。炉内には長さ約20cmの敲き石が緑石として置かれ、緑石に横たわる状態で壺が出土した。また焼土を混入した炭層が炉内及び北壁付近に広がる。柱穴及びその他の施設：住居中央部に深さ40cmのビットを2基検出した。埋土は砂質の黒褐色粘土に砂のブロックが混在する埋め戻し土で、柱穴と捉えられる。遺物の出土状況：2層下部から下層・床面にかけて土器・石器が出土し、略丸形となる土器が炉周辺にまとまっていた。出土遺物の大半は本址に関わる1次廃棄の所産である。



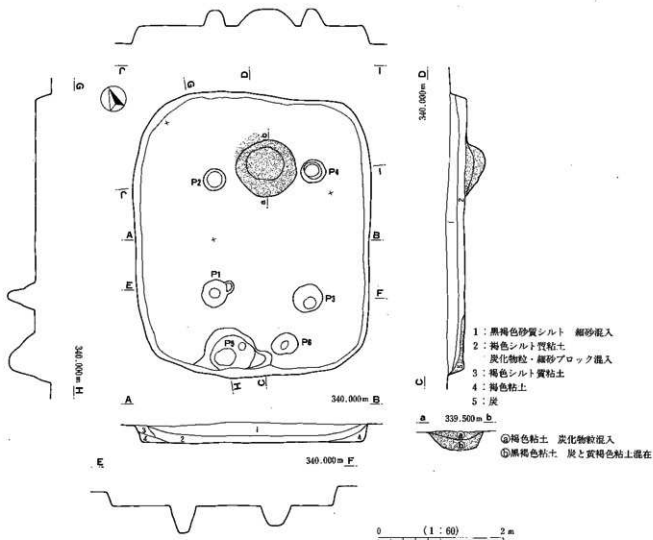
第90図 SB15実測図及び出土遺物分布図



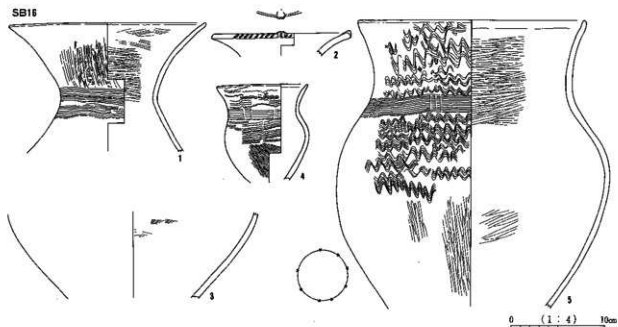
第91図 SB15出土土器実測図・拓影

SB16 (IV区-Mグリッド) [第92~95・262図 PL9・33]

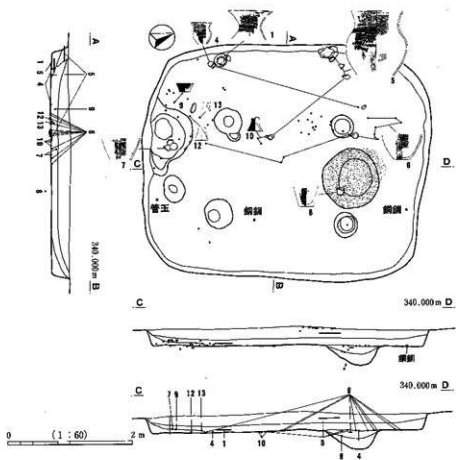
調査区はほぼ中央に位置している。ほかの遺構との重複はない。形状・規模：南南西-北北東方向に長軸をとる隅丸方形プランを呈し、4.3×3.5mの規模をもつ中型の竪穴住居である。主軸方向はN-21°-E。埋土：上層(1層)はシルト質砂で洪水性の堆積層、下層(2~4層)は細砂ブロックを含んだ埋め戻し土である。南西壁から床面にかけて厚い炭(5層)が堆積し遺構廃棄直後の人為的な行為と認められ、複数の遺物が供伴している。床面：黒褐色粘土と黄灰色シルトを混合した貼り床で、壁縁辺に薄く中央部に厚く貼られている。掘り方は中央がやや深く、壁付近は平坦で凹凸の著しい形態であった。炉：主軸上の北側支柱穴の間に位置する。100×90cmの楕円形プランを呈し、床面から約30cmの深い窪みとなる地床炉である。炉内埋土は炭化物粒を混入した褐灰色から黒褐色粘土で、本址廃棄段階に掘削し埋め戻した状況と捉



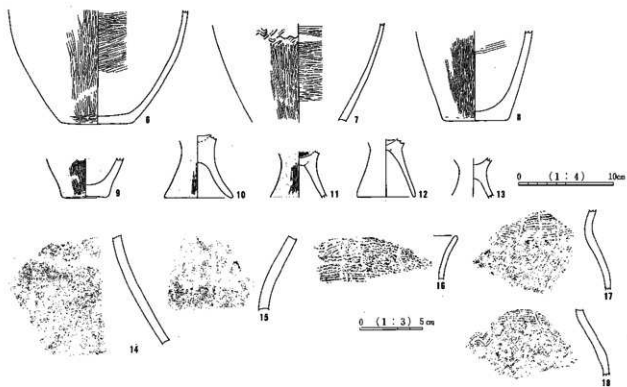
第92図 SB16実測図



第93図 SB16出土土器実測図

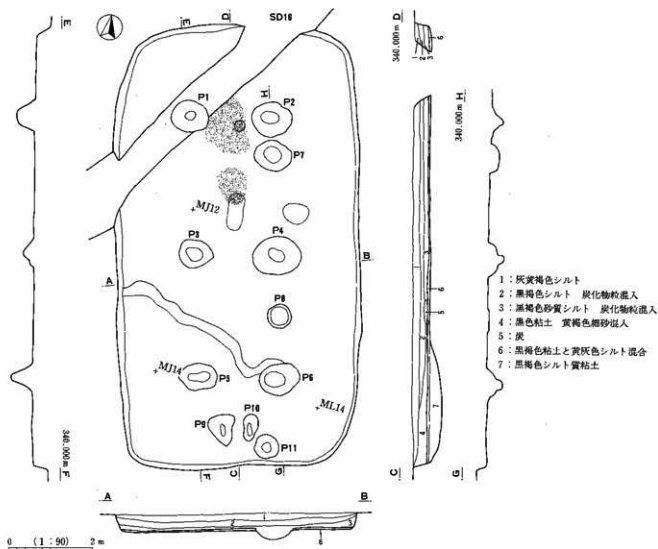


第94図 SB16出土遺物分布図

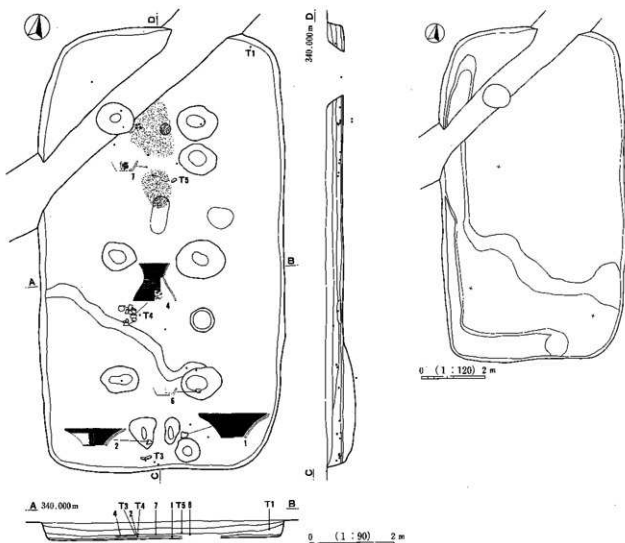


第95図 SB16出土土器実測図・拓影

えられる。焼土は炉の北側に少量認められた。炉の上層から甕底部(4)が出土し、出入り口付近出土の土器片と接合した。柱穴・ピット：ピットは6基検出された。P₁~P₄が主柱穴となり、床面からの深さはP₁が43cm、P₂~P₄は35cmほどである。P₅からは柱材の一部と思われる木片が出土した。P₅・P₆は出入り口施設もしくは貯蔵穴であるが、両ピットとも床面から40cmの深さがありP₅は径70cmの大形ピットとなる。P₅からは円礫が4点と複数の土器片が出土した。遺物出土状況：上層から数点の土器片が出土したほかは全て床面ないしは下層下部と炭層(5層)からの出土である。特殊遺物では、床面から銅鋼破片が2点(第262図2・5)と管玉破片が1点ある。銅鋼破片はいずれも扁平に延びた形状で内1片には1条の極が深く彫り込まれている。



第96図 SB17実測図

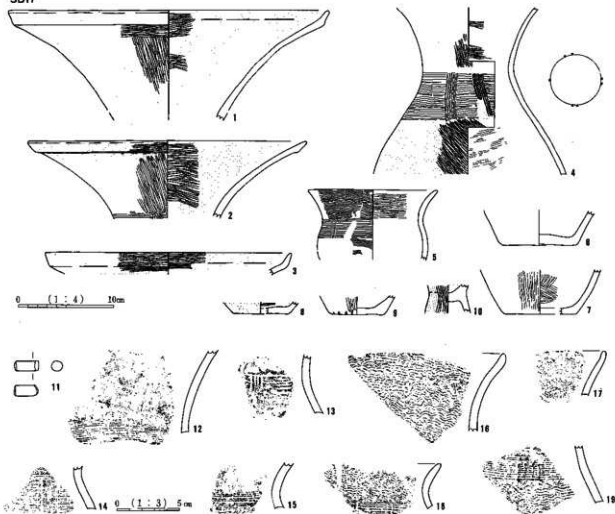


第97図 SB17出土遺物分布図及び掘り方実測図

SB17 (IV区-Mグリッド) [第96・97・98図 PL10・33・50]

調査区はほぼ中央に位置している。後期の溝址SD16に北西側の壁と床面の一部を被される。形状・規模：北北西-南南東に長軸をとる隅丸長方形プランを呈し、10.6×5.6mの規模をもつ本遺跡では最大の堅穴住居である。主軸方向はN-13°-W。煙土：粗砂・細砂を含んだ自然堆積層である。床面：黒褐色粘土と黄灰色シルトを混合した貼り床で、掘り方は南側1/4が深く、南東コーナーから北西コーナー付近まで平面「L」字形の溝が掘り込まれていた。炉：中央北側寄り3か所に焼土と炭層の広がりが検出された。いずれも掘り込みがなく恒常的な炉施設とは考えがたい。F₁・F₂は主軸上に位置し、F₁の炭層は密度が濃く、F₂は薄い炭層に被熱で硬化した床面と焼土がある。F₃は東寄りとなるが、焼土のみであった。この3者は配置から同時使用も可能となり、炭の残存状況の違いから使用法(使用目的)の差とみなされる。柱穴・ピット：ピットは11基検出された。主柱穴はP₁~P₆の6基で、ほぼ長方形の配列を示す。床面からの深さはP₃が30cmと浅く他は40~50cmである。P₇も主柱穴と同一規模であり補助柱穴の可能性がある。P₉・P₁₀は出入り口施設のピットで、主軸方向に細長い楕円形のプランを呈し中央方向に傾斜した掘り込みとなる。P₁₁は貯蔵穴である。遺物の出土状況：下層から床面にかけて土器・石器が出土した。平面分布では出入り口ピット周辺、P₃とP₅の間、炉F₁・F₂に遺物のまとまりがある。土器

SB17

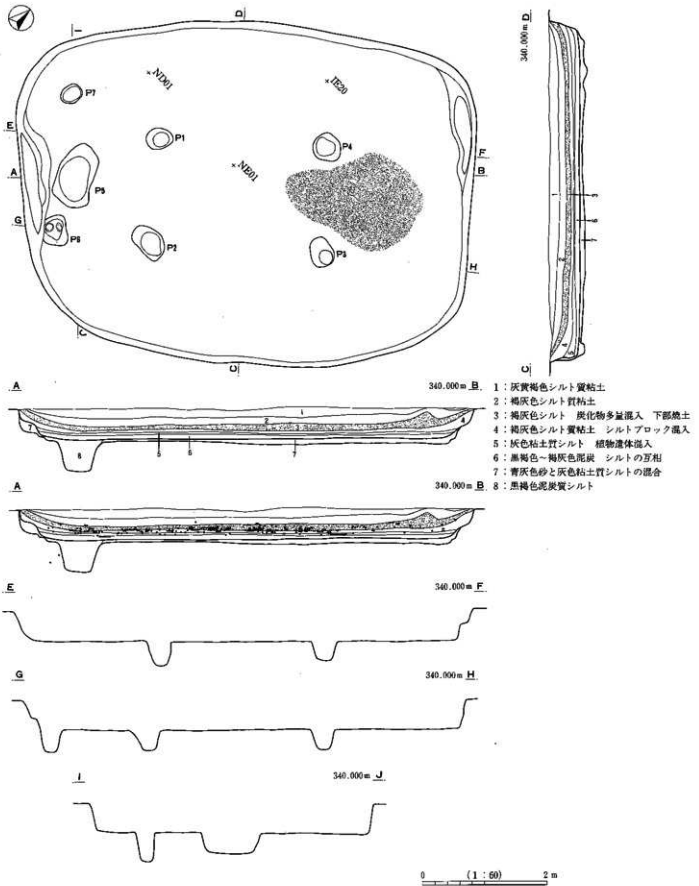


第98図 SB17出土土器実測図・拓影

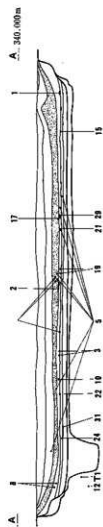
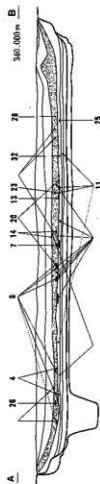
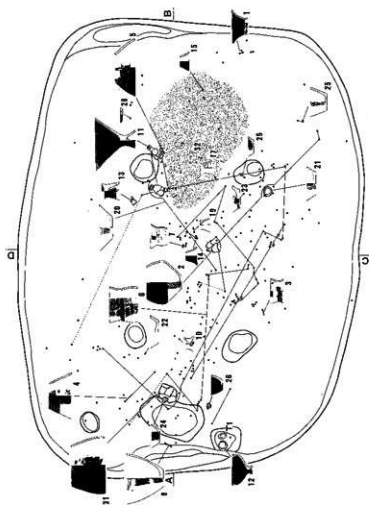
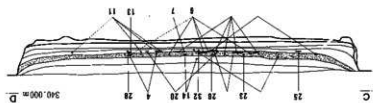
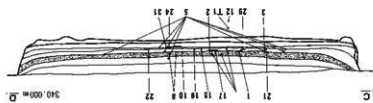
はいずれも破片資料で器形の把握されるものはない。特殊遺物では北西コーナー付近の上層から緑色凝灰岩製の管玉1点が出土したが、上層検出面の周溝墓に関連する遺物とされる。

SB18 (IV区-I・Nグリッド) [第99~102図 PL10-20-33]

調査区はほぼ中央に位置している。上部にSD22とSM09があるが、検出面が異なり直接の重複関係はもたない。形状・規模：南西-北東方向に長軸をとる隅丸長方形プランを呈し、7.0×5.2mの規模をもつ比較的大型の竪穴住居である。主軸方向はN-49°-E。埋土：自然堆積層と人為的な埋め戻し層からなる。床面直上はほぼ均一の泥炭層(6層)で覆われ、本址廃棄後に冠水低地化したことを示す。泥炭層上層は砂質のシルトによる自然堆積層(4・5層)となり、この上面に土器を伴った焼土と炭層の人為的な埋土がある(3層)。更にこの上面を自然堆積層(1・2層)が覆っている。床面：灰色粘土、緑青灰色シルトと砂を混合した貼り床であり、ほぼ全面で確認された。掘り方は埋層が深く、中央部が浅いマウンド状の形態であった。炉：主軸上の北東奥壁側の主柱穴間に位置する。床面からの掘り込みはなく厚さ約3cmの炭層

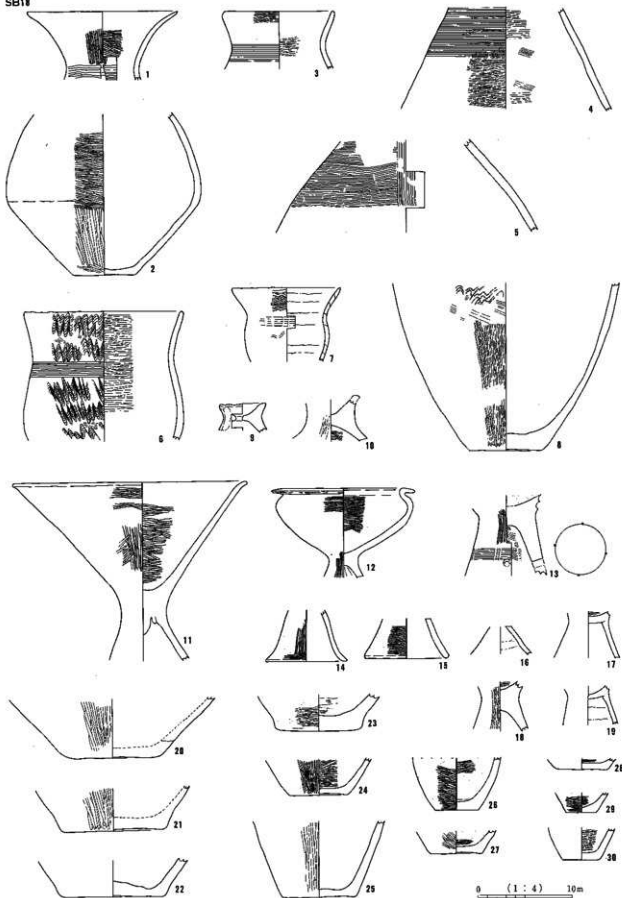


第99図 SB18実測図



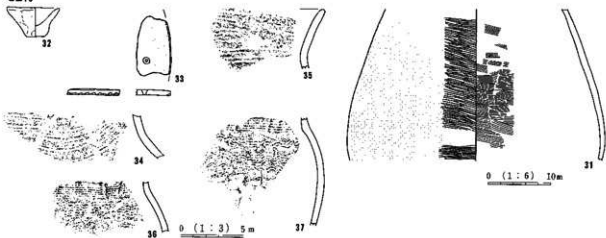
第1000圖 SBI18出土遺物分布図

SB18

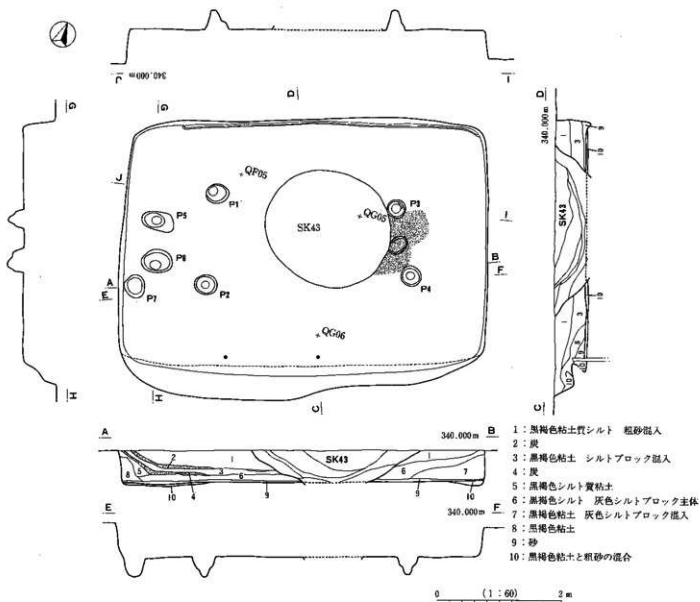


第101圖 SB18出土七器實測圖

SB18



第1022図 SB18出土土器実測図・拓影

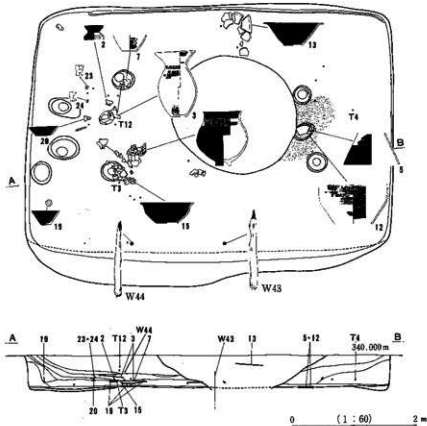


第1033図 SB20実測図

が平面規模2.2×1.6mの楕円形状で検出された。柱穴及びその他の施設：ピットは7基検出された。主柱穴はP₁~P₄で長方形の配列となり、床面から40cm前後の掘り込みとなる。P₃は出入り口施設、P₅は貯蔵穴であり、P₅内から甕(8)、P₅内から高杯(12)が出土した。本址にはピットの他に出入り口側の壁と奥壁の2カ所に床面から約30cmの高さをもつテラス状の高まりが検出された。断面は紡錘形状であり、地山である砂層にシルトを張り固めている。遺物の出土状況：下層から床面にかけて少量の遺物が出土し、他は全て焼土と炭化粒をともなった3層内からの出土である。本址廃棄に伴う土器はピット出土の他に壺(31)・甕(24)などと、泥炭層内からの木製農具膝柄が1点があるのみで、大半の遺物は遺構廃絶後の2次堆積一括廃棄土器として捉えられる。

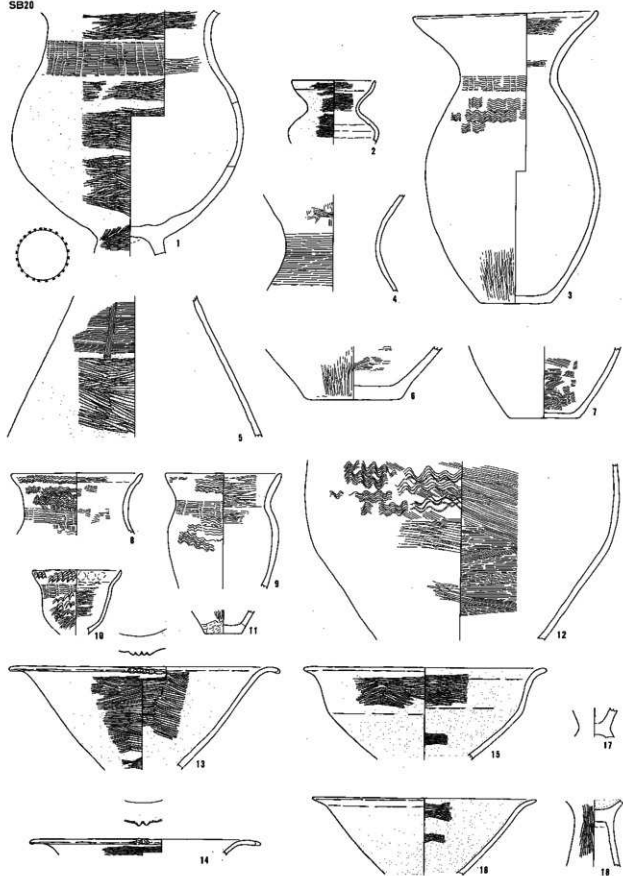
SB20 (IV-Qグリッド) [第103~106図 PL11-33-34-50]

調査区はほぼ中央西寄りに位置している。井戸址SK43によって中央部床面及び埋土を欠き、北側の壁は崩落が著しく外湾形状となる。形状・規模：北側壁の一部が外にやや突出するが、東北東-西南西方向に長軸をとる隅丸長方形のプランを呈し、5.7×4.0mの規模をもつ中型の竪穴住居である。主軸方向はN-71°-E。埋土：SK43の構築及び埋没によって、中央部埋土が土坑内にずれ込んでいる状況があり土質がグライ化変色する影響も見られたが、一様に炭化物粒とシルトブロックを含んだ粘土で、埋め戻し埋土である。下層(6・7層)と中層(3層)の間層及び中層上部に炭層があり、埋没過程に違いが確認された。床面：黒褐色粘土と粗砂を混合した貼り床(10層)で、数センチの厚みで全面が貼られていた。炉：主軸上の東奥壁側の主柱穴間に位置する。30×25cmの楕円形プランで床面から8cmほど掘り窪めた地床炉であ



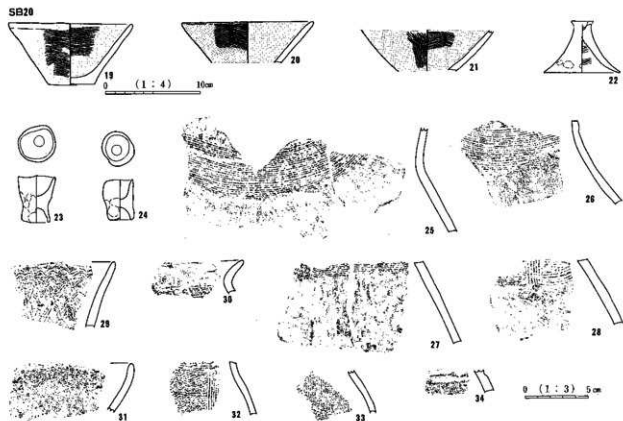
第104図 SB20出土遺物分布図

SB20



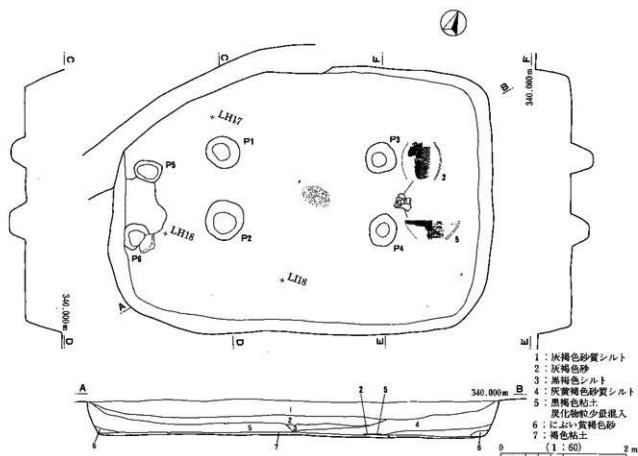
0 (1:4) 10cm

第105図 SB20出土土器実測図



第106図 SB20出土土器実測図・拓影

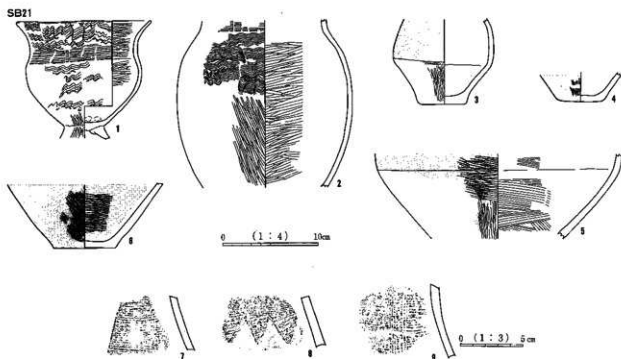
る。炉内には壺(12)と甕(5)の胴部大形破片が炭層と共に出土し、炉施設となる(土器敷き炉)。柱穴・ピット及びその他の施設：ピットは7基検出された。P₁~P₄が主柱穴となり、床面から35~40cmほどの深さである。主柱穴の配列は奥壁側のピットP₃・P₄の位置が中央寄りで並列せず台形状を呈す。P₂・P₅は入口施設の柱穴で、主軸方向にやや長い楕円形状プランとなる。P₁は貯蔵穴である。これらのピットの他に明瞭な掘り方は確認されなかったが北側壁沿いに2本の杭が検出された。2本とも壁に平行する位置にあり、床面上に突出した杭の上部は粗砂とシルトの混在した壁崩落の埋土で覆われていた。北側上面プランの歪みと照らすとこの杭が土留めとしての機能がかった可能性が強い。杭は2本とも丸木材で先端部は欠損するものの決りの加工が施された部材転用杭であった。樹種はイヌガヤとカヤである(付録参照)。また南側壁沿いには幅10cm、深さ5~8cmの周溝が検出された。遺物の出土状況：埋土中層(3層)の上下に堆積した炭層から壺・鉢など器形の確認できる個体がまとめて出土した。3層下面には出入り口部の主柱穴周辺に遺物が集中し、ミニチュア2個体(23・24)が並ぶように残されていた。この3層下面から6層が本址廃棄にかかわる遺物(1・2・4~12・15・17・19~24)と捉えられる。土器には台付き壺(1)や頸部に簾状文、胴部に波状文を施した壺(3)などがあり、本地域で類例の少ない出土資料となる。



第107図 SB21実測図及び出土遺物分布図

SB21 (IV-Lグリッド) [第107・108図 PL11・34]

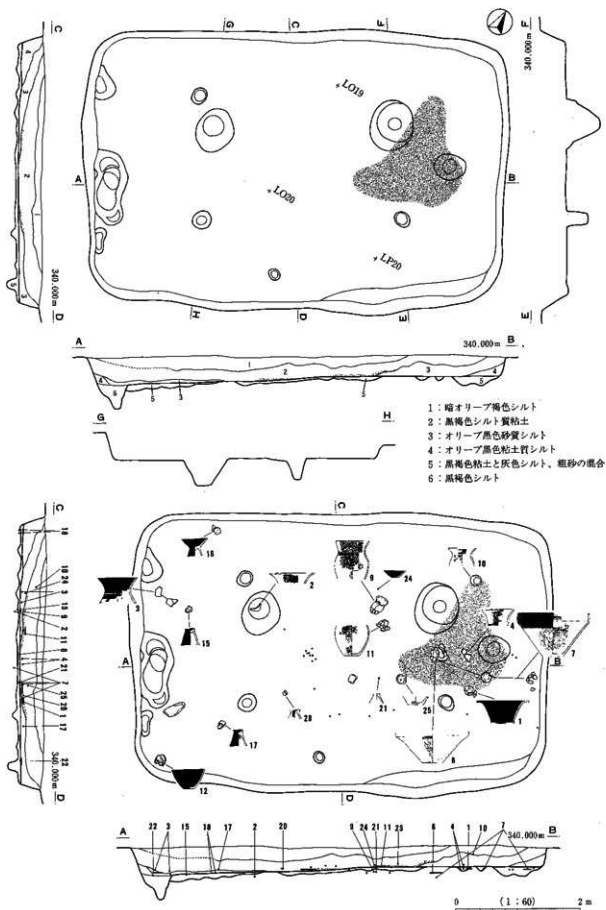
調査区は中央西寄りに位置している。他の遺構との重複はない。西コーナーが調査区外となるため未調査となるが、遺構の全容は把握された。形状・規模：東北東-西南西方向に長軸をとる隅丸長方形のプランとなり、5.6×4.0mの規模をもつ中型の竪穴住居である。主軸方向はN-70°-E。埋土：一様に砂質分を多量に含んだ自然堆積層であるが、最下層（5層）は炭化物粒を少量含んだ埋め戻し埋土として捉えられる。本址は埋土内から炭化粒子がほとんど検出されず、後期竪穴住居埋土としては稀である。床面：褐色粘土と砂を混合した貼り床（7層）で、約4cmの厚みで全面が張られていた。炉：中央部と奥壁側支柱穴の中間部の2カ所で炉の痕跡となる状況を検出したが、両者とも常設機能した可能性は薄い。住居中央には55×30cmの楕円形範囲に広がる炭層があり、奥壁側の支柱穴間には床面に壺（5）と甕（2）の大形破片が張り付いた状況で残されたが、炭及び焼土は確認されていない。柱穴・ピット：ピットは6基検出され、P₁~P₄が支柱穴となる。支柱穴はいずれも床面から25~30cmの浅い掘り込みであった。P₅・P₆は出入口施設の柱穴で、P₅脇からは大形の平石が出土した。遺物の出土状況：極めて少量の土器片と礫が1層と床面から散在して出土した。器形が確認できる1（甕）は上層出土で、他は全て床面上の土器である。



第108図 SB21出土土器実測図・拓影

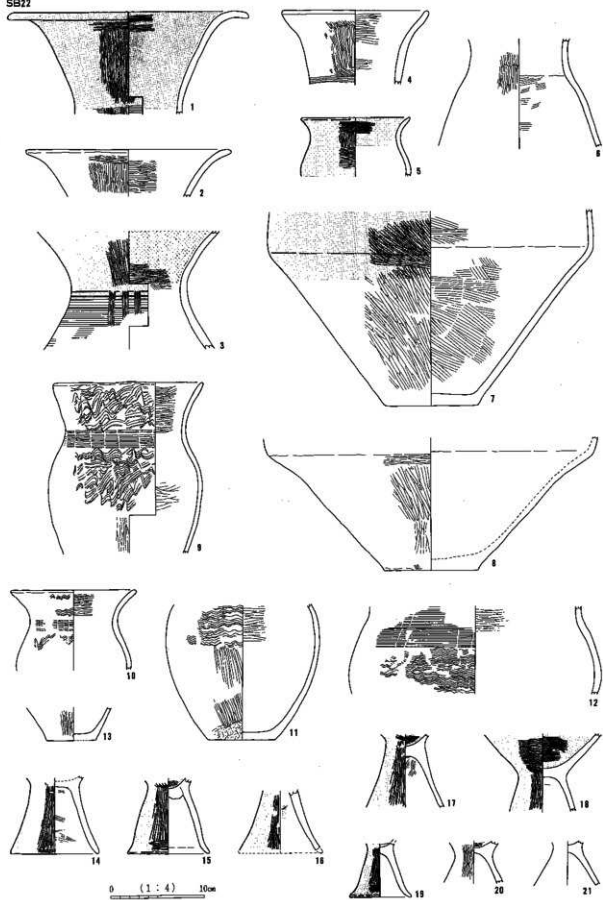
SB22 (IV区-L・Qグリッド) [第109・110・111図 PL12-34]

調査区はほぼ中央西寄りに位置している。他の遺構との重複はない。形状・規模：東西方向に長軸をとる隅丸長方形のプランとなり、6.4×4.2mの規模をもつ中型の竪穴住居である。主軸方向はN-58°-E。埋土：下層（3・4層）は黒色粘土ブロックとシルトブロックが混入する土質で壁周辺に堆積し、この下層上面と中央床面を覆う状態で炭層の広がりが確認された。中層（2層）は炭層上面から炭化物粒を多量に混入したシルトで、更にその上層（1層）に砂質シルトが堆積していた。下層は埋め戻しもしくは本址廃棄直後の崩落であり、炭層は廃棄もしくは埋没過程での遺構使用の痕跡となり2層はその埋め戻し埋土、上層は自然堆積層として捉えられる。床面：黒褐色粘土と灰色シルト、砂を混合した貼り床で（5層）、全面で確認された。掘り方は壁側がやや深く中央部がマウンド状となり、底面は凹凸の著しい形態である。炉：主軸上の奥壁側主柱穴の間に位置する。床面からの掘り込みは7cm程度と不明瞭で、壺の土器片（8）を用いた土器敷き炉である。炉周辺には炭層が奥壁にかけて広がり、数点の土器が散在していたが、焼土は確認されない。柱穴・ピット：ピットは10基検出された。P₁~P₆が主柱穴となり、床面から40cmの深さであった。北側柱穴（P₁・P₆）は床平面の掘り方が広く、柱が抜かれた可能性があり、P₁内上部からは壺の破片（2）が出土した。P₆は棟持柱穴、P₆は出入り口施設となる。P₇・P₈は壁沿いに位置し床面から15cm程度の深さであったが、性格は不明である。遺物の出土状況：遺物は全て床面付近からの出土で、壁周囲と住居中央部に分布集中している。壁周囲は4層、中央部が2層下面の炭層出土で、それぞれ埋没過程が異なるが土器破片が接合した。両層の時間差はなく埋土内の遺物は全て本址廃棄に伴うと判断した。特殊遺物として緑色凝灰岩製の管玉が上層から出土した。

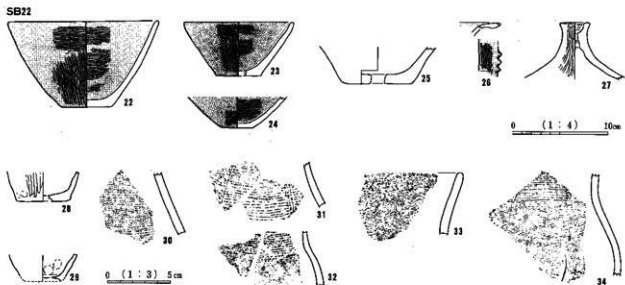


第109図 SB22実測図及び出土遺物分布図

SB22



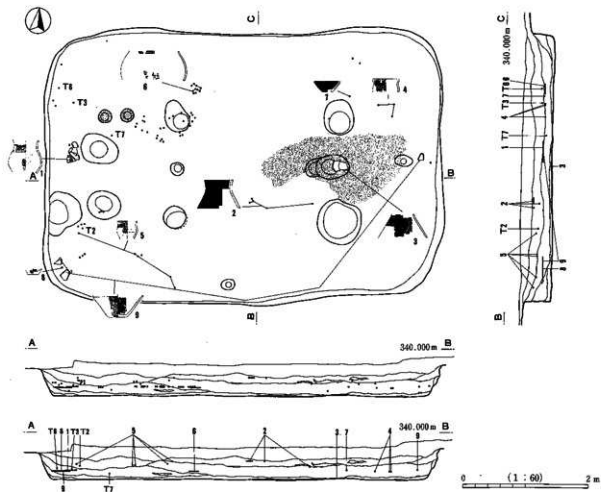
第110圖 SB22出土石器實測圖



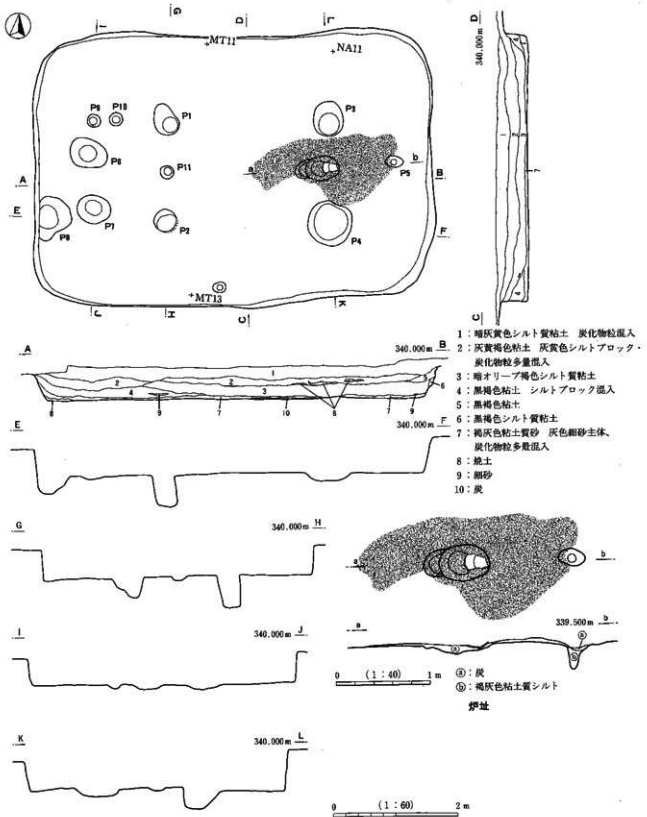
第111図 SB22出土土器実測図・拓影

SB23 (IV区-M・Nグリッド) [第112・113・114図 PL11]

調査区中央に位置している。他の遺構との重複はない。形状・規模：東西方向に長軸をとる隅丸長方形のプランを呈し、6.2×4.3mの中型の竪穴住居である。主軸方向はN-85°-E。埋土：床面は4cmほどの砂

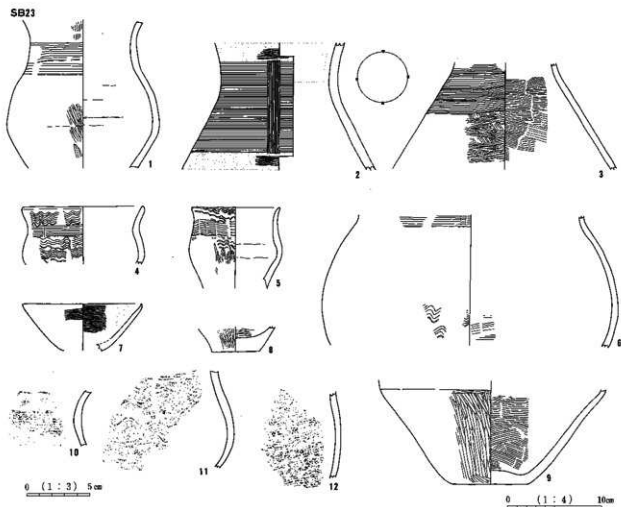


第112図 SB23出土遺物分布図



第113図 SB23実測図

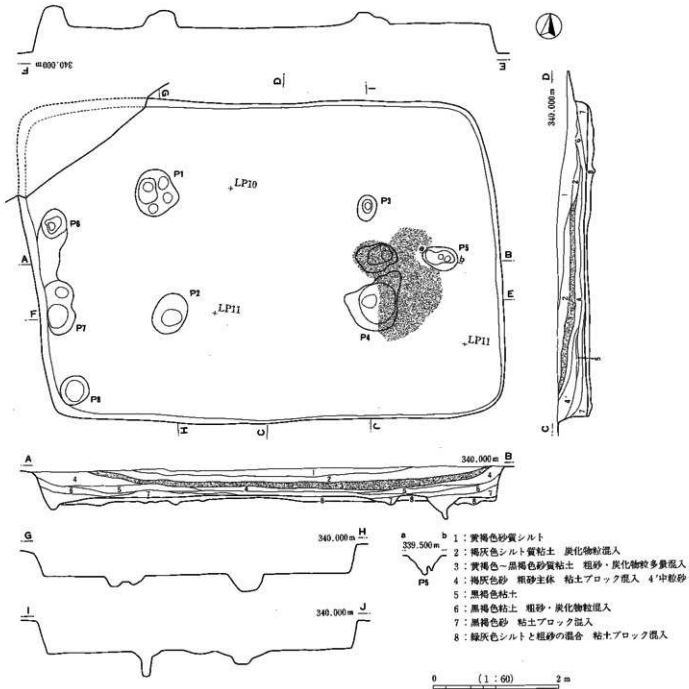
層によってほぼ均一に覆われ(7層)、その上に2度の埋め戻し層(2・3層)が確認された。砂層直上の3層は炭化物粒とシルトブロックに細砂が混合した土質で、複数の遺物が出土した。2層下面には焼土と炭化物のブロックが広がり、3層上で火を使用した痕跡とみなされる。床面：黒褐色粘土と黄褐色シルト、砂を混合した貼り床である。貼り床は主柱穴間を中心に5~10cmの厚みでほぼ均一に貼られていたが、壁際と南東コーナー周囲は砂を床としていた。炉：主軸上の奥壁側主柱穴の中間に位置する。70×40cmの楕円形のプランで床を僅かに掘り窪めた地床炉である。炉内及び周辺の床面には厚い炭層が広がり、炉の中心部には被熱を受けた壺胴部破片(3)が出土した(土器敷き炉)。炭層の広がり炉周辺と北西コーナー付近に認められた。柱穴・ピット：ピットは11基検出された。P₁~P₄が主柱穴となり、床面からの深さはP₂が50cm、P₁・P₃が30cm程度で、P₄は18cmと浅い掘り込みであった。P₅は棟持柱穴の位置にあたるが炉から広がる炭層がピット内に厚く堆積し、用途は不明である。P₆・P₇は出入り口施設となるが、柱穴同様に浅い掘り込みであった。P₈は貯蔵穴である。P₉~P₁₁は同一形態の小ピットであり底面には炭層が詰まっていた。遺物の出土状況：2層から僅かの土器(2)が出土した以外、床面及び下層から少量の土器(1・3~12)が散在して出土した。2層内出土の壺(2)は埋没後に本址の窪みを使用した廃棄とみなされるが、下層遺物との時間差は微妙である。



第114図 SB23出土土器実測図・拓影

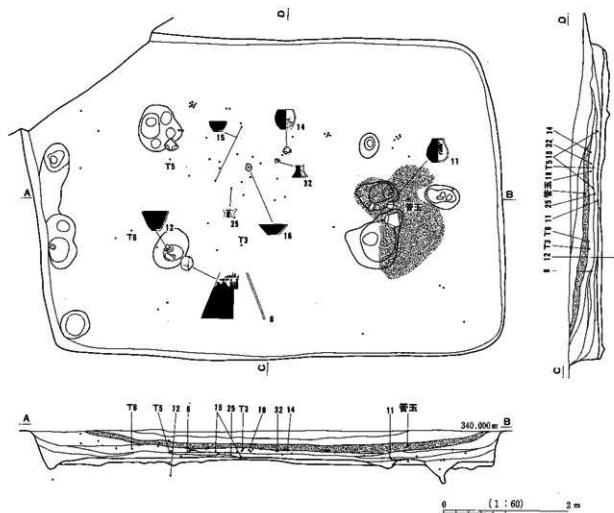
SB24 (IV区-Lグリッド) [第115~118図 PL12-34]

調査区中央西寄りに位置している。北西コーナーが調査区外のため未調査となり、西壁の一部がSK70によって削られるが、遺構の全容は把握された。形状・規模：東西方向に長軸をとる隅丸長方形のプランを呈し、主軸方向はN-83°-Eで7.2×4.9mの大形の竪穴住居である。埋土：一様に砂質の自然堆積層であり、1次堆積となる床面も部分的に粗砂で覆われ(7層)ていた。また間層を挟んだ4層にも粗砂の厚い



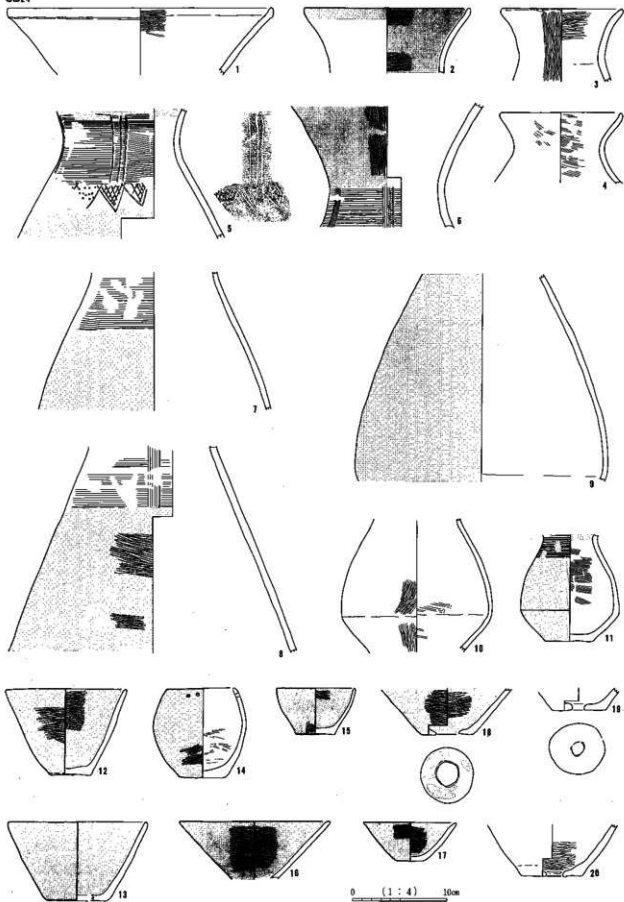
第115図 SB24実測図

堆積が認められ、一時期に砂層が流入した状況であった。この砂層上下の中層（3・5層）は、炭化物粒と粘土ブロック・粗砂が混合する埋め戻し土となり多量の遺物が出土した。床面：粗砂に灰色シルトを混合した貼り床（8層）である。砂層面までの掘り方は凹凸が著しく、壁側縁辺部が深く中央部が浅い状況であった。炉：主軸上の奥壁側主柱穴の中間に位置する。径25cmの円形プランで、床面から約15cmの深さに掘り窪めた地床炉である。炉内からは炭に混じって3個の円礫と西脇には大形平石が出土し、緑石として利用されたものである。床面の炭層は奥壁のピット（P₃）にかけて広がっていた。柱穴・ピット：ピットは8基検出され、P₁～P₈が主柱穴となる。P₃は床面から45cmの深さとなるが他は20cmと浅い。P₁・P₂底面には不整形の小ピットがあり、柱穴内埋土が砂質であったことから本址廃棄時には柱が抜き取られていたものと判断される。P₂からは完存する鉢（12）が出土した。P₃は棟持柱穴となり中央から壁側に傾斜した掘り込みであった。P₆・P₇が入り口施設、P₈が貯蔵穴となる。遺物の出土状況：床面～下層、3.5層から遺物が出土した。このうち3層出土が最も多く、礫も多数混在していたが中期土器（47・48）も混入するなど明らかな埋め戻し土であった。3層内遺物は2次堆積上に投棄されたもので5層以下が本址廃棄に関係する。確実に下層出土となる土器は壺（5・11）、鉢（12・15・17）などである。また特殊遺物として3層内から鉄石英製の管玉の未製品破片が出土した。

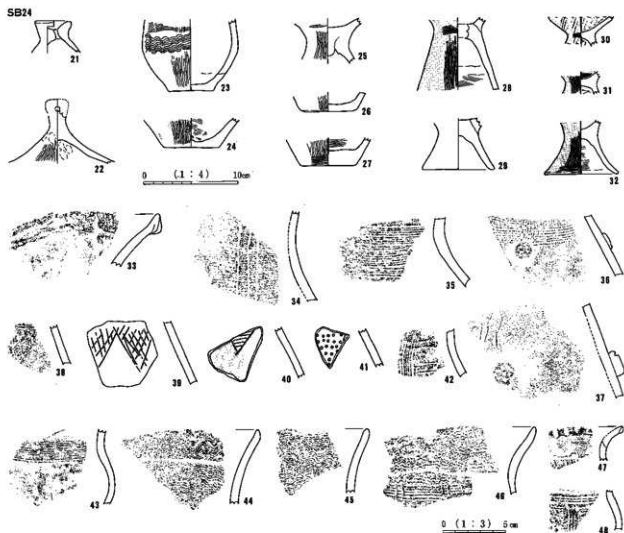


第116図 SB24出土遺物分布図

SB24



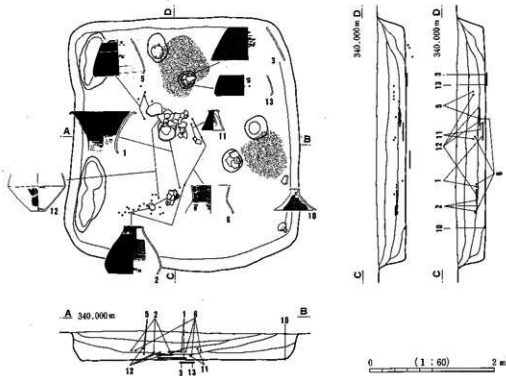
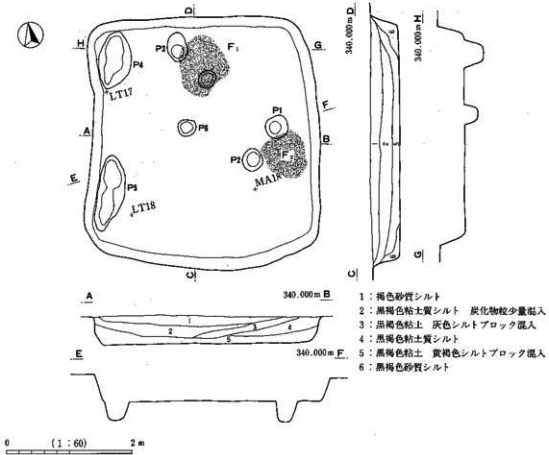
第117圖 SB24出土土器実測図



第118図 SB24出土土器実測図・拓影

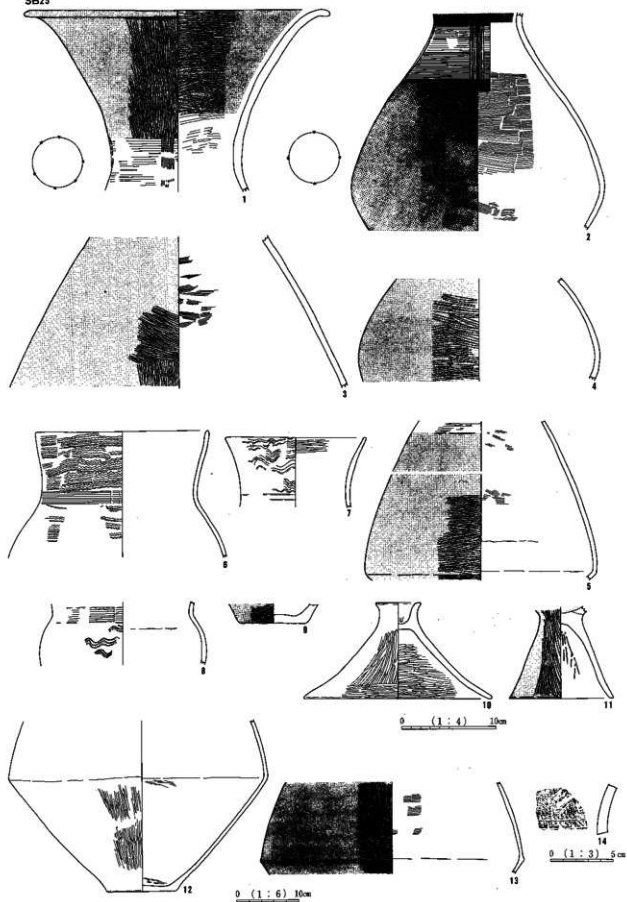
SB25 (IV区-L・Mグリッド) [第119・120図 PL12-35]

調査区ほぼ中央に位置している。ほかの遺構と重複はない。形状・規模：南北軸が僅かに長い隅丸方形のプランとなり、規模3.7×3.5mの小型の竪穴住居である。主軸方向はN-11°-E。埋土：砂質シルトを含む上層自然堆積（1・2層）と黒褐色粘土にシルトブロックが混入した埋め戻し土（5層）からなる。両者の間層には薄い炭層が残る部分もある。床面：平坦に掘り込んだ砂層面を床とし、軟弱であった。炉：北壁と東壁付近の床面2箇所に炭層の広がりが見出された。炉F₁は主軸上北側奥壁寄りに位置し、径28cmの円形プランとなる。床面から約10cmの深さに掘り窪めた地床炉で、炉内からは2個体の壺頸部破片（3・13）が炭とともに出土した（土器敷き炉）。炉F₂は東壁寄りに位置し、径30cmの円形プランをもつ地床炉であり、F₁同様に甕の小破片が出土した。F₂内の炭はまばらでF₁が主炉として機能したと判断される。柱穴・ピット：ピットは5基検出された。P₁・P₂は炉に隣接した奥壁近くにあり炉に関連した施設もしくは柱穴となる。P₄・P₅は壁沿に位置し、不正楕円形プランで約30cmの掘りこみをもつが柱穴としての痕跡はなかった。またP₆は住居中央の浅い窪みであり、本址には明確な柱穴はない。遺物の出土状況：多数の大形土器破片が5層内と2層下面から出土し、住居中央部床面には壺口縁（1）が伏せた状態で検出された。床面・下層土器片と2層下面の土器の接合関係もいくつかあり、図示した土器は全て本址廃棄にかかわる遺物とされる。



第119図 SB25実測図及び出土遺物分布図

SB25

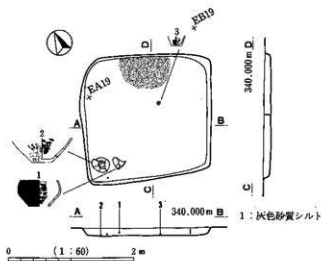


第120図 SB25出土土器実測図・拓影

SB27 (IV区-D・Eグリッド)

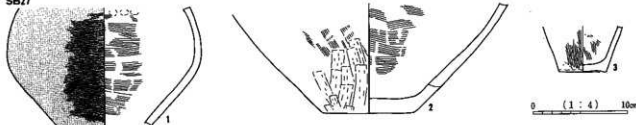
[第121・122図]

調査区中央北東寄りに位置している。ほかの遺構と重複はない。形状・規模：北と東コーナーにやや円みをもつが、一辺1.9mの方形プランを呈する小型の竪穴状遺構である。主軸方向はN-32°-E。埋土：検出面が低いため灰色シルト1層の自然堆積層である。床面：平坦に掘り込んだ砂層面を床とし、貼り床は認められなかった。炉：北東壁際床面に薄い炭層が検出された。80×50cmの範囲に及ぶ炭であったが掘り込み、焼土は確認されなかった。柱穴・ピット：ピットは検出されなかった。遺物の出土状況：北西コーナー床面に壺の底部2点(1・2)と中央床面に壺の底部(3)が出土したのみで、ほかに遺物はない。



第121図 SB27実測図及び出土遺物分布図

SB27

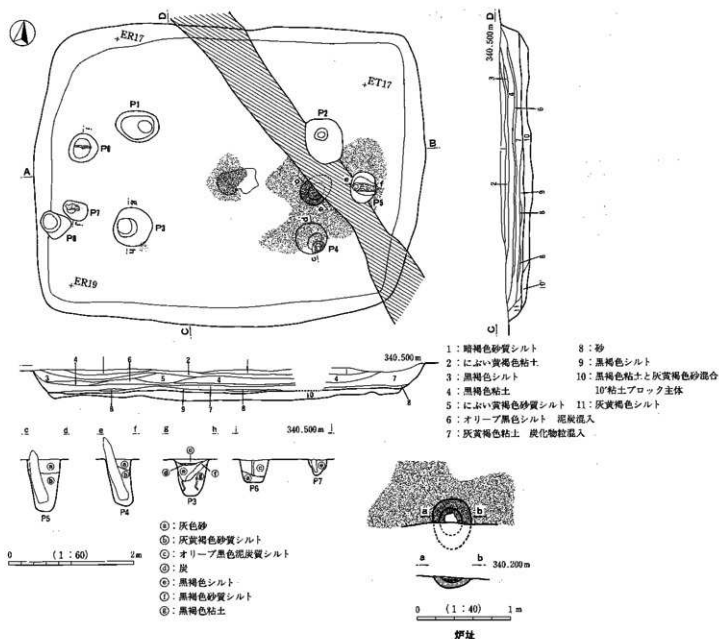


第122図 SB27出土土器実測図

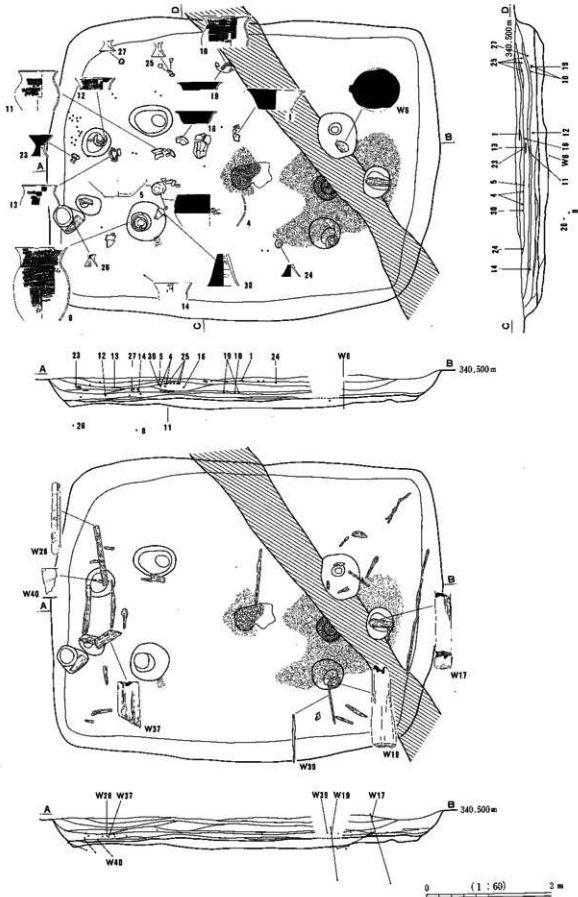
SB30 (VII区-Eグリッド) [第123~126図 PL13・35・80]

調査区南西寄りにあり、集落城西端の低地水田域との境界に位置する。分割調査区の境界であったため遺構北東寄りに調査用の排水溝掘削をしたトレンチがあるが、ほかの遺構との重複や攪乱はない。形状・規模：東西方向に長軸をとる隅丸長方形のプランとなり、主軸方向をN-79°-Eとする。規模は5.6×4.3mの中型の竪穴住居である。埋土：上層(1~5層)は砂質分を含んだ自然堆積層で、炭化物を多量に混入した7層が遺物をともなった人為的な埋戻し層となる。この間層に泥炭質のシルト(6層)があり、埋没過程で環境の変化があったことがわかる。床面上には砂層と砂質分を多く含んだシルトの堆積があり、本址の廃棄直後に砂層堆積があったことが確認された。床面：灰黄色砂に黒褐色粘土を混入した貼り床(10層)である。砂層面までの掘り方は凹凸が著しく中央に厚い貼り床が施されていた。炉：主軸上の奥壁側主柱穴の中間に位置している。50×40cmの楕円形プランを呈し、床面から12cmの深さに掘り窪められた地床炉である。炉床には焼土塊が厚く残り、焼土上に炭層と壺の大形破片が検出された。土器片の状況から土器敷炉とされる。また掘り込みはなかったが住居中央部に焼土と炭層の広がりが検出された。柱穴・ピット：ピットは8基検出され、柱材が4箇所出土した。P₁~P₄は主柱穴、P₅は棟持柱穴、P₆・P₇は出入り口施設、P₈は貯蔵穴となる。P₁~P₄は長方形配列となり床面から60~80cmの深さをもち、P₄には径22cmの丸木柱材(ヤマヅグワ)が残り、P₅には径15cmの丸木柱材(ヤマヅクラ)が床面やや上から柱穴

底面まで直立状態で残されていた。またP₃内には木製片口鉢が傾斜して出土し、P₉内中央には底部を抜いた大形の甕(8)が出土した。P₆・P₇は深さ30cm程で、両ピット内に板材(樹皮)が残されていた。P₈は深さ44cmで、板材とともに高杯脚部(26)が出土した。遺物の出土状況：片口鉢をはじめとする木製品は泥炭質のシルト(6層)以下の下層から少量の土器と出土し、多くの土器は4・5層から散在して出土した。建築材は細長い板材を主体とし長軸を南北に向けた状態で整然と残されていた。下層土器は各ピット内から出土した以外に5・10・11・12・19が該当する。また瓢箪の種子がP₂・P₄及び床面から出土した。

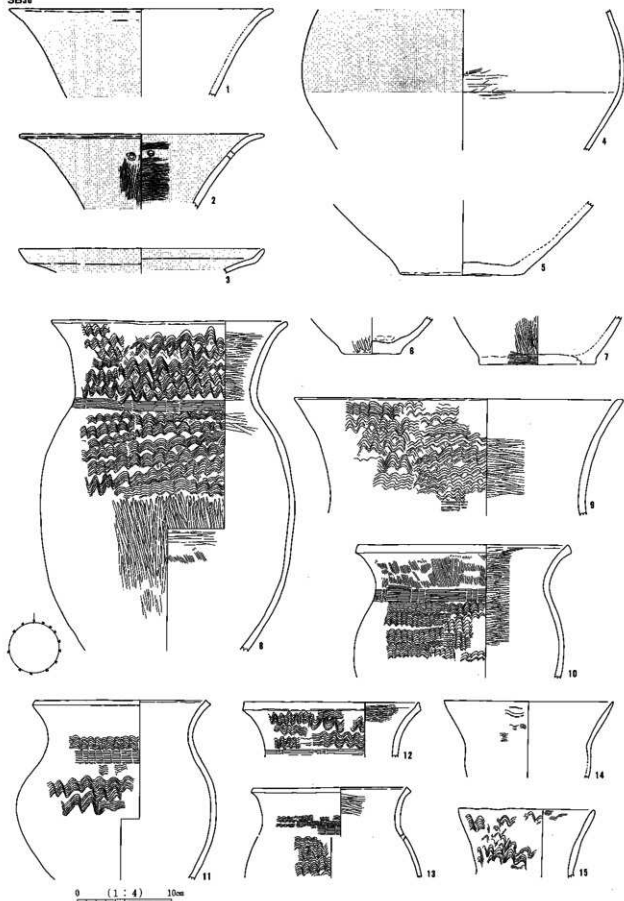


第123図 SB30実測図

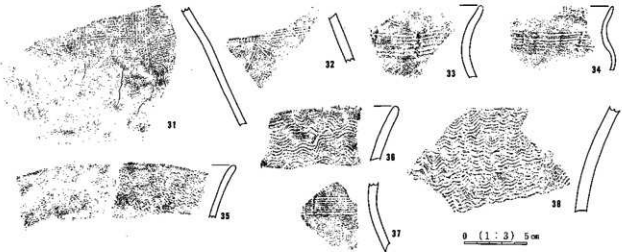
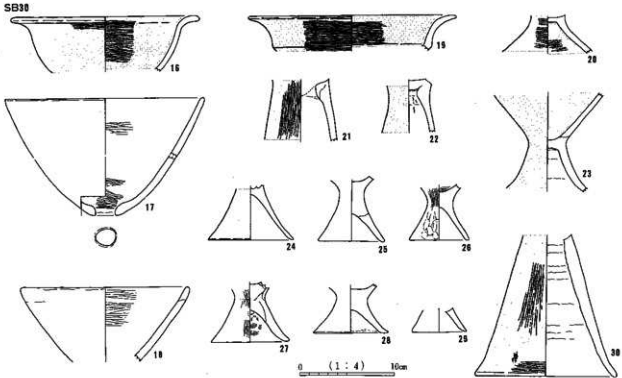


第124圖 SB30出土遺物分布圖

SB30



第125図 SB30出土土器実測図



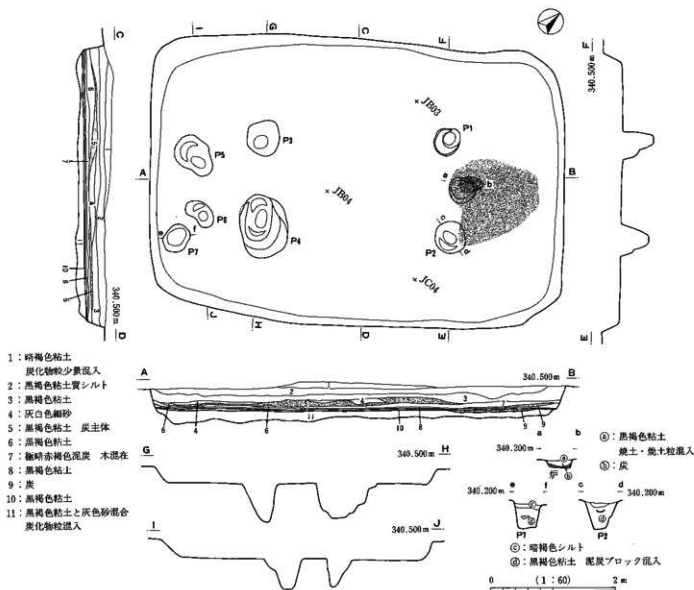
第126図 SB30出土土器実測図・拓影

SB31 (VII区-I・Jグリッド) [第127・128・129図 PL14・35-80]

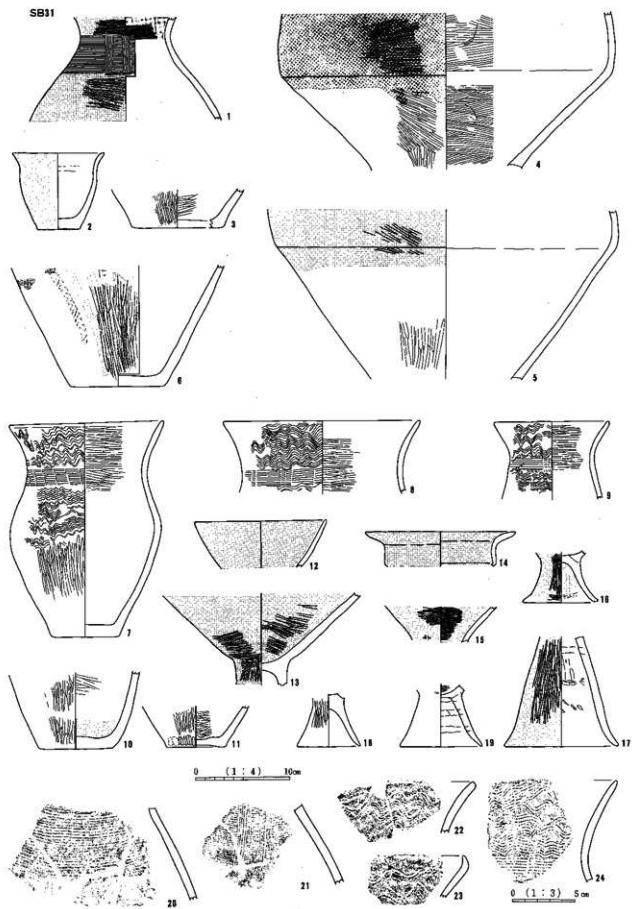
調査区南西の端にあり、集落域の西端となり低地水田域との境界に位置する。井戸址SK06・19と隣接するが、他の遺構との重複はない。形状・規模：南西-北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランとなり、6.4×4.3mの規模をもつ中型の竪穴住居である。主軸方向はN-47°-E。埋土：上層(1-3層)はシルト質の自然堆積層であり、炭化物を主体とした5層は遺物をともなった人為的な埋め戻し層となる。この間層に細砂(4層)があり、埋没過程で洪水性の堆積があったことが窺われる。5層下には6-8cmの厚みをもつ泥炭(7層)があり住居廃棄直後に水没し低湿地となったことを示している。更に泥炭層下には遺構内全面に広がる炭層があり下層堆積(8-10層)は住居廃棄にともなう人為的な埋め戻し層として捉えられた。本址埋土から周辺環境が微高地から低地に変化した状況が明らかとなった。床面：灰色砂に黒褐色粘土を混入した貼り床である(11層)。南西出入口付近が比較的厚く貼られ約20cmの厚みがあった。

炉：主軸上の北東奥壁側主柱穴の中間に位置する。径42cmの円形プランを呈し、床面から12cmの深さに掘り窪められた地床炉である。炉床には炭層、上部には焼土が堆積し、炉から北東奥壁床面にかけて薄い炭層の広がりが認められた。柱穴・ピット：ピットは7基検出され、P₁～P₄は主柱穴、P₅・P₆は出入り口施設、P₇は貯蔵穴となる。P₁～P₄は長方形配列となり、いずれも床面から65cmほどの深さで主軸ラインに向かって傾斜する形状で掘り込まれていた。P₂内上部には建築部材と土器片が、P₃内には木製品(工具の膝柄)と瓢箪が出土した。P₅・P₆は床面から40cmほどの深さを持ち、住居中心部方向に傾斜する掘り込み形状が確認された。貯蔵穴P₇は上層埋土が床面と同質で、床面をやや下げた面で検出された。

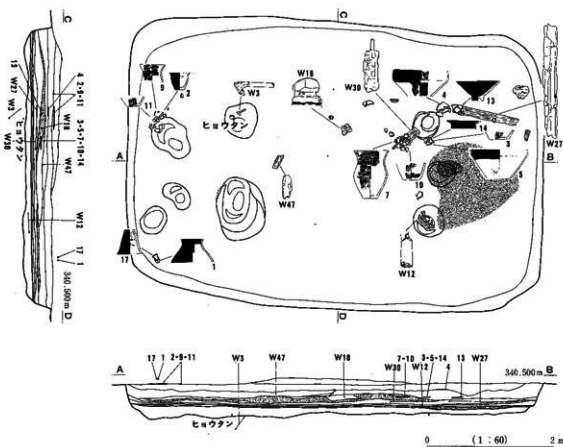
遺物の出土状況：遺物は土器接合関係や集中箇所から上層(1～3層)、中層(5・6層)、泥炭層(7層)以下の下層に分けられる。本址と直接かかわらない上・中層遺物には1・2・3・4・9・11・17の各土器があり、これら以外の土器と木製品が本址廃棄にかかわる遺物とされる。泥炭層(7層)を主として6点の木製品が出土したが、全ての製品が破損しており自然木と共に散在していた。P₃出土の膝柄(3)以外には建築材であり該期の用材を知る良好な資料である(付表参照)。



第127図 SB31実測図



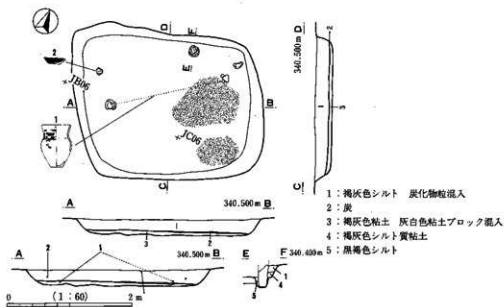
第128圖 SB31出土土器実測圖・拓影



第129図 SB31出土遺物分布図

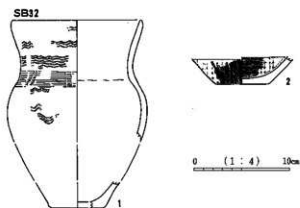
SB32 (Ⅷ区-Jグリッド) [第130・131図 PL14]

調査区南西端にあり、集落域の西端にあたる低地水田域との境界に位置する。他の遺構との重複はない。形状・規模：北西コーナーが張り出した不正隅丸長方形プランとなる。南西-北東方向に長軸をとり、2.6×2.2mの規模となる竪穴状遺構である。長軸方向を主軸とするとN-64°Eとなる。埋土：炭化物粒と細砂を含んだ自然堆積層である。床面：灰色粘土による貼り床が8~10cmの厚みで確認されたが、低地付近の立地であるため軟弱床面であった(3層)。炉：主軸上の中央北東寄りと、南東コーナー付近の床面に広がる薄い炭層を検出したが、明確な掘り込み、焼土はない。本址に施設としての

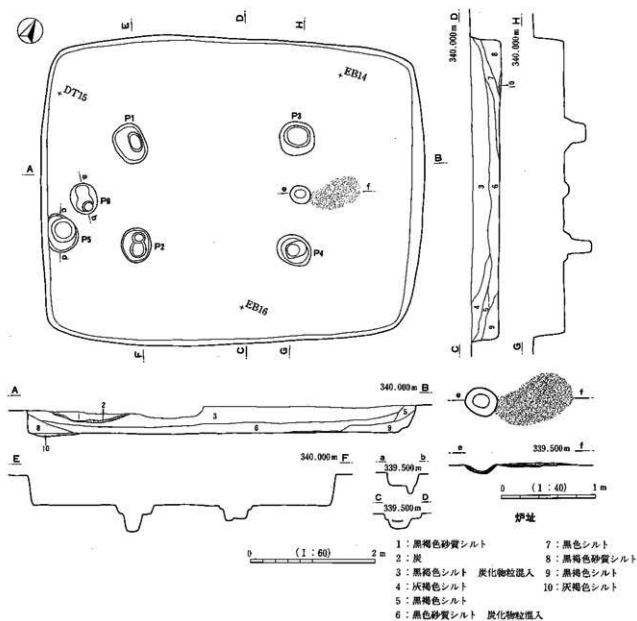


第130図 SB32実測図及び出土遺物分布図

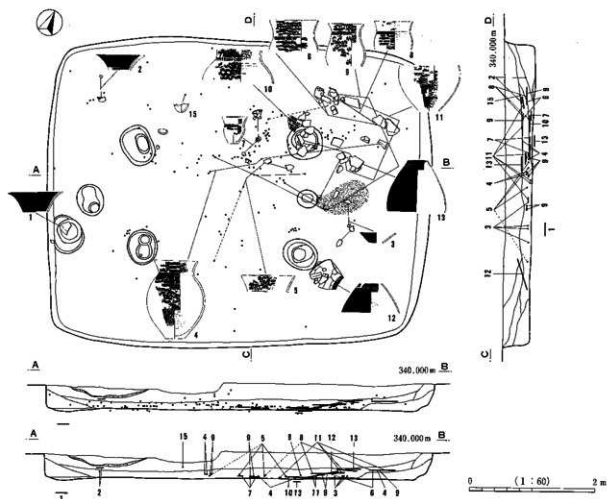
炉は認められなかった。柱穴・ピット：柱材の残るピットが北西壁際から1基検出された。床面から20cmの掘り込みに径15cmの丸木材が直立しており、本址にかかわる施設と捉えられるが構造上の位置は不明である。遺物の出土状況：南西寄りの床面上に土器破片があったほか遺物はない。



第131図 SB32出土土器実測図



第132図 SB38実測図

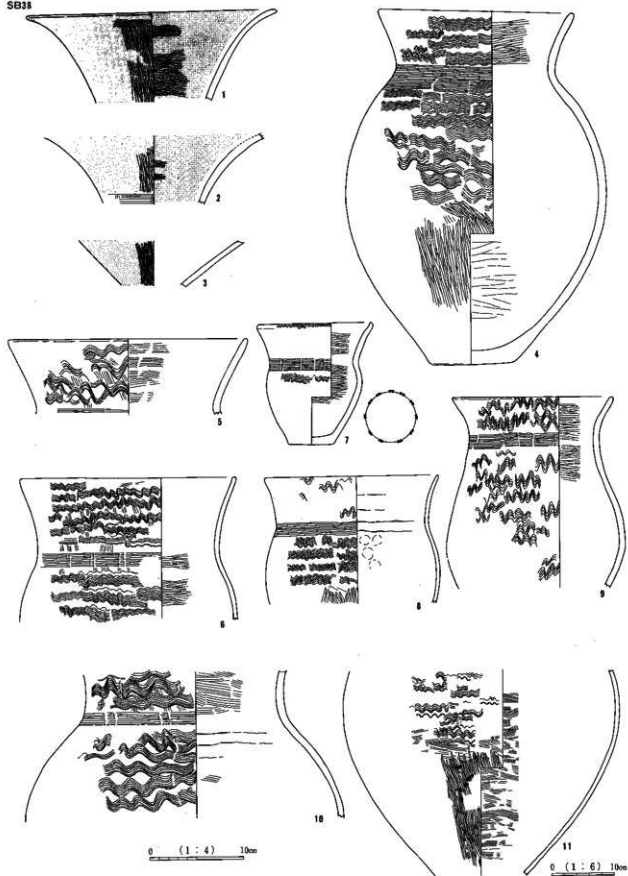


第133図 SB38出土遺物分布図

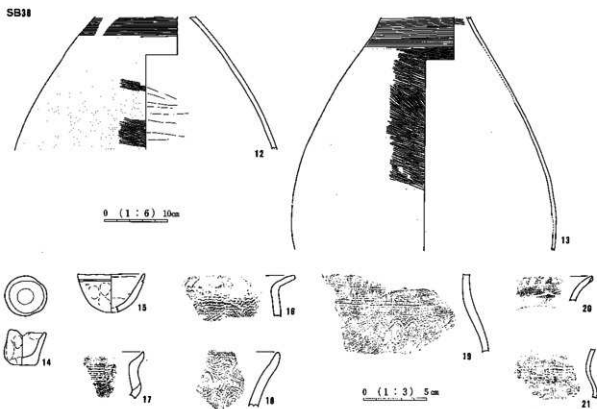
SB38 (IV区-D・Eグリッド) [第132~135図 PL14・15・35・50]

調査区北東寄りに位置し、後期の竪穴住居では最北端にあたる。掘り下げ時に土坑(1層)を埋土の断面で確認したが形状・時期は不明である。また北西コーナーに隣接した検出面上から太形蛤刃石斧3点の集中箇所を検出し、本址によって中期の遺構が破壊された可能性がある。形状・規模：南西-北東に長軸をとる隅丸長方形プランを呈する。主軸方向はN-67°Eとなり、5.8×4.8mの規模をもつ中型の竪穴住居である。埋土：一様に砂質分を多量に含んだ自然堆積層である。上層(3層)と下層(6層)には粗砂がブロックで含まれている状況から短期間で埋没したと捉えた。床面：主柱穴配列内部の床面は、薄い灰色シルトが踏み固められた状況で検出され、硬化が認められた。出入口付近には黒色シルトが敷かれ、壁周辺は平坦に掘り込んだ砂層を踏み固めた床であったが、軟弱であった。炉：主軸上の奥壁側主柱穴の中間に位置する。径30cmの円形プランで、床面から約10cmの深さに掘り穿めた地床炉である。炉壁には硬化した焼土が検出されたが、炉床には少量の炭化材と炭層があるのみで軟弱であった。また炉から北側奥壁までの床面にも焼土があり、上面には90×50cmの範囲に広がる炭層が検出された。炉内出土の炭化材はサクラ属であった(付参参照)。柱穴・ピット：ピットは6基検出された。主柱穴はP₁~P₄で長方形の配列となり、P₂以外は床面から50cm前後の掘り込みをもつ。P₃は床面から25cmの深さとなる貯蔵穴であり、下

SB38



第134圖 SB38出土土器実測圖

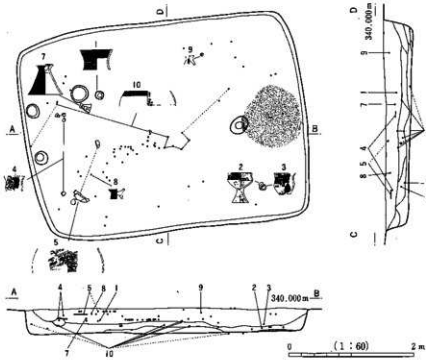
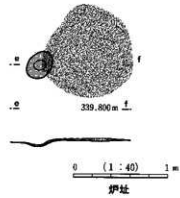
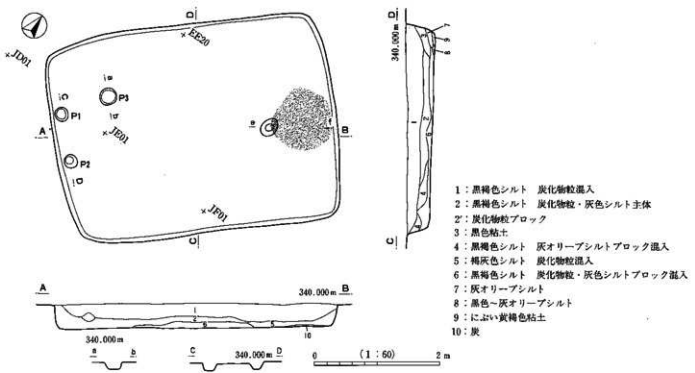


第135図 SB38出土土器実測図・拓影

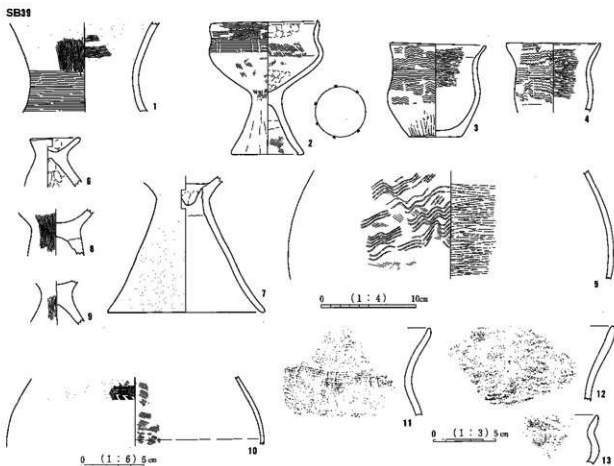
部から壺口縁部(1)が出土した。P₄は主軸上に設けられた出入り口施設で、径50cmの掘り込みとその中の径15cmの垂直に掘り込まれた小ピットからなる。遺物の出土状況：住居北東側を主体として、6層から多量の土器片が出土した。土器片は6層中に混入した炭化物粒の集中層と同一の広がりとなり、破片接合は6層内出土土器に限られた。本址伴う遺物は貯蔵穴出土の壺(1)のみで、復元図示した他の土器は、遺構廃絶後の2次堆積による、一括廃棄土器として捉えた。

SB39 (IV-E・Jグリッド) [第136・137図 PL15・35]

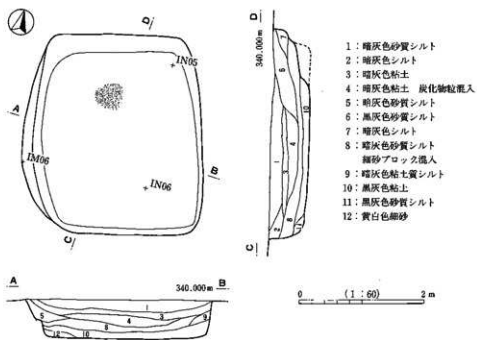
調査区中央北東寄りに位置し、他の遺構との重複はない。形状・規模：南西-北東に長軸をとる長方形プランである。4.4×3.2mの規模をもつ比較的小型の竪穴住居である。主軸方向はN-48°-E。埋土：一様に炭化物粒を含む自然堆積層である。床面：明瞭な貼り床はなく、平坦に掘り込んだ砂層面に灰色シルトが踏み固められた状況で、軟弱であった。炉：主軸上の北側奥壁寄りに位置する。径28cmの円形プランで床面から8cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床には焼土が検出され、上面に3cmほどの厚みをもった灰の堆積があった。更に炉から奥壁床面の径約1mの範囲に炭層が検出された。柱穴・ピット：ピットは3基検出されたが、主柱穴はない。P₁・P₂は床面から20cm、P₃は15cmの掘り込みと浅く、P₁・P₂は壁際に並列する出入り口施設のピットとなる。遺物の出土状況：下層から床面にかけて出土した土器は台付き甕(2)と甕(3)だけで、大半は上層出土であった。下層と上層の土器片接合が明確に認められなかったことから本址廃棄に伴う遺物は2・3だけである。



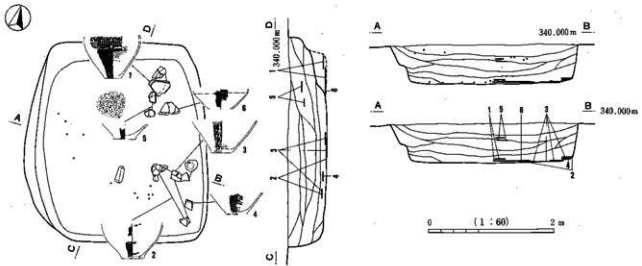
第136図 SB39実測図及び出土遺物分布図



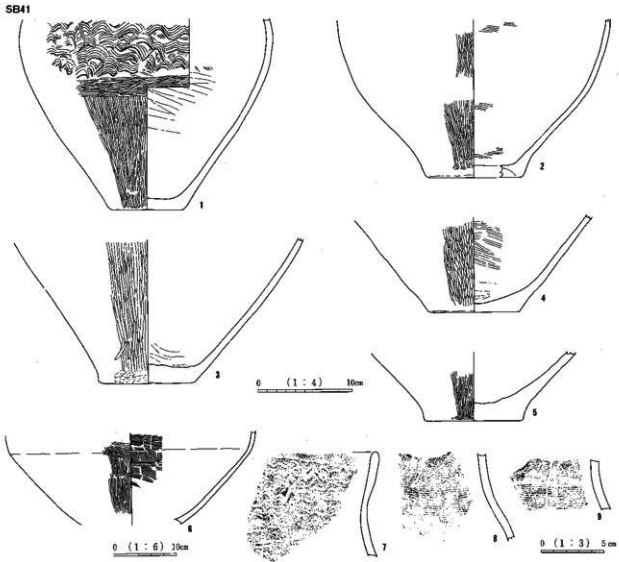
第137図 SB39出土土器実測図・拓影



第138図 SB41実測図

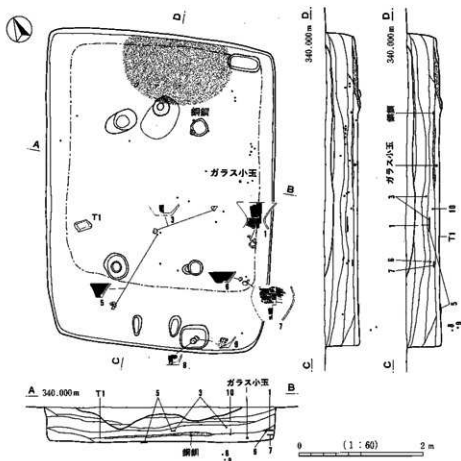


第139图 SB41出土遺物分布图

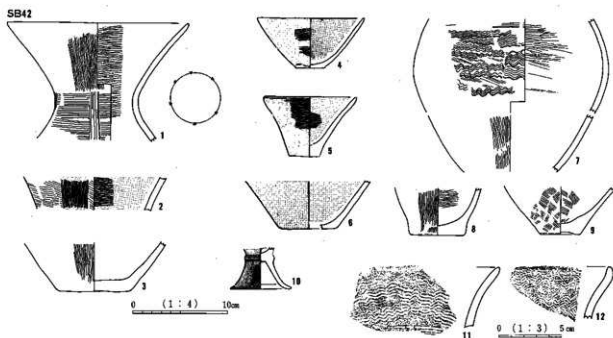


第140图 SB41出土土器实测图·拓影

主軸方向はN-30°-Eで、北東奥壁の両コーナーが直角に近い隅丸長方形となる。4.9×3.6mの中型の竪穴住居である。埋土：砂質シルトに炭化物粒が混入する埋土で、間層に炭層がある。砂質埋土は自然堆積となり炭層は人為的な埋没経過と捉えた。床面：平坦に掘り込んだ砂層面に黒褐色粘土が薄く敷かれた状況で検出された。貼り床は主柱穴周囲に方形に検出され、出入口部及び壁際には砂質シルトが踏み固められたのみでやや軟弱であった。炉：主軸上の奥壁側主柱穴の中間に位置する。径25cmの円形プランで、床面から約10cmの深さに掘り窪めた地床炉である。炉周辺には70×50cmの楕円形範囲に焼土が検出された。炉壁は焼燥によって硬化しており、炉から奥壁の床面には5～6cmの厚みで炭層の堆積があった。柱穴・ピット：ピットは8基検出された。P₁～P₄が主柱穴となり床面からは35cm程度の深さで、長方形配列となる。P₇・P₈は出入口施設用のピットで、主軸方向に細長い楕円形平面プランが垂直に掘り込まれていた。貯蔵穴P₆は壁際に添って深さ40cmに垂直に掘り込まれ方形の断面形を呈し、平面40×38cm長方形プランで、下層から壁底部が2点(8・9)出土した。9は在地の胎土と異なる北陸系の瓷である。遺物の出土状況：土器片は南東側に平面分布の主体があり、北東コーナー側は埋土上層を含めても稀薄である。層位では最下層(5層)と炭層を挟んだ4層に分布主体があり、両層出土破片が接合した(5)。これは、住居廃棄と炭層堆積の時間差がないことを示している。特殊遺物では銅鋼(第262図3)の破片とガラス小玉が各1点最下層から出土した。銅鋼は直径4.6cmの湾曲した破片で、本遺跡出土の銅では唯一本来の形状が確認できた。



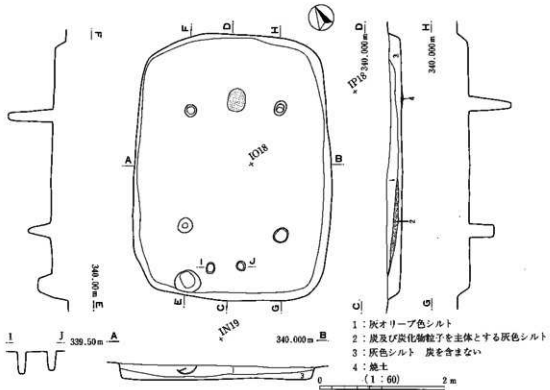
第142図 SB42出土遺物分布図



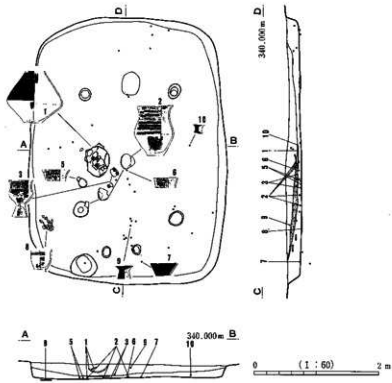
第143図 SB42出土土器実測図・拓影

SB101 (IV区-Iグリッド) [第144・145・146図 PL16・36]

調査区北東寄りに位置している。他の遺構との重複はない。形状・規模：南西-北東方向に長軸をとる隅丸長方形のプランであり、4.0×2.9mの比較的小型の竪穴住居である。主軸方向はN-38°E。埋土：2層に分層され上層には炭化物粒が含まれ、南西寄りの堆積層には下層との間に炭層が検出された。これに対し下層埋土には炭化物が含まれず、上層との埋没経過の違いを示している。床面：平坦に掘り込んだ砂層面に黒褐色粘土が薄く敷かれた状態で検出されたが、やや軟弱床面であった。炉：主軸上の奥壁側主柱穴の中間に位置する。34×28cmの楕円形の僅かの窪みに焼土が検出され、周辺約1.5mの範囲に薄い炭の堆積があった。柱穴・ビット：ビットは7基検出された。P₁~P₄が主柱穴となりP₁・P₂は床面から65~70cmの深い掘り込みがあり、P₃・P₄は40cm程度の深さであった。P₅・P₆は出入り口施設となりほぼ同一規模のビットが並列している。貯蔵穴となるP₇内からは拳大の磨り石が出土した。遺物の出土状況：住居南西に堆積した炭層(2層)の上・下部及び床面に土器出土分布の主体があり、平面分布においても、中央から南西側に偏在する状況であった。土器はさほど多くはないが床面上に潰れて出土した壺(8)や炭層の途切れる中央部に固まりで出土した大型壺(1)など、器形の確認できる固体が多い。破片接合では住居中央部の床面からやや浮いた炭層中から出土した壺2・3の大形破片が、下層下部の炭化物粒混入のない土器片と接合し、復元された。この土器出土状況は3層と炭層の埋没過程には時間的な隔たりがないもので、炭層までを住居廃棄行為として捉えられる。従って図示した土器すべてが本址にかかわる土器と判断した。

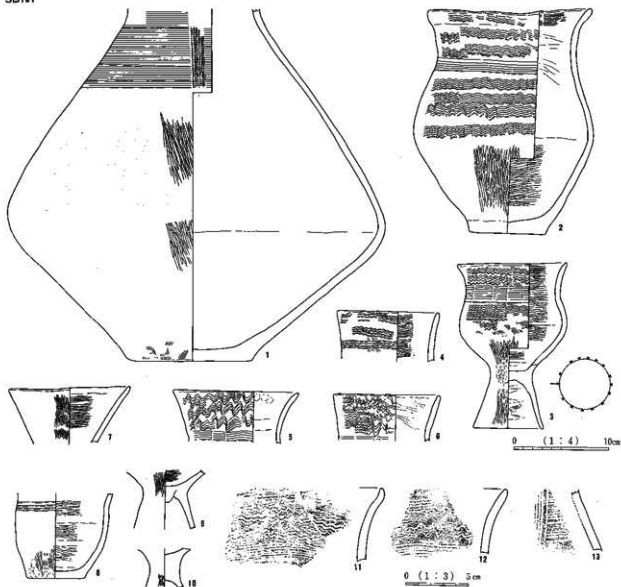


第144図 SB101実測図



第145図 SB101出土遺物分布図

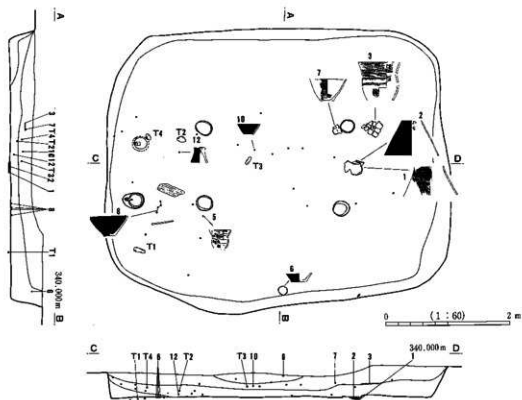
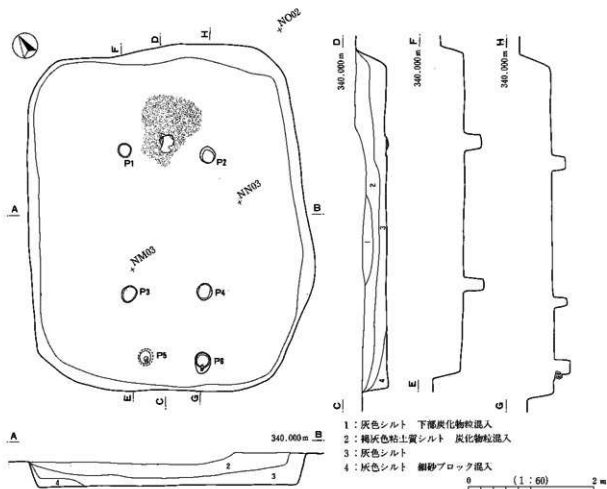
SB101



第146図 SB101出土土器実測図・拓影

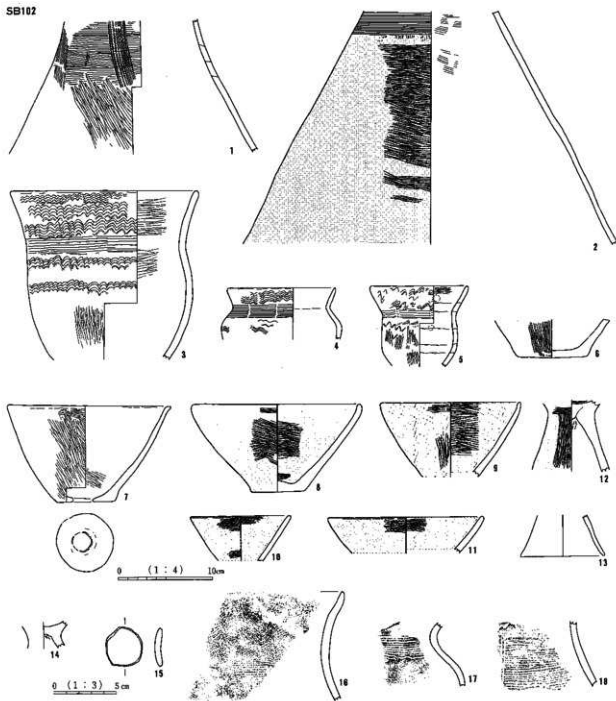
SB102 (IV区-Nグリッド) [第147・148図 PL16-36]

調査区北東寄りに位置している。他の遺構と重複のない遺構である。形状・規模：東西短軸の出入り口方向がやや膨らんだ胴の張る隅丸長方形のプランとなる。主軸方向はN-30°E、5.2×4.2mの中型の竪穴住居である。埋土：薄く堆積した炭層を間層として、上・下2層に分層されたが、両者ともに灰色シルトであった。南西側の出入り口付近には細砂ブロックを混入したシルトの堆積があり床面上には鉢(8)、木製品がバックされていた。床面：平坦に掘り込んだ砂層面に黒褐色粘土が薄く敷かれた状態で検出されたが、やや軟弱床面であった。炉：主軸上の奥壁側主柱穴の中間に位置する。焼土は検出されなかったが浅く窪んだ床面に壺胴部の大形破片2片(1・2)が重なって出土した。炉から奥壁にかけての周囲約80cmの範囲に薄い炭の堆積があった。柱穴・ピット：ピットは6基検出され、2本一対で整然と配置されていた。P₁~P₄が主柱穴となる。主柱穴の床面からの深さは、底面砂層の崩落のため35cm前後と浅い掘り



第147図 SB102実測図及び出土遺物分布図

込みとして検出された。出入り口施設P₅・P₆からは自然炭化した柱材が出土した。P₅内の柱は床面上に突出して検出され長さ約60cm残存していた。樹種はクスノキ科であった(付章参照)。遺物の出土状況：土器は出入り口部から主柱穴の間に平面分布し、床面(8・12・16~18)と上層下部(3・7)に各個体が散在して出土した。土製円盤、ミニチュアは上層出土である。

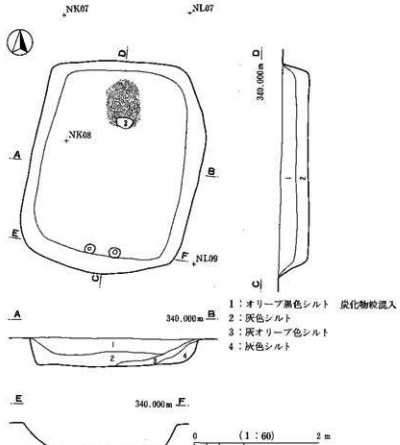


第148図 SB102出土土器実測図・拓影

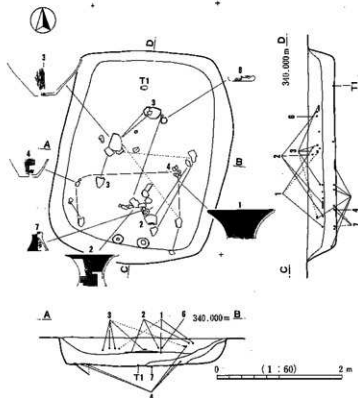
SB103 (IV区-Nグリッド)

[第149・150・151図 PL16]

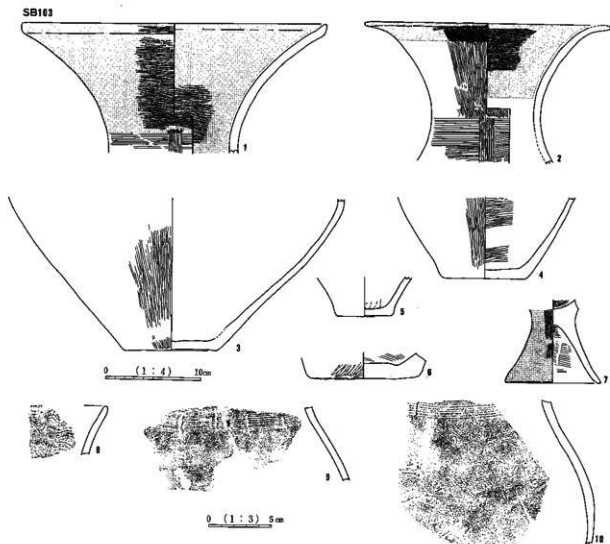
調査区はほぼ中央東寄りに位置している。ほかの遺構との重複はない。
形状・規模：隅丸長方形のプランとなり、 3.0×2.3 mの小型の竪穴住居である。主軸方向はN-11°-E。埋土：2層に分層され、上層には炭化物が多量に含まれ、間層には薄い炭層が検出された。床面：平坦に掘り込んだ砂層面に黒褐色粘土が薄く敷かれた状態で検出されたが、軟弱床面であった。炉：主軸上北側奥壁寄りに土器片と炭を検出した。炭は 80×50 cmの範囲に広がり、炭と床面に貼り付いた状態で壺胴部片があった。この土器片と住居内出土土器との接合はなく炉施設に常設した一部と考えられる(土器敷き炉)。柱穴・ピット：ピットは南壁際に2基検出されたのみで、住居内に主柱穴は検出されなかった。P₁・P₂とも床面から12cm程度の掘り込みと浅く、出入口施設と判断される。遺物の出土状況：1層下部と2層下部ないしは床面上に偏在して出土した。層位間相互の接合はなく、埋土の相違を加味すると埋没過程に隔りがあったことを示している。床面付近出土土器は小破片で図示した中の7・8・9のみである。これらが本址廃棄時の遺物となる。



第149図 SB103実測図



第150図 SB103出土遺物分布図

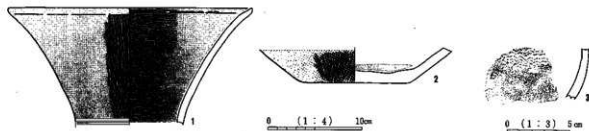


第151図 SB103出土土器実測図・拓影

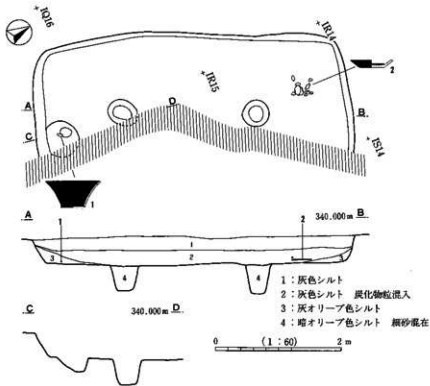
SB104 (IV区-Iグリッド) [第152・153図 PL17]

調査区北東寄りに位置している。南東側は調査区外のため遺構の約3/5を欠き、構造・規模等の全容は不明である。形状・規模：南北に長軸をとる隅丸長方形になると推定され、長軸4.8mの中型の竪穴住居である。主軸方向はN-19°-E。埋土：2層に分層され、1層と2層の間層には薄い炭層が確認された。床面：明瞭な貼り床は認められなかったが、平坦に掘り込んだ砂層面に薄い黒褐色粘土が検出され、硬化も認められた。柱穴・ピット：P₁・P₂が主柱穴、P₃が貯蔵穴となる。P₁・P₂は床面から40～45cmほどの

SB104



第152図 SB104出土土器実測図・拓影

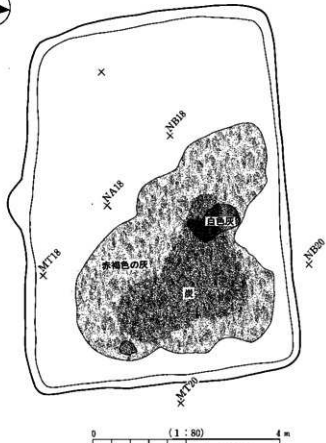


第153図 SB104実測図及び出土遺物分布図

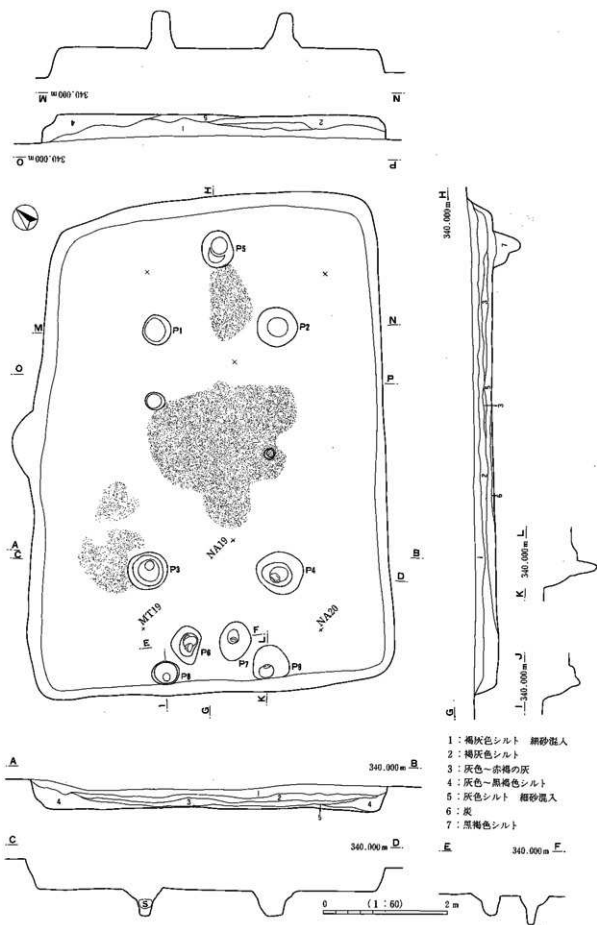
SB105 (IV区-M・Nグリッド)

[第154～157図 PL17・18・37]

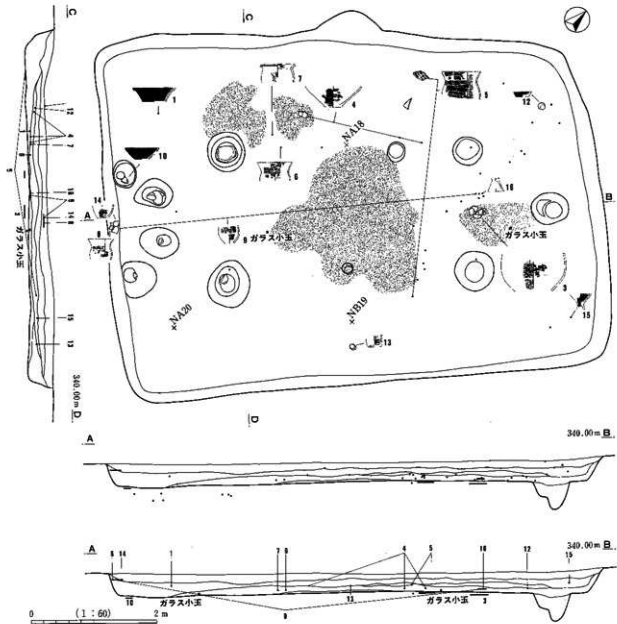
調査区中央南東寄りに位置している。他の遺構と重複のない単独の遺構である。形状・規模：コーナーがやや緩やかな長方形プランとなり、東西に長軸をとる7.4×5.4mの中型の竪穴住居である。主軸方向はN-45°-E。埋土：一様に細砂を含んだ自然堆積層であるが、4・5層上に灰と炭化物のレンズ状の堆積層(3層)が確認された。灰の広がりは南側半分に偏っており、埋没過程で人為的な燃焼行為が行われたとみられる。床面：固く締った砂質シルトであるが明確な貼り床は認められない。炉：明確な掘り込みの確認できたピットはなく、主軸上の主柱穴間より北東壁寄りとP₃北側に2～5cmの炭化物層を検出した。前者が炉と判断され、壺3が炉施設にかかわる土器となる。柱穴・ピット：ピットは11基検出され、このうちP₁～P₅は床面から60cmの深さをもち主柱穴となる。この柱穴の掘り込みはいずれも砂礫層まで達してい



第154図 SB105 3層(灰と炭)の分布範囲図



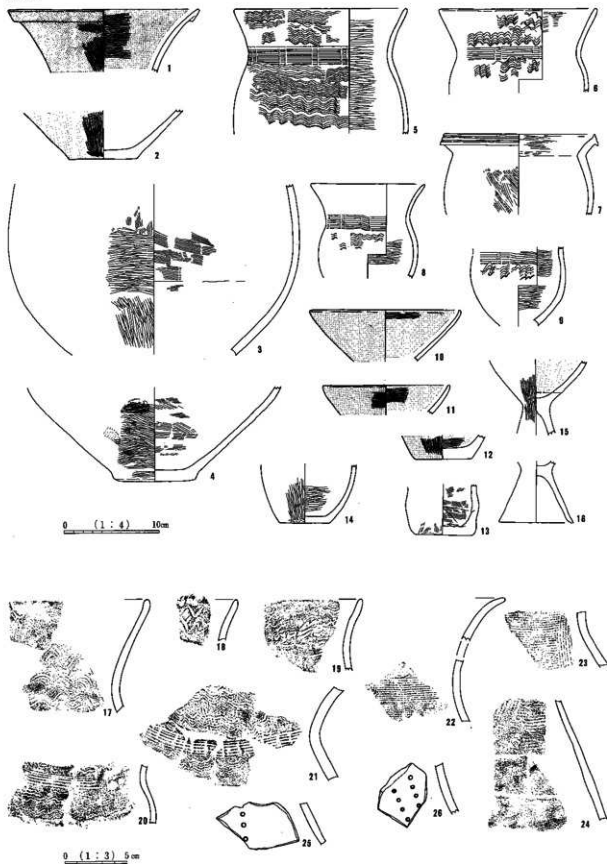
第155図 SB105実測図



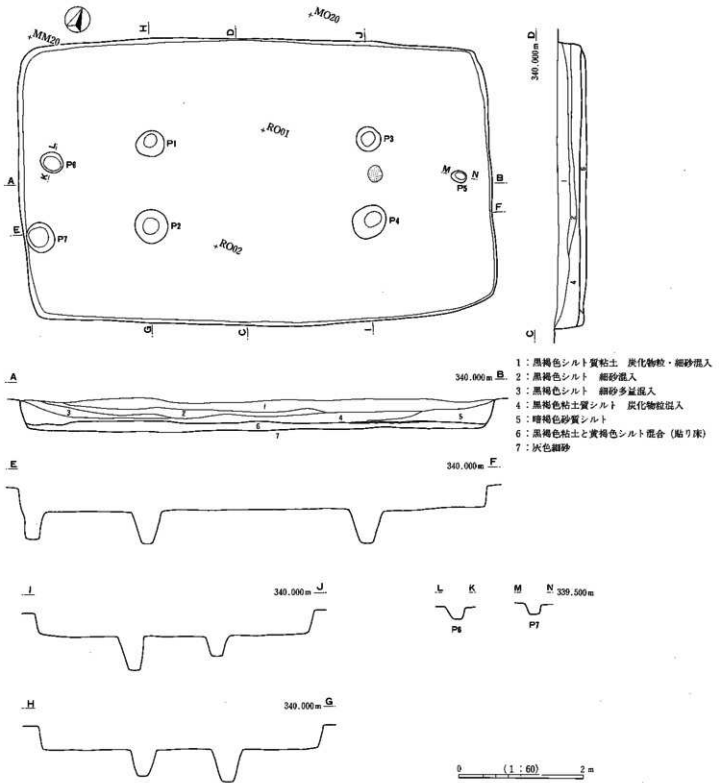
第156図 SB105出土遺物分布図

る。P₃からは大形の平石が、P₄からは円礫が中央に向かい傾斜して出土した。P₆・P₇は出入り口施設のピットであり外壁側にやや傾斜した掘り込みであった。いずれのピットからも拳大の礫が出土した。P₈・P₉は貯蔵穴でありP₈からは鉢(10)が出土した。遺物出土状況：土器の平面分布は北側約半分に散在し、3層(灰)の広がりとは対称を示す。層位では5層ないしピットに集中するが完存する資料はなく、接合状況も破片の一部が付いたにすぎない。土器は本址廃絶直後に破損廃棄されたものと判断される。特殊遺物としてはガラス小玉2点が床面上から出土した。7の甕は口縁部に擬凹線を施した有段口縁甕で、在地と異なる胎土であった。

SB105

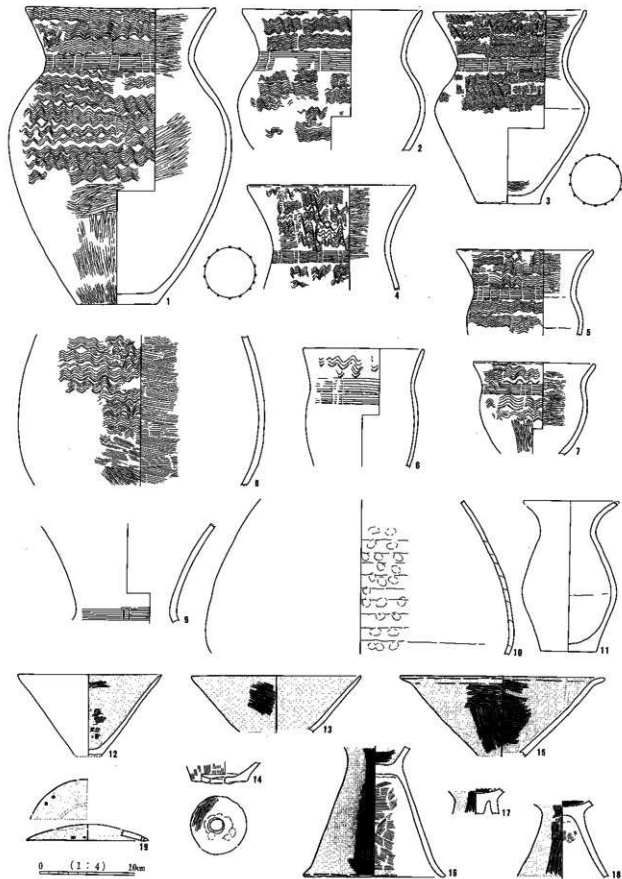


第157図 SB105出土土器実測図・拓影

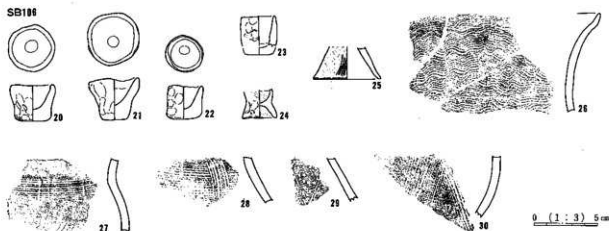


第158図 SB106実測図

SB106



第159図 SB106出土土器実測図



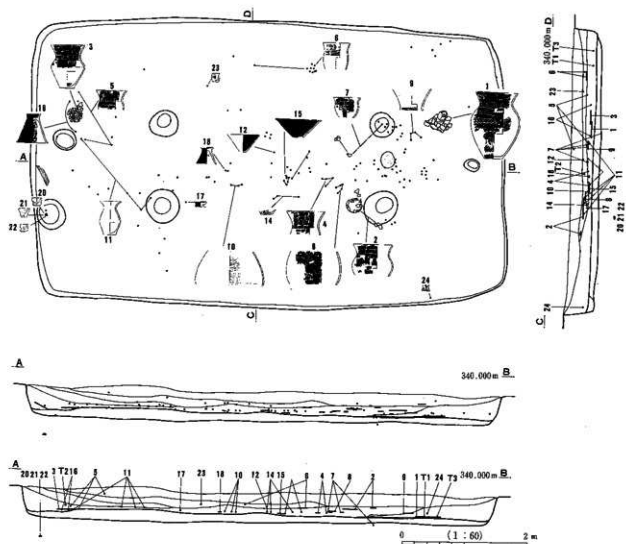
第160図 SB106出土土製品実測図・土器拓影

SB106 (IV区-M・Rグリッド) [第158~161図 PL17-36-50]

調査区中央北寄りに位置している。北側壁の一部が試掘坑によって削られていたが、他の遺構と重複のない単独の遺構である。形状・規模：6.4×4.4mの東西に長いほぼ長方形プランとなる竪穴住居である。主軸方向はN-66°-E。埋土：一様に砂質分を多量に含んだ自然堆積層であり、5層以外は炭化物粒子の混入が認められた。床面：黒褐色粘土と黄褐色シルトの混合による貼り床(6層)で、5~8cmの厚みであった。壁寄がやや軟弱であったほかは硬化していた。炉：主軸上の奥壁より主柱穴の中間に位置する。掘り込みは4cm程度と浅く径24cmの焼土塊が検出された。床面にはこの焼土を中心として径約1mの範囲に炭化物の広がりがあった。柱穴・ビット：ビットは7基検出され、P₁~P₄・P₇が床面から40cm前後と深く、P₅・P₆が20cmと比較的浅い掘り込みであった。P₁~P₄は主柱穴で、柱穴を結ぶ線は住居プランに平行する長方形となる。P₇は貯蔵穴で最下部から完存するミニチュアが3個体(20・21・22)まとまって出土した。P₆は出入り口施設と考えられ、円礫1点が出土した。遺物の出土状況：土器の分布は出入り口から主柱穴間、炉周辺に散在し、大半が下層から床面にかけての出土であった。土器片の接合は集中し潰れた状況で出土した甕が4点(1・2・3・7)あった。ミニチュアは貯蔵穴内の3点のほか下層出土3点の計6点で、本遺跡遺構内遺物では最も多い。また出入り口からは約10cmの板材が出土した。これらの遺物は住居廃棄直後のものと判断される。

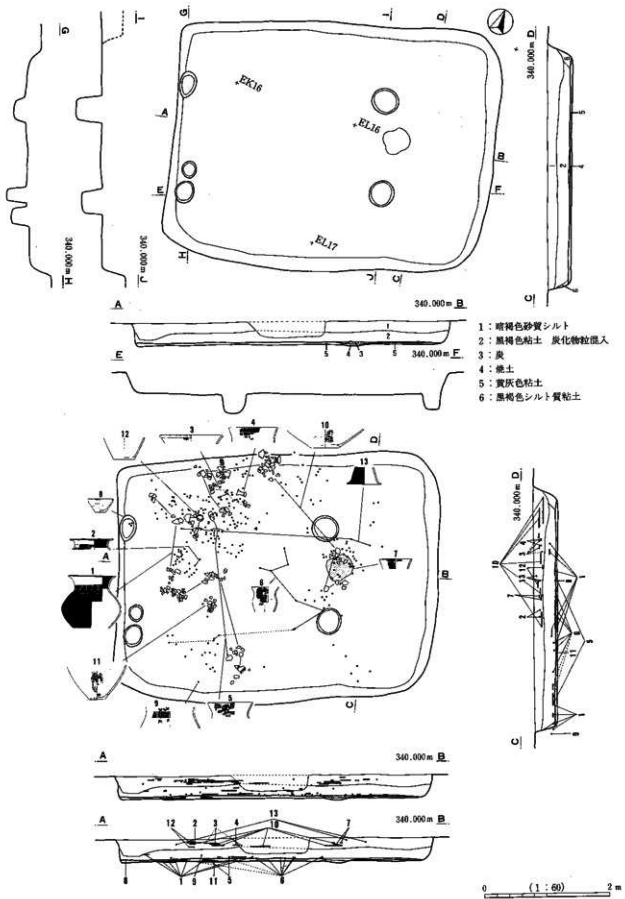
SB108 (IV区-Eグリッド) [第162・163図 PL17-18-37]

調査区北東寄りに位置し、後期の住居では東端となる。SM15の周溝によってほぼ中央部の埋土及び南北壁の一部が削られている。形状・規模：コーナーが比較的直角に近い隅丸長方形のプランとなり、4.8×3.6mの中型の竪穴住居である。主軸方向はN-74°-E。埋土：大きく2層に分層され、上層(1層)は砂の混入が著しい自然堆積であり、下層(2層)は炭化物粒子を含んだ粘性の強い土質であった。床面：約3cmの厚みをもつ黄灰色粘土による貼り床であった(5層)。炉：主軸上の奥壁側主柱穴の中間に位置している。掘り込みは5cmと浅く、42×38cmの楕円の窪みに焼土塊が残された地床炉である。炉周辺及び東側奥壁にかけて約4cmの厚みをもつ炭化物の広がりがあった。柱穴・ビット：ビットは5基検出された。出入り口側の柱穴P₃・P₆が壁に接近し過ぎるが、配置からP₁~P₃・P₆が主柱穴となる。P₅を除



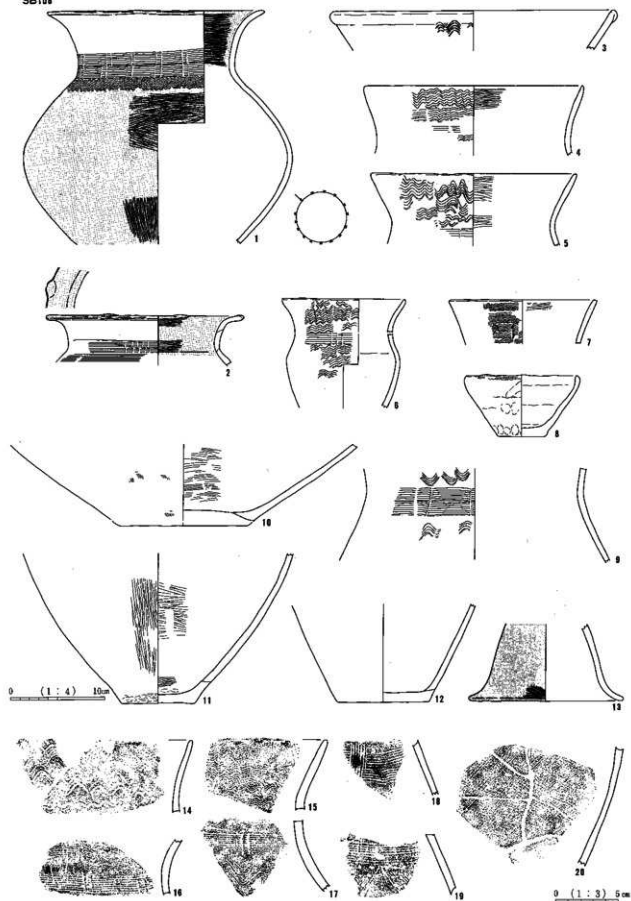
第161図 SB106出土遺物分布図

いては床面から35~40cmほどの掘り込みとなり砂礫層まで達している。遺物の出土状況：多量の土器破片が西側コーナー寄りと炉周辺から出土し、1層中と2層下部から床面に偏在した。破片数に対して完存する資料は少ないが、層位接合状況は上層と下層に明確に分けられ、相互に接合した土器はない。このことは遺物を含めた埋没過程に隔たりがあったことを示している。下層出土土器は1・5・6・8・9・11・16~20でありこれらが本址廃棄時の遺物である。特殊遺物として鉄片が上層より出土したが、本址に伴う遺物かは不明である。



第162図 SB108実測図及び出土遺物分布図

SB108



第163図 SB108出土土器実測図・拓影

第4表 弥生後期竪穴住居内出土の石制剥片・砕片重量

(後期住居掘土内から比較的多く剥片・砕片が出土した遺構のみ)

住居番号	石質製品		チャート (石礫)	黒曜石 (石礫)	閃緑岩(輝緑岩) (鉛石片・ 扁平石)	安山岩 (刀器・ 石磨丁)	粘板・頁岩 (石磨丁・ 磨製打礫)	住居内出土の石製品
	鉄石類 (管玉)							
SB14			11.0	5.3	20.8	25.9		扁平片状石片未製品 1
SB16	0.9		31.8	1.0		18.6		
SB17			38.5		14.3		94.6	打製石礫 2

第5表 弥生時代後期竪穴住居出土土器及び土製品観察表

色調及び胎土の記号は第3表弥生中期土器観察表と同一である。

SB02

図版No	器種	法 産			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	甌	27.4			口縁部1/4	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅 斜位ミガキ→赤彩	
2	高杯	32.4			口縁部1/8	B	a	・摩滅 ・摩滅	
3	甌				胴部上半1/4	A	a	・磨・斜位ミガキ→赤彩 摩付者 ・横位ハケ	
4	甌				胴部上半1/6	A	a	・磨・横位ミガキ→斜位ミガキ→赤彩 ・ナデ	
5	甌		9.0		底部完存	AD	a	・磨・斜位ミガキ→ナデ ・斜位ハケ→ナデ	
6	甌		11.6		底部3/5	AC	a	・摩滅 縦位ミガキ ・摩滅 磨製剥落	
7	甌		6.7		底部完存	D	a	・縦位ミガキ 縁辺ケズリ 黒色化 ・斜位ミガキ 黒色化	
8	甌		15.6		胴部上半はぼ完存	DE	a	・摩滅 波状文(6本上下) 黒色化 ・摩滅 ナデミガキ 黒色化	
9	甌		10.9	5.2 13.6	はぼ完存	AD E	a	・磨・波状文(2本3段3溝)→波状文→縦位ミガキ ・底面ミガキ 全面磨付者 ・ナデ→斜・縦位ミガキ(口縁)縦位ミガキ(胴)	磨滅文金剛しない
10	甌		15.6		口縁部1/3	AE	a	・摩滅 磨製横線文→T字文→波状文 ・摩滅	
11	甌		5.8		底部完存	AD	a	・波状文→縦位ミガキ 黒色化 ・ナデ (弱い斜位ミガキ) 底面赤色顔料付着 の痕跡	
12	甌		5.2		底部2/3	E	a	・縦位ミガキ 底面一部磨製剥落 ・横位ハケ→ナデ	
13	鉢		6.8		胴部下半1/3 底部完存	AB	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 磨製剥落 ・摩滅 赤彩 磨製剥落	胴下半と底部の接 点なし 図上復元
14	有孔鉢		17.4	4.8 10.2	胴部2/3 底部完存	A	d	・縦位ミガキ→縦位横線文(2条) 底面ミガキ 指環状板 ・横位ハケ→ナデ	穿孔径1.9~2.0
15	甌		12.0 (伏置 形)		全形1/2	A	a	・摩滅 斜位ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩	
16	高杯		12.4	7.7 15.0	完存	A	a	・磨・波状文(12本2層10単位)→横・斜位ミガキ (杯)縦位ミガキ(胴)→赤彩 磨製剥落 ・縦位ミガキ→赤彩(杯)ナデ(胴)	
17	高杯		8.3		接合部・胴部完存	A	a	・摩滅 縦位ミガキ(胴)→赤彩 ・摩滅 縦位ミガキ→赤彩(杯) 底面磨製剥落 (杯)ナデ→部分赤彩(胴)	
18	高杯		7.8		接合部完存脚部1/2	A	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 縦位ミガキ→赤彩(杯)底面磨製剥落	杯と脚部の接点なし 図上復元

土製品

図版No	器種	直 径	器厚	孔 径	重 量g	残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
19	有孔土製円盤	4.1×3.78	1.55	0.60	29.26	完存	AD	a	・ナデ 黒炭 ・摩滅	オリジナル
20	有孔土製円盤 未製品	3.3×3.02	0.63	—	7.97	完存	D	a	・摩滅 斜位横線文 ・ナデ 黒色化	焼 破片取用

本址出土土器は実測・拓影図の他に口縁部41個体あり、内訳は弥生後期帯4、甌9、鉢・高杯23個体、中期甌5であった。此部は38個体あり、内訳は甌3、甌21、鉢8、高杯甌4、不明2個体であった。

SB03

図版No	器 種	法 量			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	鉢	25.0			口縁部1/4	F	b	・横位ミガキ→赤彩 口縁端剥み ・横位ミガキ→赤彩	穿孔1 孔径0.2
2	高杯	25.0			口縁部1/3	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	口縁端部突起欠損
3	高杯	24.6			胴部完存	A	a	・横位ミガキ→斜・横位ミガキ→赤彩接合面黒色化 ・横位ミガキ→赤彩	
4	高杯				接合部完存	B	a	・摩滅 横位ミガキ→斜位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩(杯)	
5	高杯				脚柱状部完存	D	a	・摩滅 赤彩 内外面・断面ともに黒色化 ・摩滅 赤彩(杯)	2次焼成
6	高杯				脚柱状部完存	AD	a	・摩滅 胎土痕残存 ・摩滅	
7	壺	12.0			胴部下半ほぼ完存	AF	a	・ハケ→斜位ミガキ(劣) ・斜位ハケ 器壁一部剥落	
8	壺 (付壺の可能性あり)				胴部上半1/3	D	a	・磨擦横線文(5本4本2段)→横位ミガキ→斜 ・横位ミガキ→赤彩 亀付着 ・斜位ミガキ→赤彩(頸) 斜・横位ハケ 部分的に赤彩付着(胴)	
9	鉢	4.0			胴部下半1/2	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	

土製品

図版No	器 種	法 量			重量g	残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高						
10	穿孔粘土塊	2.72×2.45×2.4			12.2	—	AB	b	・ナデ 穿孔径0.36	
11	土製円盤	3.1	0.77	—	9.00	完存	A	a	・摩滅 縁周ケズリ ・ハケ	赤 破片転用
12	有孔土製円盤	(3.0)	0.75	(0.55)	3.96	全形1/3	D	a	・ミガキ ・ナデ	赤 破片転用
13	有孔土製円盤	(2.8)	0.50	(0.45)	1.74	全形1/2	A	a	・摩滅 ・摩滅	赤 破片転用
14	有孔土製円盤	(3.0)	0.65	(0.40)	1.79	全形1/2以下	A	a	・ミガキ 赤彩 ・ミガキ 赤彩	鉢 破片転用

本址出土土器は実測・拓影図の他に口縁部34個体あり、内訳は弥生後期変8、変8 8個体、中期変1、変6、中・後期の鉢・高杯10、不明1個体であった。底部は11個体あり、内訳は壺6、甕4、高杯脚1個体であった。

SB04

図版No	器 種	法 量			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺	13.0			口縁部2/3	A	a	・磨擦横線文(6本2段)→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁)刷黒色化	
2	甕	18.0			口縁部1/4	A	a	・座状文→波状文(上→下) ・摩滅 横位ミガキ	
3	甕		7.4		底部完存	AD	a	・横位ミガキ→部分的赤色顔料残存 ・摩滅 ナデ	内面底
4	甕		8.2		底部1/2	DE	a	・斜位ハケ→横位ミガキ 底面黒色化 ・斜位ハケ→斜位ミガキ→ナデ	焼成歴
5	甕		8.0		底部1/4	AD	a	・斜位ミガキ ・ナデ(弱い横位ミガキ)	
6	甕		6.5		底部完存	AD	a	・摩滅 横位ミガキ 部分的に黒色化 ・摩滅 横位ミガキ 部分的に赤色顔料付着 黒色化	
7	壺		12.4		底部完存	B	a	・摩滅 ・摩滅 器壁一部剥落 黒色化	2次焼成
8	高杯	27.0			胴部1/6	B	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	
9	鉢	15.6			口縁部1/8	B	a	・横・斜位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
10	甕口		9.0		接合部完存 胴部1/6	A	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 ・ナデ	穿孔径0.5-0.6
11	壺				胴部下半1/4	AD	a	・摩滅 ・斜位ハケ 器付着	

本址出土土器は実測・拓影図の他に11種部47個体あり、内訳は弥生後期壺6、甕10、鉢・高杯27、不明4個体であった。底部は20個体あり、内訳は壺4、甕10、鉢2、高杯脚4個体であった。

SB06

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	甕	12.3	4.0	14.2	ほぼ完存	B	a	・糜状文(1層)→波状文(口縁上→下脚不規則) ・ケズリ(下半) 黒色化 ・横位ミガキ	
2	甕	11.2			口縁部3/5	BD	a	・糜状文(2層)→波状文 ・横位ミガキ	
3	甕	12.2			口縁部1/4	D	a	・糜状 櫛形横線文(3本上→下)黒色化 ・摩滅	
4	甕		8.8		底部	D	a	・縦位ミガキ ・横位ミガキ	上げ底
5	甕		5.4		底部	AD	a	・縦位ミガキ ・ナデ	
6	甕		5.4		底部	AC	b	・縦位ミガキ 黒色化 ・ナデ	
7	甕		4.8		底部	C	a	・摩滅 ・摩滅	
8	甕		6.4		底部	A	a	・摩滅 縦位ミガキか ・ケズリ→ハケ	
9	甕		6.8		底部	AD	a	・摩滅 縦位ミガキか ・ナデ 部分的に赤彩残存	
10	ミニチュア (甕)		2.8		底部	A	a	・縦位ミガキ ・ミガキ→ナデ	
11	鉢	13.2	4.0	6.0	全形2/5	AD	a	・指頭丘痕→横・斜位ミガキ→赤彩 底面赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
12	鉢	12.6	4.4	5.8	ほぼ完存	AD	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ 黒色化 ・斜・斜位ミガキ	
13	高杯				脚部	C	b	・摩滅 赤彩 爪状片痕	焼成堅
14	鉢		5.6		底部	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 底面ミガキ ・横位ミガキ→赤彩	

本出土土器は掲載した実例・拓影図の他に口縁部16個体あり、内訳は弥生後期5、甕3、鉢・高杯7個体、中期51個体であった。底部は10個体あり、内訳は甕5、甕3、鉢2個体であった。

SB09

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	甕	25.2			口縁部1/2	A	a	・櫛形横線文(8本4段)→T字文(7本)→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁)ハケ(脚)	頸と胴部の接点なし。 図上復元
2	鉢	28.6			口縁部1/2	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
3	甕	29.0			口縁部1/6	A	b	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
4	甕	24.0			口縁部1/3	A	a	・櫛形横線文→T字文→縦位ミガキ(密)→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩 集付着	
5	甕	26.4			口縁部1/3	CD	a	・斜位ミガキ→縦位ミガキ→ナデ(口縁)→赤彩 ・横・斜位ミガキ→赤彩 黒色化	
6	甕				胴部上半1/3	A	a	・斜位ハケ→櫛形横線文→斜位ミガキ→赤彩 集付着 ・摩滅 ナデ 一部黒色化	
7	白付甕	26.4			口縁部2/3 接合部完存 胴部下半1/6	AE	b	・糜状文(8本3段4層)→ボタン状貼付文 横 ・斜位ミガキ→赤彩 口縁端部突起 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) 斜位ハケ→ナデ (脚)	胴上半と下半部の接点なし。 図上復元
8	甕	8.8			口縁部2/3	A	a	・摩滅 ハケ→ミガキ 黒斑 ・摩滅 ナデ	
9	甕	8.4	4.0	13.0	ほぼ完存	AD	a	・櫛形横線文(7本)→櫛形T字文(12単位)→縦位ミガキ 黒斑 ・横位ミガキ(口縁)→ナデ	
10	高杯	21.4	12.8	19.6	完存	A	a	・横・斜位ミガキ(杯) 縦位ミガキ(脚)→赤彩 ・斜・横位ミガキ→赤彩(杯) ナデ(弱いケズリ)→部分赤彩(脚)	
11	甕		8.2		底部3/4	A	a	・横・斜位ミガキ(頸)→部分赤彩 一部黒色化 ・摩滅 ハケ 一部黒色化	
12	甕		8.1		底部完存	AD	a	・ハケ→縦位ミガキ→横位ミガキ 集付着 黒色化 ・横位ハケ→部分的に縦位ハケ	

4	高杯	19.4			口縁部1/6	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
5	壺	21.6			口縁部1/8	A	a	・横位ミガキ→赤彩(口縁部) ・横位ミガキ→赤彩	
6	甕				胴部上半1/4・下半1/2	D	a	・帯指模線文→斜位ミガキ→赤彩煤付着 ・ハケ→ナデ 胴下半黒色化	
7	壺				胴部上半1/4	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ 黒斑 ・摩滅 器壁剥落	
8	壺		9.6		底部1/3	A	a	・摩滅 ハケ→斜位ミガキ→ナデ→縁辺ケズリ ・斜位ハケ	焼成堅
9	高杯	31.5			杯部ほぼ完存	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
10	高杯	21.0			杯部1/6	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅 斜位ミガキ→赤彩(杯)	焼成堅
11	高杯		17.6		脚部ほぼ完存	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅(杯) 斜位ハケ→ナデ(脚)	
12	台付壺				接合部完存	B	a	・摩滅 斜位ミガキ→赤彩 ・摩滅 ナデ(脚) 胴黒色化	
13	高杯				接合部完存	A	a	・縦位ミガキ→斜位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(杯)ナデ(脚)	
14	鉢	26.5			口縁部1/6	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・斜位ミガキ→赤彩	
15	鉢	20.4	5.5	8.0	口縁部1/3 底部完存	C	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ(密)→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	穿孔2 孔径0.3
16	鉢		4.7		底部1/3	AD	a	・縦位ミガキ→赤彩 一部黒色化 ・斜位ミガキ→赤彩	
17	有孔鉢		5.6		底部1/2	AD	a	・ナデ→縁辺ケズリ 黒色化 ・横位ミガキ	孔径1.4
18	壺	16.2			口縁部1/4 胴部2/3	AD	a	・摩滅 流状文→縦位ミガキ 黒色化 ・摩滅 横位ミガキ 一部黒色化 ・横位ミガキ	
19	壺	14.1			口縁部1/2	D	a	・流状文→帯指模線文(7本) ・横位ミガキ	
20	壺				胴部2/5	D	a	・流状文(9本2塵1列)→流状文→斜位ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ→ナデ 指腹斥痕 黒色化	
21	壺		5.1		底部完存	A	a	・摩滅 底面黒色化 ・摩滅 ナデ(弱い斜位ミガキ)	
22	壺				胴部1/2	AC	a	・摩滅 区画沈線文 竹管刺突列立文 横線文 ・摩滅	摩滅著しい

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が42個体あり、内訳は弥生後期壺15、甕9、鉢・高杯17個体、中期壺1個体であった。底部は15個体あり、内訳は壺5、甕6、鉢3、不明1個体であった。

S B13

図版No.	器 種	法 量			現 存 度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	台付壺	12.0	8.3	17.1	ほぼ完存	E D	a	・摩滅 流状文(7本2塵)→流状文 煤付着 黒色化 ・摩滅 横位ミガキ(脚)口縁縁辺・胴中位黒色 化	
2	壺		5.6		底部完存	E	a	・摩滅 縦位ミガキ ・ナデ(弱い横位ミガキ)	
3	甕		6.8		底部1/2	A	a	・ハケ→縦位ミガキ 黒斑 ・斜位ミガキ 底面黒斑	
4	鉢(有孔鉢か)		7.1		口縁部1/8 胴部1/4	E	a	・摩滅 ナデ ・摩滅 横位ミガキ	口縁と胴部の接点 なし 図上復元
5	鉢		15.5		口縁部1/6	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	
6	壺	3.9 胴部			縁部完存	C	a	・縦位ミガキ 一部黒色化 ・ナデ(底部)ナデ(弱い斜位ミガキ)	穿孔径0.45~0.65
7	ミニチュア (甕)	2.6	2.0	3.8	完存	D	a	・帯指模線文(3本)→帯指T字文 指頭斥痕 黒色化 ・指腹斥痕	

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が35個体あり、内訳は弥生後期壺4、甕7、鉢・高杯18、不明6個体であった。底部は9個体あり、内訳は壺3、甕2、鉢3、高杯1個体であった。

SB14

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外周調整 ・内周調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	25.0			胴部ほぼ完存	A a	・縹緋横線文(5本)→T字文(5本2列4単位) ・縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩		
2	壺				口縁部2/3	A a	・縹緋横線文→縦位ミガキ→赤彩 ・縹緋 横位ミガキ→赤彩		
3	壺				口縁部1/6 胴部1/2	A a	・縹緋 縹緋横線文→縹緋T字文(2条) ・縹緋 赤彩(口縁) 器壁剥落	口縁と胴部の接点なし 図上復元	
4	壺		8.8		胴部下半完存	A a	・縹緋 縦位ミガキ 黒斑 ・横・斜位ハケ		
5	壺				胴部下半3/4	FD a	・縹緋 縦位ミガキ ・縹緋 ナデ 黒色化		
6	広口壺	14.0			胴部上半1/4	A a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩		
7	広口壺	8.0			口縁部1/6	A a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	穿孔2 孔径0.2	
8	甕	13.8	7.0		口縁部1/2 胴部上半1/6 底部完存	AD a	・縹緋 座状文 波状文 一部黒色化 ・縹緋 横位ミガキ 黒色化	口縁・胴・底部の接点なし 図上復元	
9	甕		7.0		底部完存	D a	・ハケ→縦位ミガキ 黒色化 ・ナデ 黒色化	上げ底	
10	甕		5.1		底部完存	CD a	・縹緋 底面部分的に赤色顔料付着 ・ハケ→ナデ 黒色化		
11	甕		6.2		底部完存	D a	・縹緋 黒色化 ・ナデ(弱いミガキ) 黒色化		
12	鉢		4.5		底部3/4	A a	・縦位ミガキ→赤彩 底面ミガキ ・横・斜位ミガキ→赤彩		
13	鉢	22.8	6.6	10.1	ほぼ完存	A a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・縹緋 横位ミガキ→赤彩 底面器壁剥落 黒色化		
14	有孔鉢		6.3		此部完存	A a	・縹緋 黒斑 ・縹緋	孔径1.0	
15	高杯	18.0			口縁部1/6	A a	・縹緋 縦位ハケ→横位ミガキ→赤彩 ・縹緋 横位ミガキ→赤彩		
16	鉢	18.0			口縁部1/3	AD a	・縹緋 一部黒色化 ・縹緋 一部黒色化		
17	高杯		14.4		接合部完存 胴部ほぼ完存	A a	・縹緋 縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・縹緋 ナデ(脚)→赤彩(杯)		
18	台付壺	11.2	9.2	66.0	口縁部1/4 胴部下半・接合部 ほぼ完存	FD a	・縹緋 縹緋横線文(6本)→赤彩 ・縹緋 赤彩(口縁・胴)	口縁と胴下半の接点なし 図上復元 2次焼成	
19	高杯				杯部1/2 接合部完存	A a	・縹緋 赤彩 一部黒色化 ・縹緋 横位ミガキ→赤彩(杯)		
20	高杯		9.0		接合部完存脚部1/2	D a	・縹緋 ミガキ→赤彩 煤付着 黒色化 ・横位ミガキ→赤彩(杯) 煤付着(杯)ナデ(脚)	2次焼成 遺転用か	
21	台付壺				接合部完存	B a	・縹緋 縦位ミガキ→赤彩 ・縹緋 杯黒色化		
22	高杯		12.2		接合部 脚部下半ほぼ完存	A a	・縹緋 赤彩 ・縹緋 ナデ 赤彩(杯)	脚と脚部の接点なし 図上復元	
23	ミニチュア(高杯)		4.9		脚部ほぼ完存	D a	・縹緋 横位ミガキ→赤彩 ・縹緋		
24	高杯				接合部・脚部上半完存	AD a	・縦位ミガキ→赤彩 一部黒色化 ・縹緋 赤彩(杯)ナデ 脚黒色化		
25	高杯か(台付壺の可能性あり)				接合部・脚部上半完存	E a	・縹緋 ・縹緋 ハケ		

本出土土器は採集した美濃・新形区に口縁部が29個体あり、内訳は弥生後期登4、甕11、鉢・高杯14個体であった。底部は39個体あり、内訳は壺12、甕13、鉢9、高杯脚3、不明2個体であった。

SB15

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外周調整 ・内周調整	備考
		口径	底径	器高					
1	甕	19.8			胴部上半5/6 口縁部完存	CD a	・座状文(9本4条)→波状文→縦位ミガキ 1/2 ・黒色化 ・横位ハケ→ナデ	焼成堅	
2	甕	10.7	4.7	12.1	ほぼ完存	D a	・ナデ→縹緋横線文(6本)→縦位ミガキ 煤付着 黒色化 ・指環圧痕→横位ミガキ 瓦状工具の線状痕	器形の歪み顕著	

3	壺	23.4		口縁部1/6	DE	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・磨粒剥落 横位ミガキ→赤彩	
4	壺			全形1/2	AB	a	・摩滅 帯橋横線文(4本3段) ・横・斜位ナデ	器壁厚い
5	甕	8.6		胴部下半1/4	AB	a	・摩滅 縦・斜位ミガキ ・摩滅 斜位ハケ	
6	壺	5.0		胴部完存	A	a	・帯橋横線文(3段)→T字文(9本1列5単位) →縦・横位ミガキ→赤彩 ・ナデ(ハケ)	
7	甕	5.4		底部完存	D	a	・摩滅 縦位ミガキ ・横位ミガキ 黒色化	
8	甕	7.3		胴部下半完存	A	a	・縦位ミガキ ・ナデ	
9	壺	6.7		胴部1/2 底部完存	A	a	・縦位ミガキ 黒斑 ・ナデ	
10	鉢	22.5		口縁部1/5	AC	a	・摩滅 擦痕 ・斜位ハケ→ナデ	
11	鉢	12.3		全形3/4	AC	a	・摩滅 黒斑 ・摩滅 横・縦位ミガキ	
12	台付甕	6.4		胴部ほぼ完存	BD	a	・摩滅 縦位ミガキ ・横位ミガキ(杯) ナデ(脚)	
13	有孔鉢	5.5		底部完存	A	a	・斜位ミガキ 黒斑ミガキ 一部黒斑 ・ナデ	孔径0.8
14	異形壺			頸部1/3	AE	a	・貼付輪帯→ナデ 一部黒色化 ・ナデ	

本址出土土器は掲載した実測図・拓影図の他に口縁部が3個体あり、内訳は壺2、甕8、鉢・高杯3個体であった。底部は11個体あり、内訳は壺5、甕4、鉢2個体であった。

SB16

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	21.0			口縁・胴部完存	A	a	・帯橋横線文(6本3段)→福袋のハケ状工具による縦位ミガキ 黒斑2カ所 ・斜位ハケ→横位ミガキ ・ナデ	
2	壺	14.4			口縁部1/4	AD	a	・横文→山形突起→ナデ	
3	甕				胴部下半1/3	AD	a	・ナデ 黒色化 ・ハケ→ナデ 黒色化	
4	台付甕	9.6			胴部ほぼ完存	AD	a	・座状文(6本2層)→波状文→斜・横位ミガキ 集付着 黒色化 ・摩滅 ナデ 下部集付着	
5	甕	24.2			口縁・胴部上半ほぼ完存	AD	a	・座状文(12本3～5層8単位)→波状文→縦位ミガキ 黒色化 ・横・斜位ミガキ→ナデ(口縁) 一部黒色化	
6	甕	7.6			胴部下半2/3 底部完存	D	a	・縦位ミガキ 集付着 黒色化 ・横・斜位ミガキ 下部帯状に集付着黒色化	
7	甕				胴部下半1/4	D	a	・波状文→縦位ミガキ 上部集付着 黒色化 ・横位ミガキ 黒色化	
8	甕	7.0			胴部下半完存	E	a	・縦位ミガキ 黒斑2カ所 ・ハケ→ナデ	
9	鉢	4.8			底部完存	A	a	・縦位ミガキ→斜位ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩	
10	高杯	7.3			胴部ほぼ完存	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅(杯)ナデ(脚)	
11	高杯				接合部完存	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・ミガキ→赤彩(杯)ナデ(脚)	
12	高杯	6.2			接合部完存 脚部1/3	FD	a	・摩滅 ・摩滅 杯接合部黒色化	2次焼成
13	高杯				接合部完存	A	a	・摩滅 赤彩か 黒斑 ・ナデ	

本址出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が33個体あり、内訳は弥生後期壺8、甕7、鉢・高杯17個体、中期甕1個体であった。底部は10個体あり、内訳は壺2、甕5、鉢2、不明1個体であった。

SB17

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	34.0			口縁部1/4	B	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横・斜位ミガキ→赤彩	

2	壺	29.6		口縁部1/6	AD	a	・ハケ→櫛栞横線文→T字文(6本1列)→縦位ミガキ→横位ミガキ→口縁縁辺のみ赤彩 ・横・斜位ミガキ→赤彩	
3	壺	26.0		口縁部1/6	AC	a	・縦位ミガキ→赤彩 黒斑 ・横位ミガキ→赤彩	
4	壺			胴部完全 胴部上半3/4	AD	a	・横線文(6本4段上→下)→T字文(6本2条 2単位1条1単位)→縦・斜位ミガキ→赤彩 3/4黒斑 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩(上部)斜位ハケ→ナ デ 口縁黒斑	
5	壺	13.8		口縁部1/2	AD	a	・摩滅 塵状文(14本2条)→波状文 煤付着 ・摩滅 横位ミガキ	
6	壺	7.8		底部1/2	A	a	・摩滅 ・ナデ	
7	壺	7.6		底部1/6	D	a	・縦位ミガキ 黒色化 ・弱い斜位ミガキ(ナデ)	
8	鉢	5.8		底部1/4	C	b	・摩滅 赤彩 底面赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
9	壺	6.0		底部2/3	AD	a	・縦位ミガキ 縁辺刺突痕 黒色化 ・摩滅	
10	高杯			接合部完全	E	u	・縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩(杯)ナデ(脚)	

土製品

図版No	器種	全長	径	残存度	色調	胎土	調整
11	スプーン	2.1	0.8	胴部破片	B	a	・ミガキ→赤彩

本址出土土器は掲載した資測図・拓影図の他に口縁部が82個体あり、内訳は弥生後期8、壺21、中期壺2、壺2、中・後期鉢・高杯49個体であった。此部は17個体あり、内訳は壺6、鉢11個体であった。

SB18

図版No	器種	法 量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺	16.0			口縁部2/3	A	a	・櫛栞横線文→T字文(2本1列)→縦位ミガキ→赤彩 ・斜位ミガキ→赤彩 口縁縁辺黒色化	
2	壺		6.5		胴部1/4 底部完全	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 一部器壁剥落	
3	壺		11.8		口縁部3/4	D	a	・櫛栞横線文(11本)→縦位ミガキ ・横位ミガキ(脚)ナデ(口縁)	部分的に赤彩残存
4	壺				胴部上半1/3	A	a	・縦位ハケ→櫛栞横線文(8本4段)→横位ミガキ ・摩滅 横位ハケ	
5	壺				胴部1/3	AC	a	・摩滅 櫛栞横線文(9→11本6段)→T字文 (11本1列)→赤彩 ・摩滅	
6	壺	17.0			胴部上半1/3	D	a	・ハケ→櫛栞横線文(10本)→波状文 黒斑 ・横位ミガキ 黒色化	
7	壺	11.6			胴部上半1/4	D	a	・摩滅 塵状文(2条)波状文 ・摩滅 輪轆み取痕等に残存	
8	壺		7.6		胴部1/3 底部完全	DE	a	・斜位ハケ→波状文→縦位ミガキ 煤付着 黒色化 ・ナデ 煤付着	
9	壺	5.0 胴部			底部2/3	D	a	・摩滅 指頭圧痕 黒色化 ・摩滅 黒色化	2次焼成 穿孔径0.6
10	壺				底部1/2	B	a	・摩滅 ナデ(弱い縦位ミガキ) ・ナデ(底部)横位ミガキ 黒色化	
11	高杯	25.0			ほぼ完全	BD E	a	・縦・斜位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 杯中心1→ナデ付に煤付着 ・横位ミガキ→赤彩(杯)杯下部煤付着	巻転用 2次焼成
12	高杯	15.2			杯・接合部ほぼ完全	A	a	・摩滅 横位ミガキ(杯)縦位ミガキ(脚)→赤彩 ・横・斜位ミガキ→赤彩(杯)ナデ(脚)	
13	高杯				接合部完全	AD	a	・摩滅 塵状文(8本3条)→縦位ミガキ→赤彩 一部器壁剥落 赤彩(杯)横位ハケ→ナデ(脚)	穿孔4 推定穿孔径0.8
14	高杯	8.8			脚部5/6	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・ナデ	
15	高杯	9.0			脚端部3/4	A	a	・横・斜位ミガキ(密)→赤彩 ・ナデ	
16	高杯 (ミニチュア か)				脚部7/8	A	a	・摩滅 赤彩 ・ナデ	

17	内付甕				接合部完存	AB	a	・厚減 ・厚減 輪積み紋顯著に残存(脚)	
18	高杯				接合部完存	E	a	・縦位ミガキ ・横位ミガキ ナテ(脚) 杯黒色化	蓋取用か
19	内付甕				接合部完存	B	a	・厚減 ・横位ミガキ(杯) ナテ(脚)	
20	甕	10.0			底部1/3	A	a	・厚減 縦位ミガキ ・厚減 器壁剥落	
21	甕	11.2			底部完存	A	a	・縦位ミガキ(粗) 底面ミガキ ・器壁剥落	やや上げ底
22	甕	11.0			底部完存	D	a	・厚減 ・厚減 ナテ 黒色化	
23	甕	9.2			底部完存	A	a	・縦位ミガキ→部分赤彩 底面ミガキ ・横位ハケ→ナテ	湾曲底
24	甕	6.2			底部完存	E	b	・縦位ミガキ(密) 底面ミガキ 部分赤彩 ・斜・横位ミガキ(密) 底面ミガキ	上げ底
25	甕	7.6			底部完存	E	a	・厚減 縦位ミガキ ・厚減	
26	鉢	4.6			底部完存	AE	a	・斜位ミガキ→赤彩 底面ミガキ ・横位ミガキ→赤彩 底部一部厚減 黒色化	
27	鉢	5.6			底部完存	A	a	・斜位ミガキ→ナテ ・横位ミガキ→赤彩	
28	鉢	5.6			底部完存	AD	a	・ミガキ→赤彩 底面黒斑 ・横位ミガキ→赤彩	
29	鉢	3.2			底部完存	D	a	・横・斜位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
30	甕	3.9			底部ほぼ完存	A	a	・厚減 ・横位ミガキ	
31	甕				胴部1/4	AD	a	・横・斜位ミガキ→赤彩 黒斑 ・横・斜位ハケ 黒色化	
32	ミニチュア (白・鉢)	4.1	2.4	1.5	全形1/2	A	a	・厚減 胎頭圧痕 ・厚減	

本址出土土器は掲載した実例・拓影図の他に口縁部が75個体あり、内訳は弥生後期型32、甕14、鉢・高杯29個体であった。底面は39個体あり、内訳は甕12、甕13、鉢9、高杯3、不明2個体であった。

SB20

図録No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外割調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	内付き甕				胴・接合部ほぼ完存	AF	a	・腰状文(11本2段2段上→下25単位)→横位ミガキ→赤彩 胴上半横付着 ・厚減 横位ミガキ・赤彩(口縁)ナテ(脚) 胴下半横付着 黒色化 器壁一部剥落	
2	甕	9.0			口縁部1/2	C	c	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩 輪積み痕→ナテ	2次焼成 焼成型
3	甕	19.4	30.8	7.5	ほぼ完存	A	a	・厚減 腰状文(8本2段)→波状文 縦位ミガキ 黒斑4ヶ所 ・厚減 横位ミガキ ナテ	
4	甕				胴部1/2	E	a	・厚減 縦位ハケ→横位ミガキ→帯横線文(7→10本3段) ・厚減	
5	甕				胴部上半1/4	AD	a	・帯横線文(4段)→T字文(5本1列)→斜位ミガキ→赤彩 ・厚減	
6	甕	10.6			底部1/2	AC	a	・縦位ミガキ ・横位ハケ→ナテ	
7	甕	7.4			底部完存	A	a	・厚減(縦位ミガキ) ・横位ハケ	2次焼成
8	甕	14.0			口縁部1/3	CD	c	・縦位ハケ→腰状文(2座)→波状文 ・横位ハケ→横位ミガキ	
9	甕	12.5			胴部上半7/8	DE	a	・厚減 腰状文(2座)→波状文(上→下)→縦位ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ	
10	内付甕	9.5			胴部ほぼ完存	D	a	・腰状文(10本2座)→波状文→斜・横ミガキ一部黒色化 ・胎頭圧痕 ナテミガキ	焼成型 器形の劣み顯著
11	甕	4.0			底部完存	D	a	・ケズリ→縦位ミガキ 黒色化 ・ナテ 赤色顔料付着	
12	甕				胴部下半1/2	AB	a	・斜位ハケ→波状文→斜位ミガキ ・横・斜位ハケ	
13	高杯	28.9			杯部ほぼ完存	AC	b	・斜位ミガキ→赤彩 1/2黒色化 ・斜位ミガキ→赤彩	口縁部波状突起

第3章 各時代の遺構・遺物

14	高杯	24.0			口縁部1/4	C	b	・横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩	口縁部破状突起
15	高杯	26.0			杯部1/6	FD	a	・摩滅 横・斜位ミガキ→赤彩 ・横・斜位ミガキ→赤彩	
16	高杯	24.0			杯部2/5	AD	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩 黒色化	蓋取用か
17	高杯				接合部1/2	D	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩(杯) ナデ(脚)	
18	高杯				接合部完存	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(杯) ナデ(脚)	
19	鉢	13.2	5.0	6.6	完存	A	a	・横・斜位ミガキ→赤彩 底面ミガキ ・横位ミガキ→赤彩	
20	鉢	14.0			胴部完存	A	a	・斜位ミガキ→赤彩 ・摩滅 ナデ 赤彩	
21	高杯(鉢か)				胴部下半1/2	A	a	・縦・斜位ミガキ→赤彩 ・斜位ミガキ→赤彩	
22	壺		8.0		全形1/3	AC	a	・ナデ 指頭片底 縁辺黒色化 ・ナデ(弱い横位ミガキ)	
23	ミニチュア (白)	2.2	2.0	3.2	完存	D	a	・ナデ 指頭片底 ・ナデ	
24	ミニチュア (白)	3.0	2.2	3.7	完存	BD	a	・ナデ 指頭片底 ・ナデ	

本出土土器は実測・拓影図の他に口縁部が46個体あり、内訳は発生後期壺7、壺13、鉢・高杯26個体であった。底部が15個体あり、内訳は壺5、壺7、鉢3個体であった。

S B21

図版No.	器 種	法 量			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	台付き壺	14.2			胴・口縁部ほぼ完存	E	a	・摩滅 座状文(8~9本2康2単位) 縦位ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ 指頭片底	座状文の原体先溝消れ 粗雑な施文
2	壺				胴部7/8	AD	a	・康状文(3康)→波状文→縦・斜位ミガキ 灰付着 ・斜位ミガキ 一部黒色化	
3	壺		5.2		胴部下半完存	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 灰付着 ・ナデ 黒斑 灰付着	
4	鉢		5.0		底部1/2	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅	
5	壺				胴部下半1/4	AE	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・斜位ハケ	
6	鉢		6.6		底部2/3	A	a	・摩滅 斜位ミガキ→赤彩 底面黒斑 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	

本出土土器は実測・拓影図の他に口縁部が12個体あり、内訳は発生後期壺1、壺6、鉢・高杯5個体であった。底部は9個あり、内訳は壺2、壺4、高杯壺2、不明1個体であった。

S B22

図版No.	器 種	法 量			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺	25.6			口縁部完存	A	a	・帯状横線文→丁字文(2列)→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横・斜位ミガキ→赤彩 ・器壁剥落	蓋取用か
2	壺	21.8			口縁部完存	C	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ ・横位ミガキ	
3	壺				胴部1/4	A	a	・帯状横線文→丁字文(4本3列)→縦位ミガキ→赤彩 ・ハケ→ナデ→横位ミガキ→赤彩(上部)	
4	壺	15.6			口縁部1/2	C	a	・ハケ→横線文→斜・縦位ミガキ→ナデ ・横・斜位ミガキ→ナデ(口縁部)	
5	広口壺	11.6			口縁部1/5	D	a	・縦・横位ミガキ→赤彩 灰付着 ・ナデ→横位ミガキ→赤彩(口縁) 黒色化	
6	壺				胴部・胴部上半完存	AB	a	・縦位ミガキ→ナデ ・横位ミガキ→ナデ	
7	壺		9.8		胴部下半2/3	AD	a	・斜位ミガキ→赤彩 ・横・斜位ハケ 灰付着	
8	壺		10.0		胴部下半・底部完存	AB	a	・摩滅 ハケ→縦・斜位ミガキ ・摩滅 器壁剥落	
9	壺		15.9		口縁・胴部上半ほぼ完存	D	a	・ハケ→座状文(2本4本4本3段1腹上→下)→波状文(粗線)→縦位ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ(口縁) ナデ(脚) 黒色化	

10	壺	13.4			口縁部完存	DE	a	・摩滅 底状文→波状文 ・弱い横位ミガキ(ナデ) 黒色化		
11	壺		7.0		胴部下半完存	AD	a	・波状文 ケズリ→縦位ミガキ ・横位・斜位ナデミガキ 炭化物・煤付着		
12	壺				胴部上半1/2	AD	a	・摩滅 波状文(上→下)→麻状文(2段2塵) 煤付着 ・摩滅・横位ミガキ		
13	壺		5.3		胴部下半2/3	D	a	・縦位ミガキ 黒色化 底面剥落 ・ナデ 部分黒色化		
14	高杯		9.4		胴部1/2	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・斜位ハケ→ナデ 磨滅剥落(杯)		
15	高杯		8.8		胴部ほぼ完存	A	a	・縦位ミガキ→斜位ミガキ→赤彩 ・ナデ		
16	高杯				胴部ほぼ完存	ED	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・ナデ 磨滅 部分赤彩 黒色化		
17	高杯				胴部ほぼ完存	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(杯) 斜位ハケ→ナデ(脚)		
18	高杯				伏合蓋完存	A	a c	・縦位ミガキ→斜位ミガキ→赤彩 ・斜位ミガキ→赤彩(杯) ナデ(脚)		
19	高杯		6.6		胴部完存	AD	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・ナデ 黒色化		
20	台付き甕				胴部3/4	B	a	・縦位ミガキ ・横位ミガキ(胴) ナデ(脚) 黒色化	円形接合	
21	台付き甕				胴部3/4	B	a	・摩滅 ・摩滅 黒色化	円形接合	
22	鉢	16.0	9.1	5.2	ほぼ完存	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩		
23	鉢		11.6	4.8	5.7	全形1/2	AB	a	・縦・斜位ミガキ→赤彩 底面黒色化 ・摩滅 斜位ミガキ→赤彩	
24	鉢			3.4	全形4/5	A	a c	・横・斜位ミガキ→赤彩 底面赤彩 ・横位ミガキ→赤彩		
25	有孔鉢			7.1	底部完存	A	a	・摩滅 ・摩滅 ナデ	孔径1.4~1.5	
26	高杯				口縁部破片	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩	口縁部装状突起	
27	蓋		3.2		3.2	3.2	3.2	・縦位ミガキ ・ナデ 部分赤彩(縁部) 黒色化	穿孔径0.6	
28	ミニチュア (甕)			4.3	底部1/3	D	a	・指頭圧痕→縦位ミガキ ・ナデ		
29	ミニチュア (甕)			3.0	胴部下半1/2	AD	a	・摩滅 ・ナデ 指頭圧痕		

本出土土器は掲載した実例・拓影図の他に口縁部が70個体あり、内訳は弥生後期壺18、甕21、鉢・高杯31個体であった。底面は39個体あり、内訳は壺7、甕20、鉢6個体であった。

S B23

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺				胴部1/3 胴部1/2	BC	a	・摩滅 磨滅横線文(3~5本3段)→縦位ミガキ 黒斑3カ所 ・摩滅	
2	壺				胴部完存	A	a	・磨滅横線文(7~8本8段)→T字文(8本4単位)→ミガキ→赤彩 ・摩滅 ミガキ→赤彩(上部)ナデ	
3	壺				胴部上半1/2	A	a	・斜位ハケ→磨滅横線文(9本)→横位ミガキ ・横・斜位ハケ	
4	壺		13.0		口縁部2/3	D	a	・麻状文(8本1か2塵)→波状文 煤付着 黒色化 ・摩滅 ナデ 煤付着 黒色化	
5	台付き甕		9.4		口縁部2/3 胴部上半ほぼ完存	AD	a	・ハケ→麻状文(9本1塵)→波状文→縦位ミガキ→ナデ 煤付着 ・ハケ→ナデ 口縁黒色化	
6	壺				胴部上半1/4	A	a	・摩滅 麻状文(2塵)波状文 ・摩滅 ハケ	
7	鉢		12.7		胴部1/5	CD	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 一部黒色化 ・横位ミガキ→赤彩 底面磨滅剥落 黒色化	
8	壺		5.0		底部完存	D	a	・縦位ミガキ 底面ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ 底面ミガキ	
9	壺		8.1		胴部下半5/6	A	a	・横位ハケ→縦位ミガキ(底) ・横・斜位ハケ 一部黒色化	

本出土土器は掲載した実例・拓影図の他に口縁部が22個体あり、内訳は弥生後期壺8、甕4、鉢・高杯8個体、中期壺1、不明1個体であ

第3章 各時代の遺構・遺物

た。底部は16個体あり、内訳は壺3、甕12、鉢1個体であった。

S B24

図面No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺 (鉢か)	28.2			口縁部1/3	A	a	・摩滅 ・摩滅 横位ミガキ	
2	壺	17.6			口縁部1/3	A	a	・摩滅 口縁縁辺赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
3	壺	13.0			口縁部1/3	A	a	・縦位ミガキ ・横位ミガキ	
4	壺	13.0			口縁部7/8	C	a	・摩滅 斜位ハケ ・摩滅 斜・横位ハケ	2次焼成 器彩変形
5	壺				胴部1/2	A	a	・摩滅 帯指襷織文(7-9本4段)→電描T字文(3本)→電描織文→赤彩 ・摩滅 赤彩(上部)	
6	壺				胴部5/6	A	a	・摩滅 帯指襷織文(3段)→T字文(7本1列) →縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅	
7	壺				胴部1/6	A	a	・摩滅 帯指襷織文(6-8本4段)→赤彩 ・摩滅	
8	壺				胴部1/3	AD	a	・摩滅 帯指襷織文→T字文(6-7本1列)→ 斜位ミガキ→赤彩 黒斑 ・摩滅	
9	壺				胴部1/3	A	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅	
10	壺				胴部1/2	A	a	・摩滅 縦・斜位ミガキ 黒斑 ・摩滅 ハケ ナテ	
11	壺		4.9		胴部完存	A	a	・摩滅 帯指襷織文→赤彩 ・摩滅 赤彩(口縁)横位ハケ(側)	2次焼成
12	鉢	13.0	4.4	9.2	完存	BE	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 黒斑2カ所 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	
13	鉢	15.0	6.4	8.3	全形1/3	E	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	
14	鉢	7.2	9.5	5.0	口縁部1/3 底部完存	D	a	・摩滅 ミガキ→赤彩 ・摩滅 ハケ→ナテ	穿孔2 孔径0.4
15	鉢	8.5	4.9	4.2	全形1/3	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	
16	鉢 (高杯か)	16.2			余形1/2	A	a	・横位ミガキ→赤彩 口縁縁辺帯付着 ・横位ミガキ→赤彩 口縁縁辺幅約3.0cm帯付着 黒色化	蓋紐用か
17	鉢	10.0	3.1	4.1	全形1/4	A	b	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
18	有孔鉢	5.6			底部完存	A	a	・横位ミガキ→赤彩 底部部分ミガキ→赤彩 風流状穿孔 ・斜位ミガキ→赤彩	穿孔径2.3-2.5
19	有孔鉢	5.7			底部3/4	AC	a	・摩滅 ・摩滅	穿孔径1.3-1.4
20	有孔鉢	6.4			底部ほぼ完存	AB	a	・摩滅 ・横位ミガキ	穿孔径1.7
21	蓋	3.9			縁部完存	A	a	・摩滅 ・摩滅 黒色化	穿孔径0.3-0.4
22	蓋				全形5/6	A	a	・摩滅 縦位ミガキ 指柄圧痕 ・ナテ 指柄圧痕	
23	甕	4.8			胴部 F字2/3	DE	a	・唐状文(1段)→T字文(6本1列)→波状文→ 縦位ミガキ 黒色化 ・ナテ	やや上げ底
24	甕	6.0			底部1/2	A	a	・縦位ミガキ→部分赤彩(準彩と異なる) ・斜位ミガキ	
25	付付甕				接合部完存	BD	a	・縦・斜位ミガキ ・摩滅	
26	甕	5.6			底部完存	AD	a	・縦位ミガキ 黒色化 底面ミガキ ・ナテ	
27	甕	6.0			底部完存	AE	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ 底面ミガキ ・横位ミガキ	
28	甕				胴部1/2	A	a	・縦・斜位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ハケ	
29	付付甕	7.6			接合部完存 胴部1/6	E	a	・摩滅 ・摩滅	
30	高杯				接合部完存	A	b	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 爪先圧痕 赤彩(杯)	

31	高杯				接合部完存	B	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(杯) ナデ(脚)	
32	高杯		7.8		脚部完存	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 ハケ→ナデ(脚) 杯黒色化	蓋取用か

本址出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が134個体あり、内訳は弥生後期壺63、壺35、鉢・高杯32個体、中期壺2・甕2個体であった。底部は54個体あり、内訳は壺15、甕26、鉢13個体であった。

S B25

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考	
		口径	底径	器高						
1	壺	32.4			口縁部完存	A	a	・縞縞線文(上→下)→T字文(7本6単位)→縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩(口縁)		
2	壺				胴部完存	A	a	・ハケ→縞縞線文(4段)→T字文(10本4単位)→斜位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ(口縁) 横位ハケ(脚)		
3	壺				胴部上半1/4	A	E	a	・縦位ミガキ→横・斜位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ハケ	
4	壺				胴部1/4	E	a	・摩滅→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅		
5	壺				胴部1/4	A	D	a	・縞縞線文→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 斜位ハケ	
6	壺	18.4			口縁部完存	A	B	a	・底状文(2線)→波状文(上→下) ・摩滅	
7	壺	15.0			口縁部1/3	A	D	a	・底状文 波状文(下→上) ・摩滅 横位ミガキ	
8	壺				胴部1/5	A	a	・摩滅 底状文(1線)→波状文 ・摩滅		
9	壺		7.0		底部1/2	E	D	a	・横位ミガキ→赤彩 ・摩滅	
10	壺	4.8	20.0	10.2	ほぼ完存	B	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ ・縦位ミガキ(基部)→ナデ 横位ミガキ(受け部) 下→ナツツ状に黒色化		
11	高杯		11.0		脚部完存	E	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・ナデ 脚蓋工具の縞縞線 赤彩(杯)		
12	壺		10.8		胴部下半・底部完存	D	E	a	・摩滅 縦位ミガキ 底面ミガキ 1/2黒色化 ・摩滅 斜位ハケ	
13	壺				胴部1/6	A	E	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ハケ	

本址出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が16個体あり、内訳は弥生後期壺4、壺6、鉢・高杯3、不明3個体であった。底部は壺が2個体あった。

S B27

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考	
		口径	底径	器高						
1	壺				胴部上半1/3	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ハケ 指頭圧痕 煤付着		
2	壺		9.6		底部完存	A	D	a	・ハケ→ズリ→ナデ 底面ズリ ・縦位ハケ→ナデ 煤付着 黒色化	
3	壺		4.9		底部完存	C	D	a	・縦位ミガキ 一部黒色化 ・縦位ハケ	

本址出土土器は掲載した実測図の他に口縁・底部の破片はない。

S B30

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考		
		口径	底径	器高							
1	壺		28.0		口縁部1/4	A	D	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 一部黒色化 器縁剥落	2次焼成	
2	壺		26.0		口縁部1/6	A	a	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	穿孔2 孔径0.5	
3	壺		26.0		口縁部1/4	A	a	a	・摩滅 赤彩 器縁一部剥落 ・摩滅 赤彩		
4	壺				胴部下半1/4	A	a	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 ナデ		
5	壺		13.2		底部完存	A	a	a	・摩滅 底面縞縞線状痕 一部黒色化 ・器縁剥落		
6	壺		5.8		底部完存	F	a	a	・摩滅 縦位ミガキ ・摩滅 指頭圧痕		
7	壺		12.5		胴部下半1/2	A	B	D	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ 一部赤色顔料残存 ・器縁剥落 黒色化	焼成堅

8	甕	24.9			口縁部・胴部上半 完存 胴部下半1/2	AD	a	・斜位ハケ→濠状文(7本2稜12単位・1稜1 単位)→波状文(口縁下→上)→斜 ・縦位ミガキ 胴中位以下煤付着 黒色化 ・横・斜位ミガキ→ナデ	
9	甕	35.0			口縁部1/4	B	a	・斜位ハケ→波状文 濠状文 ・摩滅 縦位ミガキ	
10	甕	22.5			口縁・胴部上半3/ 4	DF	a	・縦位ハケ→濠状文(9本3稜)→波状文ナデ (口縁端) ・横位ハケ→横位ミガキ	
11	甕	18.1			胴部上半ほぼ完存	E	a	・摩滅 濠状文(8本1稜複数)→波状文ナデ (口縁端) ・摩滅 一部黒色化	
12	甕	18.6			口縁部2/3	D	a	・濠状文(2稜)→波状文 ナデ(口縁端) ・摩滅 横位ミガキ	
13	甕	17.0			口縁部完存 胴部上半1/6	DE	a	・濠状文(7本1稜複数単位)→波状文ナデ(口縁 端) ・摩滅 横位ミガキ	口縁と胴部の接点 なし 図上復元
14	甕	18.0			口縁部1/4	ED	a	・摩滅 濠状文 波状文(或結) 黒色化 ・摩滅 器壁剥落	
15	甕	14.4			口縁部1/3	D	a	・波状文 ・摩滅 ハケ 黒色化	
16	高杯	20.0			口縁部1/4	D	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 黒色化 ・横位ミガキ→赤彩	
17	有孔鉢	21.0	2.4	(2.5)	口縁部1/6 底部完存	AD	a	・摩滅 ナデ ・摩滅 ナデミガキ 一部煤付着 黒色化	孔径1.8×1.2 胴中位の接点なし 図上復元
18	有孔鉢	17.8			口縁部1/2	E	a	・摩滅 ・摩滅 横位ミガキ	
19	高杯	22.0			口縁部1/4	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
20	甕				伏部1/4	BD	a	・横位ミガキ→赤彩 ・斜位ミガキ→赤彩 黒色化	
21	高杯				胴部上半1/2	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・ナデ	
22	高杯				接合部完存	A	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 ナデ 筒状工具の磨痕状	
23	高杯				接合部完存 脚部ほぼ完存	AB	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩(杯)	
24	高杯	9.0			脚部完存	AB	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅	
25	白付甕	7.1			接合部完存 脚部1/6	B	a	・摩滅 ・摩滅 杯黒色化	
26	白付甕	6.4			脚部完存	ED	a	・縦位ミガキ→ナデ 指頭圧痕 ・ナデ 杯黒色化	
27	白付甕	8.0			脚部完存	B	a	・摩滅 ・ナデ	
28	白付甕	8.2			接合部完存 脚部1/3	AD	a	・摩滅 縦位ミガキ→ナデ ・横位ハケ 爪痕 黒色化	
29	白付甕	5.8			脚部完存	AB	a	・摩滅	
30	高杯	14.8			脚部ほぼ完存	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩黒斑 ・摩滅 ナデ	

本址出土土器は掲載した実例・拓影図の他に口縁部が38個体あり、内訳は発生後期遺23、甕8、鉢・高杯7個体であった。底部は7個体あり、内訳は甕1、甕5、高杯脚1個体であった。

S B31

図版No.	器 種	法 量			残 存 度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	脚高					
1	甕				頸部1/5	D	a c	・菊指横線文(4段上→中→下)→T字文(7本) →横・斜位ミガキ→赤彩 ・ナデ→横位ミガキ→赤彩(上部)	
2	鉢	9.8	4.5	8.0	全形4/5	AD E	a	・摩滅 赤彩 ・ナデ	焼成堅
3	甕		9.8		底部1/2	ED	a	・縦位ミガキ ・横位ナデ(弱いミガキ)	
4	甕				底部1/2	A	a	・下半縦位ミガキ→斜位ミガキ 上半横位ミガ キ→斜位ミガキ→赤彩 ・斜・横位ハケ	
5	甕				底部1/2	AC	a	・摩滅 下半縦位ミガキ 上半斜位ミガキ→赤 彩 ・摩滅	

6	壺		10.0		底部完存	A a	・縦位ミガキ→赤彩文様 ・摩滅	漆付着
7	甕	16.0	7.2	22.6	ほぼ完存	ED a	・ハケ→麻状文(9本1廉複数単位)→波状文(下→上)→縦位ミガキ 煤付着 ・黄・斜位ミガキ	左止廉状文
8	甕	21.0			口縁部1/6	D a	・麻状文(3廉)→波状文(上→下) 煤付着 ・横位ミガキ	
9	甕	12.2			口縁部1/6	DE a	・斜位ハケ→麻状文(2廉)→波状文(下→上) ・横位ミガキ	
10	甕		7.8		底部完存	BD a	・縦位ミガキ 煤付着 ・若い横位ミガキ(ナデ) 底面に赤色 顔料付着	
11	甕		6.4		底部完存	D a	・縦位ミガキ 指頭圧痕 黒色化 ・黄・斜位ナデ(若いミガキ) 煤付着	上げ底
12	鉢	14.0			口縁部1/5	E a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	
13	高杯				杯部3/5	AF a	・斜位ミガキ(杯)→赤彩 縦位ミガキ(脚)→赤彩 脚接合部丸く摩滅 ・斜位ミガキ→赤彩(杯) 煤多量に付着	蓋転用の高杯
14	高杯	16.0			口縁部1/4	A a c	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	
15	高杯				杯部1/2	AE a	・縦位ハケ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩 煤多量に付着	蓋転用の高杯
16	高杯		8.0		脚部完存	C a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅 ナデ 赤色顔料付着 徹底	
17	高杯		12.0		脚部完存	AD a	・縦位ミガキ→赤彩 黒底1/2 ・ナデ 鋸状工具の割突痕	
18	高杯		8.8		脚部完存	C a	・摩滅 ハケ→縦位ミガキか ・摩滅 ナデ→横位ミガキ(杯) 輪積み痕顕著に残存	
19	台付き甕		6.8		脚部完存	A a	・縦位ミガキ ・ナデ 煤付着	

本址出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が23個体あり、内訳は弥生後期Ⅱ8・Ⅱ8・Ⅱ8・高杯6個体、中期Ⅰ1個体であった。底部は7個体あり、内訳はⅡ3・Ⅱ4 4個体であった。

S B 32

図版No.	器 種	法 量			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺	13.6	5.4		口縁部完存 胴部1/2	B a	・摩滅 麻状文(2廉)→波状文 ・摩滅	胴と底部の接点なし 円上底元	
2	鉢		5.5		底部完存	A a c	・横位ミガキ→赤彩 ・斜位ミガキ→赤彩	赤彩入色	

本址出土土器は掲載した実測・拓影図の他に蓋底部が1個体あった。

S B 38

図版No.	器 種	法 量			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺	26.4			口縁部1/6	A a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・斜・横位ミガキ→赤彩 黒斑		
2	壺				胴部1/4	A a	・摩滅 帯橋横線文→T字文→縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩 器壁一部剥落		
3	壺				胴部下半はほぼ完存	B a	・縦位ミガキ(密)→赤彩 ・摩滅 黒色化		
4	甕	20.8	9.0	37.5	胴部上半1/2 胴部下半完存	BD a	・帯橋横線文(10本2段)→波状文→斜 縦位ミガキ 黒斑 ・横位ミガキ(口縁) ナデ(胴) 一部黒色化		
5	甕	25.4			口縁部1/2	CD a	・ハケ→麻状文(1廉)→波状文 煤付着 ・横位ハケ→ナデ 黒色化		
6	甕	23.0			胴部上半1/4	D a	・ハケ→麻状文(9本2廉)→波状文 煤付着 ・摩滅 横位ミガキ 黒色化		
7	甕	12.3	4.8	13.0	ほぼ完存	D a	・摩滅 麻状文(9本2廉11単位)→波状文 煤付着 ・黒色化 ・横位ミガキ 口縁のみ黒色化		
8	甕	18.6			胴部上半1/2	A a	・摩滅 帯橋横線文(9本)→波状文→斜位ミガキ ・摩滅 指頭圧痕		
9	甕	17.1			胴部上半はほぼ完存	D a	・縦位ハケ→麻状文(5本1廉2段)→波状文 黒色化 ・横位ミガキ 煤付着 黒色化		

第3章 各時代の遺構・遺物

10	甕				胴部上半1/3	D a	ハケ→濃状文(7本2線)→波状文 黒斑 ハケ→ナデ 黒色化	
11	甕				胴部下半1/2	BD a	・横位ハケ→波状文→縦位ミガキ 部分的に赤色顔料付着 広範囲に黒斑 ・斜・横位ハケ 部分的に黒色化	幾成瓶
12	壺				頸部完存 胴部上半2/3	A a	・帯括横線文(8~9本)→斜・縦位ミガキ→赤彩 黒斑2カ所 ・摩滅 ナデ 磨盤一部剥落 黒色化	
13	甕				胴部上半1/4	A a	・摩滅 帯括横線文(8本)→横位ミガキ→赤彩 黒斑 ・ナデ	
14	ミニチュア(鉢)	3.0	2.2	2.8	完存	D a	・ナデ 指頭疔痕 ・ナデ	
15	ミニチュア(鉢)	5.4		(3.1)	全形1/3	B a	・帯括横線文 指頭疔痕→ナデ ・ナデ	

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が21個体あり、内訳は弥生後期壺3、甕15個体、中期壺1、甕2個体であった。底部は16個体あり、内訳は壺3、甕10、鉢2、不明1個体であった。

S B39

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	甕				頸部完存	A a	・帯括横線文(10本1上→下)→縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩(上部) ナデ		
2	付付甕	11.2	7.7	14.2	ほぼ完存	ED a	・縦状文(10本2線6単位)→波状文→縦位ハケ→ナデ 杯黒色化 ・ハケ→ナデ 指頭疔痕 黒色化(口縁)		
3	甕	10.2	5.6	9.9	ほぼ完存	AD a	・帯括横線文(6本)→波状文→縦位ミガキ 底面ミガキ 黒斑 ・横位ミガキ 一部赤色顔料付着		
4	甕	10.0			胴部上半3/4	BD a	・縦状文(6本2線)→波状文 下部磨盤剥落 ・横位ミガキ 指頭疔痕	外面磨痕	
5	甕				胴部1/4	A a	・摩滅 ハケ→波状文 黒斑 ・横位ミガキ 黒斑		
6	壺	5.3			縦帯ほぼ完存	A a	・摩滅 ・ナデ 指頭疔痕		
7	高杯		16.6		胴部ほぼ完存	B a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩(杯)		
8	付付壺				接合部完存	E a	・縦位ミガキ→赤彩 ・ナデ 脚黒色化		
9	付付甕				接合部完存	B a	・縦位ミガキ ・摩滅(杯) ナデ(脚)		
10	壺				胴部1/4	A a	・斜位ハケ→横位ミガキ→赤彩 ・斜位ハケ		

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が8個体あり、内訳は弥生後期壺3、甕4個体、中期壺1個体であった。底部は6個体あり、内訳は平底壺5、付付壺脚部1個体であった。

S B41

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	甕		8.0		胴部下半2/3 底部完存	D a	・ハケ→波状文→縦位ミガキ(下部)→横位ミガキ(上部) 上部黒色化 ・ハケ→ナデ 横付着 黒色化		
2	甕		10.2		胴部下半1/3	AD a	・摩滅 ハケ→縦位ミガキ 黒斑2カ所 ・摩滅 ハケ 部分的に黒色化		
3	甕		10.6		胴部下半2/3 底部完存	CD a	・縦位ミガキ→ケズリ 底面ミガキ ・ナデ 横付着 黒色化		
4	甕		10.0		底部1/2	AD a	・縦位ミガキ ・摩滅 斜位ハケ→ナデ 黒色化		
5	壺		10.6		底部ほぼ完存	D a	・縦位ミガキ(密) 一部黒色化 ・摩滅 黒色化		
6	壺				胴部下半1/3	BE a	・ハケ→縦位ミガキ→斜位ミガキ 黒斑 ・摩滅 縦・斜位ハケ		

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部7個体あり、内訳は弥生後期壺2、甕4個体、中期壺1個体であった。底部は2個体あり、内訳は壺1、甕1個体であった。

S B42

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺		19.2		口縁部1/2 頸部完存	AD a	・帯括横線文(8本)→丁字文(6本6単位)→縦位ミガキ→ナデ 口縁黒色化 ・横位ミガキ→ナデ 口縁横付着 黒色化		

2	壺				頸部1/4	A	a	・斜位ハケ→縦位ミガキ→部分赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
3	甕		7.6		底部2/3	AD	a	・縦位ミガキ 煤付着 黒色化 底面ミガキ ・厚減 赤彩	
4	鉢	11.4	3.2	5.3	口縁部1/4 底部充存	A	a	・厚減 横位ミガキ→赤彩 底面赤彩 ・厚減 赤彩	口縁と頸部の境点なし 図上復元
5	鉢	9.9	3.2	6.3	全形1/2	AD	a	・厚減 横位ミガキ→赤彩 底面及び底面付近 ・横位ミガキ→赤彩 器壁の大半削落 ・厚減 赤彩	
6	鉢		6.0		胴部下半1/3	A	a	・厚減 赤彩 ・厚減 赤彩	
7	甕				胴部上半1/2 胴部下半1/4	ED	a	・斜位ハケ→横描横線文 波状文→縦位ミガキ 煤付着 黒色化 ・横位ミガキ→ナデ	胴上半と胴部下半の境点なし 図上復元
8	甕		6.0		底部充存	D	a	・縦位ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ 黒色化	
9	甕		4.2		底部充存	C	c	・斜位ハケ 一部煤付着 黒色化 ・斜位ハケ 一部煤付着	胎入品 上げ底
10	高杯		6.5		脚部ほぼ充存	A	a	・厚減 縦位ミガキ→赤彩 ・厚減 赤彩(杯)	

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が25個体あり、内訳は弥生後期壺7、甕9、鉢・高杯8個体、中期壺1個体であった。底部は17個体あり、内訳は壺5、甕9、鉢2、高杯脚1個体であった。

SB101

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺		12.6		頸部1/3 胴部充存	AD F	a	・厚減 横線文(10本5段下→上)→T字文(6本) ・縦位ミガキ→赤彩 ハケ→縦位ミガキ(胴下半) 器壁一部削落 ・厚減	2次焼成
2	甕	17.4	8.2	23.5	充存	D	a	・横線文(6本)→波状文→縦位ミガキ 底面ミガキ ・口縁：胴上半煤付着 黒色化 ・ハケ→縦状上長の横筋(口縁)ナデ→横位ミガキ ・赤色顔料部分付着 底・口縁黒色化	器形・器厚の歪み顕著
3	台付甕	11.6	7.4	17.5	充存	AD E	a	・斜位ハケ→横線文(9本1廉15単位)→波状文 →ナデ→縦位ミガキ 煤付着 銅黒色化 ・縦位ミガキ 赤色顔料部分付着 ハケ→ナデ(脚) ・胴一部黒色化	器形・器厚の歪み顕著
4	甕	10.8			口縁部1/2	DE	a	・厚減 斜位ハケ→横線文(4条) 波状文 ・横位ミガキ 赤彩顔料付着	割れのある甕状工具で横文
5	甕	13.3			口縁部3/4	A	a	・横線文(5本2廉)→波状文 煤付着 黒色化 ・厚減 ナデ 指頭圧痕 口縁端煤付着	
6	甕	11.3			口縁部充存	D	a	・ハケ→横線文(2廉)→波状文 黒色化 ・甕状工具の横筋→ナデ	
7	甕	12.8			口縁部充存	A	a	・厚減 縦位ミガキ→赤彩 黒斑 ・横位ミガキ→赤彩	器形の歪み顕著
8	甕		6.1		胴部ほぼ充存	DE	a	・厚減 横線文(4本)ハケ→縦位ミガキ 指頭 圧痕 黒色化 ・厚減 横位ナデミガキ	底面指頭圧痕
9	高杯				接合部充存	A	a	・厚減 縦位ミガキ→赤彩 黒色化 ・横位ミガキ→赤彩(杯)厚減 赤色顔料付着(脚)	
10	高杯				接合部充存	A	b	・厚減 縦位ミガキ→赤彩 ・厚減 赤彩(杯・脚)	

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が14個体あり、内訳は弥生後期壺13、鉢・高杯1個体であった。底部は3個体あり、内訳は壺2、鉢1個体であった。

SB102

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺				頸部1/3	AD	a	・横描横線文(10本上→下)→T字文(10本)→斜位ミガキ ・厚減 器壁削落	
2	壺				胴部上半1/3	AC D	a	・縦位ハケ→横描横線文(10本上→下)→横位ミガキ→赤彩 ・厚減 横位ハケ 上部黒色化 一部器壁削落	
3	甕	20.0			口縁・胴部ほぼ充存	D	a	・横線文(3～4本2段)→波状文→縦位ミガキ 煤付着 黒斑 ・横位ミガキ 口縁黒色化	
4	甕	11.4			口縁部1/2	ED	a	・厚減 横線文(10本1廉)→波状文 ・厚減	

第3章 各時代の遺構・遺物

5	台付壺	10.4			口縁部4/5 胴部2/3	D a	ハケ→蒺杖文(4本1束)→波状文→縦位ミガキ ・黒色化 ・指頭圧痕→ミガキ→ナデ 輪積み痕跡著に 残存 黒色化	
6	壺		7.2		底部完存	AD a	・縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅	
7	有孔鉢	17.5	6.2	10.4	ほぼ完存	AB a	・斜・縦位ミガキ 黒染2カ所 ・ナデ	孔径2.1
8	鉢	18.1	5.5	9.4	口縁部1/10 胴部ほぼ完存	A a	・摩滅 斜・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	黒成底
9	鉢	14.8			口縁部1/6	B a	・摩滅 縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
10	鉢	10.8			口縁部2/3	AD a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩 黒色化	
11	鉢	16.8			口縁部1/6	AD a	・斜・横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 縦位ミガキ→赤彩	
12	高杯				接合部完存	A a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(杯)ナデ(脚)	
13	高杯		9.0		脚部1/2	F a	・摩滅	
14	ミニチュア (高杯)				接合部完存	A a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩(杯) ナデ(脚)	

土製品

図版No	器種	直径	底径	器高	口径	重量g	残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
15	土製円筒	3.2			0.50	—	4.88	完存	E D a	・摩滅 ・ナデ	縦 破片散用

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が21個あり、内訳は糸巻後期近2、壺9、鉢・高杯5個体であった。底部は10個体あり、内訳は壺3、壺6、不明1個体であった。

S B103

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	32.0			口縁部1/2	A a	・帯横線文(8本)→T字文(8本)→縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩		
2	壺	26.0			口縁部ほぼ完存	AB a	ハケ→帯横線文(8本)→T字文(8本)→縦位ミガキ→斜位ミガキ→口縁上部のみ赤彩 ・指頭圧痕→横位ミガキ→赤彩 一部磨滅剥落		
3	壺	10.0			胴部下半・底部完存	AD a	・縦位ミガキ 底面ミガキ 黒色化 ・摩滅 一部磨滅剥落 黒色化		
4	壺	9.0			底部3/4	D a	・縦位ミガキ 底面ミガキ 一部横付着 ・横位ミガキ→ナデ 横付着 黒色化		
5	壺	6.0			底部完存	C a	・摩滅 ・ナデ 上部横付着		
6	壺	11.8			底部完存	C a	・斜位ミガキ 底面ミガキ ・ハケ		
7	高杯(台付壺か)	10.0			脚部完存	AB a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・ミガキ(杯) 横・斜位ハケ 部分的に赤色顔料付着(脚)		

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に糸巻後期の壺口縁部が1個体、4個体の壺底部があった。

S B104

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	26.2			口縁部1/2	A E a	・帯横線文→縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩		
2	壺		12.0		底部3/4	A a	・縦位ミガキ→赤彩 ・ナデ 底面赤色顔料付着 一部磨滅剥落		

本出土土器は掲載した実測・拓影図の他に口縁部が9個体あり、内訳は糸巻後期近1、壺1、鉢1個体であった。底部の出土はない。

S B105

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	20.4			口縁部1/4	A a	・摩滅 縦位ミガキ→斜位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩		
2	壺		7.4		底部完存	A a	・斜位ミガキ→縦位ミガキ→赤彩 底面ミガキ ・摩滅		

3	甗				胴部1/4	A F	a	・ハケ→縦位ミガキ→横位ミガキ ・摩滅 横・斜位ハケ	
4	甗		8.5		底部完存	A	a	・斜位ミガキ→部分赤彩 黒斑 ・摩滅 横・斜位ハケ	
5	甗	18.4			胴部上半2/3	E D	a	・摩滅 康状文(12本2層)→波状文 ・横位ナデミガキ	
6	甗	16.6			口縁部1/3	F	a	・摩滅 康状文(7本2層)→波状文 黒斑 ・摩滅 ナデミガキ	
7	甗	16.0			口縁部1/4	A	c	・摩滅 横線文(2条)(口縁) ナデ→斜位ハケ ・摩滅→横位ハケ(口縁)	腹入品
8	甗 (合付甗か)	12.0			胴部上半1/4	D	a	・摩滅 康状文(8本2層) 波状文 黒色化 ・摩滅 ナデミガキ 黒色化	
9	合付甗				胴部ほぼ完存	D F	a	・康状文(6本1と2層)→波状文 器壁一部剥落 ・斜・横位ミガキ	
10	高杯	16.2			口縁部1/4	A D	a	・摩滅 赤彩 口縁端黒色化 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩 口縁端黒色化	
11	鉢	13.6			口縁部1/6	A	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 ・斜位ミガキ→赤彩	
12	鉢	6.0			底部完存	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
13	甗	6.1			胴部下半完存	A C	a	・摩滅 縦位ハケ 黒色化 ・横位ハケ→ナデ 輪郭み顔腹著に残存	底面縦圧痕
14	甗	5.2			底部完存	D E	a	・摩滅 縦位ミガキ→縁辺ケズリ 黒色化 ・斜位ミガキ	
15	高杯				杯部下半・接合部完存	A D E	a	・摩滅 縦位ミガキ 黒色化 ・摩滅 ナデ→赤彩(杯)	
16	合付甗	7.9			胴部ほぼ完存	E	a	・摩滅 ・ナデ 縦黒色化	

本址出土土器は掲載した実例・拓影図の他に口縁部が33個体あり、内訳は弥生後期型13、甗6、鉢・高杯12、不明2個体であった。底部は23個体あり、内訳は甗9、甗9、鉢4、高杯脚1個体であった。

S B106

器名No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	甗	20.2	8.4	31.4	完存	A D	a	・康状文(10本2層15単位)→波状文→横・斜位ミガキ→縦位ミガキ 胴中位と口縁部付着黒色化 ・横位ミガキ ナデミガキ 胴下部煤付着 黒色化	
2	甗	19.0			口縁部ほぼ完存	D E	a	・摩滅 康状文(11本1層)→波状文 ・摩滅 黒色化	2次焼成
3	甗	16.2	20.5	6.7	ほぼ完存	D F	a	・康状文(8本2層14単位)→波状文(上→下) 黒色化 胴下半部壁剥落 ・横位ミガキ→ナデ 胴上半黒色化	
4	甗	17.8			口縁部1/6 胴部1/4	A D	b	・康状文(9本2層)→波状文 黒色化 黒斑 ・横位ミガキ	焼成堅
5	甗	14.5			口縁部ほぼ完存 胴部1/2	D F	a	・康状文(8本複数層)→波状文 黒斑 ・横位ミガキ 黒色化	
6	甗	13.0			口縁部2/3	D	a	・摩滅 康状文(6本・5本2段)波状文 ・摩滅 黒色化	
7	合付甗	13.0			胴部2/3	D	a	・斜位ハケ→康状文(7～8本3層)→波状文→縦位ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ 黒色化	
8	甗				胴部1/4	E	a	・斜位ハケ→波状文→斜位ミガキ ・斜・横位ハケ	
9	甗				胴部1/4	D E	a	・摩滅 横線文→篋形丁字文(2条)黒斑 ・摩滅	
10	甗				胴部上半1/6	A D	a	・摩滅 縦位ミガキ ・摩滅 底面圧痕 輪郭み顔腹著に残存	
11	甗	09.2	6.0	03.9	胴・胴上半部完存 胴下半・底部1/2	A E	a	・摩滅 底面黒色化 ・摩滅	2次焼成
12	鉢	15.2	02.9	08.7	全形1/2	C	a	・摩滅 黒斑 ・摩滅 ハケ→横位ミガキ→赤彩	
13	鉢	18.2			口縁部1/4	A C	a	・摩滅 斜位ミガキ→赤彩 ・摩滅 ミガキ→赤彩	
14	有孔鉢	5.9			底部5/6	D	a	・縦位ハケ 底面ミガキ 底面圧痕 黒色化 ・ナデ	穿孔径1.3～1.4
15	高杯	22.0			杯部1/3	D F	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横・斜位ミガキ→赤彩	口縁端部突起の痕跡あり

16	高杯		15.2			脚部ほぼ完存	A a	・ハケ→縦位ミガキ(雷)→横位ミガキ→赤彩 接合部黒色化 ・ミガキ→赤彩(杯) 横・斜位ハケ→ナデ 赤 色顔料一部付着(脚) 接合部黒色化	
17	高杯					接合部完存	D a	・縦位ミガキ→赤彩 ・ミガキ→赤彩(杯)ナデ 脚黒色化	
18	高杯					接合部完存	A a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 一部黒色化 ・斜位ハケ→ナデ(脚) ミガキ→赤彩(杯) 一 部黒色化	
19	壺	13.0				口縁部1/6	E a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 ミガキ→赤彩 黒斑	穿孔2 孔径0.3
20	ミニチュア (鉢)	3.4	2.7	2.9		完存	D a	・ナデ 棒状工具の圧痕 指頭圧痕 黒斑 ・ナデ 黒斑	
21	ミニチュア (鉢)	4.0	2.0	3.2		完存	D a	・ナデ 指頭圧痕 黒斑 ・ナデ 黒斑	
22	ミニチュア (鉢)	2.6	2.7	2.6		完存	D a	・ナデ 指頭圧痕 黒斑 ・ナデ	
23	ミニチュア (鉢)	2.6				胴部1/6	A a	・ナデ 指頭圧痕 部分赤彩 ・ナデ	
24	ミニチュア (白付鉢)		2.8			脚部完存	AD a	・ナデ 指頭圧痕 部分赤彩 ・ナデ 部分赤彩	
25	ミニチュア (高杯)		5.4			脚部1/8	A a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅	

本址出土土器は掲載した実測・拓制図の他に口縁部が73個体あり、内訳は発生後期遺24、壺23、鉢・高杯25個体、中期遺1個体であった。底部は29個体あり、内訳は壺15、甕11、鉢3個体であった。

SB108

図録No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	台付壺	23.0			口縁部完存 胴部ほぼ完存	AB a	・摩滅文(8本2線2段14単位)→波状文横・斜 位ミガキ→赤彩(脚) ナデ(口縁)→端部赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(脚)		
2	台付壺	21.0			口縁部1/6	E a	・ナデ→横位文→摩滅文(4本2線2段) 赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	口縁端部山形突起	
3	甕	29.8			口縁部1/6	A a	・摩滅 波状文 ・摩滅	折り返し口縁	
4	甕	23.4			口縁部1/6	D a	・摩滅 波状文 器壁一部剥落 ・横位ミガキ 黒色化		
5	甕	22.0			口縁部1/6	C a	・摩滅 波状文 ・摩滅 横位ミガキ 黒色化		
6	甕	13.2			口縁部1/2 胴部1/4	BD a	・摩滅 摩滅文(6本3線)→波状文 脚黒色化 ・摩滅	口縁と胴部の接点 なし 肉上復元	
7	甕	15.6			口縁部1/3	D a	・波状文 煤付着 黒色化 ・摩滅 口縁端黒色化		
8	鉢	12.4	5.4	6.5	金形1/2	E a	・波状文(口縁増)→ナデ 指頭圧痕 ・ナデ	焼成堅	
9	甕				胴部1/4	DE a	・摩滅 摩滅文(7本1線2段) 波状文 黒斑 ・摩滅		
10	壺	04.8			胴部下半1/3	AD a	・摩滅 ハケ ・ハケ→ナデ 黒色化		
11	甕		9.6		底部完存 胴部下半1/6	D a	・縦位ミガキ→ナデ 底部擦痕 煤付着 黒色 化 ・横位ミガキ→ナデ 指頭圧痕 煤付着 黒色 化	やや上げ底	
12	壺		10.0		底部完存	B a	・摩滅 黒斑 ・摩滅		
13	高杯		16.6		脚部1/3	AB a	・摩滅 ミガキ→赤彩 ・ナデ 赤色顔料一部付着		

本址出土土器は掲載した実測・拓制図の他に口縁部が24個体あり、内訳は発生後期遺22、鉢・高杯2個体であった。底部は8個体あり、内訳は甕7、壺1個体であった。

3 掘立柱建物址

2棟の掘立柱建物址と建物址の柱穴と捉えられるビット群が2カ所で検出された。ST01・101の2棟は大形の掘立柱建物址として主軸・規模がほぼ確認され、①ビット群は複数の柱穴があったが配列が不規則、不正形であり、②ビット群は2基の隣接する柱穴で建物址を確定するに至らなかった。これらの建物址を構成する数基の柱穴には柱材が残されていたものや埋土に柱痕が認められるものがあった。掘立柱建物址の集落内における位置は、竪穴住居に近接しながらも居住域の縁辺にあたる低地生産域寄りである。

ST01 (VII区-Iグリッド) [第164図 PL83]

調査区西端に位置する。南西側は調査区外及び調査上の排水溝掘削のため不明となる。径30~40cm、検出面からの深さ40cmの柱穴が7基検出され、ビット6・7が後期土坑SK20を切って構築されている。残存する柱穴配列から南西-北東方向に長軸をとる4×1間の建物址と捉えられるが、桁行間に間隔の違いがあり複数棟の可能性もある。梁行2.6m、桁行9.2mの規模となり、ビット4(5)とビット6(7)の桁行間が4.0mと長い。埋土は粘土質のシルトで、埋め戻し土と判断される。ビット3・4にはカヤ・クリを樹種(付参照)とする柱材が残存していた。出土遺物はないが検出状況・埋土から該期の遺構とした。

ST101 (IV区-Nグリッド) [第164図 PL1-21]

調査区中央南寄りに位置する。東西に走行するSD20・101と隣接するが、重複はない。径25~40cm、検出面から深さ20~60cmの柱穴が14基検出された。柱穴配列から南北に長軸をとる6×1間の建物址と捉えられるが、東側の柱穴筋筋に若干の歪みがあることと桁行間が一定でないことから複数棟が同一軸上に重複している可能性がある。規模は梁行2.6m、桁行5.2mとなり、ビット6(13)とビット7(14)の桁行間が1.4mと長く、ビット5(12)とビット6(13)の桁行間が0.6mと短い。ビット6・11・14にはクリを樹種とする柱材が残存し、ビット1・3・4・7には柱痕が確認された。埋土は粘土質のシルトで埋め戻しと判断される。出土遺物はないが検出状況と埋土から該期の遺構とした。

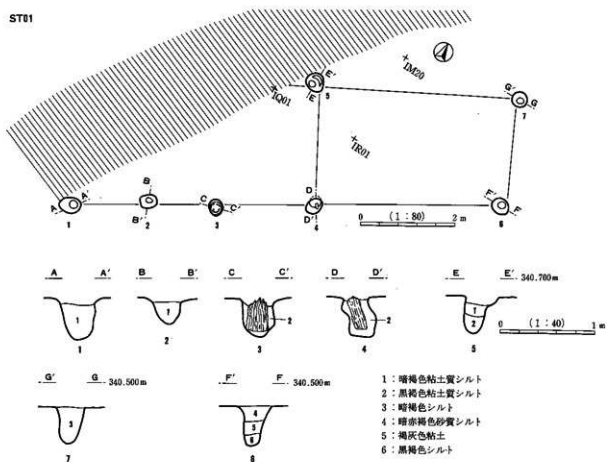
①ビット群-SK18・22・23・25~30 (VII区-Eグリッド) [第165図]

調査区西端に位置するST101の北東に隣接している。調査時点では9基の円形小土坑として検出したが、SK18・22には柱材が残り、周辺のビットの規模と埋土が共通することから掘立柱建物址と捉えた。後期溝址SD31・42、焼土址SF02と重複するが新旧関係は不明である。検出面からの深さはSK18が60cmと深く、SK22・23・25・29は30cm前後、SK28・30は24cm、SK26・27は12cmと浅い。平面規模はSK29が径28cmとやや大きく、SK18・23・25・26・27・30が22~26cm、SK28が15cmであった。これら柱穴群は南西-北東方向に長く広がり、長軸もほぼこの方向をとると推測され、ST101と同列上に位置する。埋土は柱材が残存するSK18・22を含め黒褐色シルトもしくは砂質シルトで、SK23には炭化物粒が含まれていた。遺物の出土はないが検出面と埋土から該期の遺構とした。

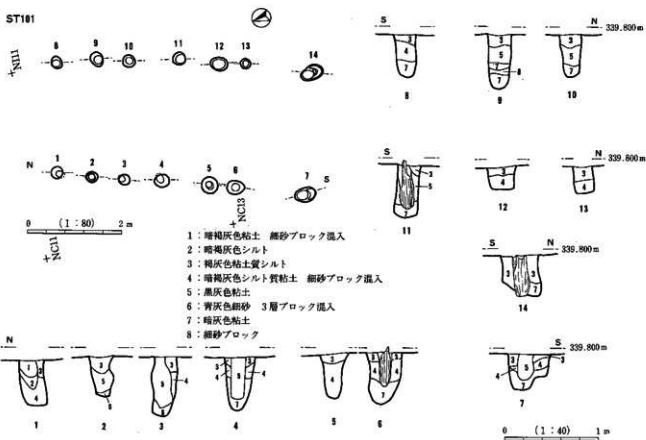
②ビット群-SK110・111 (IV区-Rグリッド) [第165図]

調査区中央南寄りに位置する。SK110は平面楕円形で40×20cmの規模となり検出面から42cmの深さで、クリ材の柱が残されていた。SK111は径20cmのはほぼ円形で、検出面から34cmの深さとなる。2基のビットは3.8mの間隔で東西方向に結ばれる位置関係を示すが、周囲に同様な遺構は検出されず掘立柱建物とし

ST01

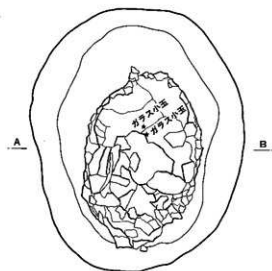


ST101



第164図 孤立柱建物址実測図1 (ST01・101)

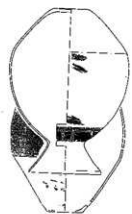
SK01



340.200m

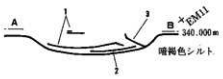
1: にぶい黄褐色シルト
2: 黄褐色シルト

*MP13



*MG13

SK49



340.000m

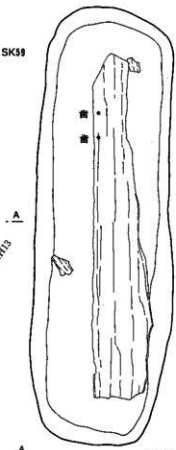
暗褐色シルト



1: 褐色粘土と明黄褐色砂の混合
2: 黒褐色粘土
3: 黄褐色シルト
4: 黄褐色シルト 黒褐色粘土ブロック混入

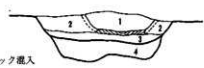
0 (1:20) 50cm

SK59



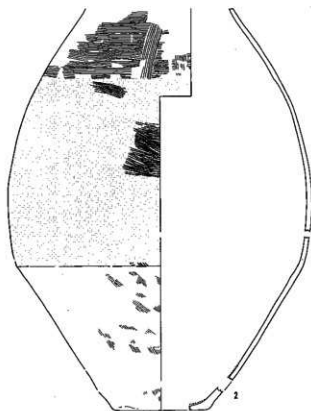
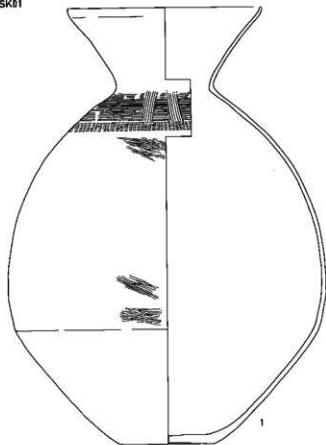
*MP13

339.800m

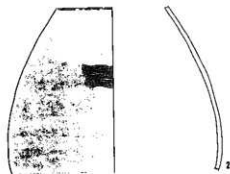
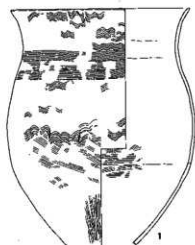


第166図 SK01・49・59実測図及び出土遺物状況図

SK01



SK49



0 (1:6) 10cm

SK01



0 (1:3) 5cm

第167図 SK01・49出土土器実測図・拓影

横たえられ、口縁部が残る壺(1)に口縁欠損の壺(2)が被る状況で検出された。壺内には砂が堆積し、ほぼ中央部からガラス小玉が11点出土した。

SK49 (IV区-Eグリッド) [第166・167図 PL22]

調査区東寄りに位置する。北西-南東方向に長軸をとる楕円形プランの土壌に大形甕1個体と壺2個体を棺としている。土壌の規模は72×57cmで、底は検出面から20cmである。土器棺は底面にほぼ密着した状況で検出された。土器棺は、甕(1)に口縁部側から口縁・底部を欠損した壺(2)を覆い被せ、さらに壺底部(3)で蓋をする3重構造であった。土器棺内からの出土遺物はない。

SK59 (IV区-Mグリッド) [第166・168図・PL22・87]

調査区中央部に位置する。東北東-西南西方向に長軸をとる長方形プランの土壌に割り竹形の本棺を敷設している。土壌の規模は2.3×0.7mで、検出面からは24cmの深さとなる。土壌には掘り方から10cmほどの厚みで黒褐色粘土と黄褐色シルトの混合土が貼られ、更に厚み4~6cmの黄褐色シルトで平坦面を作りだし、その上に本棺が置かれている。本棺木質の規模は1.8×0.3m、厚さ2~4cmで、底面に密着した部分が残されていた。本来の本棺長はほぼ検出規模と考えられるが、幅は平面精査において割り抜きの木端が筋状に2本確認されていることから40cmを超えると推測される。本棺はクリ材である(付章参照)。埋土は黒褐色粘土と灰色シルトで、木口側も同様の粘土質シルトであった。棺内は明褐色の砂が多量に混入した自然堆積層である。遺物は棺内北東側から歯が2本(第168図)と後期の瓦破片、棺外から中期瓦破片が数点出土した。歯は上顎右第2小臼歯と右第1大臼歯で成人前の年齢という鑑定であった。本址の埋葬施設は当該期では特殊であるが、構築時期において上層検出の周溝墓群を下ることはない。



第168図 SK59出土歯(1:2)

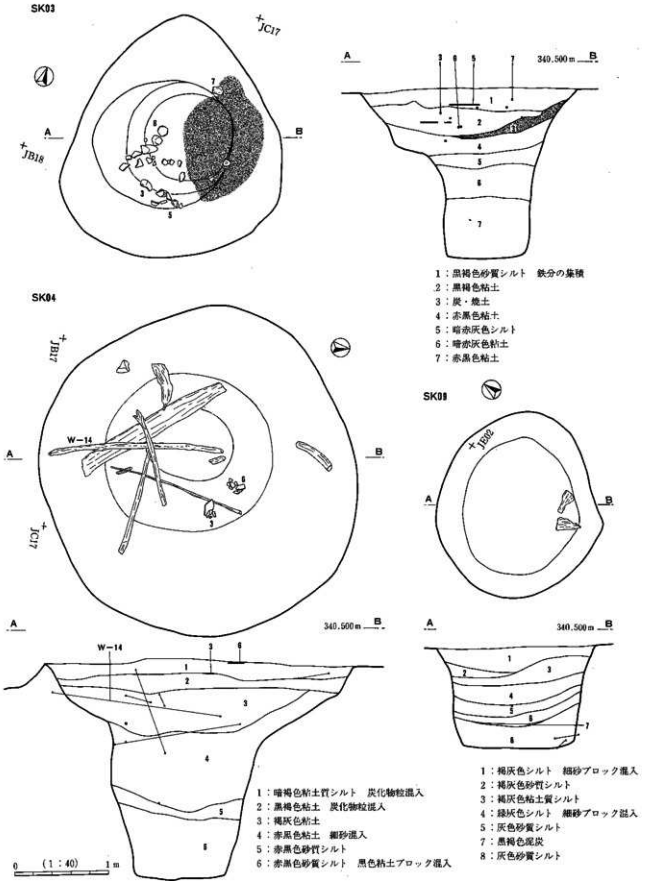
(2) 井戸

井戸址は12基検出され、内10基は調査区南西端の低地域にある。井戸とした12基の土坑の他にSK103・104が楕円形の平面プランを呈し深い土坑底となり井戸の可能性ある。低地域に分布する井戸の埋土上層には炭層があり、井戸廃棄後の2次使用と捉えられる。この2次使用には井戸そのものの廃棄にかかわる行為と埋没過程での再利用行為の2者が認められた。井戸の構造は10基が井筒状に地山を掘り込んだ「地山井筒」であり、1基が「割抜井筒」、1基は隔柱と横板を組んだ「方形井筒」であった。

SK03 (VII区-Jグリッド) [第169・174図 PL19]

調査区南西端の低地内に位置し、井戸址SK04に隣接する。この両井戸址は下層の後期水田面及び畦畔を壊す。上平面形は南北方向にやや長く、2.4×2.2mの卵形に近い楕円形プランを呈し、底面は平坦で検出面から1.8mの深さとなる。深さ70cm以下は径1.2mの円筒形となり、上部が広がって2段掘り、断面形は漏斗状になる。埋土は4層以下が埋め戻しと捉えられ、2次使用として燃焼行為があり(3層)、再び埋め戻される(2層)経過となる。遺物は2次使用後の堆積層からの出土であり、全て壺の土器片であった。本址は1次廃棄の埋め戻し埋土が均一な粘土であることから、2次使用までの時間経過はさほどなかったと判断される。

SK04 (VII区-Jグリッド) [第169・174図 PL19・37・83]



第169図 SK03・04・05実測図及び出土遺物分布図

調査区南西端の低地内に位置し、井戸址SK03に隣接する。上平面形は径3.5～3.6mの円形を呈し、検出面から2.3mの深さとなる。底面は平坦で、断面形状は上部が広がる漏斗状となり、深さ約60cmから径1.6mの円筒形状で底に達する。埋土は下層（5・6層）が本址機能時の地下水淘汰作用による堆積で、中層（3・4層）が埋め戻し土である。上層（1・2層）も砂質分の少ない粘土で埋め戻し土となるが、炭化物粒が多量に混入することから2次使用の可能性が有る。遺物は上層から甕・壺等の土器、中層から板材・丸木材などの大型建築部材が出土した。木製品にはカヤを樹種とする枝首がある。

SK09 (VII区-Jグリッド) [第169・174図 PL19]

調査区南西端の微低地内に位置する。上平面形は径1.8mの円形プランで、検出面から1.2mの深さとなる。底面は平坦で、断面形は上部がやや広がるが方形に近く、ほぼ垂直な掘り込みで底に達する。埋土は下層（8層）が本址機能時の地下水淘汰作用による堆積で、廃棄後に滞水した状況となり（6・7層）、埋め戻しの堆積層（1～5層）となる。本址には2次使用の痕跡がない。遺物は下層から木片2点の他、3層から土器小片が出土したのみである。

SK06 (VII区-Jグリッド) [第170・175図 PL19-37]

調査区南西端の微低地内に位置し、後期住居SB31と隣接する。上平面形は径3.4～3.6mの不正円形を呈し、検出面から1.7mの深さとなる。底面は平坦で、断面形状は上部がやや広く、逆台形状となり底に達する。埋土は、下層（6・7層）が本址機能時の地下水淘汰作用による堆積で、廃棄後に低地化した泥炭が堆積（5層）し、埋め戻された状況である（4・5層）。上層（1～3層）は砂質の自然堆積層であり、本址には2次使用した痕跡は認められない。遺物は埋め戻し土（4層）から甕・片口鉢などの土器がまわって出土した。

SK08 (VII区-Jグリッド) [第170・175図 PL20-80]

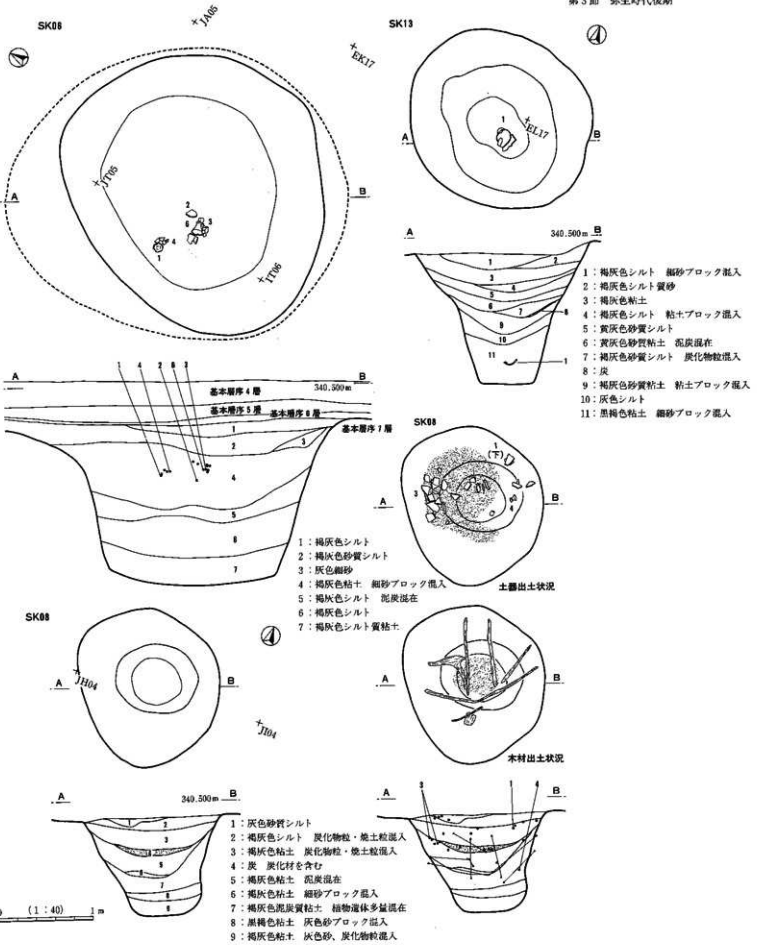
調査区南西端の微低地内に位置する。径1.6mの円形プランを呈し、ほぼ垂直に掘り込まれた円筒形の井戸である。検出面からの深さは1.2mで、底面は平坦である。埋土は、下層（8・9層）が本址機能時の地下水淘汰作用による堆積で、廃棄後に低地化した泥炭の厚い堆積（5～7層）がある。浅い窪地形成後に2次使用として燃焼行為（3・4層）があり埋め戻しの土（2層）となる。遺物は3・4層に土器片と炭化木材、泥炭質の5～7層から棒状木製品や自然木が出土した。7層にはケヤキの丸木を削りだした農具柄がある。

SK10 (VII区-Eグリッド) [第171・175図 PL20]

調査区南西端の微低地内に位置する。上平面形は径1.5～1.6mの不正円形プランを呈し、検出面からの深さは1.9mとなり、底面は平坦である。断面形は上部が広く漏斗形状となり、深さ約70cmから径約1mの円筒形で底面に達する2段掘りである。埋土は、下層（10～12層）が本址機能時の地下水淘汰作用による堆積、中層（7～9層）が人為的な埋め戻し、浅い窪地形成後に2次使用として炭（4層）が入り、再び上層（1～3層）が人為的な埋め戻しとなる。遺物は6～7層にかけて少量の土器破片と小礫、棒状の丸木材が出土した。

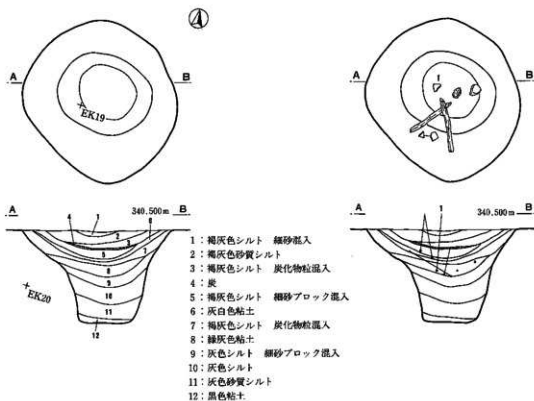
SK13 (VII区-Eグリッド) [第170・175図 PL20]

調査区南西端の微低地内に位置する。上平面形は径1.8～2.0mの円形プランを呈し、検出面からの深さ

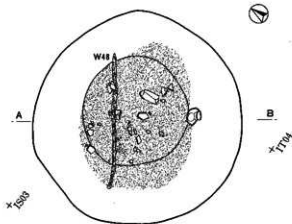


第170図 SK06・08・13実測図及び出土遺物分布図

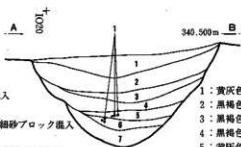
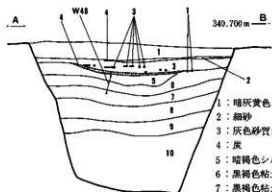
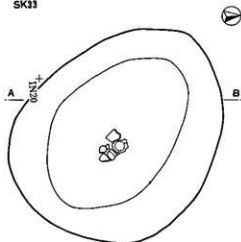
SK10



SK19



SK33



0 (1:40) 1m

第171図 SK10・19・33実測図及び出土遺物分布図

は1.4mで、底面は平坦である。断面形は上部がやや広く漏斗形状に開き、約50cmの深さから底面にかけて径約1mの円筒形に掘り込まれる。埋土は下層(10・11層)が本址機能時の地下水淘汰作用による堆積で、9層が人為的な埋め戻しである。中層(6～8層)は2次使用の痕跡とその後の低地化による泥炭の堆積で、再び埋め戻され(3～5層)、上層(1・2層)自然堆積層で覆われた状況である。遺物は下層から壺胴下半部が出土したのみである。

SK14 (VII区-Jグリッド) [第172図 PL21]

調査区南西端の微低地内に位置する。上平面は86×68cmの楕円形プランとなり、検出面からの深さは40cmで、底面は平坦である。断面は上部がやや広がるが、垂直に掘り込まれほぼ長方形を呈す。埋土は下層(3層)が本址機能時の堆積で上層は埋め戻し土となるが、やや泥炭質であった。遺物は上層から木材片が多数出土したほか土器片等はない。立地、形状から井戸とした。

SK19 (VII区-Iグリッド) [第171・176図 PL20・37・86・88]

調査区南西端の低地内に位置する。上平面は径1.0mの円形プランを呈し、検出面からの深さは1.5mとなり、底面は平坦である。断面形状は壁がやや開き気味に直立する逆台形となる。埋土は、下層(9・10層)が本址機能時の地下水淘汰作用による堆積と廃棄後の低地に由来する泥炭であり、9層下面からは多量の木片を含んだ植物遺体が検出された。中層(5～8層)は人為的な埋め戻し土で、2次使用として炭(4層)を残し再び埋め戻された(3層)状況である。遺物は下層から高杯(2)、中層からカヤを樹種(付章参照)とする棒状木製品が出土したほか、3層には土器片が多量に廃棄されていた。

SK33 (VII区-Iグリッド) [第171・176図]

調査区南西端の低地内に位置し、後期水田面及び畦畔を壊す。北西-南東方向がやや長く卵形に近い楕円形プランを呈す。平面規模は2.5×2.0mで、検出面から1.0mの深さとなる。底面は湾曲し断面は半円形状となる。埋土は、下層(6・7層)が本址機能時の地下水淘汰作用による堆積となり、中層(4・5層)が人為的な埋め戻しである。3層埋土に炭化物粒が多く含まれることから2次使用の痕跡とされ再び埋め戻しの土となる。遺物は本址中央の下層からまともな土器片が出土した。

SK35 (IV区-Pグリッド) [第172・177・178図 PL21・38・39・50・85]

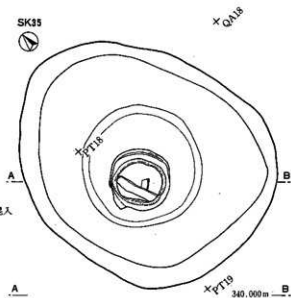
調査区南西寄りの微低地に位置する。丸木を削り抜いた刳抜井筒井戸である。湧水による壁崩落があり掘り方形状及び埋土が不明となる。上平面は南北にやや長い楕円形プランを呈し、平面規模は3.2×2.4mで、検出面から1.9mの深さとなる。検出面から深さ80cmにテラス状の段があり、刳抜井筒がやや突出する状況で径80cmの円筒形掘り方になる。刳抜井筒は径62cm、長さ1.1mで、外側には部分的に刳抜材が補強されていた。井筒の樹種はサワラで、外側補強の材はトチノキとケヤキであった(付章参照)。埋土は井筒内がシルトブロックを混在した埋め戻し(4層)で、2層との土質差はほとんどなく短期に埋め戻されたものと捉えられる。上層は窪み状に堆積した炭を主体とした人為的な痕跡がある埋土で、本址廃棄に関わる埋め戻しと判断される。遺物は刳抜井筒上部に土器片、井戸底となる砂礫層上部から埋土下層にかけて板材などの木製品数点と多量の土器が出土した。下層出土土器の器種は甕が1点のほかは全て壺であった。ミニチュア(25)と高杯脚部(18)は上部出土である。また4層上部からは桃・胡桃の実が20点余りまともな状態で検出された。本址は刳抜井筒という特殊な構造であり、遺構廃棄にともない多量の土器を一括遺棄した祭祀が行われた可能性が高い。本址出土土器は後期中葉の良好な一括資料である。

SK14

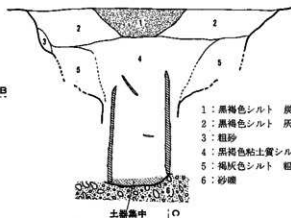
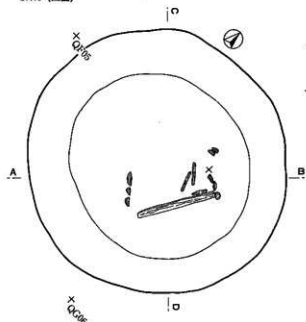


- 1: 赤灰色粘土 粗砂混入
- 2: 暗赤灰色粘土
- 3: 黒色粘土 細砂ブロック混入

SK35



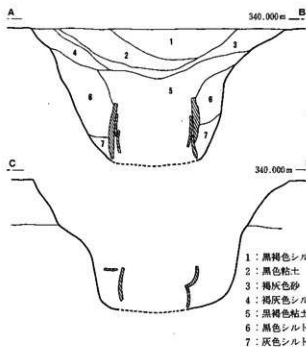
SK43 (上面)



- 1: 黒褐色シルト 炭化物粒多量混入
- 2: 黒褐色シルト 灰色シルトブロック混入
- 3: 粗砂
- 4: 黒褐色粘土質シルト 灰色シルトブロック混入
- 5: 褐灰色シルト 粗砂混入
- 6: 砂礫

土層集中

SK43 (下面)



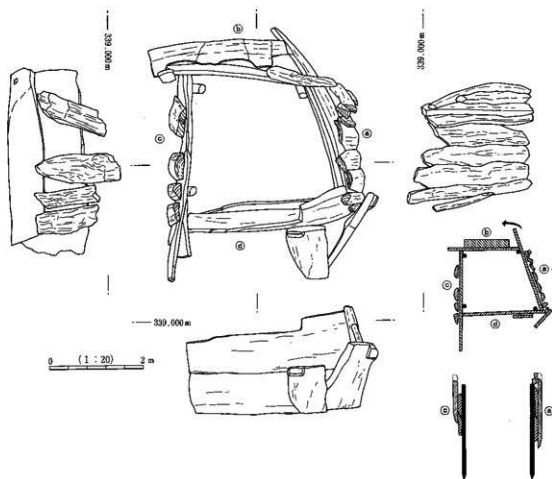
- 1: 黒褐色シルト 炭化物粒混入
- 2: 黒色粘土
- 3: 褐灰色砂
- 4: 褐灰色シルト質砂
- 5: 黒褐色粘土 灰色シルトブロック粗砂混入
- 6: 黒色シルト
- 7: 灰色シルト

0 (1:40) 1m

第172図 SK14・35・43実測図及び出土遺物分布図

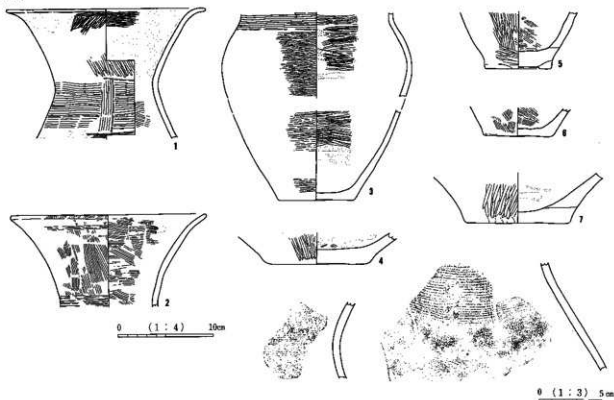
SK43 (IV区-Qグリッド) [第172・173・176・236図 PL20・78・79・88]

調査区西寄りの居住域内に位置し、後期住居SB20のほぼ中央部を壊して構築されている。井戸底は砂層を深く掘り込んでいたため調査時の湧水が激しく掘り方及び埋土の一部が不明となる。上平面形は径2.8mの円形で、井戸底に転用横板を組んだ方形井筒の井戸である。検出面からの深さは1.4~1.5mで、検出面から60~70cmの深さに段があり隅丸方形に掘り込まれている。埋土は方形井筒と掘り方の間層がシルトで固められ(6・7層)、井筒内は粘土とシルトの埋め戻し土(5層)となり、砂の自然堆積層(3・4層)が上層を覆う状況であった。最上層(1層)には炭を混入した埋土があるが、本址廃棄後の2次使用とされる。遺物は井筒内下部から多数の小破片が出土したが、器形復元できたものはない。なお本址方形井筒の横材は船を縦割りにした転用材であり、1艘の丸木船に復元された(第236図)。方形井筒の構造は、隅柱と2段の横材、更に横材止めの杭からなり、構築手順は以下のように復元される。①-隅柱を方形に4本打つ。②-a面を起点とし左回りに下段横板を隅柱に宛てがう。③-下段横板までを埋め戻す。④-a面には割り材の杭を深く打ち上段目横板を補強する。⑤-再びa面を起点とし左回りに上段横板を隅柱に宛てがう。⑥-b面は平板、c面は割り材杭、d面は立板で上段横板を補強する。⑦-上段の横板を埋め戻す。方形井筒を構築した樹種は丸木船がトチノキ、隅柱がヤマグワ、a・c面の補強杭がキリであった(付参参照)。

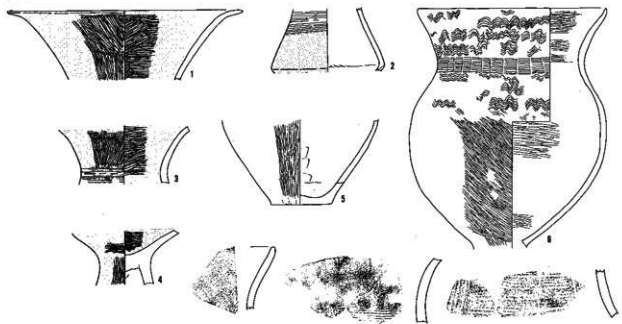


第173図 SK43方形井筒実測図及び構造模式図

SK03



SK04

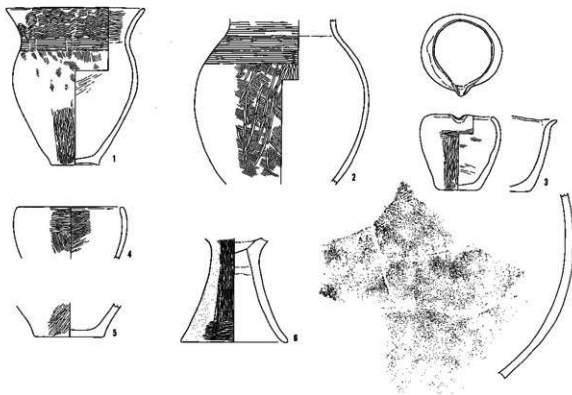


SK08

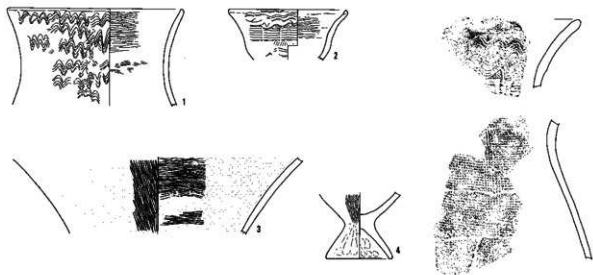


第174図 SK03・04・09出土土器実測図・拓影

SK06

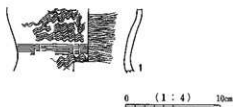


SK08



0 (1:3) 5cm

SK10

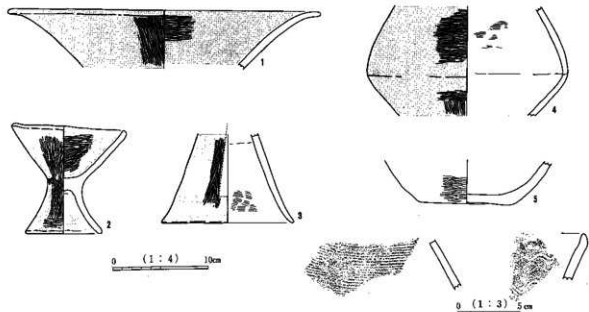


SK13

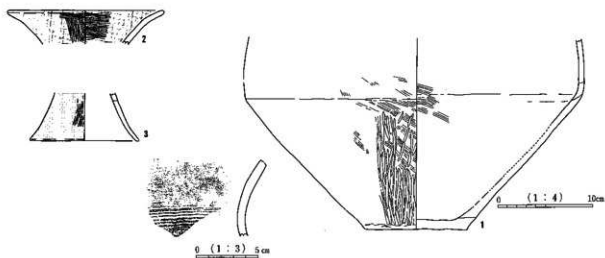


第175図 SK06・08・10・13出土土器実測図・拓影

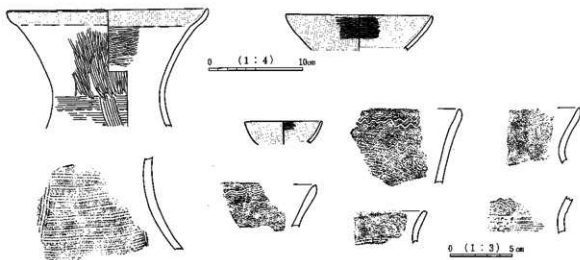
SK19



SK33

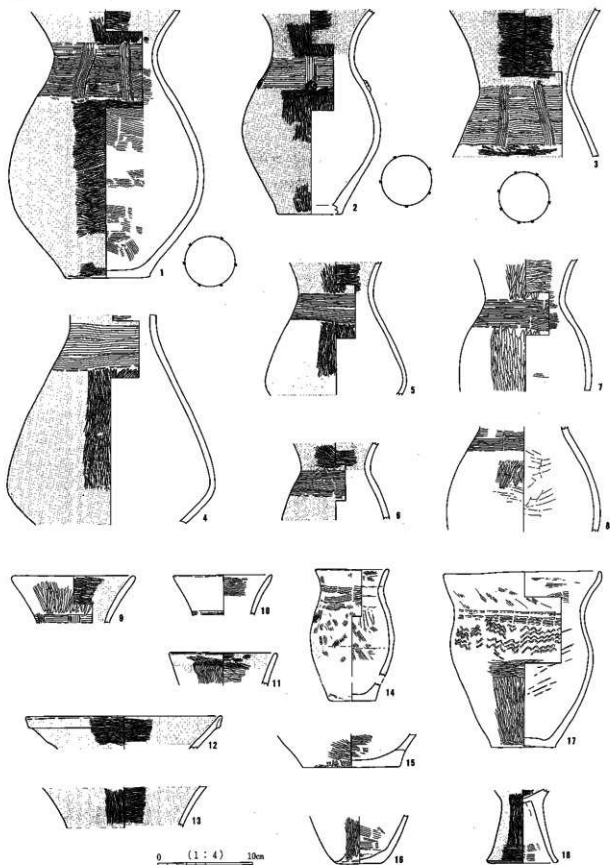


SK43



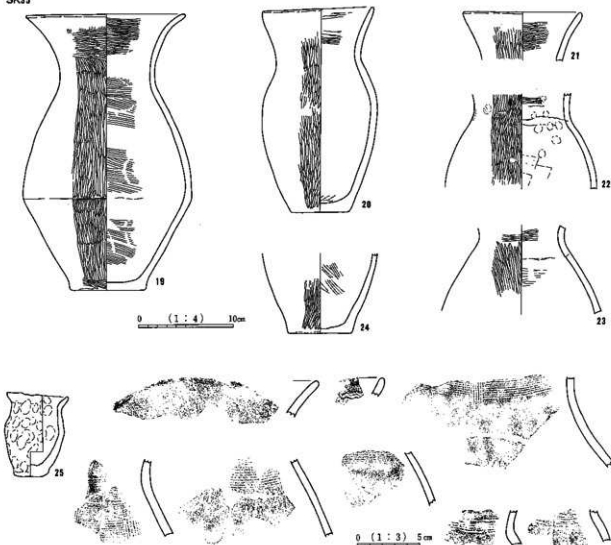
第176図 SK19・33・43出土土器実測図・拓影

SK35



第177図 SK35出土土器実測図

SK35



第178図 SK35出土土器実測図・拓影

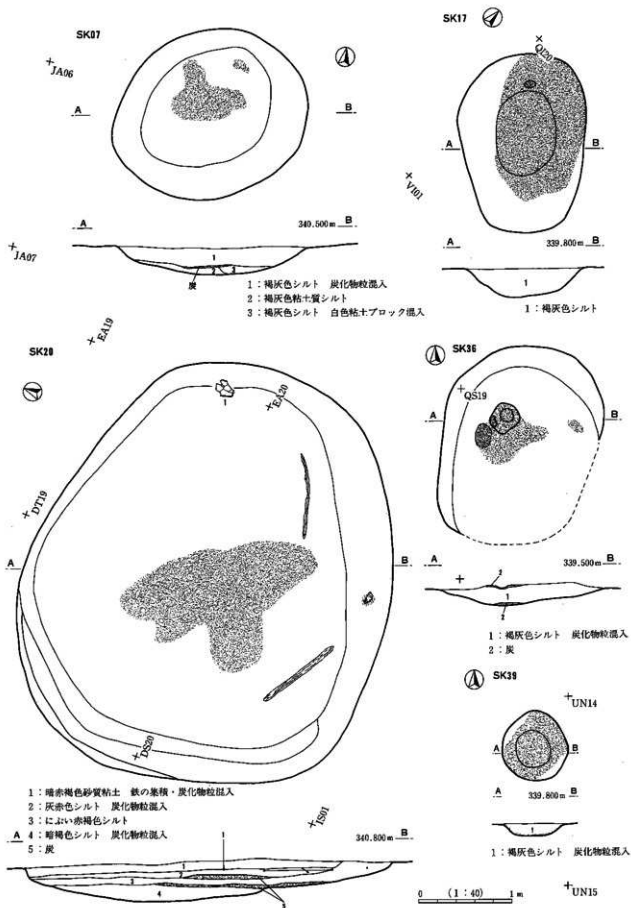
(3) 炭層堆積土坑

竪穴住居址の埋土として検出された炭層は、数多くの土坑にも看取され当該期の埋土の特長となっている。炭層堆積土坑には焼土を伴うものと炭だけのものがあるが、炭の堆積厚からみて大半の土坑で火が焚かれた状況と捉えられる。炭層の状況は底面に堆積が認められるものと埋土中の間層に堆積したものの2者があり、形状・規模は様々で、立地も多様である。本節では井戸を除く土坑埋土に炭が確認されたものを扱うが、炭堆積の要因については特定できない。

SK07 (VII区-Jグリッド) [第179・181図]

調査区南西端の低地境に位置する。北東南西方向に長軸をとる楕円形を呈する。規模は2.0×1.8m、断面は底面が湾曲する形状で検出面から30cmの深さとなる。埋土は上層が砂質粘土で下層が砂質シルトであり、炭層は両者の間層として中央部に広がっていた。遺物は上層から土器破片と大形剝片が出土したのみであった。これらは土坑埋没過程で2次利用された炭層に伴う遺物である。

SK17 (IV区-Qグリッド) [第179図]



第179図 SK07・17・20・36・39実測図

居住城南端の低地との中間に位置する。北西南東に長軸をとる楕円形状を呈する。規模は1.9×1.3m、断面は底面から緩く立ち上がる擋り鉢形状である。炭化物粒子を混入した褐色シルトの埋土と底面に厚さ数ミリの広がりをもつ炭層と一部に焼土が検出された。出土遺物はないが、検出面と周辺土坑の状況から本時期に帰属させた。本土坑内において火が使われたものと捉えた。

SK20 (VII区-Dグリッド) [第179・181図 PL21]

調査区南西端の低地境に位置する。掘立柱建物址ST01のビット2基によって埋土及び底面の一部が削平をうける。東西方向に長軸をとり西側がやや張った形状の楕円形を呈し、規模は4.6×3.8mの大形土坑である。断面形は底面から緩やかに立ち上がる擋り鉢状となるが、北側が一段更に窪んでいる。埋土には一様に炭化物粒が含まれており、炭層は間層を挟んで2層検出された。炭層は自然堆積層の窪みに溜った状況で、本土坑の2次利用と捉えられる。遺物は上層から土器と木製品が出土したが、本址にかかわる遺物はない。規模及び埋土堆積状況から隣接する住居と関連した竪穴状遺構である可能性が高い。

SK38 (IV区-Uグリッド) [第179図]

調査区中央の住居域寄りに位置する。南東側が年度調査域の境となったため排水溝掘削により削平された。一部壁を欠くが南北方向に長軸をとる隅丸長方形のプランで、2.4×1.5mの規模が推定される。埋土は炭化物粒子を混入するシルトで上部に1層、下部底面に1層の炭層が厚み3cmで検出された。上下いずれの炭層下部にも薄い焼土が検出され、燃焼行為があったことが確認された。遺物の出土はないが検出面と周辺土坑の状況から本時期に帰属させた。

SK39 (IV区-Uグリッド) [第179図]

居住城南端の低地との中間に位置する。径70cmの円形を呈し、断面形は壁が比較的垂直に立ち上がる台形となる。埋土は炭化物粒を多量に含んだシルトで、底面全面に数ミリの厚みで炭層が張り付いていた。遺物は埋土から後期土器小片が僅かに出土したのみである。

SK40 (IV区-Uグリッド) [第180図]

居住城南端の低地との中間に位置する。底面形は径30cmの円形であるが検出面の形状は一辺80cmの隅丸方形を呈する。埋土は炭化物粒を多量に含んだシルトであったが、底面には数ミリの厚みで炭層が広がっていた。出土遺物はないが隣接するSK39と同一の状況であることから本時期と判断した。

SK41 (IV区-Pグリッド) [第180図]

居住城南端の低地との中間に位置する。平面形状は南西-北東方向に長軸をとる1.2×0.9mの楕円形土坑の一端に径34cmの円形土坑が結合した瓢箪型となる。2基の土坑があった可能性もあるが、埋土は同一のシルトで、底面にはほぼ全面に広がる炭層が連続していた。楕円形土坑内の炭層下部には僅かな厚みとなる焼土の広がりが検出された。本址からの出土遺物はないが周辺土坑の状況から本時期と捉えた。

SK42 (IV区-Vグリッド) [第180・181図]

居住城南端の低地との中間に位置する。南北方向に長軸をとる楕円形を呈する。規模は1.0×0.9m、検出面からの深さは10cmと浅い小形の土坑である。埋土は炭化物粒を多量に含んだシルトの単一層であったが、擋り鉢状の底面には0.5~1.0cmの厚みで炭層が、更に炭層の下には焼土が検出された。遺物は炭層の